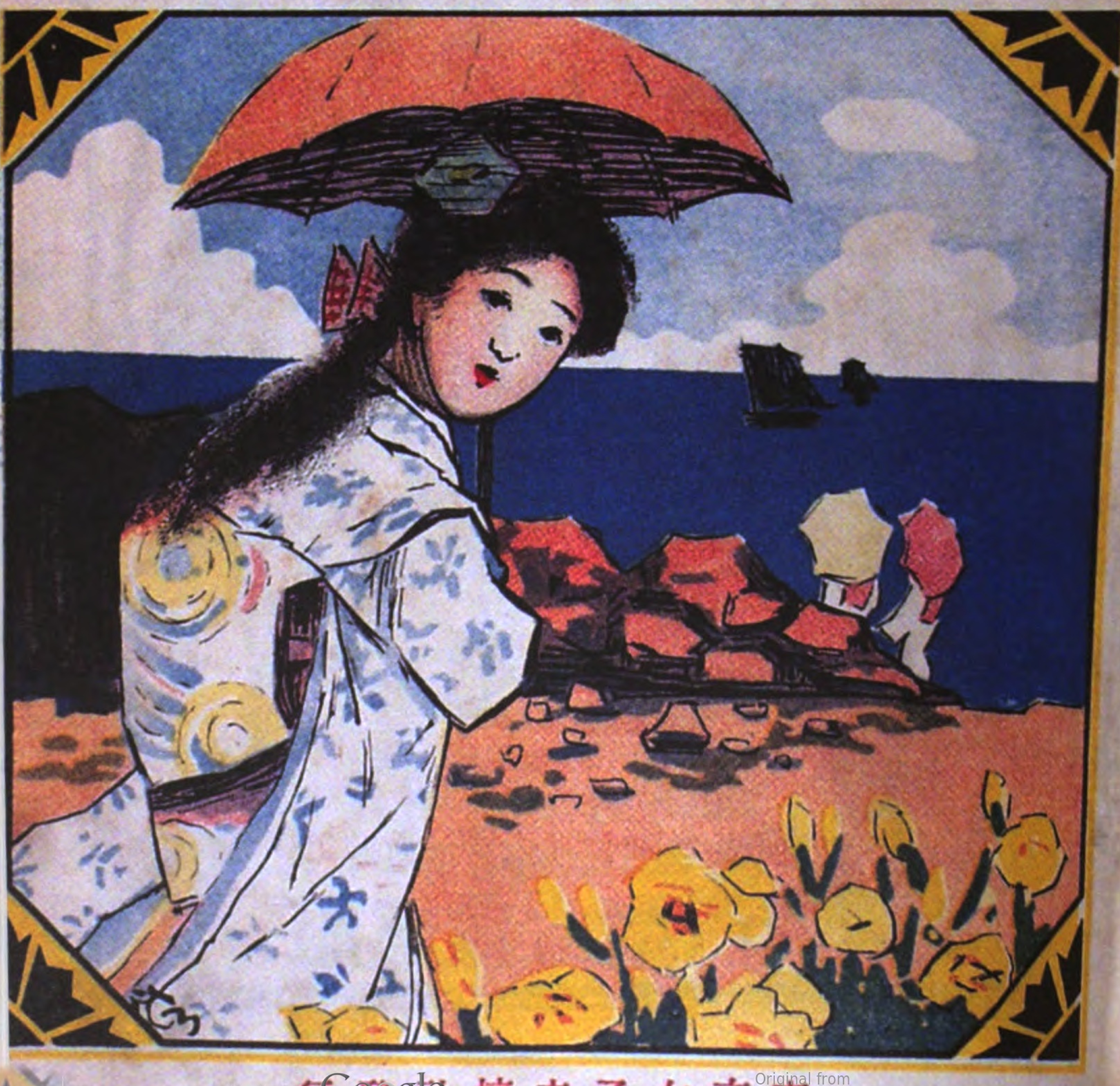
八月

女子文壇

第五年第十號



東京女子文壇社發行

本品は最も完全なる白毛赤毛染なり

又本品を以て赤毛を染る時は有に半ケ年以上を保つと云ふ奏効禮状日々多大なり

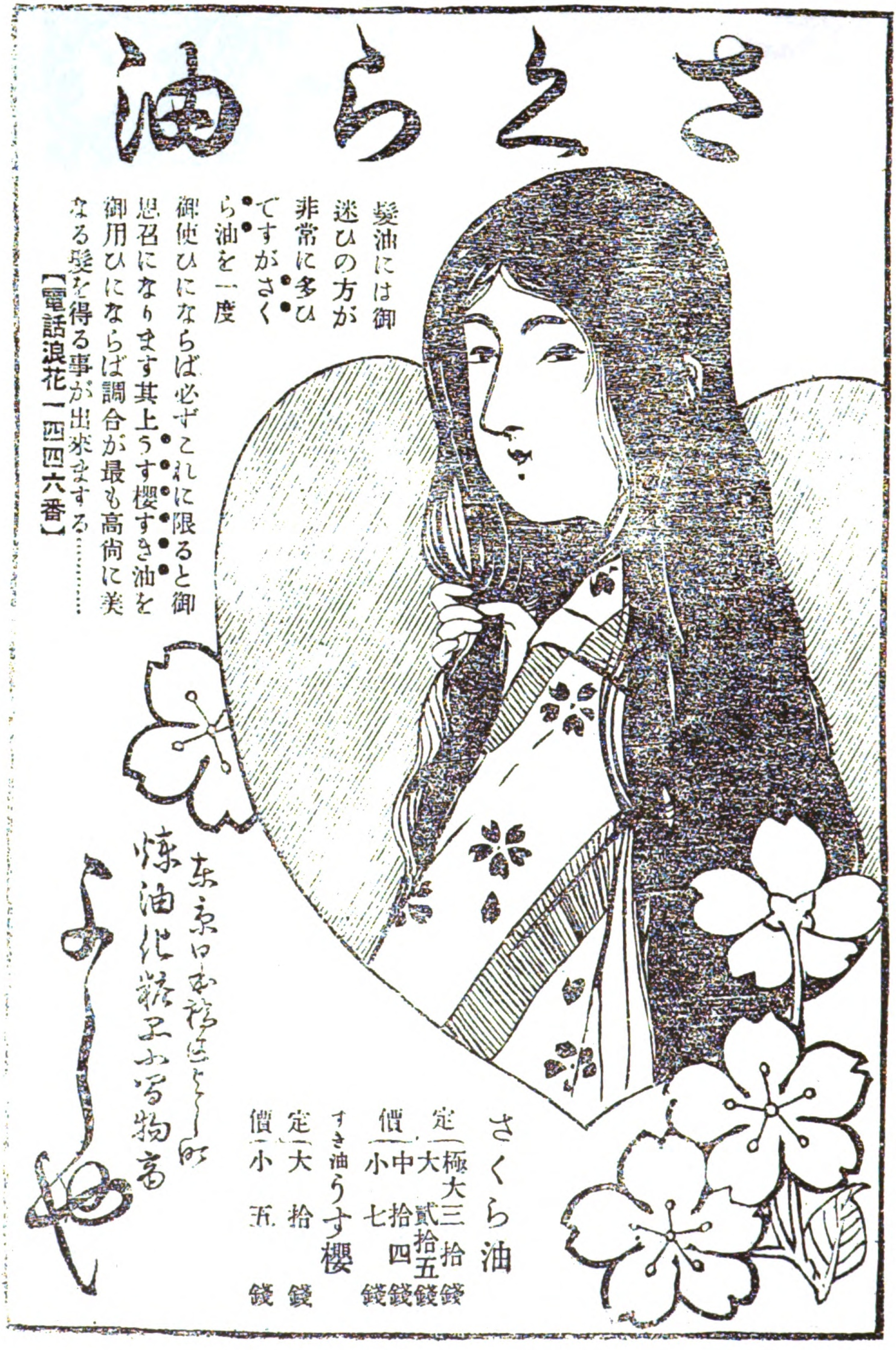
全國到る處の小間物化粧品店薬店に有り



本舗

東京市日本橋區通鹽町一番地

服部重右衛門商店


さくら油
髪油には御
迷ひの方が
非常に多ひ
ですがさく
ら油を一度
御使ひにならば必ずこれに限ると御
思召になります其上うす櫻すき油を
御用ひにならば調合が最も高尚に美
なる髪を得る事が出來まする……
【電話浪花一四四六番】
さくら油
定價 極大三拾錢 大貳拾五錢 中拾四錢 小七錢
すき油うす櫻
定價 大拾錢 小五錢
東京日本橋區通一丁目
煉油化粧品小間物商

女子文壇
第五年第十號

【本欄】

目次

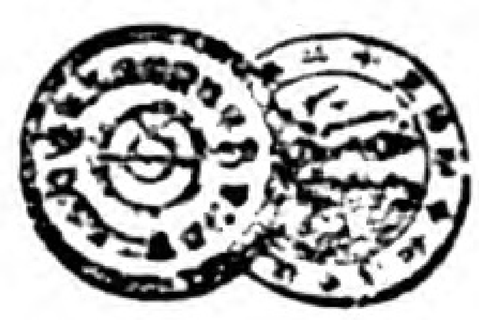
第五回內國勸業博覽會賞牌及褒狀受領

壽美禮おしろい

登錄商標

◎**壽美禮白粉**は歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成體等を以て配劑しあるを以て常に用ひて御顏肌を艶麗ならしめ清々しく天然と色白きに至るべし殊に衣服半襟等のよごれざると汗の爲にムラを生ぜざるは本白粉の特色なり「菫おしろい」は芳香馥郁として長時間保續するが故宴會、祝席、雜踏の場所に臨むに衞生上又社交上有益無比の逸品なり「壽美禮白粉」は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方東京橫濱其他に於ても上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

五二品評會 功勞賞牌



THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE

ヴワイオレツト煉製
錫盞附乳白硝子器入



壽美禮おしろい

ヴワイオレツト水製

ぬり製 大壜二十錢 小壜十二百
水製 大壜二十五錢 中壜十五錢 小壜ず錢
玉製
粉製
肉色各種
錫栓附乳白硝子壜入

◎西洋皮膚艶麗劑 **壽美禮あらひ粉の特性**

◎壽美禮洗粉は近來歐米諸國に賞賛する香料及弊店が多年研究の上へ製せし獨特の新原料を用ひて製せし品なれば朝夕此の洗粉を御用ひ給はゞ常に御肌の艶深くきめを滑かにし色白く美くしくなす◎壽美禮あらひ粉は御髮洗に御用ひ給へば髮のねばりを取り油あか等を生ぜず又半襟ハンカチーフ絹布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する特性あり◎御使用法は普通あらひ粉の半分にて宜ろし水又は溫湯に溶し又ぬかに混ぜ御入浴の際用ふるをよしとす

錄、藍、紅彩蝶香ひ 鑵詰入 錢
別製鑵詰 五拾錢
大袋 二錢
小袋 一錢

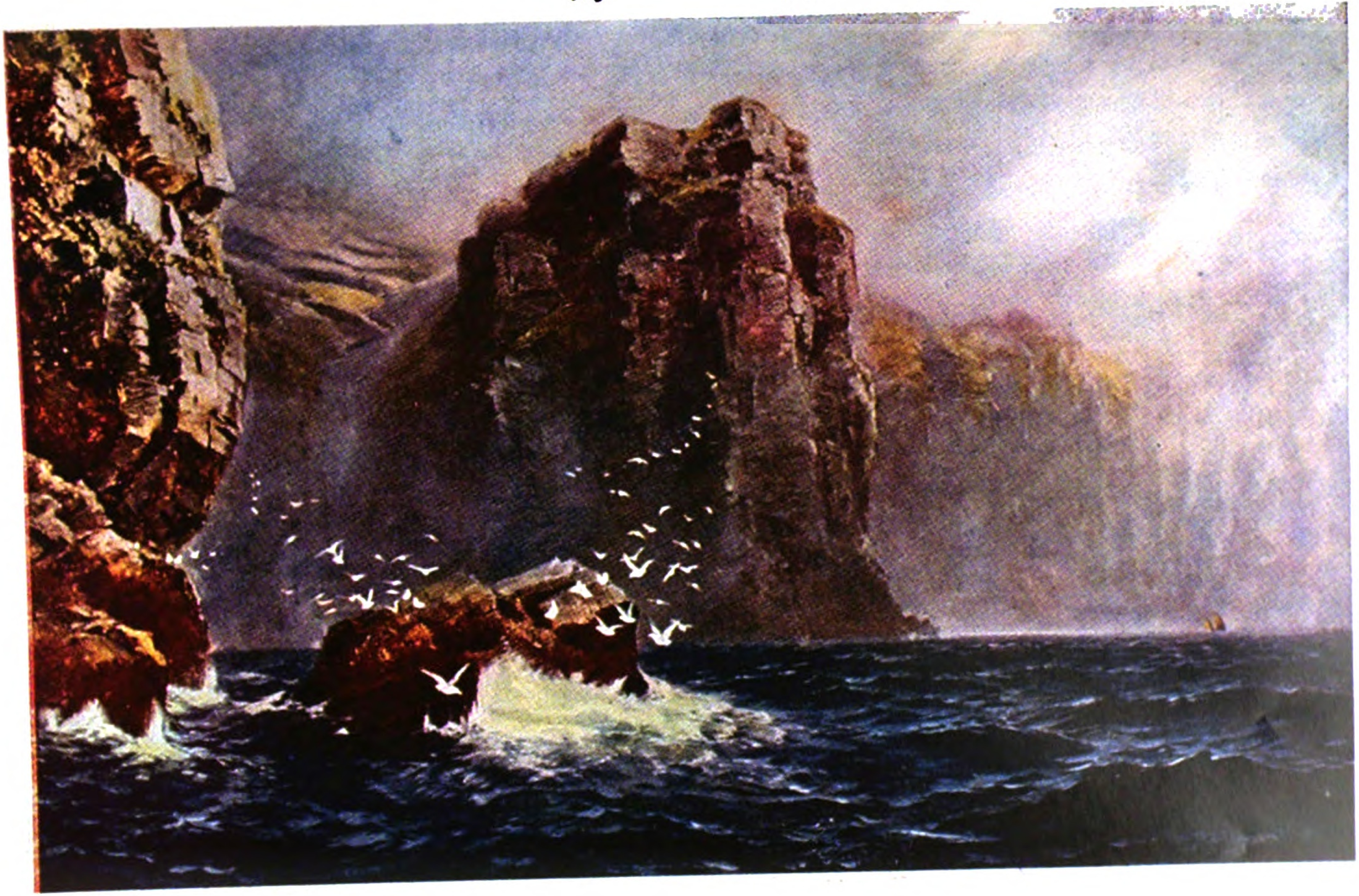
登錄商標
西洋白色くなるあらひ劑
SUMIRE
WASHLNG IOWDER
壽美禮あらひ粉



製造本舗 東京東兩國元町(兩國橋際) 壽美禮堂謹製 (電話浪花二七六五番)

販賣所は全國到る處の小間物店化粧品店賣藥店等に有之候に付御近邊にて御求めを乞ふ

白鳥



（大江原色版[illegible]）

女子文壇の廣告に依り御申込の節は其旨御書添を乞ふ

女子文壇の妹九月一日に生る

少女



月刊

◯少女は讀み易く分り易い雜誌です◯少女は親切です誠實です少しも大人ぶらない子供子供した雜誌です◯少女は學校以外にためになることを敎へます◯少女を讀むとお友達とお話をしてゐるやうです◯少女を讀むと新しい智惠がつきます◯少女を讀むと珍しいことが分ります◯少女は愛情の深い天使です◯少女には繪が澤山あります◯少女は假名さへ讀める方には必ず讀めます

投書募集

◎文章（廿三字詰二十行以内）
◎日記（廿三字詰二十行以内）
◎日用文（廿三字詰十五行以内）
「右一人一篇限りとす」
◎和歌（一人二首限）
◎俳句（一人二句限）
◎詩（十五行以内一人一篇限）

◎筆蹟（字體隨意、寸法は一寸五分の二寸五分）之は日本紙の半紙
◎圖畫（毛筆鉛筆スケッチ寸法二寸の三寸）
◎少女料理（少女諸嬢の爲し得る料理法又は自ら爲したる料理實法）
◎少女笑話（をかしい話、面白い話、新しい一口話、あつた話）
◎少女實驗談（日用百般の實驗について思ひついた一寸した話）

賞（凡て天、地、人の三人に賞品を進呈す）

◉少女くらぶ（交際を望む方、書籍や物品の交換を望む方、各地の通信給葉書の交換など諸嬢の通信文を載す）◉百事問答（學術、技藝、文學、社會其外諸嬢の尋ねたき事は何でも尋ねて下さい、誌上に於てお答いたします）◉投書宛名は『東京市京橋區大鋸町女子文壇社少女編輯局御中』と書くべし

▲初めのメ切は七月三十日です。其後は毎月二十日であります

每月一回 少女 一日發刊

定價		
一冊	金拾錢(郵稅壹錢)	計金拾壹錢
三冊	(三月分)前金參拾錢(郵稅參錢)	計金參拾參錢
六冊	(半年分)前金六拾錢(郵稅六錢)	計金六拾六錢
十二冊	(壹年分)前金壹圓(郵稅拾貳錢)	計金壹圓貳拾錢

送金注意 振替拂込は登記料武錢增、郵券代用は一割增、郵便爲替は京橋和泉町局宛の事

發行所 東京市京橋區大鋸町十、十一番地 振替貯金口座東京壹七貳九番 女子文壇社（電話本局六〇七番）

特約發賣元 東京堂 東海堂 北隆館 至誠堂 上田屋 良明堂 日本全國各書店

銷夏絶好の讀み物

婦人世界

八月一日發行 九號 一冊拾五錢 郵税一錢五厘 半年分郵税共一圓五錢 一年分二圓五錢

東京の女學校は田舎育ちの娘に合はず退學させた…高等視學監 關清英

▲初めて生れた兒がお菓子を口に入れる迄のお稽古…波多市松

◎肺病に罹りし良人を看護せし當時 國木田治子

◎空中飛行船を發明せし良人の苦心 ハミルトン夫人

△儉約で禮儀正しい大坂の女中の特色と美點…松本貞子

△貞婦清水美代 細川風谷

△京都婦人の神だのみ…

▼良人の言葉を誤解して不幸を招いた婦人の實例 村井弦齋

▼女學生は暑中休暇を利用して勉強すべし…山脇房子

▼十人の子女を健全に養育せし私の苦心…弘田醫學博士夫人 弘田ます子

△婦人に泳ぎを敎へた話 大竹森吉

△棚橋刀自のお講義を聽く(記)一記者

△七年前より淸國に住む 山本絹子

△弦齋夫人料理談 時節柄必讀

◎男學生を監督する米國女學生氣質 永井荷風

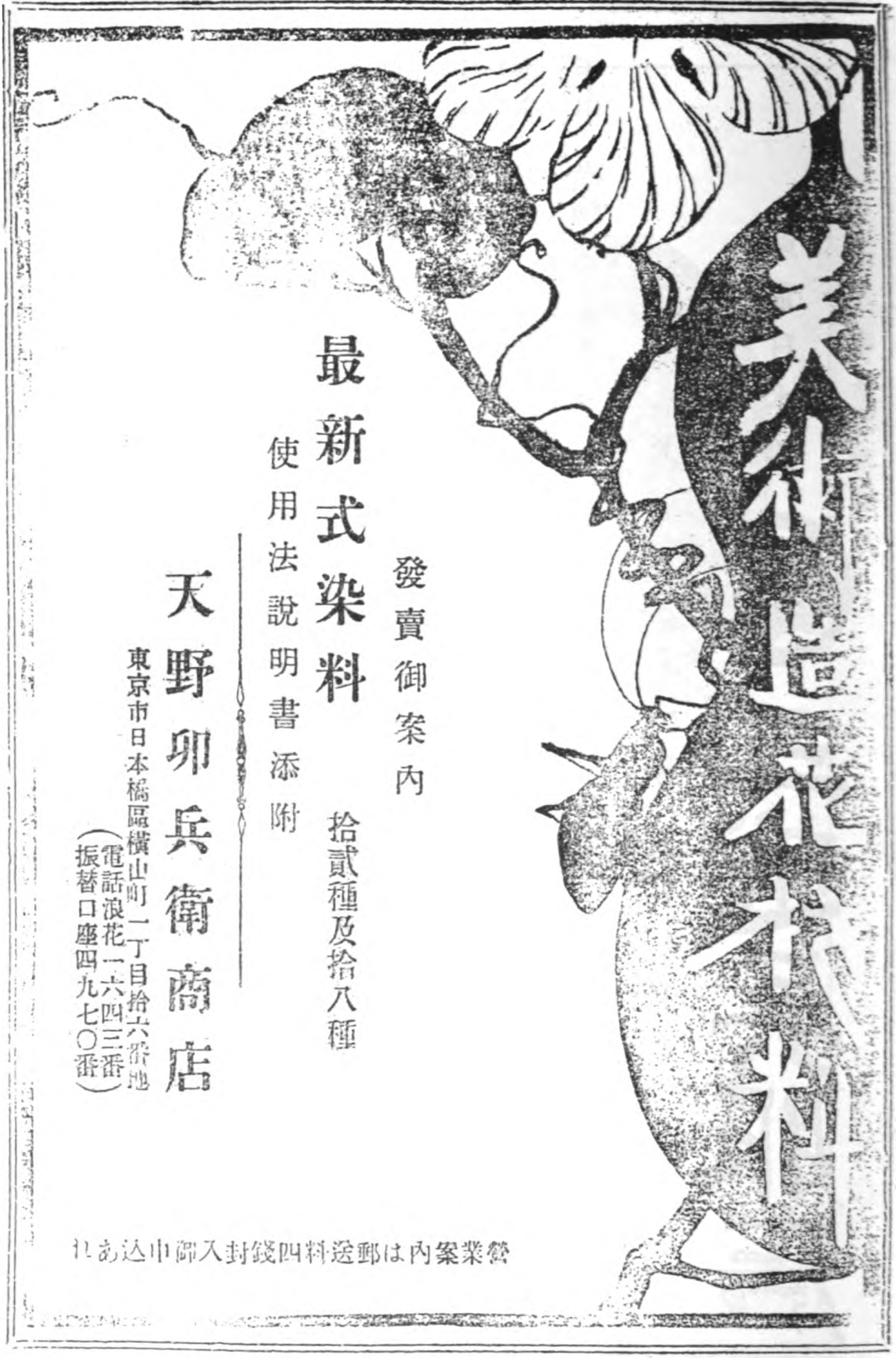
◎實母に虐待されし幼兒を保護せし苦心 出獄人保護主幹 原胤昭

▲佛國より歸朝せし閨秀音樂家の實歷…神戸絢子

婦人に多き犯罪と監獄内の女囚生活 市ヶ谷監獄敎誨師 河野純孝

東京 實業之日本社 (郵便振替貯金 三二六番)

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ



女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

三越と營業科目

一新柄呉服物類
一新流行太物類
一歐米流行洋服類
一半襟、帯揚、帯〆類
一香水、石鹸及化粧品類
一手巾、襟飾及シャツ類

一紙入、銀貨入等袋物類
一肩掛、羽織紐其他糸組物類
一櫛、笄、簪等小間物類
一玩具其他兒童用品類
一帽子、洋傘、履物類
一文房具及學校用品類

一時計、指輪等貴金屬類
一靴、鞄及旅行用品類
一シガア及シガレット類
一窓掛、屛風其他室内裝飾品類
一繪畫、陶磁器等新美術品類
一各種新式寫眞撮影

デパアトメント、ストーア

三越呉服店

東京日本橋

婦人畫家



馬杉青琴女史

椎塚蕉華女史

工學博士渡邊嘉一氏家庭



後列三女晴江子　前列次女久江子
令夫人
後列渡邊博士　前列嚴父
後列四女幸江子　前列長女那江子

女子文壇の廣告により御申込ノ節は其旨御書添を乞ふ

新輸入 美容肉體 色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓貳拾錢特別製分壹圓八拾錢

飲んで色白くなる世界唯一輸入新藥

根本的色白くなる内服劑 サーサパリラ

價壹劑二圓七拾錢▲參劑七圓五拾錢▲五劑拾貳圓拾錢

英國ロンドン「バーゴイン」製の「サーサパリラ」は峻烈なる**清血劑**にして頑強なる皮膚病、猛惡なる慢性梅毒瘡毒リウマチス等の病毒及び男女體内の**惡血毒血**惡液を體外に排泄し血液を清淨にし且つ精神を爽快にし根本的に肉色を**純白艶美**ならしむる奇効顯著の内服水劑なり(注意)從來種々の外用塗布的化粧水及誇大廣告の洗粉白粉等を用ひ其無効に歎じつつある各位は速に此「サーサパリラ」を試みよ奏効頗る迅速確實なり(今回英國より輸入し當舘にて一手專賣致候)色白新劑と「サーサパリラ」と内外双方併用せば奏効頗る迅速確實なり

色白特効 ペーアス石鹼

壹個代價送料共八拾五錢▲三個函入同上貳圓參拾錢

此石鹼は**世界第一等**の良品にして化粧品の大王たることは苟も泰西の事情に通ずる者の熟知する所なれば今更喋々贅辯を要せず啻だ單に其主眼たる特効の一二を揭げん**皮膚を潤澤軟密にし色を白くし、粗糙質**を治するは此石鹼獨特の靈効なり且つ此石鹼は香氣頗る佳良にして使用後五時間は芳香馥郁として身體に附着し薰るは館主の實驗保證する所なり、乞ふ昨今世上に縷々顯出し誇大の廣告を以て世人を瞞着する内國製の粗惡品と玉石混同視すること勿れ(昨年輸入の五萬個は夙に賣切れ久しく品切中の處今回拾萬個着荷せり速に御注文を望む)

以上三種專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

有効保險 前代未發 秘傳奇術

全壹册正價郵税共參拾五錢▲郵券代用は四拾五錢封送の事

(目錄大要)神經衰弱の新療法●陰萎病を必治する新法●陰○の爛れを治する法●消渇を必治する法●頑癖の必治法●人造麝香の製法●上等香水製法●香袋製法●美顏クリーム製造法●音聲を清朗にする法●齒痛即治藥製法●髮の脱落するを止むる法●化粧石鹼製法●西洋白粉製法●毛髮必生法●臭汗治法●白髮を染る法●毛髮の光澤を美にする新藥●齒磨粉製法●西洋梳油製造新法●にきび即治法●ほくろを落す法●ビットル酒製法●夏日室内を爽涼にする法●紐紗類を汚せるインキ班痕を除く法●●白瓜を一年新鮮に貯ふ法●蚤を驅除する良法●氷を即時製造する法●百年長壽の奇法●生遲病に罹らざる奇法●人の生死を豫知する法●船中より海の底を見る法●百日眠らず疲衰へざる法●抜毛劑新法●寢入たる者に答へしむる法●禿頭病必治法●寢入りたる男女の心中を知る法●白なまず即治法●五十の職婆を二八の娘に變ずる法●脚氣病必治法●妖怪變化を見顯はす神術●人體不死の奇法●千里一足飛行の神術●盜人を見顯はす神術●女に○れらるゝ藥法●硬き毛髮を柔軟にする法●思ふ女を○○かす藥法●堅き女の氣を○○す藥法●陰○を長大にする藥法●そばかす必治法●女を○○にて泣す神藥●夢に戀人と語る秘術●見染し女を手に○れる神法●待人來る神術●一生戀中變らぬ秘術●恪氣深き女を治する藥法●閨中の秘藥●即座に男精を增す法●毒蟲に螫れたる時塗る特効藥●避食の仙術●神速に精力を強む法●即坐隱身術●人を眠らす秘法即ち催眠術●顏赤く吹出物生ずるを治する法●過房を治する妙法●多情を抑制する秘法●色慾なき女に情を○せしむる法●記憶力を增進する法●女孕みの仙術●男女梅瘡の有無を知る法●淫婦劉破の奇術●黑字夜光の奇術●老人終身職取りの奇術●腹臭を治する法●色を白くする内服劑新法●賣丹の藥法●腹痛速治法●疥癬病の藥法●生たる鯉を遠國へ送る法●服喘を治する法●黄疸を治する法●緻肌を直す秘法●味噌の損じたるを直す法●探病の治法●月經の不順を治する法●疝氣の妙劑●齒痛を治する法●陰部の臭きを治する法●陰部の虱を去る法●にきびを去る最新法●頭髮を長くする法●毛生藥の最新法●梅毒必治の新法●便毒必治の新法●下疳を治する奇法●胃病の新劑●百日咳の妙法●肺病必治の新藥●中風豫防の新法●瘀痔の妙法●衣服に酒のしみたるを洗はずして落す法●火傷即治の秘法●シヤクリ即治法●聲を能くする新術●白髮豫防新法●土蔵の鼠穴を塞ぎ再び明けぬ法●寢小便を治する秘法●頭瘡を治する法●耳だれを治する法●いぼを取る法●あざを拔く新法●乳の出る妙藥●陰部の諸痔治する法●虎列拉病療治簡易法●梅毒豫防の奇法●思ふ時目を覺す法●年齢により寡房の度數●病氣前知の奇術●男女全體の色を白くし且つ艶美ならしむる法●毒酒を製造する法●富を造るの秘法●一時に數拾匹の鼠を捕獲する秘法●夏帽子洗濯新法●疊の汚染を落す新法●新しき鍋釜の鐵氣を止る法●簡易美顏術新法●衣服に油の付たるを落す良法▲以下數拾法略す(合計壹百四十法あり)著金即刻送本す

專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 **日新館商店**

(ろノ二)



子のできる器及子のできない器

懷妊避妊自由自在器

(▲兼用梅毒淋病豫防器及子宮病自療器)

醫學得業士

(齋藤乙吉先生發明)

實用新案登錄特許

アトシア

atocia,

(膣内插入小器具)

本器は産科婦人科日東病院長醫學得業士齋藤乙吉先生の發明に係る最も簡易安全にして毫も無害なる懷妊避妊自由自在器兼用梅毒淋病豫防器及子宮病自宅治療器也即ち本器により膣内へ妊孕を補助する藥劑を入れる時は人工的に**懷妊**することを得らる故に子の無き人は用て目的を達すべく又本器により膣内へ妊孕素を消失する藥劑を入れる時は決て妊娠せず子澤山の婦人は夫に秘密に用て**避妊**の目的を達し得らる而も共に衞生無害なるは發明者多年實驗上確證する所なり且つ本器へ病毒豫防藥を入れ應用する時は**梅毒淋病**其他の病毒か醫て傳染することなく子宮な跳傷する患なし又慢性子宮内膜炎膣炎**子宮諸病**患者は本器へ是等治療藥液を入れ應用せば自宅にて容易に**自身治療**することを得るものなり本器は彼のルーデサック及子宮サックの如き不快の念なく天然の感觸を鋭敏強劇ならしむる世界唯一の理想的斷新發明品にて一度買へば拾數年間保存し得る婦人衞生上必ず携ふべき要用の具器なり。但し詳細なる說明書及使用法并に應用諸藥劑處方書は現品に添附し小包郵便密封にて送付す。(正價)ニッケル製壹圓拾五錢。純銀特別製參圓拾五錢。郵券代用貳割増し。着金即刻送品す

世界一手 專賣元

東京市神田區五軒町十九番地

(電話番號下谷五百四十六番)

日新館藥房


毛髪の滋養として大効あり故に紳士
貴婦人諸君間にて好評嘖々たり
煉香油
パール
東京横山町三
發賣元
平尾商店

朝顔



●婦人の涙

(其原因は男子の罪なり)

近來職に苦み常に不妊を嘆つ病婦を到る處に見るが其眼も多き病状は下腹痛み鼻汁の如き白帯下あり腰筋張り顔色蒼白にて從前の病歴を聞に始め必ず「せうかち」に罹たりと云ふ其病名が子宮病血の道などに云程ても皆痳毒の爲なれば現に永引て治らぬが第一の證據である殊に痳病の病原發見後婦人病の大部分は痳性疾患が其原因と成る事が學者の研究に依て證明されて其治療上に一大革新を與へたれば最初「せうかち」の時に十分の手當最も肝要なり凡そ痳病梅毒を根治するには必ず唯一丸に限る唯一丸は現世唯一の驅毒藥を以て最も親切に調劑したれば實に面白き程効力ありて拭ふが如く根治すべし故に多毒質の人は是非服用の必要がある

根治完能唯一丸藥價三日分四十錢●七日分八十錢●十四日分一圓五十錢●三十日分三圓(內地遞送無料)

●本病患者の爲に其病理養生及治療法親切に詳述せる冊子無代施本送料三錢要す

發行所 東京市本郷區湯島天神表門中坂上

藥劑師 **中西莊吉**

振替貯金東京[illegible]

●診察時間●毎日午前七時より午後九時迄●

●皮膚科●梅毒科

●外科●生殖器科

東京淺草區淺草橋通瓦町廿八 電車停留場橫

中央醫院

●東京中央醫院藥法最新專門自宅速治療法●

●橫根 ●下疳 ●全身毒 ●梅毒痔 ●毛ぬける ●其他諸症 ●婦人しようかち

梅毒病

りん

生殖器病 神經衰弱

記憶力思考力減衰陰萎遺精夢精早漏陰莖發育不充分症

わきが

▲各自病状を記し郵券六錢封送せば[illegible]と右の各症に對しては如何なる[illegible]皆て全治し得る特効新藥の[illegible]

●東京市淺草區瓦町廿八番地 **中央**醫院[illegible]藥劑部

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

梅毒根治新藥

本劑（藥名ドクトル）は幾多の研究實驗を重ね多年辛苦經營の結果成功したる最新最良の藥物なれば現世紀に於る唯一の**ばい毒**根治特効

梅毒に傳染及遺傳により發して經過する諸症（即ちばいどく。ひゑ。かさ。しつ毒。かんそう。よこね。ようばいそう。たいどく。瘡毒。るいれき。骨がらみ・べんどく。ふしぶしのいたみ等）ならば如何なる頑固難症にても特別製分にて**誓つて根治**すること確證す從來醫療賣藥等百方手を盡すも全治の効なくして困難せる患者は速に本劑を試服し其病毒を根底より驅逐斷絶し天賦の生命健康を保全せよ。

藥價壹劑分壹圓拾錢貳劑分壹圓九拾錢特別製分參圓六拾錢

生殖機病特効新劑……（獨逸新輸入藥）

内服 ヨヒンビン

拾錠入壹劑 藥價送料共 壹圓九拾錢 郵券貳割增

本劑は獨逸國伯林大學教授博士スピーゲル氏の發見に係る

男 **生殖機不能**即ち**陰萎病**。**腎虚神經衰弱**

女 遺精。夢精。早漏。過房。元氣衰弱。老衰無力。生殖機能障害。早老者。精液稀薄。不妊娠。冷症。發育不全等に用ひ輕症は參四劑重症は五六劑慢性難症は八九劑にて根治の目的を達する天下無比**可驚奇効**ある最新發見藥也**精力**を**増進**し生殖器を強健ならしめんと望む者は早く試よ峻烈偉大なる特効眞に**如電光**世にありふれたる誇大奇賣を羅列する内地製無効賣藥と同一視することなかれ本劑の卓効は高名なる醫師に就て承合せば明白也

奏効確證 美容新劑 やせる藥

本劑（藥名ヨードチリン錠）は學理實驗に徴したる現世紀唯一の發明劑にて血ぶとり、あぶらぶとり、濕ぶとり、顏赤くほてり、のぼせ症、卒中症に罹り易く肥滿質多血質脂肪過多質の人用ゆれば無害にして著しく贅肉を減じ脂肪を適度に脱し美容健康を保ち程よくやせる特効藥なり故に彼の見苦しくふとりたるを苦にする諸君は速に本劑を用ひ其驚くべき偉大なる奇効を知られよ

壹劑分價送料共參圓廿錢 貳劑分六圓廿錢特別製分九圓拾錢代金即刻送藥す

▲世界唯一 麻病消渇の根治新藥

麻滅

麻滅は最も進歩したる最新の麻病消渇治療模範藥なり、本劑はありふれたる普通の賣藥と異なり殺菌學上効力顯る峻烈なる一新藥を主劑とし是を内服して**麻病消渇**の病原たる「ゴノコッケン」を忽ち**滅殺**する處方に基き製劑せし新藥に付輕症は壹劑重症は特別製分にて必ず誓て根底より**根治**するを確證す但し彼の強式洗滌劑の如き迂遠無効有害の姑息藥と異なり劇効確實峻烈なるだけそれだけ藥價不廉なり用藥者豫め之を諒せよ

藥價壹劑壹圓拾錢特別製貳圓拾錢 郵券代用貳割增しの事

わきが 腋臭 根治確證新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても的效良根治新藥なり適に試み臭氣を脱せよ**誓て根治**し決して再發或は他病に感ずる恐なき廿世紀

價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓廿錢前金即刻送藥す

毛の必ず生る確證藥

本劑は米國醫學博士の發明に依り學理實驗に徴したる世界無比の毛髮生藥なり、即ち男女共腫物の痕、はつぼうはげの痕、やけどの痕、頭髮及はゑぎわの薄き人、陰部に毛なき人、まゆげ口ひげの薄き人、其他毛のあるべき所に毛のなき人等本劑特別製分を用ゆれば忽ち毛髮を發生する特効あることを確證す本劑は從來ありふれたる種々雜多の毛生藥とは其効力勿論同日に語るべきものにあらず實に天地月鼈の大差あるに付夢々玉石混同視することなかれ

特別製分 金參圓三拾錢 大瓶貳圓廿錢 中瓶壹圓廿錢

以上六藥專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新舘藥房**（電話下谷五四六番）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

夏季を利用して練習なさい

字の上手は一生の徳

速に入會して頗る能書家となるべし

本會獨特の方法は全く好果顯著なり故に會員數拾名を有す

書者 文部省習字檢定試驗委員 稻川雲谿先生及玉木愛石先生

女子部書者 小野鵞堂先生外講師大家數拾名

○見本詳細會則進呈 東京市本郷森川町壹 電話下谷三〇壹壹番

帝國習字速成學會

繪畫速成通信教授

大好評を以て歡迎を受けたる本會獨特の教授法に依れば如何なる初學者にても直ちに上達する

玉章先生 玉堂先生 廣業先生 華邨先生 半古先生 其他數名

執筆講義平易可嘆

○見本詳細會則進呈 東京本郷森川町壹 電話下谷三〇壹壹

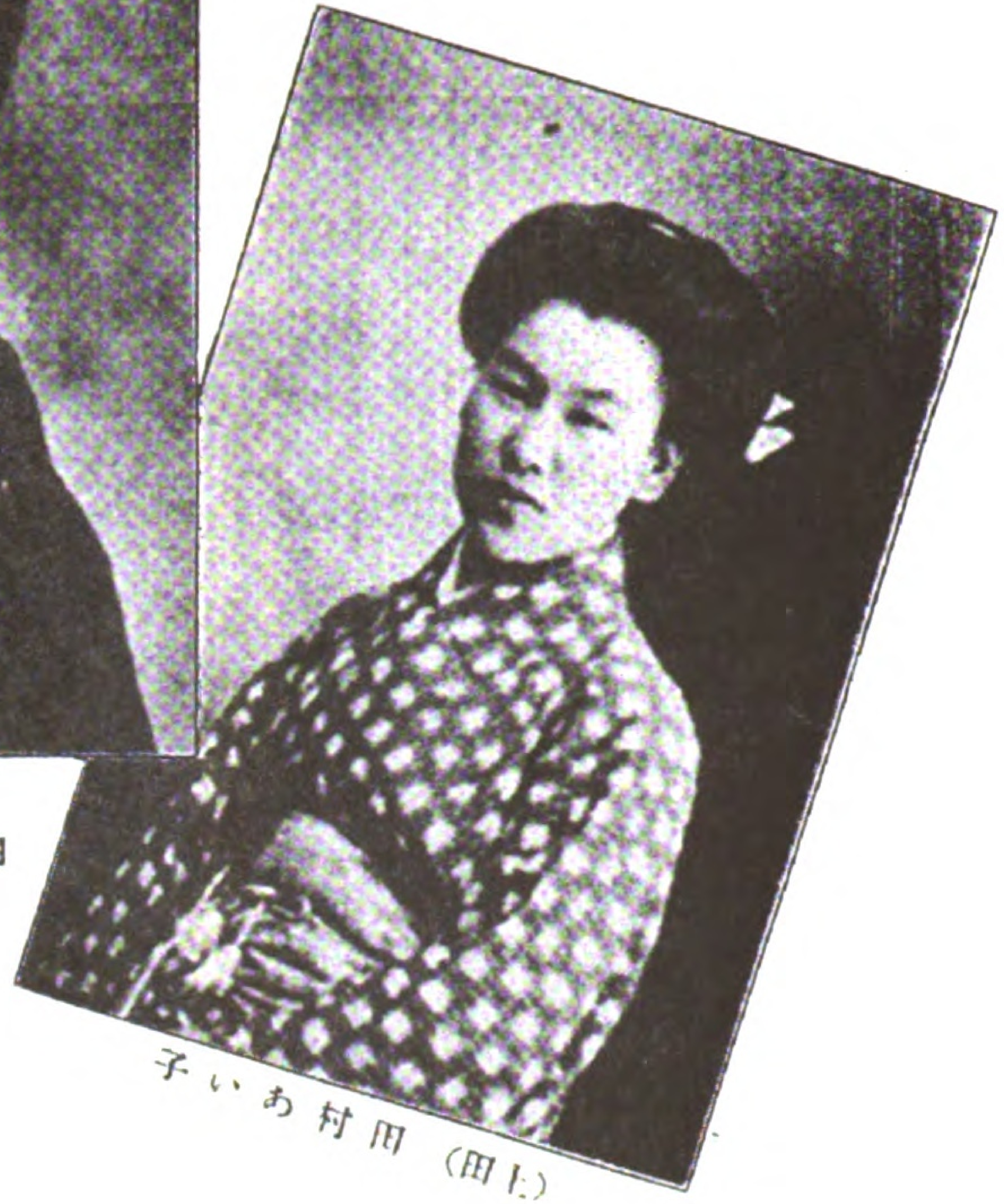
帝國習字學會繪畫部



片山しん子（武生）



（釜山）
向井操子

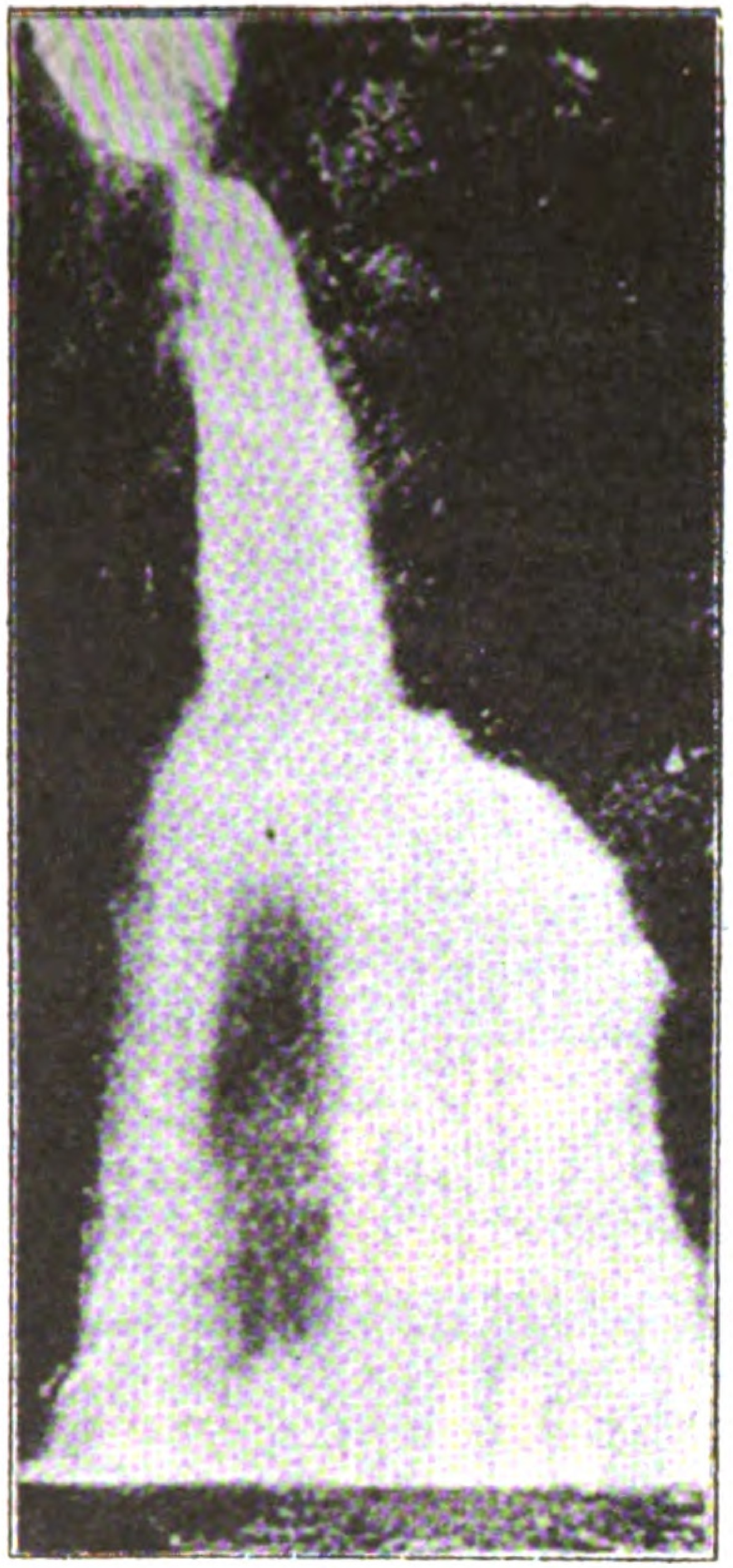


田村あい子（上田）

花影



暗門第一の瀧



同　第二の瀧



同　第三の瀧

（青森縣　西谷きし子寄）

肥滿病新藥

（米國新輸入劑）

小供の折美愛と稱せられし人も年頃になりてよりぶと〳〵肉太りたるため左圖の如く醜婦となる人少なしとせず本劑はバークデビス會社の模範製劑にて脂肪多き人●ぶと〳〵ふとり血太り肉太り酒太り水太りにきび顔赤◉ふき出物多き人◉脹滿◉ぶつ〳〵逆上腫等輕症は一二劑如何程の惡性も三劑分連服せば色は艶白となり程よくやせて嘗つて顔窈窕たる美人となる

諸孃姉の福音



美事を保證す……

藥價
一劑一圓五拾錢
二劑二圓九十錢
三劑四圓卅錢
送料十錢宛

▲肥滿性に苦む人は他藥に迷はず速に服用あれ

◉世界一 月やく下し藥

見……病める婦人
よ……月經なき女子

專門博士賞賛指導の新發見良藥

▲効能……藥力最強度……其效極て峻烈……有効無害……保險藥



本劑は婦人二三ヶ月の月經不順月經閉止月經滯りは一二劑にて必ず流下す四五月以上又は血塊にても特製或は別製分服用せば安心に忽ち流經す夙に各婦人病院に於て効力卓絶なりと賞賛せられたるは此の女月丸なり滯り又は不順にて苦む人は速に服用あれ

▲藥價一劑六十錢、二劑一圓十錢、特製二圓廿錢、別製分三圓卅錢、送料四錢

發賣本舖 東京々橋區中橋和泉町 振替口座一〇六七七番 小宮愛生堂

【ヒノ四】

わが寫眞帖



（東京）中山登里子、松阪常子



（東京）山下花子さ令弟



（東京）日向操子さ従姉



八[illegible]

立山權現堂





(越中)安田崎子寄

立山地獄谷の噴火

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

秀才文壇第九卷大發展紀念 臨時增刊

處女作號

八月二十日發行（正價金貳拾錢 郵稅金一錢五厘

▲汎く文壇に警告す!!

多年市に匿れて、密かに修養し、蘊蓄しつゝありし實力あり天分ある新作家を、汎くあらゆる方面に索めて、その最も踔跂の異彩なる、優に名家の壘を摩するに足る佳作を拔抽し、之を新たに文壇の水平線上高く、炳燿たる白熱光を放たしむべき光榮を完うせんとする爲めに、本誌は特に夏期增刊として「處女作號」を刊行し、强烈なる刺激を我が文壇に與へんとす。大略決定されたる内容の一斑と作家の氏名を擧ぐ。

本欄

佐藤緑葉　永代靜雄　加藤朝鳥
奥瀨多比良　淸見陸郎
其他數名（未定）
平栗猪山　大倉淺男　大菅胡果
金室崇村　松島煙汀　尾知山靜波
江木樵水

附錄

處女作の回顧　名家拾餘名談

新作小說　德田秋聲　永井荷風

▲汎く文壇に警告す!!

發行所 東京神田旅籠町一丁目 文光堂（振替口座一九五五）

賣捌 東京堂 東海堂

身長法の發明……矮小なる人に趣味を與ふべき一奇談……

人身延長法は多年發明家を初めとして科學及び醫學の大家に依つて研究されし處なりしも數年前までは未だ全く其方法の發明を見るに至らざりし。然るに此多數の學者の失敗に歸したる難問題は比較的年少なるケー、レヲ、ミンジス氏に依て美事に解決を與へられたり。其法に依れば『男女に係らず僅少の時日に於て二吋乃至五吋の身長を增し得べし』。『此奇異なる方法は一室内に於て施さるゝが故に親友にも悟られずに行はる』ミンジス氏は米國ニューヨーク州ロチエスター市に住し青年時代より人類の軟骨に就き深く研究する處あり。且つ屢々實驗を重ねたる結果、終に至大なる勉强は成功の冠を以て酬ひられたり。此に於てロチエスターの有力なる市民は此發見を公にせん爲に一大會社を組織したるを以て今や如何なる紳士淑女と雖も身長の二吋乃至五吋を增し得ざるといふ事なきに至る。即ち此身長法は絕對に保證せられたるなり。ミンジス氏は自己に此法を應用したる結果六呎一吋までに延ばし得て立派に且つ健康なる人となりたり。

余は如何にして身の丈けを增せしか 矮小者の福音!!!



ケーレヲ、ミンジス氏

尚それのみならず世界各國に散在せる數多の人は此術を施して同樣奇効を奏しつゝあり。本社は諸君を驚かすに足る記事を列擧し尚圖解を以て詳しく說明したる『延身の秘術』と題する奇書を發行し、以て之を世に紹介せん爲に今回壹萬部を限り無代價を以て逐附せんとす。書中にはミンジス氏の秘術の次第より、身長を增す法全身の機能を發達せしむる法、又此法を採用したる人々の寫眞及び證言を掲載しあれば一度本書を繙きたる人は此奇書を得るの機會を與へたるに對し必ず永久に本社に感謝せらるゝなるべく、而して若し此機を失せば必ず永久に悔るの時あるべし。尚凡て書信は秘密を保たんが爲に白封筒を用ふべし。此奇書を無代價にて萬國聯合端書若は端書に貳錢五厘の印紙を貼用し左記米國本店宛て申込次第郵送すべし

名宛

CARTILAGE COMPANY, DEPT. 152 A.
ROCHESTER. N. Y. U. S. A.

米國ニューヨーク州ロチエスター市カーチレーチ會社

通信は總て日本文にて米國へ直接申込れ度く名宛は成可く歐文にて記[illegible]度し

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

リウマチス全治秘訣

余儀多年リウマチス病に罹り百方手を盡すも更に効なく困難の處不思議の神藥の奇効に依り忽ち全治全快し喜悅に堪へず依つて人助のため同病者に事實を告げ救治せんとす御希望の方は郵券貳錢封入申込次第詳細に御通知申上可く候間御遠慮なく申込あれ

東京府下大森停車場東太畑

河奈とめ女

無代進呈

解説 繪入

營業案內

營業種目 種子 苗木 農書 農具 禽畜

農家ニ必要ナル雜貨及藥品類

資本金七拾萬圓

四拾貳年秋季の部

ハガキにて御申込を乞ふ

東京內藤新宿舊停車場際

日本種苗株式會社

みやけ油



東京人形町通三宅堂本舖

并引續き斯界の御家庭及數萬の愛用者方賞讃を博し居る

天下一品

最良髮油みやけ油

高等みやけ香油

香入みやけ油

スキ油、ビンツケ

洗粉島椿、島の春

等の精良品にして舶來品に優る。偽物四方に顯はれたり東京發賣本舖名と商標に御注意。近時大阪みやけと稱し劣等の偽物を販賣する者あり欺かるゝ勿れ

販賣所 化粧品商、小間物屋、藥屋、等到る處にあり

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

日本一の少年少女雜誌

立志成功 少年之友

第四巻第八號……八月一日發行

（口繪）

○横濱開港五十年祭○愉快なる海水浴○亞弗利加產の猛獸（英國ロンドン動物園飼養）○誌友の面影及少年の鮒釣り

△柳生の猿……………………福田琴月

△風雲に際會すれば猫も虎となる……………伯爵 大隈重信

△猛虎狩 英國少將アル、シイ、マヂイ

△螢の話……………………渡瀨理學博士

△憐な家鴨……………………小川未明

△バンカーヒルの戰爭紀念碑……………記者

△お日様の小言△腰越狀△少年日記△昆蟲印畫術△海水浴の歌△世界新聞△謎探し及前號解答

△孝行少年……………………記者

少年文壇（長文○短文○日記文○短詩○和歌○俳句○笑話○考物○スケッチ○少年俱樂部等）

正價 一冊郵稅共金九錢、六冊同金五十一錢、十二冊同金九十六錢

高濱虛子先生選 先生句選 中村不折先生裝釘 鳴雪先生序 戲畫

新選 俳句集 虛子選

正價 金四拾五錢 郵稅六錢

△男女學生座右之寶鑑▽

（最新刊）全一冊三百余頁 フランス紙 新裝美本

（口繪）春風馬堤曲（石版密刷）狂言（寫眞版）木版色刷スケッチ六十四葉入

文學士 久保天隨先生評釋

附錄 俳文評釋

目次

一、柴門辭芭蕉 二、鉢扣辭去來 三、松島賦芭蕉 四、五、百花譜許六 六、蓑蟲說素堂 七、十八樓記芭蕉 八、九、丈草誄去來 十、十一、祭猫文支考 十二、示僧古鏡辭李由 十三、長雪隱解許六

發行所 東京神田區旅籠町一丁目 （振替口座一一九五五） 文光堂

賣捌 東京堂○東海堂○北隆館○良明堂○上田屋○至誠堂

遊樂の紀念

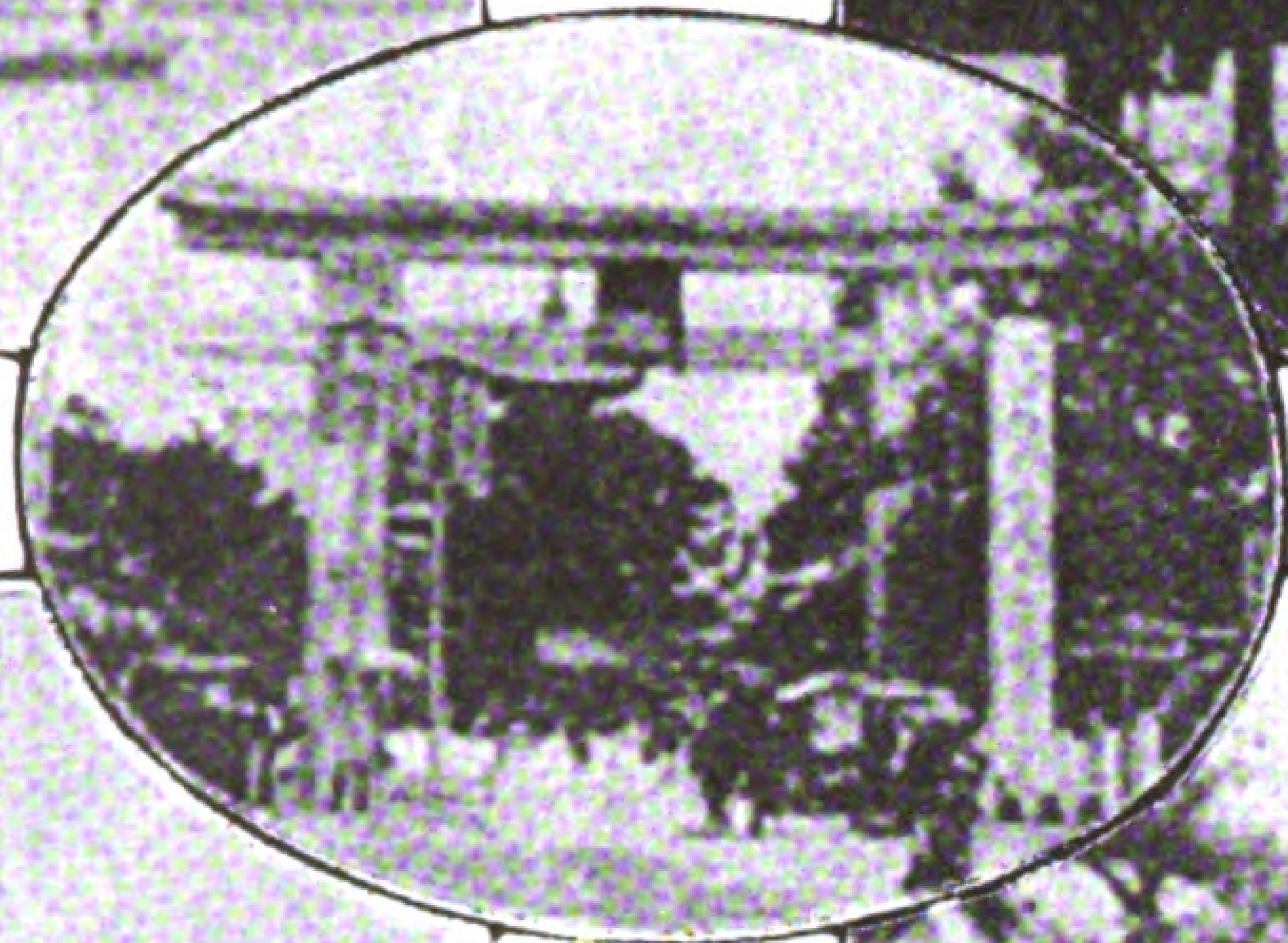


豊後臼杵にて觀櫻會紀念撮影（在臺灣深井せつ君寄贈）

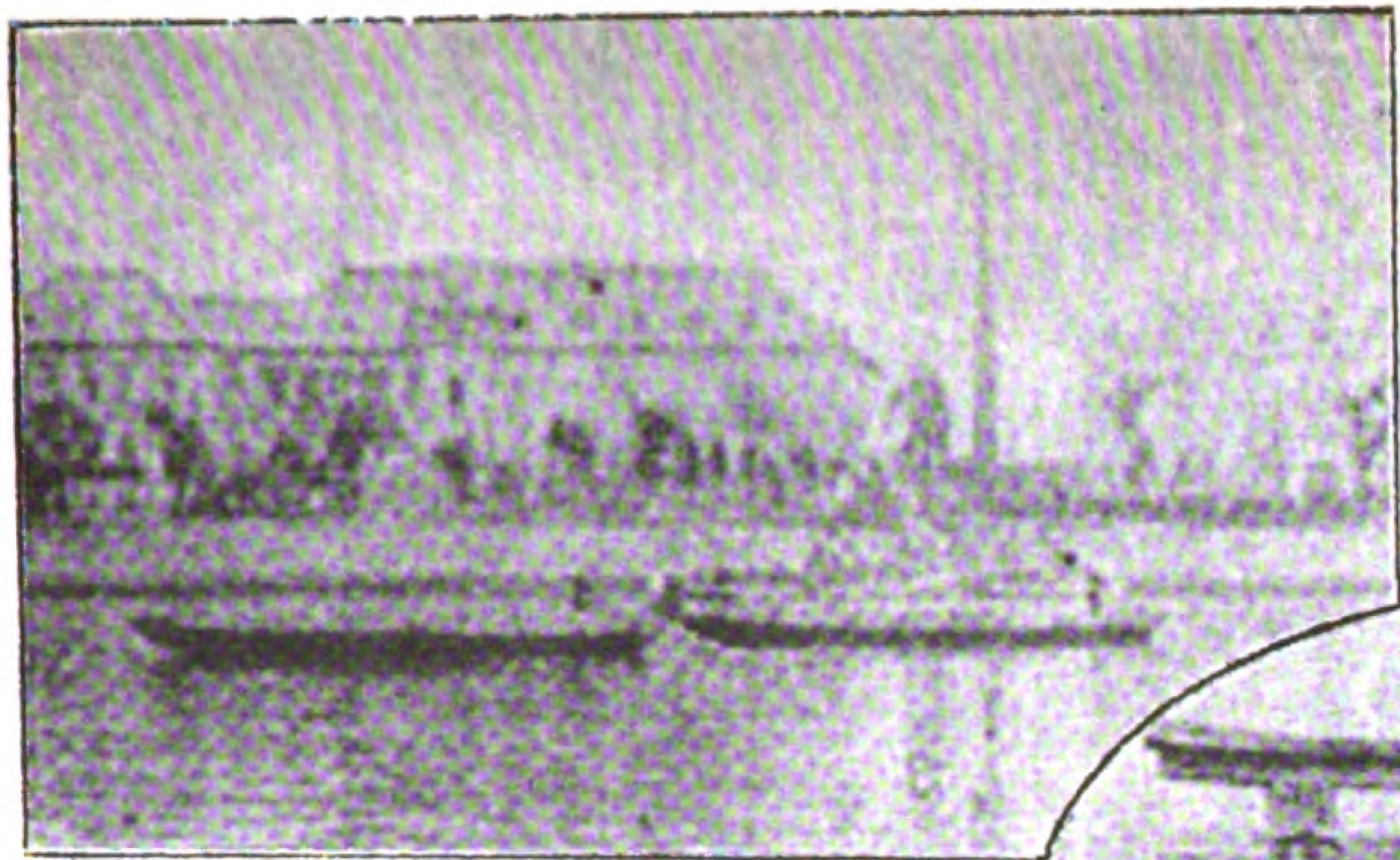
大阪



高津神社の絵馬堂



四天王寺



中ノ島公園と大阪ホテル



木津川の千本松



天保山の燈臺

（大阪今西春江子君寄贈）



第五年第十號

明治四十二年八月一日發行

薄ぐもる夏の日なかは
愛欲の念にうるみ
底もゆるをみなの眼ざし
むかひゐてこころぞ惱む

何事の起るともなく
何ものかひそめるけはひ
執ふかき力は、やがら
重き世をまろがし移す

窓の外につづく草土手
きりぎりす綴まぐれに鳴き
それも今、はたと聲絶え
薄ぐもる日は蒸し淀む

ややありて茅が根を疾く
蟋蟀走りすがへば
ほろほろに乾ける土は
ひとしきり崖をすべりぬ

蒲原有明氏『夏の歌』より

「夏は暑いものですね」と、周吉は机の中から手拭を出して顔を洗ひに行くと、擦れ違ひに外勤記者の森山が入つて來た。數寄屋の羽織の後まで汗が通つてゐる。汗を拭きながらも、目をぱちくくさせ、口を歪め、「どうも困つたね今日は、朝から麻布や牛込の方を驅けずり廻つて一つも物にならん」と、苦り切つた顔をして四方を見たが、誰も歎息の相手になる者はないので、獨りてぶつくく云ひながら羽織を脱ぎ、「暑いくく、これぢややり切れない、給仕氷を二つ取つて來て呉れ」と、荒々しく扇を動かす。埃が捲上げて生温い風が窓を掠めた。近藤は原稿紙を吹き飛ばされぬやうに剪刀て壓へ、首を捻ぢ向けて、後の柱時計を一瞥し、「やあ、もう二時かな」と呟き隣の金縁眼鏡をのぞき込み、「君、成べく冷しく書けといふ命令だが、駄目だね、暑いのに涼しく書くのだから、悲しい時に陽氣な歌を唄はされるやうなものだ」と小聲て云つて又大儀さうに筆を握つて書き出す。

正宗白鳥氏『紅塵』より



若き婦人の根本修養

羽仁もと子

第八　身にふさはしき一つの得手をつくる事

家庭の人とならぬ前に

最初に記しました、勝手元の事より衣服の整理等、手近き一人前の仕事が出來て、その上常に進歩したる智識にふれ、または高尚なる趣味に親しむために、前に申し上げましたやうな方法によつて、種々の方面に莅れるまことの學力を養ひ、かつその得たる力によつて、ます／＼わが靈性の進歩をはかることを、各自己れの生涯にわたれる重要なる事業として、常に怠らぬやうに勉めることのみに、その境遇の如何にかゝはらず、私共の又必ず心掛けて勉めねばならぬ一つのことは、各々その身に相應しき一つの得手をつくるやうにする事で御座います。

學術技藝のことにても、最も自分の才能に適ひ、かつ

成るべくその身の境遇として修め能ふべきほどの道を擇んで、心を潜めて學び、思ひを錬つて樣々の工夫を積み、時期に就て云へば、成るべくは母親とならぬ前に、出來能ふとならば、家庭の人とならない前に、十分上達の域に達してゐることが必要で御座います。

當座の利益

何か一つ得手をつくるのは、何のために必要かと申しますと、普通中流の家の娘にとりては、多くの場合に於て、結婚前にそれ〳〵の職業に從事することが家のためにも、好都合でありますし、またその身自身としても、良縁を得る前に、これと身を入れてする程の事もなく暮してゐると、申さば結婚を待つてジツトしてゐるといふやうな譯になり、知らず〳〵結婚を急ぐ結果は、多く不幸なる生涯をつくることになるやうで御座います。自己の學びつゝある技藝を以て、職業に從事してゐても、または從事しないでも、心に期する所があつて、專心一つの道に心を傾け、その上達を樂んでゐるやうな健全なる境遇に身を置いて居りますと、自然にさま〳〵の誘惑に遠かることが出來ます。

生涯の利益

以上は一つの得手をつくることの當座の利益でありますが、これを生涯にわたつて考へて見ましたならば、私共は何か一つの他にすぐれたる長所を持つてゐることになつて、物質的にも精神的にも、多くの幸福とうる場合が何程あるか知れません。

第一に私共にこの道ならばといふ、一つの動かざる自信がありますと、常に氣丈夫に暮してゐることが出來またその長所は、自然一つに私共の價値となりて、他より相當の尊敬を博し得るばかりでなく、好める道に上達して、この事に携はる如に感ずることの出來る高尚なる樂みは、何程私共の慰めになるか知れません。

その身も幸福なる境遇にありて、更にこの樂しみを感ずることの出來る人は、いふまでもなく一層の幸福でありますし、若しも不幸にして、その境遇の樂しから

ざる場合には、鬱々の氣を遣るために、最も樂しき別天地をその業の中に見出すヿが出來、用事の少いために怠屈を感ずる人にありては、そのために高尚にして有益なる時間を送るヿが出來ます。

殊に一藝能に達する人の、それによりて、近くは自己の周圍を益し、ひいて社會を益するヿの實に大なるものであるヿを思つて見ると、一藝に達するヿは、即ちそれ丈け、自己の生涯を生甲斐のあるものにする所以で御座います。

必ずしも萬一に備ふる爲めに非ず

或人々は動もすれば、一藝一能に達するといふヿを餘りに卑しく、また餘りに現金なものにしてゐるやうで御座います。即ち音樂學校でも卒業すると、マサカの時にも食ふには困らぬと云ひ、裁縫がよく出來るから困る場合には、賃仕事をしてなりと、小遣ひ儲が出來るとか、または人といふものはいつ何時貧困に陷らぬとも限らぬものゆゑ、今はその必要はないけれども教員の免狀でもとつて置かうといふやうな種類の考へが主となつて、それ〳〵の勉强をする人も多いやうで御座います。

萬一の場合にそれによつて收入を得るヿが出來るといふやうなヿも、各自の長ずる所をのばし、一藝に達せんとするものゝ、心の中にあつてもよいヿでありますけれど、そのやうな事を第一の目標として修業するのは間違つて居ります。まして小さき虛榮心を滿足せしむるために、或は嫁入の場合に、その體裁を飾るために、實力よりも卒業といふ名前、または免狀を目あてに學ぶやうなヿなどは、實に生涯の不幸をつくり出すもとであります。

一事に專らなるべし

人にはまたさま〳〵の長所があります。あれかこれかと思ひ迷ふ時には、その最も大いなるものゝために他を犧牲にするヿが、最も賢き方法であらうと思ひます。俗に器用貧乏とかといふ諺もあるやうに、器用な

人ても、あまりに種々なものに氣を多く致しますと、所謂一通は何でも出來る代りに、一つの道にも眞の上達をすることが出來ないもので御座います、まして天器のやゝ劣りたる人にして、ピアノも出來るヴァイオリンも出來る、茶の湯も生花もと云はれやうとしたならばそれこそ看板ばかりで中身のない人になります。何事も仕來りで濟んでゐた昔と違い、萬事實力の世の中に、看板は何程立派てあつても、中身がない事程みじめなものはありません。くれ〴〵も何でも出來ると云はれやうなどゝいふ考はうちすてゝ、動かぬ一つの長所を大成するためには、割合に小さき長所を犧牲にせねばなりません。

私はこの故に若き方々の、あまりに種々の稽古をなさるのを、餘りよい事てはないと思ひます。御承知のつれ〴〵草に、天晴高僧にならうと志し、それにしては、若しも遠方から招待をうけた時に、馬にのることを覺えてゐないては恥をかくかも知れない、下戸てあつては、折角招待した主が本意なく思ふかも知れないといふやうなことて、種々のことを習つてゐる内に、遂々肝腎の佛法を聞く間もなしに終つたといふことが書いてある通り、こういふ場合にあれも必要、何々の場合にこれも必要と考へて、始終横道にそれてゐた日には、肝腎なことはいつの間にかお留守になります。

白痴の少女と飯炊の名人

以上はあれこれと氣の多い人に就てのことてありますが、中には私には何の長所もなし、一藝に優れるなどゝいふことはおもひもよらぬと、自ら卑下してゐる方のために、私の數年前實際に見ることが出來ました、一つの例をお話いたしたいと思ひます。

岡山孤兒院に、その當時十五ばかりの白痴に近き女の子が居りました。幼兒の外は自身の身のまわりに他人の手を借らず、却て外に用事のある男子部や、自分て出來ぬ幼兒のために、洗濯をする縫ひ物をする、髮を結つてやるといふやうに、めい〳〵に力に應してその愛する大家庭のために、有益な働をするといふのが

同院の美風でありますので、この白痴の樣な女の子も自分も皆のために、何かの働をしたいものだと思ひましたが、込み入つたとは勿論何も出來ません、それで男子部數百人の御飯の米をとぐとを始めました。大層熱心に、その何斗といふ澤山のお米を、實に立派にとぎますので、段々に御飯を炊く事もさせて見ましたところ、始めには隨分出來損いもあつたてせうと思はれますが、心を籠めてする中に、いつか何人も及ばぬ樣な御飯炊の名人になりました。さうして同孤兒院の麥飯の評判は、院の外にまで高くなり、たまに一日でも病身のために、その少女が休みますと、折角の御飯がいつものやうにおいしくないといふので、三百の院兒が一樣に失望するといふとで御座います。

誰にても出來ぬ筈なし

本當に專門の學術技藝に上達して、斯道の名家と仰がるゝ如き人は、世上に數多くはないものであります。得手はなるべく大いなるに越すことはありませぬけれど、またあまりに大いなるとをのみ望み過ぎるのは、矢張不成功のもとてあります。よく〳〵熟考し、また先輩長上の意見も聞いて、身に叶ふほどの事にて、何か一つの得手をつくる心になりましたなら、世に欠點なき人のないと共に、のぼすべき長所のない人もありますまい、白痴に近き少女ですらも、熱心に働くといふ心がありますと、その手を以て幾百人の同胞に、大いなる幸福を與へるとが出來ます。なにも出來ないといふ人は、出來ないのではなく、一生懸命にする氣にならないのてあります。大小は別として、得手をつくるといふ事は、努めるならば誰にても、必ず出來る筈の事て御座います。

短夜や片側町の明殘り　成守女
負うた子に髪なぶらるゝ暑さ哉　園女
稚子遊ぶ程はつりけり宵の蚊幮　花讃
旅人に深草團扇もらひけり　几秋
蚊の聲の命に代へし力かな　きく
晝顏や西瓜の上に咲いて居る　花讃
紅さいた口も忘るゝ清水かな　千代

男一疋

小栗籌子

（一）

才吉は今年もう二十一になる。年から言へば立派な男一疋であるけれども、錢勘定も滿足には出來ず、加之に兩親には緣が薄く、幼さい時に別れて了つた。それから子のない伯母夫婦の家に引取られて、少時ゐる中に、さる百姓にもらはれた。それは才吉がまだやつと五つの時であつたが、百姓させるには躰さへ丈夫なら、大した智慧もいらないからといふので、つまり低脳を承知で貰ひに來たのだ。伯母夫婦ももとより子なしてあるから可愛ざかりの才吉を人にやるのは、惜いには惜いが、馬鹿では末の見込みがない、貰ひ手のある内にやつた方が可からうといつて、自分達が親元になつて、若干の養育金をつけて養子にやつたのであつた。處がこの一年許り前に、才吉は養家から出されてきた、――それに色々條件もあつたが、第一は、今更いふのは無理かも知れんが、こんな馬鹿では百姓も滿足には出來ぬから返すとの事であつた。伯母達夫婦は馬鹿は始めから承知でかゝつた事だから、今になつて然ういはれては困るといつて一應は爭つても見たものゝ、結局そんな處に置いても才吉が可愛さうだといふので、引取る事にしたのである。そんな風であるから、躰の方もあまり十分に發達しては居なかつた。――一寸見た處では十六七といつても可い程小がらでその上兩方の目が斜視みてある。今年の徴兵檢査に無論立派に落第した。伯母夫婦もいろ〳〵心配して、切めて手の職分でも何か食べる道を敎へたらと言ふのて、桶屋、疊屋、指物屋の嫌ひなく弟子入の口を探したけれど、一つは中年者だといふ角もあつたが、何處

ても皆そんな風では到底もと言つて刎ねられた。仕方がないから今では家に置いて臺所の手傳いがさせてある。伯母夫婦は士族上りの商ひも下手な處から、伯母の仕事に素人下宿をして、主人は中學かなにかの劍道の教師をしてゐる。割合に家の中は豐かだ。

「才さや。」と伯母は臺所の才吉を呼んだ。

「あゝ。」と才吉は惚けた聲で答へながら、出て來た。

「お前最う臺所の用事は濟んだのかい？」

「あゝ。俺らお菊さあと話してゐたゞ。」才吉はまだ一年前までの田舍言葉が少しも直らぬのである。

「然うかい。若い男が若い女の傍へ行くもんぢやないよ。始終然う言つてるのに。と伯母は嚴そかな顏をして言つたが、一服して、

「お前は私の子なんだから、用事が濟んだら私の部屋へ來ておいで。」と言ひ渡す。伯母夫婦は何處までも自分達の子だと才吉に言ひ聞かせて、然う信じさせてあるのだ。

「そいぢや、お菊さあや敬さあは阿母さんの子ぢや無つか？」

「然うともね。それは皆手傳ひに頼んである人達さ。」

敬さんは伯母夫婦の養ひ子で、行々はお菊に娶はせて、此家の嗣を取らせる積りである。お菊も矢張り貰ひ子て、今年十六の春を迎へたばかし、色の白い丸顏の目鼻立のハッキリした娘である。

「然うかい。それでも俺ら變な事他人に聞いたゞ。俺ら阿母さあの子て無えちうだ。

伯母は思ひ掛けない事を聞かされて、愕然としたが、

「馬鹿な事をお言ひでない。一躰誰がそんな事を言つたの？」

「二階のお客さあに……言ふて無えちつたが、俺ら言つ了つた。」

「あんな人が何を知るもんで！それはお前が欺されたんだよ。」

「うゝむ然うて無えだ。そいて、お菊さあ俺らに貰つて呉れるんぢや無えだつてよ！俺ら今日までお菊さあ俺らのだと思つとつたゞ。」

伯母も才吉の不斷の樣子で大抵察してはゐた者の、かうまで露骨に言はれて見ると、今更容易ならん事のやうな氣がする。

「何をお言ひだ！菊は大切な他處の預り娘だよ。二階の人なんかと何を知つて！」と伯母は打ち消す。

「そいては、俺らが馬鹿て此家の嗣取れねえから、俺らを他處へ出しつ了つてお菊さあと敬さと一緒にして此家の嗣取らせるちうて無えか！」と言つて才吉は其藪睨みの白目勝な目をキリッとさせて伯母を睨めた。伯母は才吉の恨みに輝く其目を見ると、思はずゾッとしたが、何の爲めに二階の客が此罪もない者に餘計なことを聞かせて、爲ずともの苦勞をさせるのかと思ふと、自分達の當惑よりも才吉がいとをしく、才吉のいとをしさよりも二階の客がツク〴〵憎らしい。

「こんな馬鹿に本當の事を聞かせて……餘計な僻み

幼けなかりし頃



を起させてはならぬ。本當に馬鹿ほど怖いものは無い。何んな思ひ切つた事をするかもしれぬ。今私を睨めたあの目！何といふいやな！執念さうな！困つた事が出來た。」と伯母は當惑の目を閉ぢて考へた。

「ねえ貴方。」と伯母は夫を呼びかけて、

「一寸入らしつて下さいましな。」

「何だい？」と大様な物の言ひ方で主人は茶の間へ入つて來た。

五十五六とも思はれる頒白の大兵の男で、如何にも武藝者らしい鋭い眼光と、ガツシリとゆたかな格服と、なか／＼立派な風采である。

「これにも困りました。」と伯母は目顔で知らせた。

「お聞きでせうが、才さが今飛んでもない事を言ひ出したのですよ。私共の本當の子ではないなんて……」

主人は長火鉢の向ふへ伯母と向合せに座つたが、怖い顔をして、

「馬鹿な！才吉、貴様己の子でなくて、外に親が何處にある?! 外に本當の親があるなら何處へなりと本當の親の處へ行け。」とイキナリ叱りつけた。

才吉は急にオド／＼する。

「まあ貴方お靜かに……飛んでも無い僻みを起してるんですから、能うく此子のお腹へ入いるやう言ひ聞かせやつて下さいまし。」

と伯母は短氣な夫を制して、

「ねえ才や、其は皆お前の邪推だよ、お前の外に私の生んだ子といつては無いんだから……ねえ貴方。」と夫に顔を向けると、主人も

「然うとも。」と頷いた。

「お菊達は今もいふ通り、家が忙しいものだから、お手傳ひに來て貰つた人達さ。馬鹿な僻みを起しちや不可いよ。ね、ね、才さ。」

伯母は何處までも優しくなぐさめた。が、行々は破れ鍋に閉蓋とやら、いくらかシツカリ者の女房を才吉に持たして、別家でもさせやうといふ考である。

「そんだ……」と、一生懸命になると才吉は少し吃る、「俺らが此家の嗣取りだちう證據に、敬さ追出して了

つてくれさ」
「馬鹿言へ！」と、主人は叱る。
「まあ敬さんを？……そんな事が出來ますかい、あれは他所から賴んで來た人だもの。それぢや何かいお菊もかい？」
「うゝむ、お菊さあは俺らが貰ふんだもの。俺ら先刻お菊さあに談判したよ。」
「それでお菊は何と言つたえ？」
「何とも言はねえだ。敬ささへ行つて了や可いだ。そうせりや俺ら安心して働くがな。あの人が居つちや俺ら邪魔になつてならねえ。」
「馬鹿言へ！」と主人は三度叱つて、
「足らない奴だと思つて默つて居りや、途方も無い……
……そんな事を最う一度言つて見ろ、貴樣から追ひ出すぞ！さあ出ろ！出ろ！」
主人の見幕は激しかつた。才吉は兩手を擧げて、立ちかゝる伯父を支へながら、
「ま、ま、」とをかしいほどうろたへて、オロ〳〵聲で伯母に、
「俺らそんならお菊さあ連れて行くだ！
「まだ痴言を吐かすか！」主人は立上つた。
主人は自體嚴格な人である。ことにかういふ男女間の事なぞは格別やかましい。
才吉は伯母の背後へ戰へながら隱れた。伯母は
「まあ待つて下さい。私が靜かに言ひ聞かせますから……」と夫を宥めて、
「才さ、お前分らない事を言ふものぢやないよ。ね。それぢや阿母さんが聞くが、お菊が可厭だと言つたらお前は何うお爲だ?! それでもまだそんな事を言ひますか、え、え？」
「俺ら其……其時にや死ぬ！死んで了ふ！」
と才吉は即座に答へた。夫婦は顏を見合せたが、
「死ぬ？馬鹿！さ、死ぬなら立派に死ね！」
主人はツと起つて床の間から一刀を取出して來て見せた。
すると、才吉は縮み上つて、

「阿父さん、俺らそんな物は嫌ひだ！」

「嫌ひも好きも有るかい。死ぬなら士の子らしく立派に死ね！」

「可厭だ〱。俺ら海の眞中へ船で行つて、船から水へ飛び込んで死ぬだ！」

クス〱と思はず伯母が笑ひ出すと、主人も堪らなくなつてトウ〱噴き出して了つた。

「はゝゝゝゝゝ馬鹿め！」

（二）

其晩伯母は才吉を自分の傍へ寢させて、色々と優しく噛んで含めるやうに譯を說き聞かせた。が、才吉はそんな事は耳に入つたか入らぬか、夜一夜寐ない。伯母がスヤ〱と睡りかけると、「阿母さん〱。」と搖り動かしては起す。そして、何うしてもお菊を嫁に貰つてくれと言つて、せがみ通しにせがんだ。

伯母は夜の明けるのを待ち兼ねて、かやう〱と夫に相談をしたが、結局は、そんな風では一日も一緒の家に置くのは危險だ。馬鹿丈に何んな無法なことを仕出來さぬにも限らない。今日でも何處へか預けて了ふが可いとの事に話しを極めた。それも近い處ではよくないと言つて、其處からは五里ばかりもある在方の、伯母の實家へ預けることにして、伯母が自分で連れて行くといふまでになつた。

「才さや。」と伯母は才吉を呼んで、

「お前は今日から〇〇村の祖母さん處へ行くんだよ。ね、だが、決してお前を邪魔にして遣るの何うのと云ふんぢや無いから、妙な僻みを起しちや不可いよ。其代りお菊の事は阿母さんが可いやうにしてやるから大丈夫。阿母さんに任して安心して行つておくれ、ね。お菊はまだ子供だから、お前が然うしてゐると恥かしいつてお言ひだから……」

「阿母さあそんな事言つて、俺ら欺まして追出すんで無えか。」

「馬鹿な事をお言ひでない、少時行つてゐる丈のことさ。其中には……お菊が少し大きくなつた頃には、私がお前をお迎ひに行つてさ、お菊と一緒になつて貰

ふよ。ね、お前が若し行くのは可厭だとお言ひなら、可厭ても可いよ、其代りお菊はお前に遣る事ぢや無いからと。」伯母は此場さへ旨く濟ませばとの考から、かういふと、哀れな才吉は、

「そんなら俺ら祖母さあの處へ行くだよ。約束間ちがへると聞かねえよ。」と念を押した。

「可いとも！安心お爲。」

それから伯母は小ザッパりした新しい着物にかへさせ、羽織も仕立おろしのを着せた。蟇口に小使ひが若干、何が若干とチャンと勘定をして入れて、鼻紙まで添へて才吉に渡す。才吉はッと受取つて懐へ捻ぢ込んだ。

「落さないやうにお爲。さあ下駄も洋傘も新らしいのを此處に置くよ。向ふへ行つたら祖母様や祖父様の言ふ事をよく聞くのだよ。家のやうに我儘ぢや直きに愛想をつかされるから。それから、暇が有つたら今までのやうに誰にでも本も敎へてお貰ひ。手習もお爲よ。荷物の中へ何も彼も入れて置いたから、」

「あゝ。」

「さ、それぢやソロ／＼出掛けやう。阿父様に御あいさつをしてお出て。」

才吉は主人の居間へ行つて兩手を支いたが、何と言つて可いか分らなかつた。

「そんだ阿父さん俺ら今から行きますだ。」

「おゝ行くかい。體を大事にしてな、よく皆の言ふ事を聞くんだぞ。それ、此は小使ひだ、持つて行くが可い。」と主人は廿錢のや十錢のや取まぜた銀貨をザラザラと其處へ投り出す。才吉も欲は知つてゐる、錢は何より大好きだ。猿舞の猿が煎餅でも貰つた時のやうに、あはてゝ拾ひ集めて財布に入れた。

伯母もやがて着物を着かへて出て來たが、

「それでは一寸行つて參りますから。」

「うむ。皆によろしく言つてくれ。それから此子の事は能く事情を話してな。」

「えゝ。お、もう十時だ、さあ才さや行きませう。」

主人もお菊も敬さんも皆門口まで送つて出る。

「お菊さあ、俺ら祖母さあ處へ行つて來るだ。待つとつてくれ！」
お菊は笑ひをこらへてソッと敬さんと顔を見合せた。
「そんだ阿父さん、お正月にはお客に來るよ。」
「おゝ來るが可いとも。」
「それおや才さん御機嫌よう。」敬さんが言ふと　才吉は默つて敬さんを睨めつけた。
伯母の背後についてトボ／＼と行く才吉の後姿が曲り角に見えなくなると、主人は、
「可哀さうな者だなあ！」とシミ／＼獨言ちた。お菊も敬さんも、主人の此言葉を聞くと、何といふ事は無く引入れられるやうに胸がせまつた。
師走に近い風は寒く、空には時雨雲が出た。

近代的女性の意義

松原至文

近代的女性の特質を明らかに說くには、まづ近代的といふ言葉を明瞭にしてかゝらなければならぬ。
近代的といふ言葉は、幾様にも用ゐられる。歴史的に言へば、近代は唯だ古代とか中世とかに對する言葉に過ぎぬ。然し文明史的に、近代的といふのは、最近十九世紀後半の歐羅巴の思想界に起つた『近代主義』といふ思想から胚胎して、此の近代主義の思想を持て居るものを近代人といひ、此の思想に近い婦人を一般に近代的女性と言つて居る。で、近代的といふのは必ずしも、時代の新古によつて名けたのではなくて、その傾向、その思想なりが、此の近代主義的のそれであり、又それに似て居るのを名づけたのである。
さて近代主義的の思想とはどんなものか。一口に概括的に言へば、『自覺』すなはちこれである。舊時代にあつて、人々が唯だ盲目的に言動して居たに對して、近代の人々は、自覺して覺醒的に言動して居る。『自覺』はどうして起つたかと言へば懐疑から起つて居る。なぜ宗教を信じねばならぬか。なぜ道徳は守らねばならぬ。なぜ女子は男に服從せねばならぬか。なぜ肉體の

快樂は陋劣であるか。斯の如く、なぜ、なぜ、なぜといふ疑が、舊代の制度のあらゆるものに對して起つて來た。今までは唯だ盲目的に宗教は信ぜねばならぬ、道德は守らねばならぬ、女子は男子に服從せねばならぬ、肉體の快樂は陋劣であると、その他いろいろに一種の束縛制裁が作られてそれを何の疑もなく守つて來た。ところが十九世紀の文明が、舊時代の先覺が作つて置いた學說や、信條の假設虛妄であることを證明すると同時に、一般の人々もあらゆる制度、信條、制裁を疑ひはじめ、道德や、宗教や、その他一切の制度に對して根本的の疑を起して來た。



此の舊來の道德、宗教、及び其他の一切の制度に對する根本的の懷疑はやがて根本的の自覺となり、次では根本的の破壞となり、此處に近代的の主義思想が生じて來た。ショッペンハウエルとか、ニイチエとか、キャーケゴルトなどいふ哲學者は、此の懷疑思想の張本人であり、破壞說の大將である。これ等の哲學者思想家の言行が、一般人に影響し、一般人もまた自ら根本的の懷疑自覺を起し

て此處に近代人とか、近代的女性などいふものが醞釀されて來たのである。

　されば近代的の女性といふのは、斯の如き舊來の道德、宗教、乃至は一切の制度に對して根本的の懷疑、ならびに自覺を持つて居る婦人をいふのである。今までの女性が、此の舊宗教、舊道德、乃至一切の舊制度の家の中にあつて、あゝも思ひ、斯うも言ひして來たに反して、近代的の女性は、その家の外にあつて、思ひ、言ひ、行ひして居る。だから舊時代的の婦人と、近代的の婦人とは、內容に於て、根本的に全く異なつた世界に住んで居るのである。

　かゝる懷疑、かゝる自覺の上に立つ女性であるから、第一近代的の女の煩悶は、舊時代の人々とはまるで違つて居る。一種複雜な根本的な煩悶があるのである。それを察してやらずに、舊時代的の女も、新時代的の女も同じやうな心持て居ると思つて、之れを取扱ふのは間違つて居る。舊時代的の女性にはまづ〳〵煩悶と名のつく煩悶、言つて見れば根本的な煩悶などは無かつたと言つて可い。然るに近代的の婦人は、先天的男性とは違う「姓」を持つて居り、母とならなければならぬ使命があり、一方動物的（語弊はあるが）の先天性を具へて居て、一面に人生問題といふ根本的な疑を持つて居る。此の矛盾の交叉點上に彼等は生きて居る。彼等に煩悶なきを得んやである。

　近代的女性が此の慘ましき矛盾に泣くのに對して、一般人が深い同情を寄せぬのは不思議である。今少しその煩悶を解剖して見ようか、彼等は髮を長くし、白粉をぬり、寶玉や、指輪や、その他のもので、異性の歡心を買ふに努めねばならぬ。（異性に媚びる彼等の習慣は祖先よりの遺傳である）いかに心には人生とか生死とか藝術とかの煩悶に泣いて居ても、彼等の身體の一部からは、爛熟したる血液が、月々に流れ出る。そして流れ出ては、他の動物の如く異性を求めて子孫を繁殖せよと本能はせまる。彼等とても同じく嫉妬もあれば、人を戀ふる心もあれば、肉の衝動もある。此のヒステリー的な心持と共に、心の中には、人生、藝術、

懐疑、自覺等が、ゴタ〳〵になつて旋り〳〵して居る十七八になれば他人の妻とならねばならぬ。他人の妻となれば用捨なく母にされて了う。小便まるけの子供は泣く。かくて彼等は大自然の法則のまゝに、子を哺み、子を育て、老い、死んでしまう。そして人生も藝術も、懐疑も、自覺も、小便くさい蒲團一枚の價もないやうになつて了う。彼等も矛盾の人の子ではないか。

斯の如くにしてノラは家庭の絆を脫却して『自由』の人たらんとし、斯の如くにしてヘッダは自ら焚いて死し、斯の如くにしてリタは理想の土を憧憬れた。然し彼の時若しノラをして自由の天地に走らしめたら如何であらう。依然としてノラは女。依然としてノラは人間、依然として子孫繁殖の機能は發達し、依然として子供を戀ひ、依然として髪を長くして歩むであらう。

舊時代の女性が或る桎梏の中に居たのは、頗る幸福であつた。彼等は女といふ小さき人間の型を以て生れて、而して有限の桎梏の中に生きた、然し近代的女性は、懐疑自覺によつて遽然として此の型を破るとともに、彼等の理想は無窮となり、彼の智識慾望は無限となつた、此の有限の身を置くに此の無限を以てす、煩悶無からんとするも豈得んやである。ノラは十年の間『家庭』の桎梏の中に居て、無上の幸福と歡樂とを得た、一朝目醒めたときには、這箇有限の個體は置くところがなかつた。彼女にして、いかばかり跪き、走り、躍つて自由の天地に行つても、看よ、汝の身を、女ではないか、女性ではないか、肩圓ろく、手は柔かに、身體の一部からは爛熟した血球は流れる。此の矛盾、余はノラを思ふ毎に、ノラに似たる女を見る毎に同情に堪へずして『吁、彼等醒めざりしならば』の嘆がある。

然しこれは吾等に取つて『生れざりせば』の嘆あると同じである。

以上に說いたところは、頗る抽象的にわたり、言葉も詩的ではあるが、婦人諸卿に取つては、略々その近

代的女性の特質は分つたてあらう。諸卿に取つては、以上の説明で以て、説明以上に領解あり、同感ある筈と信ずる。況んや最近の感受性敏く、神經の鋭どき婦人諸卿には、余が所期以上の同感あることと思ふ。余は止むを得ずして言葉をはぶき、記すを憚かつたところが多い。

然し此處に一應辨じて置かねばならぬのは、一方に最近女性の神經官能等の鋭敏、又は懷疑自覺、根本的の煩悶等があるのに同情せずして、頭から「女性なんぞ」と喝破して了ふ分らず屋があると共に、一方に女子の中で、お轉婆を以て近代的婦人の特質と誤解して居る人があることとである。男優りと言はたれ男に似た言行をするのを近代的の婦人と心得て居る人がある。これは由々しき心得違ひてある。諸卿よ、人間は、萬古永刧、男と女の二種に分たれる。千年萬年經つても、男女以外に人間はない。そして女はいつも女、男はいつも男てある、男子たるが男子の名譽てあり天職てあり、女子たるが女子の名譽てあり天職てある。

故樋口一葉女史は女子の間にあつて、殊にすぐれた天分のあつた人である。而して殊に藝術家として彼女の尊むべき點は、その女性らしき點にある。彼女の胸には女子としての煩悶あり（男子と同じ煩悶でない）彼女の眼には女子としての觀察あり、（男子と同じ觀察ではない）彼女の腕には女子としての技巧があつた。（男子と同じ技巧ではない）。

若し婦人としての諸卿が、婦人としての本性を失ひ亡くして、男子と同じ煩悶をし、男子と同じ活動言行をしようとしたならば、之れ實に諸卿自ら男子に屈服したものである、個性は尊むべし、文藝でも何でも、世が進むに從つて個性が尊まれ個性的となるにつれて、男子はいよ／＼男性の本能を發揮し、女子はいよ／＼女性の天職を發揮せねばならぬ。余は女子の先天的特質を尊む、故に殊更らにかくいふのである。

女性の女性としての煩悶、女性としての觀察、女性としての手腕、これは尊むべきものである。文藝に於て殊に然りてある。唯だややともすれば、男子に屈服

して、男子の如き眞似のしたい、お轉婆な娘のあるのを、余は中心女性の爲めに惜まざるを得ない。

余は日本の女子が、最近に到りて、殊に近代的となり、近代的の煩悶に惱み、近代的の自覺に到達したことをよろこぶものである。唯だ男子の出來損ひのやうな、クズが此の間に生ずるのを憾とする。いくら踠いても火は水の用をなさず、水は火の用をなさぬ。水も尊むべし、火も尊むべし、火が水の性なく、水に火の性ないと言つて口惜しがる必要がない。たま〳〵水の火の如くならず、火が水の如くならぬと言つて、火が水のまねをしたり、水が火のまねをしようとして努めるのは、その火たり水たるの天職を自ら汚すものである、萬古永刧、女性は女性である、男性は男性である。

女性として煩悶せよ。その煩悶よ深かれ。かくて大なる女流藝術家出でむ。彼等が多く大成せぬは男子のまねをするからである、一葉の不朽であるのは偶然ではない。

女子と犯罪

留岡幸助

一躰犯罪は男子に多くして女子に少いと云ふのが原則なんであります。何故女子に少いかと云へば、二つの大原因がある、其の一は人事に關係すると少く、僅かに家庭の小區劃を根據とするが故に、直ちに社會から犯罪の誘引を受くる境遇でない、其相手として居るものは皆自己の最愛のもの、即ち夫、親、子女等であるが故に犯罪も自然少いわけである。

今一つは所謂犯罪なるものが、女子の體格上出來難い、塀を踰越て盜むとか、人を嚇して强奪するとか、白刃を揮つて殺人するとか云ふ事が體質上困難である。即ち其比例は男子に多くして女子に少いと云ふ事になる。處でどう云ふ比例かと云ふと、歐米各國、即ち英米獨佛などで、男子百人に付て女子の犯罪は二十人、最も多くして二十二人である。然るに日本はどうかと云へば、男百人に對し女十二人位である。どうして左樣に少いのかと云ふと、畢竟歐米各國程文明が進んで居ない、隨て女子が實社會に接觸する機會が少いから

てあります。しかし追々に日本でも女子の職業も出來て、交換手、受付、書記其他いろ／＼の職に就いて居る者もある、小學敎師はいよ／＼多くなる、其他實業等に女子が多く關係する事が多くなると、自然犯罪も殖えて來るわけになりませう。

其れから歐洲各國と米國とを比較して見ると、歐廿二人に對する米二十人に當る、即ち二人少いとになるしかし前云つた實際社會の交渉は米國程多いところは無いのである、學校敎師の多數は無論、醫師でも辯護士でも、其他實業界に從事する婦人は實に多い、然るに歐洲に對して何故斯く少いと云ふ反比例を見るかと云ふに、凡べて同地では何でも女子を贔負目に見るのて、警官や裁判官と雖も婦人に對しては寛容である、社會全體が聖書の所謂「弱き器」を扱ふと云つた格で勞つて居るから、さう云ふわけて表面數字上少からしめて居るのかと思ふ。

次に改心の割合は孰れが早いかと云ふと、男子は犯罪する事も早いが改悛も亦早い。女子は容易に犯罪に入らぬ代りに、一旦陷つたからは改悛も亦容易ては無い。女の囚人を取扱つた典獄なり監獄學者の言ふとを聞くに、男囚三人取扱ふより女囚一人を取扱ふ方が困難であると云ふ程である。女子の犯罪は前に言つた通り體質を異にして居る所から、惡い事をするにしても、多くは家庭の外に起らずして、家庭の內に發生する、元來虛榮心の強いもの故、其盜みなども殆んど虛榮を滿足せしめんとするに起るやうて、竊盜などは身を飾らんとする爲めに外はない樣てす、も一つは痴情からの盜みがある、つまり其れは情夫に貢ぐと云ふ樣なわけなんてあります、又痴情から來るものに放火犯が尤も多くあります、人命犯ては墮胎、進んては嬰兒壓殺等て是れなどは女子の特種獨擅の犯罪てあります、それから殺人は或は親或は夫とありますが、其方法は斬殺とか絞殺とかは餘まりなく、大抵毒殺の手段に依ります、さうして女は溫なしさうな顏して居ながら割合に慘酷なとを敢てする、殺すのも只殺す丈けてはなく實に甚いとをする、此間赤坂にあつた、鼻の先を壓した致死の如き實に犯罪が慘酷である、か樣なわけて毒殺壓殺放火と云つた罪狀の重い方に女の嵩が多くなつて居る。

かゝる女子の囚人を取扱ふにはどうしたら宜からうかは問題てありませうが、すべて取扱と云ふ事は經驗を本とせねばならぬ、しかし「男には知れぬ暑さや帶

の幅」で、男では女が分らない、生理上女の要求の如何を知る事は出來ない。そこで私の考へでは女學校を多く女子でやる樣に、女囚の取扱も全く女子の手に委して其感化に俟ちたい——尤も高等女學校の經驗に依るに、女子の學校の校長は男子が宜いと云ふ事ですし又今日の國情ではどうかは知らぬが、米國ではボストンから十里離れたシェーボルンに女の監獄がある、是れは世界第一等です、日本では婦人のみ收容するのが此近所に八王子などですが、矢張り特別ではなく典獄は男です。

で、私の希望は是れから新らしき教育に依る幾多の訓練された女子の出づるとを待つのです。日本の女子が女學校長として、婦人の典獄として不適任だと云はゞ、それは止む無く日本の教育がまだ進まないからだと云ひたいのであります。（談話）



女の美しいと森の反響と虹とは直ぐ消える。
娘と死んだ魚とは貯へて置けぬ。

呪はれたる女

女のりかうより男の馬鹿がよい。

女房は掃溜から拾へ。

嫁と名がつけば吾子でも憎い。

女の番より金の袋の番がしやすい。

金の女より藁の男。

女と瓜は選るのがむつかしい。

水車と時計と女は修繕が絶えぬ。

女と硝子はいつでもあぶない。

娘三人と母親一人は父親にとつて惡魔四人。

死んだ女にも心許すな

女に智慧があれば驢馬も梯子に登る。

燈火がなければ皆同じ女

晝と夜と

（アルフレッド、モンベルト）

森川葵村

一、まどろみの歌

しとやかに雪ふりぬ、地の上。
しとやかに雪ふりぬ、心の上へ。
はやも積りぬ、閉ざされぬ。
あな美しう疲れし汝よ、
あゝ汝、若き女子。

ほの白きさ霧のなかに、いと赤く日ぞ夢む、
さ霧のなかに荒める心臓が。
照らし疲れぬ、
愛し疲れぬ、
あはれ今、消えん、はたや
眠らん。
あな美しう眠れる汝よ、
あゝ汝、若きをみな子。

二、夜のひらめき

積れる雪の上、沈みゆく日は血まみれよすゝり啼く…………
かすかに、かすかに、吾は汝が歌ふを聞く、聖マリヤ…………

『吾が唇は破れ傷めり、吾彼に接吻けき、吾が骸、病めり冷えたり、吾彼を温めき、吾が心臓、虚けぬ、死しぬ、吾彼を愛しにき。……』
かすかに、夢に、吾は汝がうたふを聞く、聖マリヤ……

アルフレッド、モンベルトの詩は「直接的再現」に依る心理的經驗、夢想、錯覺、及最主觀的種類の表白なりと謂ふを得可し、……ハンス・ベンツマン

處女の外出に伴ふ周圍の不安

學校を出ると改る

第一の女

學校通ひをして居ます時分は、どうしても外出する用が多う厶いますので、マア出馴れて居るとでも云ふのでせう、どんな繁華な町でも亦寂しい道でも一向平氣で歩いて居ましたが、もう袴を脱いで裁縫や家事の手助をするやうに成つてからは、友人間の往復もだん〴〵疎く成りますし、又日々の買物歩きは先づ娘にはさせませんから、いつとはなしに家に閉ぢ籠つて居る習慣がついて了ひます。サアこう成ると外出するのが誠に億劫に思はれて、家の閾を離れると、動作から氣の持ちやう迄が改まるやうで厶います、デ外へ出て一番目に付きますのは先づ自分と同じ年頃の人で、お美しい方だとか、淑やかな人だとか又はどう云ふ御身分で有らう、奥さんかしら、お嬢さんかしら、などと一寸浮ぶ事が厶いますが、別に深く印象を殘すやうな事でも無ければ、皆頭を通り脱けて了ひます。隨分厭な感じを起すのは、レーテストスタイルのハイカラ孃(?)とでも行き會ひ出して、殊更につんとすましてプラウドに輝いた瞳をじろりと向けられた時です、如何にも自分が蔑まれたやうな一種云ふに云はれぬ不愉快を覺えます、總じて凝視されるのはい丶心持のせぬものです。

それから餘り當世の流行に走らない寧ろ質素な二三人連の女學生が、樂しげに靜かに語りながら行くのは何と無く床しく懐かしくて、モ一度あ丶云ふ身分に成つて見度いなどと羨ま敷思ふ事が有ります、けれど、人が見て居やうと笑ふて居やうと一向かまはずに好く謂へば天眞爛熳とでも申すのですか、勝手に云ひ度い事を喋つて、きやつきやと騷いで居る女學生を見ると畢竟あ丶云ふ人が有るから一般の女學生の品性を下げて了ふのだ……批難の聲が高くなるのだ、と忌々敷くて成りません。

又一番つらいのは連の人が知人に會つたり又は寄り

道でもして、自分一人、途で待されて居る時です、まさか往來の眞中にも居られませんから電柱の影とか、家の軒下にでも呆然り佇て居ますと周圍の悉くの視線が皆自分に集つて居るやうて、どうしたらいゝかモジモジして居ますのを、はしたない者に揶揄れたり嘲笑れたり仕ますともう腹立たしいやら、羞かしいやらて身の置き處がなく成つて、仕舞には泣き出し度く成るやうな事が度々ムいます。

或る日の外出記

第二の女

當分何處へも行くまいと、昨日桃割に結つてからひとりできめて居たのに秋田の××様がきのふ當地に御いでになつたとの事、明後日すぐまた三池の方に御出立だといふ事が知れたので、私は代理に御訪ねしなければならない事になつた、いつそほどいて行かうか、ても折角昨日結つた許りなのに、いゝ、搆ふ事はない、着物をきをつけて下品てないのを着て行つたらまさか女中が來たとも御思ひにはならないだらうから、てこれならと自信のある着物を出して、それから襦袢は薄紅色の襟を急に白地の百合のとかけ代へる、そんなに守子じみるのが心配なら何も日本髮になんか結はなくてもいゝのにと云はれるのを、ハイハイと可い加減にきいて粉屋にあやしまれないほどに刷いて拔衣紋に着物をきてしまふ、「ては行つて參ります、と「此梅雨晴のあてにもならないお天氣にピンクの洋傘さして行つて雨にふられたら如何するつもりだらう」といふ様な眼つきに送られて出る。

電車の停留場までは一寸間がある、先方に行くまでに白粉を汗て臺なしにしてしまつては大變だと思つてそろ〳〵歩いてゆく、大きなからだをして牛があるく様にのろ〳〵して居ては嘸人がおかしく思ふだらうなどといらぬ心配までして傘て顔をかくしてゆく、束髮のくせがついて居るものでとき〳〵かさをまげに打ちつけて、あ、こはれたかしらとハッとなる、もう傘でかくす事はおやめにする、途をあるく人の様子がつい眼につく、年とつた男がせはしさうに向から歩いてくる、顔は赫くくろくなつて眼は灰色の様ににごつて居る、私はつと眼をそらした、今度きたのは髮をほこりだらけにした女、世帯にやつれた様な顔をして元氣なくあるいて居る、もしも私もあんなになつたら、と想

像して見て思はずみぶるいした、おゝ厭だ、と思つて居ると側で「お早うございます」と人の聲、まあ吃驚した、肉屋の御用きゝがにつこりして居る。

もう下らない事を思つたりしないで歩く、と曲り角の床屋の鏡に人の姿がうつる、段々近づいてみると、まあ、自分のかげだつた、何だかもつと大人の樣に見て居たが、さうすると私あんなに大人ぶつて、すまして氣取つて歩いてるか知らと思つて吃驚して獨りで一寸顏が赫くなる、だからもうそんな人の眼つきを見て觀察とやらの眞似事なんかするものではない、もつと陽氣に、もつと無邪氣に、はなやかにならなければならない、老成ぶるのが一番いやだ、などと思つて居る間に電車の通りに出た。

暫く待つて居ると電車が來た、滿員、乘り度さうに見られるのはいやだから横をむいて居る、次の電車が來た、停らないでゆく、腹は立たないけれども四邊に人が居るときまりが惡いと思つて一寸まわりを見たが誰も居なかつた、で罪を許された時の樣に安堵した、漸く電車にも乘り切符も買つた、席が無いので立つて居るのだけれど革につかまるのは見たところあんまりよくないから傘を下についてそれてかぢをとる、學校に居た時分遊動圓木のチャンの春江さんがこれていつも電車にのりとほして或時大失敗をなすつたつけと思つて私も曲り角や、發着の時は一生懸命に注意する、おかげで遠心力や隋性やむかしむかし其昔の御講義のおさらへをしてみる、お連れがあれば話し通しなのだけれども獨りではまさか知らない人にも話されず、退屈だといろ／＼な事を考へるものだと可笑しくなる。

青山三丁目「お降りはございませんか」まあかうきてしまつた、私は急いで降りて墓地を眞直に霞町の方にゆく、久しくお墓參りにも來ない、今日は幸參つて行きたいのだけれどもひとりではまた變な人に逢ふとこはいから此次にしよう、と、我が目指す家に急ぐ。

女は女に眼をつける

第三の女

私などから見た世間と申しましても、廣い中のごく狹い、ほんの一部分を覗くに過ぎませんけれど、夫れても狹いなりにも見へますから面白う御座います。

道をゆくにしても、ゆきちがふ人が女だと直ぐ目につく。それは私のやうなぼんやりな者にも、同じ道を

同じ人がゆくのに、異性よりは同性の者の方が注意を惹いて、立派な洋服姿の光る靴鳴らして行過ぎる夫れよりも、赤ん坊負つて襟のすれた半纏着た女房の方が目に付きます。まして四邊が明るくなつたかと思はれるやうな華やかな裝ひした方にでも逢はふものなら、それこそ正直の處お頭髮の結樣からお召の柄合裾廻しの色まで仔細に見て了ふと申すもの、つまり女は女の世界で別なのでございませう。

ことに總てがさうときめる譯でも御座いませんが、誰しも自分の年配に應じて同じ年頃のものには一層目がつく樣子、私にしても電車にのつた處のり合せの中年の女や年老ひた人等は左程氣にも留まりませんけれど、若い方々なら娘さんでも女學生さんでも熟く觀察すると云ふ譯、又自分も大きに觀察されて了ふのでムいます。

男子が後をつける

第四の女

外出の時は何となく怖氣が附くもので見たい物も見ないふりして通り過ぎる、そうすると必とすまして行くとか氣取て行くとか言はれます、そうかと申て友人とでも少し聲高に話し合つたり笑ひ興じたりして途を行と今度はオキャンだと云ふ、たまに無據親類の若い男子とでも外出しよう物ならまるでラバーとでも步いて居るかの樣にこそ／＼と囁き合ひクス／＼と嘲笑ふてはありませんか、それはまだしも人の惡い學生にでも出會はふものならそれこそ口笛を吹いたり、囃したてたりりするので、もう／＼消え入りたい樣な心地が致します、此んな時でも男の方は平氣で居破いますがこういふ塲合の私どもの心は實際其身になつてみねば分りますまい、又男學生の集合して居る側だとか職人等の集つて居るそばなどを通るのは嫌な物で、たとへ先では何とも思つて居なくとも目は自然地にそゝがれ顏はほてつて足許までおぼつかなくなるのです、他から見たら可笑しいでしようけれど、何うしてもそうなるので、自分でも出來る限り平氣を裝うつもりでも駄目なのです。

それに惡學生などに後をつけられる事が能くあります、で此麼事に經驗が積むと申すわけでもありますまいが、自分に何か云ひ寄りでも仕そうな人は其目付又は後から附いてくる足音に依て大概推察ができます、

其時はもう胸がどき〳〵して堪りませんけれど、足など早めてはかへつて弱みを見せる樣な物と敗け惜しみをだして、平氣を裝ひゆう〳〵と歩きます、けれど心は不安で〳〵堪らず、此う云はれたら彼云はふ、彼云はれたらこう云はふ、と、チヤンと胸の中で定めてをきますが、果して何とか言葉を掛られた時はどうてしよふか——思つた半分も云はれゝばこそ、ぐうの音も出ません勿論學校から日頃注意されて居る條件の中には、道てどんな男子に言葉を掛けられても、決して答へてはならぬと申渡されて居ますので、一方にはそれを守り、一方には自然と喉がつまつて仕舞ふのです、先が口をすくして何と申ませふとかまいません、うつむいたまゝ半町や一町は無言て歩きます、其うちに大抵の男子なら張合が抜けて何かぶつ〳〵云ながら、もどつて行きますが、また執念深いのは終に



袖を抑へたり、袴を引張たりして御定りの文句が始まるのです。こうなつた時は度胸がすわるとても申すのてしよふか、後て考へて見ると、よくも彼んな事云つたと人知れず冷汗を流す樣な、随分思い切つた口をきゝます。そうするとさすがの男子もおどろくのか、あきれるのか、都合に意氣地なくもどつて行きます。此時は今迄の恐しさもどこえか消えて、胸には多大の誇がきらめき、頬にもれるほゝえみを禁じる事が出來ません……一躰處女の後などを附けてくる樣な人は、何が目的なのか存じませんが随分馬鹿氣て見えるものです。多くの中には遠方の處御苦勞樣にもついてきて、別に何を云ふでもなく、まるて啞の旅行見た樣に、終に門の前迄來て、何うするかと思ふと、だまつて表札を見て歸つて行くのです。此麼のがかへつて、薄氣味が惡くて仕方が有りません、是も

何が目的か知りませんが時折參ります、知らぬ男名前の手紙の主かも知れません、何しろ處女が外出すれば誘惑と云ふ誘惑不安と云ふ不安が付いて廻るのですから、從つて自分でも絶えず八方へ氣をくばつて居るのです、で何が嫌と申して道で若い男子に話かけられたり、顔を見られたりする位嫌な事は有りません。

こんな事ばかり申すと、何だか處女と云ふ者はおとなしい罪のない者の樣に思はれますが、なか／＼さうでもないのです、處女其者が外出の時はどうかと申ますと、第一驚く程目を働らかせます、それも公然とするでなく見ぬふりして働かせるのですからむしろ罪は深いかも知れません。先一番に目を附けるのが矢張自分と同じ樣な處女へです、すれちがふ瞬間に互の目は機敏に働いて、先の服裝から化粧から容貌にまで注意致ます、此時の目は一種異樣にかゞやきますから誰でも氣を止めて見ればわかりませふ、そして先が自分よりおとつて居れば滿足致すのです、まあ早く申て見れば味方どうして敵視致して居る樣なものです、次は若い御夫婦連の方にですが、是は別にどうしてと云ふわけはないのですけれど、どんな御樣子して居被かとか餘り身丈が違ふとかで、只無意味に面白半分で見るに過ぎないのですが、妙に目に止るので、目を附けるのです。

外出中青年男子をしげ／＼見るなど云ふことはおそらく有りません、何故かまぶしい樣な氣が致しますので、出來得る限り會はぬ樣にとつとめるのです。何しても外出中の處女の胸中は他から見る程氣樂なものでは有りません、一から十迄恐にもつかぬ事を氣をつかつて居るのです。

金時計

佐野天聲

金が一文も無いので朝から燻つてるとＡ氏が訪ねて來た。此人は小學校の教員で、至極戊申詔書の旨に適つた行爲の人である。此人に對すると私は毎時囚はれなければならなかつた。妙に嚴格で、八字髭を喰反らした所は何うしても近頃評判の加藤肥州といふ柄に見える、つまり「古武士の風とでもいふのだらう、齢は

私に五歳ほど上て、鉢格は私の五尺五寸五分を越ゆると正に三寸、ひよろりと高い私などのちよろまかいのでは無いから見て呉れが至極いゝ、此れに軍服を着せて、三軍を叱咤せしめたら嘸好將軍が出來ようと思はれる。

座に就くといきなり「何うだ金があるか。」と來た。前記の通りの次第で無一文だから「金は無い。」と云ふと「無けりや貸さう、幾ら要る、五圓位でいゝか、其れ位ならあるよ。」

二十億の借錢負うて夜晝稼ぐ日本國と同じ程度の此人の口から這樣奇拔な言を聞かうとは思はなつた。

「不思議だね、君が僕に金を貸さうなんて言ひ出すのは、一躰何ういふ譯か。」

「何ういふ譯も糞も無い、多年籠中鳥、今日負雲飛、今日は俺の年期あけだ、即ち恩給を得る定年に達した祝ひにぴい〳〵風車の君に金を呉れて千里同風の喜びを喜ぶといふ趣向、遠慮せずに取つときたまへ、其かはり君に借りる物がある、いや貰ふ物がある。」

「なんだ？。」

「其時計を呉れたまへ。」

「此時計？。」

「うん其時計？。」

「冗談いつちやいけ無い、此れは君一昨年歿つた友人の死紀念だ、幾ら千里同風でも君に差上げるとは出來ない。」

「出來なくつても何でも貰つてくよ、一躰君の分際で金側時計なざ僣上だ、戊申詔勅の旨に反する、寄越したまへ、愚圖々々すると腕力に訴へるぞ。」

此人の腕力は有名なもので、米俵を一俵宛兩手に提げて拍子木打ちをするといふ程だから、首根ッ子をしよづまれてもすると藥代に三圓は出る。友人間の獅子王である。

「まア待ちたまへ、事と品によれば千里同風芽出度申納めんともいはんが、一體全體、何にするんだい、人の時計を引ッたくッて。」

「ひッたくるなんて人聞きの惡いとをいふな、貰ふべ

き理由があつて貰つてくんだ、さッ愚圖々々云はずと寄越したまへ。」

「其理由を聞かんうちは僕にも虫があるから滅多に遣らん。」

「ぢや云つて聞かせる、月末になつて、薪屋や酒屋に總攻撃を受ける樣な埒くちの無い身分の者に百圓近い金時計を持たしとくのは聖代の不祥である、宜しく此れを敲賣つて、其金を土台金にして銀行に預けて利を生まして子々孫々永遠の基礎を搖据ゑるといふのが趣意、つまり君の爲を思つての老婆深切だ、潰しにしても五十圓の價値はある。君の手に置くと、何時かは飲むか食ふかしてしまふ、其れより今のうち吾輩の手で處置しておけば、君の子供が大きくなつて、學資に困るやうなとは無い、大枚五圓といふ金を呉れて其上貯金の世話までしてやる深切者が何處にある、世は澆季でも俺の樣な者があるから此社會が維持される――なに友人の紀念だから人手に渡したく無い、馬鹿云なたまへ、友人の紀念だらうが何だらうが、左樣いふ贅澤品は手元に置くべからず、分相應の紀念品と取ッ換へて此品を是非俺に寄越せ。」

「分相應の紀念品に取ッ換へたいッても、もう友人は死んだあとだ、紀念分けも濟んだ後だ、今更交換は出來ないよ。」

「出來なきや尚更君の幸福だ、分相應の紀念は甚だ不生産的だが此れは生産的に取ッ換へられるから千里同風芽出度申納むべきもんだ、歿つた友人も自分の紀念が生産的に生れかはつて君の子孫を賑恤し得ると聞いたら地下で飛舞雀躍するだらう、而もともなり戊申詔書の御趣意にも適ふ美擧だ、是が非でも吾輩の意見は容れしめるよ、さッ時計を渡したまへ。」

一旦口外したら後へ退かぬ此人の性質を知つてゐる私はもう爭ふも無益と思つたから潔く時計を渡した。

「ぢや君の自由にしたまへ、僕はもう法廷で爭ふ樣な愚はせん、辯護人も糞もありやしないんだからね。」

「何を云つてる血迷つちやいかんよ、吾輩は法廷で爭ふの辯護人を添けるのッていひはせんよ。」

「君は云ふまいが、僕の心が唯左樣いふ事を想像したのさは丶丶丶丶、時に今の五圓は何うした。」

「五圓？、む丶左樣だッけ……いや其五圓も此元金へ入れちまはう、左樣すると此時計が五十圓に賣れると假定して都合五十五圓の元金になるから五分の利として年二圓七十五錢は儲かる、此れを鼠算的に五十年積立て丶見たまへ、太閤の度膽を拔いた曾呂利新左の故智も啻ならずだよ、まア大船に乘つた氣でゐたまへ二三日内に吉左右を知らせるから、ぢや此れて失敬する。

　Ａ氏は獨りいきりきつてふいと皈つて仕舞つた。

其後三日經つても五日經つても沙汰が無い、變だと思つてゐると六日目の午後第一銀行の預金證書と急遞の認印（無論私のである）とを持つてＡ氏は沈着いた顏て遣つて來た。

「思つたより金になつたよ、吾輩は高て五十圓位と縊つてゐたが何うして其樣もんぢや無い、見たまへ此通りだ。」

見ると、金八十五圓也、右當行に於て云々、何年何月より何年何月迄滿一ヶ年間云々としてある。（いふまても無く端足よりＡ氏の厚賚である）

私は恭しく證書を押頂いた。社會の制裁と或權力には古今を通じて敵し得ないものだと思ひながら證書を伏せた。

「何うだ恐入つたらう。」

「恐入りました。」

「以後金時計なぞ持つちやいかんぜ。」

「畏りました。」

「今日の新聞を見ると宮內省ては今年の二大工事を御中止になつたとある、何と有難い思召しぢやないか、君子の德は風なり、小人の德は草なりて上御一人の思召しを心としない者は無いから、今後は誰も別莊入りなどは爲ないやうにならう、此れが所謂千里同風芽出度申納候だね、お芽出たう。」と云つてＡ氏は件の證書と認印とを又所鞄に入れて別に預證を私に入れて、さッさと歸つてしまつた。私は其後姿を見送つて淚を拭

いた、大事な友人の紀念が此今鬼上官の爲に蹂躙られたのを悲しんでか、其れとも他に譯があつてか其れは何とも云へないが兎に角私は自分の身長よりも三寸高い偉丈夫の後影の見えずなるまで見送つて潸々として涙を垂れた、而して預證を叮嚀に革文庫へ仕舞つた。

「此れが麵麭の種である。」

私の子孫も矢張り此偉丈夫に似た偉丈夫の爲に同じ熱涙(?)を絞るであらうと思つた。

其翌年私は此預金證書から生れた利子で妻と子供に晝餐を買つて遣つた。

妻は云ふ「Aさんのお蔭ですね。」と、子供は云ふ「いゝ衣服を着て嬉しいな。」と、私は默つて友人の紀念の金時計が何處かの人の兵兒帶の間に燦として輝くのを想像して頭を垂れた。

○暑さと山　本年は梅雨が長く續いて、雨がやむかと思へば、突然九十度以上の烈しい暑熱が來た、それが爲め海に山に旅行するものは多い、富人が富士山に登つたり、音樂會が頂上で催ふされたり、三國一の名山も時代に刺戟されて活動を初め電線電話はもとより、今に中腹まで電車が敷設されるだらうとの噂、富士登山も夏の一大行事になつた。

マドンナの繪額

兒玉花外

私は理髮床で頭髮を刈つてもらつてる。雪のやうに眞白い新しい前被布に、刈られた毛がポロ／＼と落ちる。

田舍の百姓の手の鎌から刈られる麥よりも、人間の黑い髮の價値は無い。が併し、幾日でも假令、わが火の如うに熱し易い頭を蔽ふてたのだと見ると、惜くはないが妙な心持もされる。滿更草のやうにもみえぬ。

晝夜とも、床屋では種々の人の髮毛が刈られるが、造化の目から覷たら悉皆違ッてる事だらう、乾度艶も香も別なのであらう。——男の刈られた髮の毛は集めて何うなるのだらう。

芝居で小姓や若侍などを見ると、女にしても美しい恍惚れ／＼する男の額がある。昔の時代、イナ直ぐ維新前までは男の面も美しかつた、服裝でも風俗が優美美術的であつた。私は、人情でも古代の方が嗜好だ。お七、吉三の繪畫を覷ても、小姓姿の吉三の方が反

ッて綺麗ではないか。

西洋でも希臘の古代から掛けて、男の神樣でも學者でも頭髮を長うに、雲か藁のやうに廣い額へ垂らせてるのを見ると、威と美とが調和して具備ッてある。バイロン、セレー等詩人達は無論のことである。

文明とは、建築や器物を宏麗には爲るが、一面、人體や心を害ひ濁す恐ろしいものである。

て、女の髮となると、色絹糸よりも何よりの女の寶てあるは無論てあるが、如何に世の中が進み替つても女の髮が短かくなる時はなく、枝の鴉の羽根が白くなる事はあるまい。

俳優が使用ふ大鬘は古び砕けてもよし、女が四十頃から頭髮がそろ〳〵白うなり出すのと、熱かなんかて、病んで髮が薄う脱けるのは造化の無情殘酷、女一代の絕大な悲劇てあらう。



また女の髮は印度の大象を繫ぐ喩は陳腐だが、西京本願寺の棟木を千人の切つた太い髮綱て曳張つた話は少し新しい。斯の信仰があらば神佛は愚か天地を結合す事も六ケ敷くない。

田舍にも鎭守の森の社前によく女の艶な切髮を供へてあるが、私が神樣だつたら何んな願ても聽いてやる。

世の中の女を欺した男は其女の恨み長い黑髮て憎い身體を牽縛ッて、そして底知れぬ海中へ沈めて蝦や鮫の餌喰に喫はせてやるがよい。

今ま理髮師の手に持つ剃刀が俄に、細う開いた眼の前にギラリと光つたので、私は空想から醒めて自分に復つた。……横側の大鏡に映る片頰が蒼白う痩せてゐる、何だか自分の顏てなく他人のやうな妙な氣持がする。

い、ふいと瞳を擧げると、其の硝子鏡の上方に、聖母アリヤの肖像の額が懸ッて在る。

基督を懐胎んだ聖母だと知ッてか識らいでか？人相も一風變つた奇態な理髪師だと考へた。

噫、狹い貧しい床屋の中でも、マドンナは例の路帶つ慈眼を開き給うて、日夜入込む男客の重い頭腦を高くから見御したまうのであらう。

傀儡子（二）

横瀬夜雨

多少でも動けば、尻だ腕だと熱いのと衝突つてやけどをしさうだから、母の胸にかぐり凭つてばかりゐた。これは鐵砲風呂といふのですよ、自家にも鹽部屋の脇に在る、お父さんが窮屈がるからたてないけどと母が説明する。湯槽の中から太い丸い奴がずつと上へ出てるので、手拭を丸めてびちや〳〵叩くと、そこだけ濡れてすぐまた乾く。濛々と煙立ちこめて誰も誰も來ぬ明るい小さな浴室で、窓からは青い空に引きわたした鐵線が見える。

「あれは何なの」

「あれはね、こゝに居て遠くの人と話するもの。横根の髭おぢいさんから、今朝もまあちやんに早く歸れ、土橋のとこに待つてるぞと言うて來たよ。」

「噓言！」

「いゝ、噓言ぢやありません、だつてまあちやんはもう治くなつたぢやないか、下駄が穿けるし、獨樂が廻せるし」と笑うて抱きしめられた。

「さうだ俺は治くなつたんだ」と小さな頭にもそれは信じた。起てぬ足も立つた、白い兎にも噛まれなくなつた、家へ歸つたら馬に乘つて學校へ行くんだと思つた、きつと四郎がうちで泣いてゐる、母さんを取り返されるからもつと東京にゐたいなとも思うた。

大きさは鳩の卵ほどあるビイドロの玉の青いのや赤いのや、餅花のように枝垂柳の枝へ附けたのを天井から吊してふら〳〵動くのを見た、頭は母の膝へ仰向に

畫せる。

かさ〳〵するけれど母の手は白い、それを掴んで胸の上へ持つて來て掌と掌とすつて見たり、指を逆に曲げて痛がらして見たり、くた〳〵に揉んでお獅子を拵へて見たり、兩岸の家々にぼんやり點つた灯の何處までも何處までも續いてるのも見た、行き合ふ船で黑い炭（石炭？）をちやりりと大十能へ突つかけては火の中へ入れるのも見た。血が止らないでナイフも裂も眞紅に染めたまゝ手を舵の上にもたせてた蒼い顏の母も見た。

東京より下妻までは陸路十八里、船に乘れば深川の高橋より中川に入り江戸川に出で、溯りて關宿に達し、大利根の流れを横に下總の境へ、境より七里、鬼奴川を渡れば、大寶の森ははやくも眼に落つる、水田遠くつゞいて白き壁黝き茅家、路は村を串いて東筑波に行くのである。

（……都の雲を西に見て、川を常陸に越す舟の、棹かすむるはよしきりかと、歌ひて美しき混血兒をいたんだのはさらに十年ののちであつた。鈴なりに生れる柿の赤々と實ばかり殘つて籬には夾竹桃――毒ある草の花やかに咲いた家で、仔馬いななきはね黃金ケ原の牧場は櫟の野になつてゐた。）

髯おぢいさんは店――上り鼻の段ばしごの下に大きく趺をかいてゐらした、忘れたように行燈がぼんやり點つて、神棚と佛様とにもさゝやかなお燈明が上つてた、としか覺えてゐぬ。

姉さんにお土産にするのだといひながら、病院でおもちやにした大人形は病院で失くしたようにも聞いてる、姉は二歳下の自分を負ひたがつて手ぎはよく負へず泣かし泣かしした癖にまだ人形の欲しい年だつた。

退屈すると附添の看護婦に負はれて燒芋と草双紙とを買に出るのが日課で、今日は地雷也あしたは白縫とだん〳〵本の溜るのが無性に嬉しかつた、その中に綺麗に彩色までして、イト、イヌ、イカリに初まり、酒と煙草は養生に害ありておしまひになる小學讀本があつた、初の頁になまいきに髪を分けた若い先生が、

ト、ヰノシシと書ける塗板の前に立つて、下の方には机を並べた生徒がかしこまつて聞いてる繪がある、ヰノシシはこれと紙をめくつてすぐ見つかるやうになつてた。仁田の四郎忠常がうしろ向に乘つて刀を尻へ突ッとした毛物だと後で知つた。父が今にヰノシヽになるぞというて、黑い犬ころ見たいなのを外から貰うて來たとがある、朝起きると、けふはきんばが生たか、けふもまだかと母に聞き聞きしたが、いつまで待つても生へず、尻尾は中坪の市齋先生が髯に似て、卷いてあつて短く、ヴヴと鳴く奴だつた。

ヰノシシから、シシ、トラ、ヘウとまあちやんは、とう〳〵母さんの膝の上て、小學初等六級の本を卒業してしまつた。繪がきれいなのてその方へは獨て入門した、〇の中へボチボチと點を三つ書いて顏とするのから覺えて、加藤淸正の虎退治、よしつねの九艘飛などの名畫は、今も東の藏の內壁に殘つてゐる。奥坐敷の壁にも、母の知らぬ間に母の顏が描いてある。床の間の壁には、嚴然として巡査の首がころがつてゐる。大坊主小坊主、前藏の白い壁には、腰卷をめぐつて行列を作つてゐる、皆墨だ。なぜあんな落書をしたか、今になつて消さうとしても消えず、人に見られるたび疵をつゝかれるような氣がしてしかたがない。棒ちぎれ持つて騷ぐとはせぬ代自分のいたづらは繪具を解くとと筆を舐めるとに於て極まつてゐた。

太鼓もよく叩いた、勿論人のぢや無い。人のよりはちと大ぶりなので、擔いでも提げても歩けず、しかたなしに、往來をころ〳〵轉がしてとなりへ行くと、椿のよく咲いてる家て、下に稻荷樣があり、その屋根へ上げては、シャンギリやら馬鹿囃やら、何か面白くてかくたびれるまで鳴らした、椿の花をくはへて脣を少しそらして、どうかするとピユーと鳴る、源一は花を口にして桴もろ共に鳴らすのが巧みだつた。

一朝、雨が降り風が吹くと、腕白の小諸伯は定つてしやくりに苦しんて、泣くとも出來ぬほどに痛めつけられる。さうなると、夜具戸棚の間へ入つて足を縮めて寢てしまうか、家中探し歩いて母を見つけると、倒

れるように膝の上に突伏すかした。

よく狂ふ時計だと醫師は笑うた。夜は朝とちがつて來るし、今日は昨日と異つて、壞裂四出、母は手のつけようも無くて、たゞかゝへ通しに明かした夜さへあつたらしい。

けれど自分は、母の乳を弟の唇より奪ひ取つてなほわが物となし得られたよろこびにまぎらかされて、朝に去つて夕に來る苦痛を忘れてゐた、眼を明いて見えるところに母が居れば滿足して、一生をぶちこはした病鬼を憎むとすら知らず、わが生の値なく、わが悲みの慰めらるゝ期なきをさとらず、求めて飲みにくき肝油を飲みつゝ、じつとしてなほる日を待つた。



頭もからだも綿のように勞れてしまつて、辛くてたまらぬ時もあつたが、母の柔かなる眼の光を追うて幼き希望は輝いてゐた。

弱い者いぢめ

公に辱められたる一例

尾島菊子

古來の大哲學者や大思想家は多くの時間を費して、女といふ者に對し、樣々の論を立てゝをりますが、今日なほ確たる斷案を下すとが出來ない程、女子は不可解と云はれてをります。現に女子に對して見當ちがひ或は矛盾した言論を

公にしてゐる人がないでもありません。故齋藤綠雨氏などは、「女子は犬にも若かざる者なり」とまで罵つて、女としては迚も聞くに堪えぬやうな辱しめを我々女性に與へた人であります。又故國木田獨歩氏にも女子禽獸論があります。何れも女子の弱點のみを捉へ、一種の動物視したる極端な最も卑しい觀方です、青柳有美氏の如きは永年女子教育にも從事してをられましたから、或一派の彌次馬論とは違ひまして、定めて女子の眞相を穿つたお説があらうと例も氏の女性論は注意して居るのでありますが、悲しい哉、私は服すとが出來ないのであります。私の聽きました氏の説は餘りに極端に且つ亂暴でした、て私は氏に對して忘れられぬ一大恥辱を受けてゐる一人であります。それは昨年の春頃であつたかと思ひますが、神田の和强樂堂で慥か女優論でございました。氏は大の反對説を唱へられまして、例の「我崇拜せる女寅閣下云々」を幾度も振廻してから、滔々と水の流る〻が如き彼雄辯を振つて女子攻撃をなさいました。終りに臨んで、「女子は人間と猿との間の者、否、猿よりも劣等なものである。」と大喝一聲、奇怪なる斷定を下して演壇を去られました。滿場立錐の地もなきまで溢れたる男子の聽衆席は拍手喝采に轟きました、其時男子席からは婦人席に向ひ、一種の誇りと嘲笑の視線を鋭く注ぎました。あ〻如何せん、婦人席には僅に、實に僅つた私一人、悄然として頭を垂る〻あるのみでありました。顏はほてる耳は熱し唇は慄へて胸は早鐘を突くやう、穴にも入りたい位、私は殆んど身の置き所にも困つて了つたやうな譯で、這ふ〳〵の體で外へ逃げ出して了ひました。つい先刻まではそんな事とも知らず辯士の扣へ室に椅子を並べて、然かも直ぐお隣りに腰を掛けながら、去る氣なさ相なお話を傍て伺つてゐた……あ〻私は何といふ馬鹿だつたらう……と眞實に歸りの電車中でぽろぽろ涙が零れました。さても女子は斯くまで劣等なものでありませうか?

　假令劣等なものにせよ、其弱點につけこんで嘲罵されるのは男らしくないことだと信じます。

言ふ迄もなく女子には弱點が多い、其弱點に助勢して女子も世の中に立ち得られるやう男子の方が力を添へて下さらねばならぬ筈です、處が多くの場合、弱點につけこんで、女子を嘲笑の的にせらるるのは心外です。

女子を動かすに當りて、男子の力ほど強いものは外にありません、教育もあり、理性も勝つた女ですら、一夕男子の甘言には迷はされ易いのです、甘言を容れなければ腕力に訴へられる、此に到つて女子は抵抗すべく、最早何物も持たないのです、殊に男子の前に降伏しなければならぬやうに餘儀なくされてゐる吾國の習慣では、何うしても男の前に頭を下げる、其處で首根ッこを抑へつけられて了うのでありますから、情ない次第であります。

〇旅の心得。　旅の心得を一つ二つ、無理をしないこと、輿に乗らぬこと、むだ使ひせぬこと、飲食をつゝしむこと、安眠すること、問ふを恥とせぬこと、みえをよすこと、平民主義のこと、一人旅せぬこと、紀行は短くも其場で書くことなど。

シュトルム二篇

秋元蘆風

汝は眠る

汝は眠る――されば、われ靜かに乞はん。
ねむれ、靜かに。さて、われは靜かに行かん。
わが歩行の汝がねむり妨げぬやう。
わが聲のひゞきを汝に聞かれざるやう。

（シュトルム）

いかなれば

いかなれば白すみれ花、夜をさらに香しるけき。
いかなれば汝が唇の、夜をさらに紅く燃えぬる。
いかなればわが胸にしも、憧憬のさらに醒めぬる、
燃ゆる此の紅き唇、夜を汝にくちづくるべく。

（シュトルム）



花言葉

水野葉舟 編

つ、づ

露草　恋の仮を思ひなさいな。

椿—紅—　秀れた処が身にかゝらないで居ろ。

椿—白—　円満な愛嬌。

黄楊　嗔怒を色に表はさぬ。冷淡な人。

つるこけもゝ　憂鬱を慰めろ。

て、で

天竺牡丹（ダリヤ）　軽浮。

丁子　尊厳。

と、ど

ドラゴンプラント　わな。（麒麟竭と言ふやに生ずる樹）

ドラゴン、ウオルト　恐懼。

秦皮樹　威風。壮大。

燈心草（藺）　馴しやすい。おとなし　。

トレメラ、子ストック　抵抗。

トリリユーム、ピクタム　しとやかな美人。

玉蕊花　宗教的の迷信。

七葉樹　贅沢。

毒和蘭芹　愚鈍。

な、

なでしこ　石竹の條を見よ。

山芹菜（おになべな）　人間嫌ひ。（前號にチーゼルとしてチの部に入れたるものは誤なり）

に、

にがよもぎ　留守。

接骨木　熱心。発憤。

楡—　威厳。

楡—アメリカの—　愛国心。

忍冬　すいかづらの部

ね、

杜松　救助。保護。

の、

野葡萄　ふの部を見よ

は、ば、ば

萩　悪行。瑕瑾。

ばしくりもん　詐謀。偽り。

榛の實　仲裁。



花言葉

水野葉舟

バルム　同情。
バルム—しなやかな—　快樂。
バルム—ギレツドの—　治療。救助。
はら　ラヴ。
ばら—オーストリヤの—　あなたはほんとに愛らしい。(思ひを籠めて心に深く貴んで言ふ心持)
ばら—ブルガンディの—　自分では氣の付かない美しさ。
ばら—キャベーヂばら—　戀の使ひ。
ばら—カロリナの—　戀は危ひ。
ばら—支那の—　美しさがいつても生々して居る。
ばら—クリスマスの—　私の心配をやわらげてください。
ばら—石竹色の—　美しい顏色。
ばら—深紅色の—　さつと顏の赤らむやうな恥しさ。
ばら—犬ばら—　いの部にあり。
ばら—ゲルダアの—　冬。老年。
ばら—白枝葉のついた—　矜り。
ばら—日本の—　美しさがあなたのたつた一つの力だ。
ばら—メーヅンブラッシユ—　あなたが私を愛しさへすれば、いづれおわかりでせう。
ばら—デーリー—　あなたが微笑んで下さると、私は氣が引き立つ。
ばら—ブライダル—　幸な戀。
ばら—キャムピオン—　たゞ私の戀のために。(これ等のばらは、ばらの種類の中で斯う言ふ名を持つて居るもの、氣を付けてさがせばあります。)
ばら—花の澤山ついたの—　美德。
ばら—ミュンヂ—　多情。
ばら—麝香ばら—　變りやすい美人。
ばら—麝香ばらの一束—　人を魅する力。
ばら—一重の—　單純。
ばら—刺の無い—　いちはやき戀。
ばら—一輪—　私を美しなんてお言ひなさんな。
ばら—白—　私はあなたにとつてはれうてがありますよ。

8:30. Gave household orders; took Alice and Jane and neighbor's little girl over to play in sand-pile at my mother's house; walked in the garden.	8:30. 家事の用を云付ける，アリス，とチエンと隣のお嬢さんとを實家の庭の砂山に伴れて遊ばせる．庭を散歩す。
10:30. Home. Gave Alice bath and food; gave Jane and her playmate a little luncheon.	10:30. 歸宅，アリスに入浴させ，乳をやる．チエンとお友達とに輕き食物を與ふ。
11. Put Jane to bed for her nap.	11. チエンを晝寐さす．
11:30–12:30. Watched Hugh, my eldest boy of six and little girl play on porch and in yard.	11:30. 六歳なる惣領息子ヒウと女の子とが，椽側や庭に遊ぶを守る。
1:P.M. Luncheon.	1(午後) 晝飯。
1:30. Took baby and Jane to see my mother-in-law, who lives a mile off. We go to see her every day.	30. 一哩斗離れ居る姑君の家に子供を伴れて行く 此は毎日の科程なり。
2–2:30. Rested. Then dressed Hugh to go out to play at a friend's house.	2-2:30. 休憩．其後ヒウの衣服を替へさせて，友達の處に遊びにやる。
3. Wrote eight letters asking for charity money.	3. 慈善寄附金募集の爲八本の手紙を認む。
4. Bathed, dressed. Fixed Alice's milk, and gave it to her.	4. 入浴，身仕度をし，アリスの牛乳を調べて渡す。
5:30 Started home with two girls; went for Hugh; put Alice to bed.	5:30. 娘二人を伴れて家に歸り，息子を迎ひに行き，赤子を寐かす。
7. Dinner; put Hugh and Jane to bed. Watered some plants near our porch.	7. 夕食．ヒウと，チエンとを就床．家の前にある花や木に注意す。
8:30. Wrote two long letters; read French literature.	8:30. 手紙二本かく．佛文學を讀む。
(Unfinished)	（未完）

英　文

（第五年第八回）

女子英學塾講師 河井道子



A Busy, Happy Mother

A busy person should be also a happy person, and to him who knows the value of time, time is more than money. Young wives and mothers are apt to waste time and often they are so entirely taken up by their children that they have no time to do or to think anything else and though they are very busy they are not happy. It is their fault or others'? Here is a letter from a young friend of mine who is a mother of three children, and it may interest my reader to see how systimatic and full her schedule of a day is, and yet how happy she is.

5:30. Rose to go nine miles by the automobile in country for fresh milk for baby Alice 3 months old.

7:30. Returned home; dressed Jane who has just her second birthday; gave Alice her bottle of milk.

多忙なる樂しき母

多忙なる者は亦樂しき人たるべきである。時間の眞價を知る者には、時は金錢以上に貴重なるものである。兎角,若き妻或は母たる人々は往々時を徒費し，或は子供の世話にのみ齷齪して，他に何事をも顧み，思考する暇なく，それで少しも樂しくもない樣になるが，是は彼等の責か，又他の惡いのであらうか？我若き友人の一人にして，三人の子供の母たる者より來りし手紙があるが。之は彼女が或一日の課程の複雜なると又規律の良きとを示して，同時に彼は如何に喜樂かを顯して居るから，讀者に興味を與へるであらう。

五時半.起床,三ヶ月になつたアリスの新鮮な牛乳を郊外に取りに九哩自働車て行く。

7:30. 歸宅，丁度二歳になつたヂェンに着物を替へさせ，赤子に牛乳をやる。

西洋の新聞

雜誌スバルに出る椋鳥通信と云ふのがある、森鷗外氏が臨時に書かれるのだと云ふ噂だ、なかなか面白い、其中婦人に關したものを左に拔抄す。

▲宴會に蝶を放つ●●●●●●　近頃のPhiladelphiaの宴會て、尤も奢靡を極めたのは、James W Paulといふ人が娘の元服の祝に開いた宴會であつた。舞踏室を熱帶の花で飾つて、そこへ熱帶から生けて取り寄せた、美しい大きな蝶を放つた。蝶は二十分間程飛んで死んだ。入費五十萬圓。

▲自殺倶樂部●●●●　紐育に婦人自殺倶樂部があるらしい。近頃自殺した婦人二人は同一の記號のある拳銃で同一の[illegible]つて死んだ。抽籤で死ぬるのだらう。

▲流行●●●　巴里の婦人服には此頃帶に金鎖を附けること丶、處々へ黑天鵞絨のリボンを附けることが流行する。

▲舞踏●●　Kölnでは公開の場所で舞踏をするのは、男子滿十七歲、女子滿十六歲以上と極めた。

▲十三歲の情死●●●●　Leipzigの町はづれの林の中で毒を呑んで情死を謀つたものがある。男は Kurt Mechold 十七歲。女は Else Lohmann 十三歲。遺書がある。病院へ舁ぎ入れられて男は死んだ。女も死にさうである。

▲母の紀念日●●●　五月九日に紐育では母の紀念日と云つて、子のある女が皆白い石竹の花束を持つて歩いた。

▲男子禁制●●●　米國には男に關係しないことを誓つた女の會がある。結婚の申込を郤けた數の一番多い女に、毎年一月に代價四百圓の衣裳を贈る。

▲いひなづけ●●●●　Leipzigの質屋へ或る女技藝家がいひなづけの時用ゐる金の指環を十四個質に入れに來た。警察に屆けた。調べるとかう云つた「私は當年二十二歲になりますが、これ迄十四遍いひなづけになりました。指環は困つたときに用に立てる積で集めて持つてゐました」

▲五階●●　畫家 Friedrich Wried は妻の病氣の爲めに氣が狂つて、Dresdenで五階の上から飛んで死んだ。

▲すみれ●●　Nizza, Genua と南佛との間で毎年百五十噸の菫の花が香水用に作られることは久しい前からの事實である。英國の南部へも菫を作る風が傳はつて來るらしい、胡瓜よりまうかるのださうだ。

▲女賊●●　彼得堡管區内で女賊 Johamerina といふものが檢擧せられた。女ばかりの手下が二十人ある。旅人を殺して取つた財物が穴藏に滿ちてをつた。

▲まんびき●●●　Pragの男爵夫人 Rotky は世界中を「まんびき」をして歩いてミユンヘンで捕縛せられた。

短篇小説

小栗風葉選



○規定　題材凡て自由なり一人一篇を限り半紙又は罫紙に振假名をつけて明瞭なる楷書にて認むべし長さは二十四字詰八十行以内とす賞は甲種に據りて送呈す▲本欄以下本誌の投稿は凡て女子に限るものとす

○お繁樣（天賞）

備後　百合花

お繁樣は幼ない時から人好きのする可愛らしい人でした、顏色の白い、髮の黑い、鼻筋の通つた、眼口の可愛らしい美人でした。でも私の從弟の良樣は「お繁樣は人に與へては惡けない所持品でも、切望されゝば斷る事を爲得ない性質が、欠點だといつてゐました。

お繁樣が十七才の夏でした宅へ被來て、

「此度松本の一人息子の貞雄樣と約婚したので、娘分で松本に來ましたから、此夏休日からは退校して御義母樣に御裁縫を御習ひする筈です、御義父樣も善い御方貞雄樣は可愛がつて下さいます、貞雄樣は今東京の某國語學校に在學中なので、卒業後に結婚爲る筈です」といふ事を仰有つて歸られました。

夏休日は無論、春休日も、多休日も、貞雄樣は歸鄕て居られました。其事はお繁樣が私に仰有るので、私は知つてゐます。御兩親は二人の仲の善いのを見るのが此世の樂しみだと仰有て、近家の人に得意で御話しになるのだと、下女が歸つて云つてゐました。

お繁樣は殆一年も宅へ被來いませんでした、私は外出しないので、お噂も聞きませんでした。

お繁樣が許婚なすつてから二年目の夏でした、不圖風呂屋で久し振りに御目に懸りました、可愛い玉の樣な男の嬰兒を抱いて在被いました「まあ可愛らしい……あの何方の？」と訊きますと少し顏を赤らめて「あの私のです」と仰有いました。而してお繁樣は貞雄樣が今年の六月（去月）に卒業なすつたのだけれど、重病なので一家は眉を顰めてゐる、といふ事も仰有いました私は赤ちやんの御悦びやら、貞雄樣の御見舞やらを申

して別れました。宅へ歸て姉に此樣子を知らしてやりましたら、姉は斯う申しました「お繁樣は何時の間に御結婚なすつたのだか、隣家近所へも些とも御披露がなかつた間に御産なすつたのだと松本の隣家のお神樣が來て話してゐた」と。
其後半年程して貞雄樣は死去なれた、とお繁樣が端書て知らして下さいました。私は十日程經まして後お悔みに行きました。お繁樣は俊三樣をお守して居られました。貞雄樣の御兩親の御悲觀みつたらありませんでした。一粒種の可愛い〳〵悴を死去なしましたのですもの、と仰有つて泣かれる樣子は見る目も御悲痛しう御座いました。其時お繁樣は私に斯麼事を話されました。



貞雄は兩親に斯う申しました。「自分は死んでも俊三が幸出來てゐるから、お繁が俊三を措いて嫁入するといへば嫁入さして遣つて下さい、養子をして手許で俊三を敎育したいと云へば養子して遣つて下さい」と遺言しましたから、私は花樣……!!!これ程堅い自分の操が貞雄には解らぬのかと口惜しうなりまして……と強く私の手を御握りになつて繁は乾度操を堅く守つて孤獨で立派に俊三を敎育しますから御安心遊ばせ、と申しましたら繁!!!と斗り強く私の手を握られたまゝ消入る樣にお死去しました。と涙ながらに話されました。而してお繁樣の實家では是非歸つて再婚せよと仰有るのだけれど、お繁樣

は實家と絶交しても構はないから、俊三は離さないといふ事、乾度孤獨で操を守つて俊三を教育するといふ事を、心に契つてゐると私に話されました。

私は乾度操を守られる樣に御勸めして歸りました。

其後私とお繁樣は尙且半年に一度位は逢つてゐましたが、いつ逢つても御繁樣は別に御家庭の不和と云ふ樣な小言も仰有らず、お義母樣もお義父樣も親切だから樂しみに俊三を育てゝゐます、と仰有つてゐました。

俊三樣が三歲の正月を迎へられた時でした、私は正月禮旁訪問致しますと、お繁樣は妙に憂鬱いて居被いました。御家庭でも面白くないのですかと訊いても、何にも仰有らずたゞ泣いて計り居られました。私は寧散歩して慰め樣と試みました。お繁樣は顏を洗つて來て、泣いた樣では無くつて？と御訊きになるので、私が否といふと笑顏を作つて、御義母樣に一寸、花子樣の御供をさして下さいといつて出られました

乳母車に俊三樣を乘せて三人で公園に行きました。お繁樣は蒼ざめた顏をして少し瘦せて、如何にも人知らぬ苦がありさうてした。公園の一本堂には誰人も幸ひ居ませんてした。乳母車の中の俊三樣は振ひ着き度い樣に可愛らしい顏をして、鈴の樣な眼て、愁然とした母樣を見ては嬉しさうに笑つて居られます。「斯麼可愛らしいのが御有りなさるのに、貞雄樣が居被たらね」と私は口を開きました。切めて昔の憧憬に御慰め申す事が出來るかと思つて、でもお繁樣はいつにない貞雄樣の事を些とも仰有らず、潸然んで居られました。私は種々の方面から其の悲慘を訊かうとしました。慰めるが爲に……恁麼にしても口を開かれず、たゞ「厭な世の中」と云ふ事を繰返して居られました。

が、苦つと潸然んだ瞳て私を視て、言葉も切れ〳〵に

「花子樣!!!私は……私は……寧死んだ方が……今更實家へは歸られず……花子樣……女つて情無い者てすね……斯麼可愛い俊三が居る計りに……繁の心は疾うに死んでゐます。」と私の手を堅く握ぎッて熱涙をはら〳〵と溢されました。如何悲慘事情かは不解ぬまゝに、私は思はずお繁樣!!!と固く握り返して、强熱の涙をはら〳〵と玉の樣に溢しました。其以上如何に私が慰めても、力にならうとしても、遂に何事も仰有らず、私は何の事か不解ぬまゝに其日は歸りました。其後私はいつもお繁樣の事が氣に懸つて居ましたが、三ヶ月程經てから髮結が來て、松本のお繁樣は御義父樣の御手が懸かつて、兒樣が出來てゐるのですよ

もう六月とか七月とかいふ事ですよ。と申しました。
私は喫驚しまして、先日愁然として入破つた事がそれではと思つても見ましたが、豈夫お義父様といふ事はと疑つて居ました、所、今日宅の下女に逢ひに來た女が（此女は情夫とか、妾とかの媒介を爲るのが商賣だと下女が云つて居ました）

「松本の旦那も善い馬鹿だ、兒が出來たら出來たと早く私に仰有れば、私方には善い分別もあッたのに六月にも七月にも成ッて今初めて知れた様に什う爲様か？との相談もない物だ、此頃は御母様と三人で輒轢してゐるのだ。何？善い分別ッて云ふ事を訊くのか、分別つても構作無いさ、只車挽きでも仲仕でも、構はないで二月か三月かの中に養子に入れるのだ。親父といふ奴が、お繁様と來たら目に入れても痛くないのだから、婿は面白くないから直ぐ離別して歸るに定まつてらあ、さうさへして置けば誰人の子とても世間へは云はれるのだけれど……まあ後の祭りぢや、詰らんて、仲に這入ッて何とか治まりを着けて、一仕事仕様と思つてゐる。」と下女と話してゐました。

寂しい、而して暗い人生の一面を捉へられたのは可いが、筆が斯る深刻な題材に闘つてゐない。殊に下女と知合ひの悪婆など面白い點出てあ　句點に注意ありたし。（評）

○血縁（地賞）

本郷　笛子

「阿父様が何と仰有ろうが、別れません」
「私も別れません……別れませんとも」
斯う誓つて夢心地、敏雄の下宿を出たのは火ともし頃であつた。薄い雲が西大空に流れて、角の氷店では、サク／＼し鉋の音が涼し相だ。

お蝶は、とある裏路から淡路町の角に出た時、俄然、暗愁の雲に閉された。

それは少さい時である、父が伊豆の方へ出張して居つた留守、母から此邊て、美しい薔薇の造花の着いた帽子を買つて貰つた。母は眼付の好い柔形な人であつた。自分は他愛なく莞爾々々帽子を抱へて連れられた。當時萬世橋附近は、鐵道馬車が通る、路傍の柳は塵の中に青々と靡いて居た。馬車に乗ろうとして偶と田邊に逢つた——何時も金ぶち眼鏡を掛けた顴骨の高い男だつた。暫らく母と立話の末、一緒に或る料理店の奥で、母と田邊はお酒を飲んだ。田邊が何か小聲で囁いたと思ふ

と、母が「今日はお茶瓶付てすもの ホ……」ちらと私を見て、俯向ひて笑つた。暫らくして田邊は泣く様に「奥さん、私は非惨な運命てす、ね、さうぢや有りませんか」「貴方はかりおや



（天賞）　午後の街　堀津とよ子

有りません……」と云ふのを押へ、「イ、ヤ私は馬鹿です、何故思ひ切れんのでしやう—「私だつて悪い事は仕たくは無いんですが…—と詮方なげに北叟笑むのを、田邊は默つて凋冷し

をぐつと飲み干し、「奥さん、お別れに差上ましやう」「え!!!」母は何とも云へぬおど〱した調子で、猪口を受けながら、ぼろりと涙を落したから、私は何だか悲しくなつて、折角の帽子も投り出し、「母ちやん泣ちや厭よ……」と膝にかぢり着いたつけ……。田邊と別れ、道すがら、母は蒼い顔をして、「叔父さんとお酒飲んだ事……阿父樣にも……誰にも默つて居るんですよ、好い兒だから」と繰り返し〱云ひ含められた。あゝ母、私の母は今何處に被入るだらう。八年以前母は離緣れた……云ふ忍びぬ――田邊と醜關係の許に……。さりながら私は母が戀しい、悄然と月を眺めて泣いた、母と行く他處の子を、羨ましさうに幾度も見た、あの帽子を買つて貰つたのが、母と歩いた最終である、父は云ふ「お前は漸々樣子が女親に似て來たが、何卒行跡だけは似て呉れるな、お蝶」と痩目だちたる父から、くど〱と云はれる都度、身は云はれぬ淋しさに、前途は急に眞暗になつて了つて、自分は奈何して好い事やら、吾が足許さへ解らない。私は本當に母に似て居やうか……。

お蝶は偶と立止つた。電車のけたゝましい響に心付けば、昌平橋の際である。甲武鐵道工事場の夜業の槌の音を聞き、彼は又とぼ〱と河岸をたどる。ニコライの塔が黑く浮んだ宵暗の川向ながら、涼しい風を吹き送る。

お蝶が過去の思ひは轉じて現在に馳せた。自分は今何の碍害にも、二人の戀は捨てぬ事を敏雄さんと誓つた、敏雄さんを父は大の嫌である、而して私に某方へ嫁入るべく、昨日も今日も進められた。此の末は什麽なるだらう、別れない、私は敏雄さんと別れないと堅い決心はあるけれど……母の血は私の氣管をめぐつて居る。もし奈何しても、他へ嫁ぐべき運命が來たなら……けれど忘られぬ今の誓ひは忘られぬ噫私の成行――母の運命、彼の母が田邊と會したる料理店の一時、不健全だ！私の母は不健全な結婚に違ひない、爲に得た非慘なる運命！

母に似た私は又、偶としたら、怪しき風潮のまゝに、果然、同じ運命を繰りかへすのではあるまいか思ひ至つてお蝶はそゞろに、戰慄した。

川の水は薄黑く、土手をぱひた〱と、寄せて居る。

私に契つた男と別れて歸る途中、偶ま己が幼時の記憶を追想して、實母の破倫を偲ぶと云ふ面白い趣向、四五年前の短篇には能く斯ういふのがあつた。技巧は長けてゐるが、文章がゴテ〱してゐる。(評)

○花枝さん（入賞）

京都 わくらは

「なに、現實の……曝露談?、さう?、ほんとう? あの、ほんとうでなくつてもいゝわ、とにかくきいてあげてもいゝのよ、どうせ、貴女と私との仲ですもの、誰にも洩れる譯はなし……。て、どうなすつたの、あれ以來は?」、私がお茶を入れ乍かう聞いたとき花枝さんは太い眉の下からきらりと私を睨んで、其膝の邊へ眼を落した。其口元には人を馬鹿にした風な、冷やかなほゝ笑が漂ふてゐる。するといきなり何とも問には答へずに物狂はしう立上つて私の机の上の一物に手をかけた。注意深い眼つきで以て。

『これどうしたの? え? 誰なの? これ彫つたのは。』こんな、つかない事を、かうした場合にきくのが此人の昔からの癖てある。私は答へない。ぐつと睨んてあげた。花枝さんの其手には乘りませんよ、との樣に。

『ふゝ。ね。實は……私……今青柳小路にゐるの。もう、世の中なんかどうでもいゝのよ。人の口なんかに乘るやうな私じやなし、人の口なんかに拘泥もしない事よ。もう……私、我も人もありませんもの。ほゝゝ。氣違じみてるでせう、私は。ね。今じや、昔が、學生時代が戀しいとも思はないの。えゝ、もうこんなに、なり果てたんだから此上なり樣がないわ。私なんか、もう……。』花枝さんはかういつて天井の節穴を淋しく見入つてゐる。私は昔の同級生の今の墮落——人の妾——運命——中途退學——青柳小路の意氣な見越しの松……を思つてゐたら其容色に恨を抱いてあげた昔の同情が——其容色を引立てるに足る資力も地位もない家に生れた友に對する——何だか自分ながらうらめしくなつた。此人の今の身。其白魚の指を飾るに似合つた三つの指環もある。其なよやかな細腰を占めるによい緋縮緬の帶もある。更に其四時美しい詩に憧れて、美しい情のほのめく樂に親しむ事の出來る暇もある。その今の身に何の言葉を捧げてよいか、私は其言葉をしらぬ。あの頃——某女校の三四年生の頃——お互が十七位だつた頃——夢の樣に私は友の未來を胸に忍りつけてゐた。それは私と一番仲のいゝ、文學好の音樂好の情にもろい、何處か我まゝなとこもある此花枝さんが大酒家で三百代言て世間から爪はじきされてる父と二人住んで、仲のいゝ私にも家の泣事は決してきかせないで、つとめて平氣を裝つていた事を

私は別に理由があつて、それに慰められて花枝さんが未來を樂しみつゝ現在の苦痛を叫ばないのだと思つてゐた。それは其頃大變な評判が級中にあつたからである。何でも花枝さんの容色と才とに思を懸けた一靑年は、これも文學好の一人である豪商の次男とかで帝大の法科だといふ事。花枝さんは卒業後女子大學へ入る事。勿論學資はSさん——其人——からとの事、Sさんの兩親が不承知らしい事、Sさんの意志が的になる事、其故花枝さんは玉の輿に乘るに違ひない事。などであつた。私は友の此幸福らしい噂をきいて迷つた。これが果して人間の、女の、幸福だろうか？花枝さんの家に相當した人と——地位も財產も學問も名譽もない人——との結婚よりは幸福だろう。しかし、あまり釣り合はな過ぎる。級中で花枝さんを妬む人がふへて來た。きゝづらい事をいふ。寧そ、花枝さん止めにすればいゝものを。私はこんな事を其頃思ひつゞけてゐた。花枝さんは私より一つ年上で境遇上すべて私より非常に姉さんらしかつた。私は花枝さんに其未來を問ふ權利？がないやうに思つてゐた。で、其事について何にも問はなかつた。花枝さんはもう一月で四年生になれる時二週間程欠席して退いてしまつた。私は寄宿生であつた。尋ねて行く事もせずにゐた。手紙は二度目から戻つて來て、其後一年半の、卒業後の今日まで互に音信を絕つてたのである。

『私ね、貴女の噂がてる度に否定してたのよ、級で、でも……おしまひにはね、成可きかない樣にしてたんですもの。實は昨日お手紙よんだとき、きつと花枝さん人をだましてるのに違ひないつて思つたのよ、だつて、私、まさか……貴女が……。でもね私決して昔の心と變らないことよ、花枝さん、失禮ないひ方ですけど、私、貴女を、ほんとうにお氣の毒と思つてよ、決して私は外の級友のやうに……。』

私は此後をいひ得ない。媚びると思はれては否だ、花枝さんのお父樣がいけない事を知つてる私が誰にたよれといふ人もない。慰めるにはあまり汚れた人の運命である。忠告の言葉、それも私はしらぬ。

淋しいのよ。といつて其癖遊びに來いとはいひえずに花枝さんは歸つていつた。七種色の御召の單に配色のいゝクリームの夏ショールに玉の簪を挿んで。

私は玄關の障子に立ちつくして、其車のわだちの音をきいた。花枝さんの白い齒が淋しく眼に殘つてゐる。

悲しき運命に操らるゝ姿美しき友を思ふの、優しき同情が全篇に溢れ

て、そゞろに作者の雪人を偲ばしむ。慾には友なる其人を今少し印象明かに描き出されたかつた。(評)

【秀逸】

○蠶

三河　星花子

此の頃の天氣は、朝雨、晝曇、夕方ポロ／＼と降りて夜は萬天の星、何時もなれば、疾にカラ／＼になつて落ち初めるべき桑葉が、雨が多い故、見渡す限り、淺い緑の芽を吹いて思ひのまゝにのびた。雨に濕腐つた茅葺の屋根が動く、どの家も／＼風を通さぬやうに雨戸が閉てあるので、家の中は薄暗かつた。加之、雨脚が簷の中まで及んで、如何にも陰氣さうに見られた。里道を通ると、蠶糞の蒸れが強く鼻を打つた。



(當選)　水打ち　水戸　北川うめ子

おいわの家では今年始めて蠶を飼つた。春蠶が素敵に具合がよかつたので、それからすつかり氣乘りがして、風穴もこれで二回目である。六疊と八疊

の二間を通して棚を組んで、母と、おいわと、妹のおぎんと三人で飼つて居たのが、四日許前から、母が流行の不潔に罹つて寐てゐるので、二人は目の廻るやうな忙しさである。加之、蠶が三度目の眠りを起きる頃から、死蠶が澤山出てくるので、姉妹は奈何したらよからうと、首を攅めては、殆ど途方に暮れて居る。

今日は朝から雨が降り續く。風が吹き添はつて、井戸端の大きな能く茂つた柿の木が、ザワ〳〵と鳴つてそれで雨が烟のやうに頻吹く。西裏の庇際には、白芙蓉が美事に咲いて、青苔の生えた滑な地面へ、花瓣が思ひ出したやうに落ちる。

一昨年の秋、父がコレラで死んでから、母は病氣と云へば直ぐコレラを聯想した。そして病氣よりは寧ろ氣を病むやうになつた。こんな風だから、醫者に診察して貰ふ事は出來得るかぎり避けた。傳染病と名を附けられて、避病院へ逼入るのが恐いのだ。

母の寐て居るのは、臺所の隣の、常に寐室にあてゝある六疊の間で、床の上に古い蒲莚を敷いて、襤褸布團を幾枚も重ね、枕を高くし、顔を半埋めて寐てゐた。枕元には賣藥の飲殼が撒亂つて、煎茶々椀と、土瓶がその傍に置かれ、裏手の窓格子から頻吹き込む雨のためにその邊が一帶に黴びて、どけくさかつた。

母は今夫の看病をして、避病院に居た頃のことを思ひ出した。洋燈に照らされて、布團を撥ねのけた夫の窶れた寐姿が目に浮ぶ。突然譫語を言ひだす。すかせども駄目だ。又すや〳〵と眠る。窓を開くと、星月夜の薄暗が、何所までも、果てしない。蛬が寒さうにホロ〳〵となく。夜がだん〳〵更けて、お宮の森で狐の叫ぶ聲が聞える。悽い。淋しい。自分が避病院へ入つたら怎うしようと思つた。おいわが看病に來れば百姓をするのはおぎん一人だ。畑は荒れる。秋が來ても稲を刈る人はない。屋敷畑の葱も賣らねばならぬ。蠶もだん〳〵大きくなる――！

「あゝ。」と微な吐息をついた。男のない家族のわびしさが痛切に感じられる。

急に氣がいら〳〵して、頭を擡げたが、足が拔けさうに疲れて居るので、頽然して、

「おいわやい、おいわやい。」と力無い聲で呼んだ。目には涙が煮染んで居る。

おいわが來て、布團の横から手をさし込んで、ホカ〳〵と熱に暖い足を擦つてをる間に、母はこんなことを云つた。

「おいわやい。俺あ赤痢にでもなるじやないらかな。」おいわはいろ〳〵と慰め、且勵ましした。そして、「勇樣でも頼んで揉んで貰つて見るかへ。」と附加へた。

「晝間でも居るらかな。」

「居らにや晩に來て貰うやうに、ぎんに頼みいやらせえ。」と云つて、「おぎん、おぎんやい。」と呼ぶ。

おぎんは軒て蜜嚢を形付けてゐたが、「何だい。」と返事をした。

「お前なあ、北側の勇さの家へ行つて、閑は無いらか聞いて來て吳よう。そいからな、若しか暇が無いつたら、夜でもいゝて來てお吳れませうてつて。」

それからおぎんは井戸端て、つるべ竿をバタ〳〵云はせて、手を洗ふと、下駄を高いのに穿き更へて、急々と出て行つた。が、間もなく歸つて來て、

「今は閑がないが、三時頃になれば手が空くて行つてやると云つて居つた。」と云つた。

四時々分と思ふ頃、勇樣がてく〳〵やつて來た。勇さは今年七十歲て、揉醫者てある。耳が極く遠いので皺くちやな顏を、病人の近くへ突出して、幾度か聞きなほした。揉み乍ら、

「是あ不可。躰がどだい疲れとる。」

「何所が病いづらのん。」と病人が大聲で聞いた。

「どこも、かも惡い。良いとこは一所もない。もう幾日か惡いのかへ。」「五日許前からだがのん。」

「足はしびれやあせんか。」

「しびれやあせんけど、懈氣て〳〵仕方がない。病付く二日許前から、かいだるくて〳〵仕樣がないのを、無理をして草を取つたので、あれが障つたかとも思てるだがのん。」

「それだて不可。そんな無理をしたて不可。」

「下痢るて躰が弱るじやないらか。」

「下痢る?」

「下痢るのを止める譯にやいかんらか。」

「止めちや不可。未腹の中にあるて出して了はにやいかん。」と、言ひ放つて、ぐつぐと揉んて居る。病人はさも痛さうに顏をしかめた。

霎時して、勇樣は

「これて今夜はどうて樂になる。」と云つて立上つた。おいわは慌てゝ呼び止めて、

「お氣の毒だが、明日朝、まあ一度來てお吳れませんか。」と大聲て云つた。

「よし、よし。」と云つて、勇樣は出て行つた。

「アヽ樂になつた。」と病人は言つた。
勇樣の歸つた後で、おぎんは紐の長い籠を肩へかけ桑摘みに出て行つた。雨は疾くに霽つて、珍らしく西日が射してゐる。
おいわは表口の障子を開けて、
「おや、晴れるださうな。」と云つたが、病人が、
「この頃の天氣は當にならんて、鳥渡でも晴れ間があつたら、摘めるだけ摘んで置かんと不可ぞ。」と云つたので、
「そいじや俺も行つて來う。」と、大きな籠を背負つて出て行つた。
外へ出ると、野は何所も彼方も桑を摘む人ばかりだ。

此の作者の此の作は、以前に一度見た事が記憶にある。再度の投稿を以て見るも、作者には餘程自信ある作であらう。成程拙ては無い、農家の暗い、而して忙しい生活が一通り描けてゐる、けれど其れだけだ、作者の狙ひ所が分らぬ。（評）

●ひとりむすめ

麹町　さつき

恭二はとう〳〵行つてしまつた、もう我家の人ではない、五年前思ひがけなく我家の人となつた樣に、もう今日は思ひがけなく西と東、左と右とても逢はれぬ方向にお互に背を向けてしまつた、と思ふと百子は聲を揚げて泣き度い樣な心地がした、「恭二さん」と大聲でよんでせめて木魂の答言でも聞き度く思つた、頭がグラ〳〵とひつくり返る樣で「いらぬ、要らぬ、家もない、自分もない、恭二さんなど、他家の人はもとより要らぬ」とも思はれたが百子は立つて恭二の昨日までの書齋に何の理由あるでもなしに行つてみた、ちやんと机は片隅によせてある、みなれた角帽もむぎわら帽も、たゝんだ事なした、と笑つてやつた小倉袴も、もう影もかたちもない、やつぱり恭二さんはもう、居ない人！
百子の腦中には種々の記憶が順序なくくり返される、今年の正月恭二と此室で語つた或日を思ひ出した、
「運命だつて甘んしてそれに服從する事は無いと思ふわ、」といつたのは百子「さうです、そう出來ればそれに越した事は無いんです、しかし、大方は運命、正に來るべき運命といふものはもがいたりあせつたりするのは馬鹿だと思ひます」と恭二は云つた、
「何故、如何してゞせう」百子はまだ何か云ひ度かつたのだけれど恭二は笑つて合手にならなかつた、あの時は此家の養子になるべき運命だと思つて何處までも——私の愛が充分でないにもかまはず——辛抱する氣

蔑んだ、厭な人だと思つたけれど、とても私といふものと終生を共にしられぬと早くも看破つて断然關係をたつたのはやつぱり運命の自然を知つた眼識なんだらうか、恭二さんも悪い人ではなかつた、全く親切な人だつた、勉強家だつた、私は何故あんなにも氷炭相いれぬといつた様な風に仕たのだらうか。

それから百子は去年の夏の三郎の言葉を思ひ出した、――有田三郎といつて恭二の親友であつたのだ――「たつた一日で可い、百子さんのやうな姉さんを持つて見たいのです」其時百子は何といつたか、「私は有田さんの様な弟あつても仕方が有りませんわ、」三郎は悲しさうな顔をした、けれどすぐ元氣に還つて、「百子さん此半年間あなたは恭二君について私に親しくして下さつた筈です、それだのに、それほど信用が無いんですか」「あゝ私あなたを信用しないっていつ云ひましたらういやな方ね」それて其日は別れてしまつた、それから一週間許りたつての事、「この間のこと、あれほんと?」ときくと、「虚言をつく男と思つてらつしやるのですか」とうらむ様なまなざし、

「悪うございました、そういふ積りぢやなかつたのですよ」

そして暫時二人は無言だつた



（入賞）　海人之　富尾由夢

「あなた恭二さんをどんな人だと御思ひなすつて？」

「え？」と有田は一寸どぎまぎしたが

「あなたの約婚の君を批評するには及ばないでせうハヽヽ」と事も無げに言つた、

「約婚？」と眉をひそめて「私は兩親から何も聞かされた事ありませんわ、そんな事云つて下さつちやあ困つてしまひますわ」

「しかし」と何だか云はうとするのを、

「まア一寸、よしそうと父や母がおもつて居たつて命令したつて、人の意志はね……」

莞爾笑つて三郎の顏を見た、

「…………」

「あなたなら如何なすつて？」とまた笑つた、

其後、三郎と百子は昨日の人ではなかつた、たしかに二人の間は默々の裡に相通つたのだ、とます／＼恭二との仲は隔つて行つた、

「有田さんから端書が來てよ」といつて恭二に見せた事もある、それが遂には

「三郎さんからいゝものが來たわ」と抱へて見せる樣になつた、

或日恭二は

「近江田さんつて知つてますか」と聞いた、

「えゝ知つてゝよ」

それは有田より前に親しくして居た高等學校の生徒だ別に百子から何とも云はなかつた、恭二も何とも重ねて云はなかつた、

つい半月程前母の前に呼ばれていろ／＼の證據を指摘されて詰問されたときも百子は大して驚かなかつた、

「ぢやあ、恭二さんが私の机の引出を見たんですね」と反對に恭二の弱點を捕へた、

「私はもうみんな忘れてしまつてる樣な手紙よ、つまらない」こう云つて母の前を退つたものだ

如何いふ都合か恭二さんはとう／＼學資の給與を斷つてしまつた、同時に我家も出てしまつた、もう恭二さんと私とは何の關係も繫つては居ないと思つて夢の樣な氣がした、

恭二さんが居なくなれば三郎さんも來る事はもう有るまい、

皆誰も接近つて來るかと思へば退却げてゆく、私獨りこうやつて寂しいのに、

百子は過去は皆葬つてしまはうと思つた、恭二も三郎も、それより以前の近江田もみんなもう自分の周圍の

人ではない、「新らしい路、光るい方向」百子は獨り心にこう叫んで自から心強くした、

成程斯ういふのが現代の女性かも知らぬ。けれど選者には、家付の我儘娘としか思はれなかつた。然し文章には力がある。

○義理

横瀬ふみ子

柳子は寢て考へた。淡暗い燈火にさへ様とする目を無理に閉ぢて、一日一日と增す胸の苦痛に悶えて泣くのは毎夜の事である、不幸な女、何事にも義理の先立つ不安な境遇に居る自分はもう十八 お人好で一寸した動作にもはらはらする母は、學校も卒へて居る自分の身をどうしてくれるのであらう、前途の方針に就いて相談するでもなく、長く居れば居るほど辻村の厄介者、それには、義妹もある、義弟もある、やがては配偶者を持つべき義兄もある、義兄は先妻の子とか、決して自分に優しい人ではない、その中にたつた一人の私、世間に對してもどれほど肩身がせまいか位、少しは察してくれそうなものだ、一生を獨身自活をするならば其の様に、今から準備もあるものを、あゝ何故私は此家へ來たのだらう、淵ぼつたい空氣を吸つたのだらう、母は何故私を同伴



散歩　青森　松尾千代子

て來たのだらう、私あるが故にいやな再縁もしたのだらうがそれならも少し心を強くして實の娘にかほど苦勞をさせなくとも、決して偏見ぢやない、私だつてこの世の中にたつた一人の母だもの偏見むなんて、柳子は幻の樣に浮ぶ幼い頃の悲しい記憶からそれからそれと、亂れた胸ははりさける樣に悶えて泪は止め度も無く流れるのである、六十の聲を聞く義父、やがて來るべき義理の嫂、もうたまらなくなつて強いて眠らうとした、スヤスヤと柔かい義弟の寢息が柳子にはにくい樣に思はれた。暗い中から臥床を離れた柳子は眠りのたらないはれぼつたい目を、冷たい汲置きの水でもんで、スーと自分の部屋に入つてバッタリ机の前に坐つた、柳子は自分が唯一の味方と信じて居る優しい從兄の秀雄に今日此頃の煩悶を訴へて多少の慰藉を得やうと思つてか、なにか細々と認めた、やがて封をして表記を書かうとした刹那、弱い柳子はかうなんだか恐しい樣な氣がして誰か見てやしまいかとじーと耳を澄してあたりを見たが別に人の氣もしないので安心して、丁寧に書いた、逃げる樣にして二町ほど先のポストに入れにいつた、ソーッと裏口から歸つて來ると、もうみんな起きてガヤガヤ騷いて居る「柳ちやんは」尖がつた義兄の聲がきこへる、柳子はハッと思つたが返事をしやうともしなかつた、やがて食卓が運ばれた、柳子は小さくなつてお飯鉢の側に座つた、頭痛がするかして額に手をあてゝ居るのを母は早くも知つたが、みんなに氣乖してか知らん顏して居る、それを悟ッた柳子は又も情ない思が胸に込み上げて思はず浮ぶ熱い泪を見られまいとジッとうつむいて箸を取つた「柳、頭が痛むか」年寄だけに子供にやさしい義父は柳子の顏を見ていつた、思はずドキリとして「イ、え」「眠られんのぢやらう、目蓋がはれて居る、若い者はよく眠らにやいかん、お前ももう十八だな、」こんどはすかす樣にして、「………」「よい相手があつたら早く嫁かにやならん」といつてズーと義兄の方を見た、冷靜な義兄は依然として忙しさうに箸を動して默つて居る「姉さんなんかいゝわ美人だから、」甘つたるい聲で義妹がいつた、今年やつと女學校の三年になつた、ばかりの少女の癖にまあと、呆れて柳子はハラハラした。時計が八時をうつとみんな出て去つた、後は母と下女と三人、柳子はほつと、溜息してそこいら片附けはじめたが、茶の間の母は一言も柳子と口をきかなかつた家の中はしんとして時々ポンポンと母が煙管をはたく音のみ淋しくひゞく、義妹のおき忘れていつた、徒然草を懶げに見て居た柳子の胸には今朝出した、秀雄の返事が妙に待たれた、其の優しい情緒のこもつた言葉を想像して、思はずにつこりした。そして「つらくてもお義父さんや義兄弟の居る方がにぎやかていゝかしら、いゝわ、いくらか氣がまぎれてあゝ、どこかへ消えてしまいたい、」と思つた。目には涙があつた。學生の靴の音、工場通ひの工女が下駄の音、笑ひさゞめき、勞働時の往來は一しきり、さわがしう。

逃子の心持が一通り出てゐる文章も達だ。（評）

新體詩

與謝野寛選



○規定　題目も材料も律格も凡て自由なり要するに風情を歌へば可なり三十行を超ゆるべからず一行には一句以上を書くべからず凡て振假名をつけること字體は明瞭を要す乙種の賞を送呈す

○解かれし謎（天賞）

信濃　太田きし子

（人形の足をそこねて
あの杜のおばけの仕業
ぶつてよと母に泣きける、
そは螢とぶ夜なりし、
水田には蛙輪を描き
廣やしき檜木立の
藏の白壁爪りと影をうつして
「あの杜のおばけぶつてよ!!
熱發し聲高ぶり
泣きやまざりし強情。）
螢飛ぶ夜なりしそは。

ひや／＼と額なづる風……。

桔梗ケ原の松林つゞき
八伏出を東にして
筑摩少女の足あらふ
奈良井の川は

さゝやきうれし一海に入ると
あゝ海知らぬ二十年を
人にかくれてある子故に
親しみ深し夜の天、夜の野路
風に青葉のなる音ゆかし、
山より生れて山に逝く
青き月の光なる
謎解きてん解かでやはと
額髮垂れし幼時より

森をくゞり草を踏みし、
女子にむごき鋭心は
父母も、あゝ兄君も知らざりき。

遠く慕へる山そとや
關八州は草の海
月波紫かすむてふ
あゝ海添ひのたひら國
名は知らざりき　慕人もなかりき
其のうまし國。

富士も百里に遠しといふ
地平線――水平線――
大いなるかな。
日のあけ方、月のいりぎは、

第五學年第十課

波より出て、草に沒る光は
畝かつぎ鼻歌うたう人にすら
目になれてあるものを、
人に理解ぬふかしぎの
謎をおもへる吾が身には
夜の森こそふさふなれ
幼時ふと見しまぼろしの
光れる瞳は星なりき
たゞ風に鳴る木の葉とても
いためる胸の響ときゝぬ。
今啼きによりて泣く人の
侶なき孤影のほの見ゆるに
ふりかへり行く少女子の
よわきはたゞに足のみか――。
「花あまた咲く夏ながら
水かれやすき砂原に
はじめて生ひしいのちをば
すゞるとするに惶ろ〳〵と
森はたゞやすうもくづれけり」と
森の葉ずれの謎といて
かなしび忍ぶわが胸も
あまり――重たきひとゝかな。

新體詩

剛々たり、扌、巒上をはしろが如し、切々たり、笛しばしば咽んで鳴らざるに似たり。背き木の葉、背き光、君が謎終に解けたりや。海拔八千尺になん〳〵とする入伏山の山少女、梭を機上に投ぐるとき、系を窓下に跳る時、君のうた心はなほ動かん。されどこの人の詩はへつらはず申さば未製品なり、研かれざる璞なり、入伏山の東にして「こゝ岡丘の里のすみ」とありしを削りて「筑摩少女の足洗ふ」とし、人に解かれぬ「かたくなの思抱けろ」を「不可思議の謎を懐へる」としたるなどまれに加へたる朱筆のあとなり、願はくばおこたる勿れ。

○森一つ（入選）

岡山　高木清子

野末に立てる森一つ、
朝日白鳩舞ふ空に、
夕鬼鳴く方に
さびしく立てる森一つ。

野末に立てる森一つ、
春若草に陽炎の、
燃ゆる野越えて濃緑の、
にほひ幽しき森一つ。

夏は物皆踊躍の
厳日に芽ぐむ男心の、
すさぶがまゝに蒼空に、
息づき立てる森一つ。

野末に聖き森一つ、
思ひあぐみてみつめにし
涙に浮ぶ束の間は、
我憧がれの一つ森。

「涙に浮ぶ束の間は、わが憧れの一つ森」巧なり。されどなほ踏襲のあとあるを惜む。試みに君に題を課せん蹉跎なるもよし、平明なるもよし、十五日までに作りたまはれ。題は曰く【厭歌】

【秀逸】

○ほたる

熱海　木村綾野

螢！ほたる！
はたはたと草履の音淋し。

蚊やごしにのぞき見る、
こけし面、窶れし顔母はねませり。
うすら照る灯しめして
枕べをつと立ちあがれば
軒に白き波のはな、
くだけては、暗にかへる
磯ばたを眞白き衣の子、
紅のしごきしたる子、黒髪の
丈なす女
石地藏のもとに
螢一つ見出しと
さゞめきつゝ、追ひゆく。
あゝ吾が暗よりあれて倘暗にさまよふ
暗き心は人知らず。

病める人に侍つきて海べに在りし時の作とおぼし、あはれ深し。　のうみ



ゆめ　麹町　前田べに百合

◎白鳥の松原にて

阿波　長曾我部菊子

濃みどりの葉をくぐり
峠こえ下りくれば
桐の花、紫に、
咲きにけり、讃岐の野。
吾等いますげ小笠傾けて、白鳥神社に――
石敷ける一筋の
長き堤辿るなり
あゝ海よ――永久に
わが戀ふる瀬戸

堤の根洗ふかに
高なみぞあそび來る。
水天のあへるきは、
はりま路の山浮いて
あかつきの星のごと、
月見草こぼれ咲く。
おもへば、旅はわが
生命の糧なりき。
行かんよ笠とりて
海べの御社へ。

箱根路をわが越え來れば伊豆の海や沖の小島に波のよる見ゆ高所より見おろせる海のけしきはいまだいひつくさず、桐の花の紫と月見草の花の黄と春秋時を同うして咲くとは知らざりし、才人こゝろを留めてつとむるなくば、失脚たゞに三千丈のみならんや

○少女子なれば

[illegible]　さゝ川

瞳に失ひし影を戀ひ
思に生くる身はせめて
弱き命を悲みの
涙の海に沈むとも

丈長白き桃割れは
とかば肩にもあまるらむ
星の夜人と花つみし
梅の梢は茂りけり

たゞひとたびの秘めごゝろ
捧げし人の胸にいま
とびらは固くとざゝれて
たゝけど開かぬ侘しさよ

若き身なればこのうれひ
人を思ひて身をわびて
くらき涙のかなしみに
あゝくれなゐの頬はやせぬ

いまの歎きは悔いならぬ
悟りならねど何ならん
ゆめさまされしさびしらに
えたへぬわれはをとめごの。

月前、[illegible]にのせてうたふによく、花下ひとり立ちて口ずさむによし。いまだ人と共に泣いてよむに足らず。

○裂帛

こし路　雲井の雁

あと一針に縫ひあぐる、生絹の紅も
引きたる絲にたぐられて、袖をしき
つゝうたゝねぬ
物を切り裂く劒の音、今ひきはへし
緋のきぬは、袂もはなれ袖も綻び胴
はこまかにきざまれて！
熱高まるや——うは言に
君が名呼びてみ膝を——と
手を——腕を——とかいさぐり
縋りつゝ泣きつゝたまゆらは
在りとは思ひし！身は
囚へられたる人妻の
あゝ…………

[illegible]

○ゆびわ

園町　小草

やゝに輕快えたもふ　母のまへに
今日の御心地　たづねまつれば
心地よしと　さびしきほゝえみ
老ひませしかな　あゝ。

とみれば　左の無名指の
輝やかの　指輪をぬいて――
たゞそればかり光れる指輪――
するりと抜いて――
「こはよき金ぞ
御身をかざるには相應へり。」
すなほにおしいたゞきて
我指にうつせばにこやかに
母はみましぬ、
今日よりは　さびしく――かなしき
御手みむ　われとことなり、
「ぬきますな　われ幾年を

（亡き夫の　あがなひてたびしより）
よそひける　指輪ぞ」と
ゆかしげに　みこしたまひぬ
御むねよ　いま靜に在すや。

きら〳〵と　指輪ひかりぬ、
夕日は　うつくし。

おのづから是れ上流貴紳の寶。しかすがに
一抹哀愁の雲は眉宇にきせど。

○紅戀し　越後　佐藤　叡子

露含みてとづる紅の、花瓣絞りて白絹を、
「紅」に染めてと願ひけり。
かくて太陽は輝きぬ、美しき光線絹に衆えて
ぬれにし布は干たれども、何とせん、染みし色
はあらはれて――
「おゝ紅、み空の神讃ひて
美しき光となりて行きけるか、
花の誇りをにえにして、
飾らんとせし心をば
にくしみてか。」
死せる如き一瓣水に放てば、徐ろにひらきぬ、
されど、
憧れたる斑の痕は不朽の怨み、劫永のなげき――！
戀に破れしわれなれば、淋しき色を採るべき
か、？
まだ紅戀しき十八の、青春き血の濁るを――。
朝顔の花なら大がいうすべに色の液が出るあ
なたのやんちやなされたのは何の花か、揉て
染めると、土を摺るとはむかし〳〵有つたけ
ど、今らとは得受とれない、それとも燕尾小
千谷の機械ででも染めますか。

○血の沸く時　鳥取市　桑本きさ子

白き雲、柔けに眠る
暢靜なる、黃昏の闇に
紅瑠璃の美し吐息の
甘き香を齎ひてよりて、
夢心地……、
少女氣の魂は紅光に
魅せられて、ぢれて頭へつ
花片を、むしりて、裂きて
サヤキ〳〵にかんで鋭く
吐きすてゝ……
熱い血の、つゞかんかぎり
限りなくつよく、大きく
果らなく、叫ばん――、
飛ばん……、血の沸く時。
花と一しよに指を噛みきつて……ハンケチを染め
たら？

○うしといひて　ゆり子

うしといひてこゝに二とせ、悲しよてこゝに五
とせ、さすらひの渡島の沖
花さきて花ちりて、鳥なきててふ舞ひて
みやこ大路興たけなは、
立つ波に居る波に。花さかず花ちらず、
たゞ見る氷の海、
くらき説我がゆく道、一筋の光明もおらず、

暗きかなわれのゆく道、

絶望の人、詩を作る、なほ救ふべし。君の姉妹はよく泣けども涙はまことに出るにあらず、君の友はよくすかせども顧みては一切を忘る。彼等に犠牲なし、また眞なし。天今雨ふる、出て渺茫たる太平洋の濤を見ば、一葉浮ばず一羽飛ばざるところ一つなる君の心を葬りて而して生きよ、敗殘の子よ。

○我か魂　　赤坂　福島みよ子

天かくる物狂ほしき黒雲の
死に似たる其色の刹那
我ば聞く——罪うつ鬩えのしらべ
淋しうは身にせまり心もくるめき
病に堪へぬ其刹那
我は聞く妖女の高きかち歎を
日惜しさツト立てば死の神は
はや黒糸をこそたどりければ
我は見る——暗に迷ふ我魂の苦惱のすがた

○白百合　　和歌山　木澤てる子

胸にしみたる清き香に、そゞろ情思もなくならば、
君ふ花をば糸にくゝり、玉のうなじにかけたまへ、
さやかに香る月かげに、胸の涙もかわかなん。

○妹に　　麻布　なく花

人里遠くいはなれく遠星の
暗に輝くみ空の果に行かんもの
夏の日の盟き希望に生きし身も
しこ花の侭なる願をはやされて
やゝに今つらきさだめを知りそめぬ
妹よ君は佳き人くろ髮も
われにはまして長ければ
春はさくらに匂へかし
われはしこ花、わが住む國は大空の
おもふとなき雲のうへ——
願はくば　人をはなれて
つらかりし涙忘れむ一人なる世に

○さすらひ　　信濃　松崎よし子

流るるは涙なりけり、さすらひの旅に出づとて、見かへれば壁ほの白う、壞れたる家こそのこれ、日光はくまなくさせど、草の香の庭にこもりて、けらみゝず夏なく虫の、たが夢をまもるとすらむ、
ふる里よさらば……

○夕暮　　岩手　三上よし子

暮れかゝる夕陽の光
まばゆく照りて鳴きかへる
烏の黒羽輝きぬ
追分の馬子の唄坂の曲りめ
嘶く音して
陽は消ぬ森の彼方に
笛の音、森を巡りて
悠々と闇に包まる。

○春はゆくとて　　神戸　岡　靜子

寂びたりな天と地
春は行くとて、いまぞ
わかき血のゆらぎもしづむ
さはあれど——。
「生命」てふ花は
床しき人のやさ息に
ほころびし、其日より
うましき香に此胸うづむ
おゝ其花——。我がいのち……。
世の嵐たけるとも
双の手にひしと抱きて
さらさじな永久に〳〵。

○幼な姿　　越後　水島しのぶ

是れ見よがしの
肩にみだるゝ千草の香
ばら色の頰に——艮く似あふ
眞白の前掛……
袷のすそに稍——紅見せて
かぶれるは花の様な——うす絹の帽
黒髮は肩にとゞかねど
鯉の巾着が腰にはねてゐる
水色の帶の——たれに
緋鯉がとびつかうとして
尾ひれが——ヒラ〳〵動く。

○儚なき夢　　牛込　塚原けん子

眞暗なる闇に眼開きて
また思ふ夢の姿を。
えも云へぬ——
悲哀の胸を訪ひ來て、
冷き涙——頰を流れぬ、
悲哀に堪へず目閉づれば
刹那に浮ぶ黑きまぼろし

いくつともなく闇を彷徨。
かすけく響く人の嘆息に
更けてゆく獸のさゆらぐ、
悄々と迫り來る黯冥――
儚なかりし夢のなげきに
またしても涙し流る。

○愛子

神戸　田中ますゑ

若うゑみたる星一つ
幼き影を宿し居ぬ
亡き母上の靈ならむ
物言ひてよと泣きすがる
鏡の上をすべり來て
肌をなづるすゞ風や
母が御手かとうたがへば
青葉に濾しゝ清き風。
塵ある風は與へじと
自然も心をくだきしか
母の愛子の我なれば――
自然の愛子の我なれば――！

○空想

奈良　中富よしみ

晴れやらぬ五月雨の窓
果てしなきあゝ我が空想
惘然とさめてし時よ
迫りよる濃き夕霧
あゝ君まさず辛き現實よ。
忽ちに霧は破れぬ
天そゝる嶮しの山
現はれぬ神秘や包む
み姿のいと猛くして
獵夫さへ入らぬ魔の山
故郷ならずあゝ現實よ。



舞姫の顔　紀伊　神田みつ子

○春の宵

やなぎ女

君思ふ春の宵
ふときこゆ森のあなたに
笛の音のたへつつゞきつ
そのひゞきわが胸の小琴の糸を
ひたぶるにゆすると思ふ
其の刹那さびしみと悲しみの
心もともに結ぼれて
星仰ぐ眸は曇る
君故にたゝれし胸の此の小琴
さるをあゝあさましやいつの日か
斷たれし糸の結ぼれにけん
又今宵微かに顫ふ胸の糸
あゝよわき少女なるよ十九
にして

○狂女

兵庫　加代子

憫げに彼は立ちぬ
稲荷のほとり――
蘆嘶く小川のひらめき
三尺の――黒髪亂れて
頬への眼　白き笑ひ
青き花たづれんとてか
心亂れ　彼は狂ひぬ
夜は深み――寂寞の
青き月のむくろ――
しのびに息つぎてはたと微
笑みぬ
いづくよりか響くかすかな
る足音
齒がみして彼は戰慄きぬ
又ほゝゑみつ――去りぬ

○姉妹

大坂　中野喜代子

涙に蓋る眉ふかく、
まつげは濡れてうつむけば

袖をとらへて顔かくす、
緋がりボンは背にあり

庭にふかき春の夜の
芝生に落ちし月影は、
さきみつ花の香も浮ぶ、
池の邊りに漂へり、

つきぬは情こゝろある、
雁はかすみにしづみ果てゝ、
手に手をとりて庭石に、
あはれりボンはおちにけり、

○青き星　三河　永田舞鵡子

すや／＼と眼閉づる兒の
夢醒ましたる雷の、
叫び荒れ狂ひつゝ、
淋しき村を過ぎ行けば、
青き光の星一つ、
女の清き眼のごと、
慄れる如くきらめきて、
晴つきし天に匂ひけり。

○夢の國　千葉　白ばら子

はつ夏の綠葉涼しき
山の日は森林をすぎて
やはらかく神の御領と──
─家に照るかな
うたゝねの眞晝の夢は
波走る白帆を慕ひて、──
薔薇のその花の香に

酔ひけらし──君よ謡はん
戀の歌よき樂もちて
さすらひの胸のひゞきは
岩間もる清水さながら
野を馳せて駿河の國の
海に入る──戀物語
聖らなる石に絶えせぬ
さゝやきの怨は永劫に──
うらぶれのいく年たゝぬ
山の家に朽ちぬる戀の
綵の彩──夢より我は
‥夏をさめしな。

○薄暮の森　麹町　久保しづ子

蒸し暑き大陽も暮れゆきぬ。
酔の如き輕き風ほのかに來り、
歓らなるはた若き葉のふかき夢の吐息の、
ほのにもいとかすかに森の香のたゞよひ、
刻々と夜の靈となりゆく。
限りなき歡樂に夢は空には、
秋の大陽の麗かなる日、
菊の花の美しき畑のにほひのとき眠はひらめき、
森の香のたえまなく沁みてたゞよふ。

○わき潮　青森　萬從りさ子

十六夜の月は、
あゝ今し、のぼらむとする。
わが胸の壺に溢れぬ、
さみどりのあえかに若かき、

濃き潮。みよ見よ
中に一ひらの、美し萠、澄み渡る、
鏡の面に陶然と、影を落して、
解けゆく心地。
いづこともなくいみじき香、
また美しき樂の音。
若き潮は──
たわ／＼とああ今溢る──
潮にひた／＼と
接吻ゆるす、
一ひらの、戀の萠
紫の色

○破甕

黒髪の──、
白きうなじにたれかゝろ、
華やぎ少女かろ／＼に、
右手に甕もち、銀の
小銀片手に急き心地、
十の階、七ッ降り、
綿雲かゝけむ一瞬時、
はと音もなう碎けたり、もろき
玉甕は。
おしきかな──
甕破れぬ、しろがねの、
銀は汚土には觸れもせて
永久の日ざしに輝きぬ、
破れし碎片をとりあげて、
少女は接ぎつ、されど合はず、
甕の破れ目は──。

E N

美文



○規定　抒情、叙事、叙景等凡て他欄になき文章一切を含む字體は明瞭に認め必ず句讀を切るべし一人一章に限り半紙又は罫紙に認むること匿名を要する者は本名を別記せよ二十四字詰三十行限甲種の賞を送呈す

○秘密（天賞）

山形　君子

出て行けと云はれても去られない戀し慕はしの此の家を、私はまあ、飛び出さうと思ふとは。然かも決心は甚だしく堅くなつて、もう決して動くべきてはありません。

毎日父樣母樣の曇つた御顏を見るにつけても、不滿さうな同胞のもの言ひを聞くにつけても、私は私は、どうしたつて此の家を外に、異郷の月を眺めて泣くべき運命を授かつて來たのでせう。

それは他の人から見れば、如何にも平和な家と見えませう、庭には四季折々の花が交る〲咲きます、又花散る夕べ、月匂ふ夜半、尺八、琴、ヴワイオリン等を弄んで、遠く山行く人の足を止むる事もあります、友達は皆羨ましいと云ひます。然しあゝ然し、花の色もものゝ音も、それは皆淋しい悲しい思ひを、せめて慰める爲めのもので、平和な温かな家を賑はすものではないのですもの、私はこれにつけ、かれにつけ、泣いて許り居るのです。

泣いて泣いて泣きぬいて、今日は靜かに出て行かうか止まうかと心の衡にかけて判斷したのです、そしたらあゝそしたら、出るべき方が重かつたのです、あゝ遂に私はこの家を去るべく決心したのです、そしてその時涙の涸るゝ程泣きました。

夕飯の時からして一つ飯臺を圍むも今幾日と思へば、御飯なんか口にも入りません、て碌に食べずにやめたら父母は、どうした、どつか惡いのかつていつて下さる、私は其の時、こんな事いつて下さらなきやいゝにと思ひました、そして奧へ入つて聲を出して泣きました。

あゝこの家に、誰れがどこの人がかく泣悲しむべき秘密のあらうと思ひませうぞ。

夕飯後私が日頃折々の樂しみにと草花の種をまいて置

いた花園へ行つて見ましたら、コスモスや百日草や何かゞ勢よくのびてます、私はそこらの青葉の影にうづくまつてジーッと考へてますといつか涙は湧いて來ました。もしもこの花がさいたら、あの子が植えたんだと思ふこともあるでせう――。あゝ、なぜ、誰れがこんな暗い濕つぽい空氣をこの家に吹き込んだんでせう。あゝこの秘密を打明けませうか、いゝえいゝえ私いふ事もかく事も出來ませんもの、ゆるして下さい。

大事件であるに拘はらず沈着に書いてありますから、一層同情が深くなります、考へて行ふと云ふことが文字の上にも表はれて居るので、其家出しやうとする人の胸の裡が猶紙の裏に感じます、文或其ものが全人格の表出とすれば、理智ある人の動搖は感情ばかりで動搖する人より、其文に於ても確かなところが表はれて居ます（評）

○梨畑にて（地賞）

赤坂　靜江

私は忽に歩をとめて立ち止まつた。幾町となく續く梨畑はひつそりして、唯葉と葉との微かなゆらぎが聞える許り、眞直に立つたら頭のつかへ相な棚には、花の樣にずらりと丸い實が着いて居る。それを一つ〳〵丁寧に白い紙の袋被せて、虫をよけてあるのが。。。。。。青い葉に見え隱れして何とも云へず美しい。私は微かな葉のゆらぎに聞きとれて、靜かにとある樹の幹によつて立つた。そしてまるい圓らな實を見るともなしに見て居る中、不斗――八つの時――と云ふ樣な、朧な追憶の緒を見出した。

微風は常に畑を渡つて、何處からともなく青い活々した香か漂ふてくる。

朧な昔は次第に明かになつて、此の同じ梨畑で私を遊ばして吳れた畑の爺の事が心に浮んだ。

爺は梨の盛には畑隅の小屋に寢起して番をした、盜賊でも來やうもんなら大きな六尺棒を持つて追ふたが、常は人が好くて別して私を可愛がつた。芝居が好きで五六年に一度位見るのゝ聲色を眞似て、獨せつせと虫とりなどして居た。煙草は缺かさなかつたがお酒はたまにしか飮まない。

私が梨の未だ小さい中に欲しいと云ふてむづかると、いつも白い紙の袋をとつて、「孃樣、えーですか、未だ青うがんせうが、よくなれば一番に上げるだから待ちなせえまし」こんな事云ふてすかして越後の話しをして吳れた。聞いた事もない雪國の雪女の話しやら、爺は高田の者であつた。其頃はまだ幼かつた私は爺が一番の友達だつた。

息子が一人居るが徵兵から歸つてすぐ大阪に奉公に出た限り行先が分らないとか。

私が十の時何かの都合で鵯ケ谷に行つたが其後はどうなつたか。もう別れてから七年たつた。可愛相な爺は仝じ日本に居ながら唯一人の子にも遇はず、淋しい生

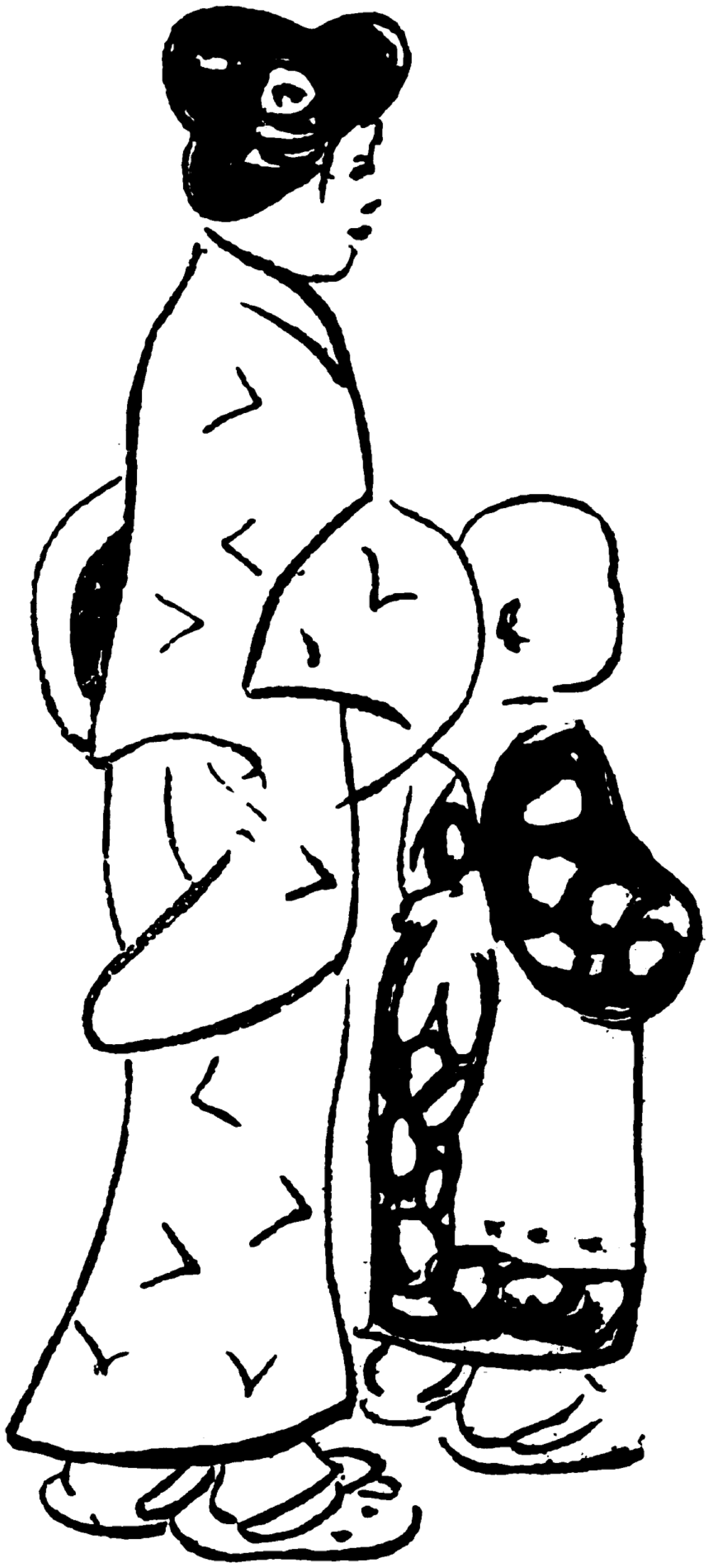
涯を辿るのかも知れない……。

「雪様お達者で――」と何も云へずほろ〳〵泣いて別れた私よ、私はも一度逢ひたい、逢つて雪女の話が聞きたいよ雪、

急に吹いて来た風に、追憶の甘い夢はさまされた。覺まされて又白い紙袋を眺めた。私は其中に昔のしたる汁を含んだ實がある様思ふて、静かに袋をのけたが中は青い堅い小さな實だつた。

ツット又袋被せて上を仰げば、青い葉の間からは澄み切つた紺碧の空がすけて、綿雲が一つ北へ〳〵。

何處か知ら超然たる處があつて、文章にも氣品が具つてゐるやうです、別に挑發的の文字もなく、刺戟的の思想でもありませんけれど、尚ぶべき文章です（評）



おもり　　水戸　北川うめ子

○夜　色（入選）

本郷　千とせ

綾さん

三日降り續いた小雨が漸々霽れて一入翠を増した松の梢に十日の月が朧に宿る黄昏時、色取々に咲き亂れた躑躅の間から、白いリボンの綾さんの半身があらはれて鳩の如な愛らしい眼がちらちらつと離室の腰掛窓へ注がれたやう、私はスッと障子の蔭へ身を隠したので、こゝに居るには氣が付かなかつたらしく、紫の華美な絣の袷小袖に桃色の襦袢の振を長う揃へて小豆色へ大きな芙蓉の形の有る羽二重の帯をきちんと結んだ後姿が、雪かと紛ふ卯の花の垣に添うてふらり〳〵と、泉池の汀の飛石の上にすきり

と立つて片手を帶の間へ……暫時恍惚と彳んで居たか、何想ふてか莞爾片頰に笑を浮べて燃ゆるやうな紅い切島の花を一輪つまんで蕾の唇に觸れたかと思ふと水の面に投げた、靜かな水面に小さいうづを描いて岸に漂う花を見詰めて居たが、ふと襟元を搔き合せながら空を仰いで又池に眼を落す、私と綾さんの間は僅二間と隔てゝ居ない、餘程綾さんと聲を掛けやうかと思つたが尙も障子の透間から覗いて居ると袂からハモニカを取り出してコチロンを賑かにベースを入れて吹きながら、庭下駄輕く藤棚の蔭に消へて了つた、が再び紫の姿が小高い築山の亭の木の切株に腰を下ろすと：：一入妙なる音が濕つた木の間をぬうて：：曲は荒城の月。

さゝがにの糸

オレンヂ色で圍りを暈した薄紫の煙の樣な雲が、磨き上げた球のやうな月にもうーと懸つて過ぎた、と思ふと又一かゝり、じつと月を眺めれば月が動くやう、雲を見つむれば雲が走るやう、後は一際澄渡つて檜と槇とに連絡をつけたさゝがにの糸が纖い白金の針金で綾なしたかの如にきら〳〵光る、その眞中に小さき黑き物只一點、晝の疲れに睡れる蜘蛛か、それとも捕はれた羽蟲で有らうか、さわ〳〵と小枝の搖れる毎に、ふはりふはりと微風に弄れながら猶も白金の絲は切れぬ、黑きものは死せるか……眠れるか：：依然として動かぬ。

いつもながら描寫の妙に感服します、「綾さん」の方は、繪畫的で、孰れかと云へば有る景ですが、「さゝがにの糸」の方は同じく天然の描寫でも、更に筆が活きて、今様の「秋の草紙」を讀むやうです、一唱三歎　（評）

【秀逸】

○鐵工場　（外二篇）

仙臺市　菊地りう子

鐵工所

公園からつゞくだら〳〵坂をせつせと下つて、一寸立ち止り、流れる汗を拭つて袴に風を入れてると「いよーハイカラ「一寸一寸姉さん〳〵、おいでよ、こゝに」「おいハイカラさんこちむいて」わあ〳〵聲するので何氣なくふと右側をみると太い鐵の柱で圍つた大きい工場。かちやん、かちやんと音する度に黃色ないやな焰がぼーつぼーともゑる。柱の隙から幾つかの顏が。陰鬱な、鐵くさい空氣を吸つて殆ど人間色の輝いて居ない死人の樣な顏がずらりと並んでる。髮も鬚もぼう〳〵と。焰の他は眞暗だ。「やあ姉さん一寸こゝ迄おいでなせえ」と又わい〳〵。彼等の目はとみに情慾に輝いて焦つた。私はいやあな氣になつて、急いで目をつ

ぶつてかけぬけ明るい町に出てほつと息をついた。瞬間君の頭にはゴリキイの「彼の小女」が浮んだ。そして彼等みじめな牢舎住ひの人逹を今迄自分の念頭に置かなかつたのを不思議に思つた。

乞食

寂しい寺つゞきの町だ。けれど一人二人通らぬ事はない。黄色い壁が所々はげた禪寺の本堂の蔭の墓原に眞黒な人山が築いてる。何だらうと思つて、よると人波にもまれ〳〵て自然前に出て了つた。むつと臭氣が鼻をつく。乞食、十七位の乞食がのめつてる。ギリ〳〵ギリッと歯をくひしばつてぶつ〳〵泡をふく。目や頰がビリ〳〵つる。唇の色はもう變つてる。兩手をぶるつとふるはして空になげたかと思ふと身體を半起した。周圍の人はどや〳〵と後退りをする。と又、ばつたりたふれて目をくわつと開いた。鼠のシャツから顴骨の高い黄靑な頰の邊を始終大きい虱がぞよ〳〵行つたり來たりして居る。「死虱だなあ」と傍の人がペッと唾をはいて出て了つた。お碗のかけらに赤いのろのろした飯が半ば土にべつとり零れて、枕元に。乞食は又もがき出した。呼吸が漸々せまつて來ると、顏は恐ろしくひきつつて悽くなる。「あ……」「胸惡い」、「汚いなあ」「可哀想だ」「皆死ぬんだ、こんな樣して死にたかないなあ」口々に勝手な事を云ひ乍ら一人去り二人去つた。誰も助ける人もない。どこからかブーンと羽虫が眞黒に集つてきて、鼻の穴、耳口に入つて行く。本堂から沈んだお經の聲が聞えて來た。かちやかちやかちやと鳰の音がして辻からおまはりさんが來る。

普請

食卓を縁にすゑて、若葉の香する柱にもたれた。どこかて普請をしてる。(よやはありは……はよやいやいやいや……いや……)ぬか雨が音のせぬ位に。(こりや……りや……りやりやりや……)

「どこかて普請してますね」「えゝ乳屋て」切文句て双方無言になつた。(よいとこ、よいとこさあ……)重い空氣の上を彼方此方に流れる。私の靈も包まれてあちこちと漂はされる樣て、あゝ旅だな、と思つた。。。。。。。。

「職工場」が最も好い、もう少し意味を見出すとよかつた、「普請」はこれて澤山、旅情がいき〳〵と動いてゐる、次に「乞食」に到ると好いは好いけれど、確に不快な惑も起ろ、不快な惑が起ろだけ、それだけ好いのてせうが、好んて斯んな場合ばかり見ない方が猶好いてせう凡て三篇とも、りう子さんの一轉機を示して結構てした（評）

○娘のお四國樣

阿波　長曾我部　菊子

春は今花らんまんの春——濃い霞淡い霞が、何となく低くて濁つた大空から下りて、柳の並木原、荒れたる河原、寺から寺への間一里を、立ち罩めてゐる。お四國詣り樣は、今が出盛り。十人づれ、十五人づれ、としよりづれ、娘づれ。右何々寺——左何々寺と指さ

した手の形まで彫つた石標を順々にたづねたづね、花より花の彌生の道をにぎやかに、――りりん。りりん。鈴ふりならして通つてゐる。

今朝私がへんろ街道に出た時、左側の「奉納」のお札をいつぱい赤いよだれかけの下へ、くくりつけられてゐる石地藏様の前に、花とも見まがふよそほひのおへんろ二人たちとまつてゐた。

一人が私の方を見るのに其紫の手拭の下からもれてる顏！　唇！　つつましげなる顔ばせの、あはれ眼一つ盲ひてゐる。一人はあちらへむいてゐる。

いぢらしさに胸を痛めながら十字路を南へとつて二三歩ゆくと、向方からまたくるお四國様。美しい娘づれである。二人きりかと思ふと、桑畑のかげからまた一人が追ひ付かうとして急いでくるのに逢ふて、私はうつかり立ちすくんでしまつた。

……娘さんあなたは何のお願があつてお四國まはりなさるの……其時の心の聲であつた。

おそろひの菖蒲いろのめりんす墨んで、亂さじと黒髪をつつみ、紅い帯、華美もやうの友禪のしりあて、襟のまうしろにはお大師様のおぞうりと云ひ傳ふる豆ばかりの大さのぞうりを吊るし、そろひの檜の木杖。新らしいすげ笠。垂れてる紐は緋色である。

どうしてもこれは今朝この村を出立つた巡拝の娘づれだとわかる。

見渡せば向ふの方――ひくい民家の上にそびえてお寺の塔、それに本堂もみゆる。夢か否!!。本堂のいらか埋るまで美事や。櫻花萬朶の雲。

ああ情景とも宛として詩中のものである。

（お千代はん。けふはどこまでうつて（參詣する事を云ふ）行けましよ）身を斜にしてから口をひらいた子は細面の十七くらゐ。女女しい娘である。

（さうぢやな！六番から十番の切幡寺さまぐらい：）丸顔の眉の濃いお千代さんがかういふと十九程なが。

（おつぎ様は弱いからお母様の御骨折は一通りでないでよ）まへの二人がうなづく。

さうして三人は石地藏立てる辻に出てしまつた。私もあるき出しながら見かへると辻にはまだ二人の娘が今合掌がすんだだけで、涼しげな井筒がすりのよく似てる二人とその袖が青風に動いてゐる。ただしばし。

二人は今來たれる三人と何となく面を見合つてはにかんでゐる。

私は四五尺ばかし歩いたらう――。またくる二人にまた逢ふた。さきの娘だちの話の母娘づれ――。

母は勝氣らしい。娘のきてゐるものはお靈もの、しゆすの帯くるくると丸巻きにしてちりめんの伊達巻でもつてくくつてゐる。胸にかかれる札ばさみには墨あざやかに「天下泰平國土安全。奉納四國八十八ヶ所同行

ご二人」と。さきの盲目の娘にくらべてもこの君の面の色はむしろ蒼白。曲眉豊頬の美はあるを可惜!。眉に佗しい愁の雲のひたとかかりて。人の見る眼に合ふときは痛なさうにぢつと目をつむる様子——。

(おまへ。こちらの方が通りよいから。)

母は石のない方へ、かう教へ教へつれてゐる。やがて辻に出る。

私はまたもたちどまつて街道の方をみると、後から後から、若衆づれ、尼づれ、五人づれ、二人づれ、通りに通つて、りりん……りりんとふる鈴のひびき。男の聲、女の聲、太い聲があいいてゐる一所になつて。

(南無。だあいし、へんじようこんがう……なむう大師……へんじよにこんがう……)

りりん。りりん。と鈴が聞にまじつて調子をとる。

それ等の中を前の娘たち二組五人——後の母娘二人、花もはじらふ巡禮すがたて、西へ西へ、、、、、と小さうなる。私はぢつと見送つて、やる方もなくい



ごかいとり　京橋　寶來靜江子

らいらする異樣な情におそはれてしまつた。

娘順禮の姿と云ふものは何となくあはれなもので、姿を見たゞけても、其身の上に小說があるらしく感じる、地は四國の阿波、時は霞籠め菜の花香ふ春のなかば、幾人かの娘順禮の語つてゆく有樣は、何うしても詩でせう、やる方のない情に動かされるもの、此作者一人てはありますまい（評）

○六月

羽前　九輪草

遊蝶花の鉢植を三つばかり店先に並べた、古着屋の角を曲つた。空は明く日の光さへ少し雲間を洩れて來たが、雨はまだはら／＼降つてゐる。往來の人はみな傘をさしてゐる新らしい藍の香のする、單衣の袖から逃ふ初夏のさわやかさが、胸までも泌むやうて――何處までも、何處までも、歩いてみたいやうな氣がする。俯向くと紅緒の足駄の爪先が、かはる／＼前へ出て、無意識に歩まれる――。（七日）

蠶は昨日までに、みな簇にはいつてしまつた。暗く閉ち込めた蠶室は新繭をつくる、かすかな音がこもつて、家の內は何となく靜としい。

もう何處の桑畑にも綠の葉はみつけられない、たださへ明るくなつたのに、熱い日の光が照りつけてゐるのを見ると、泣きたいやうな氣がする。（十九日）

午すぎ妹と野へ萱草の花を取りにゆく、野に出ると、曇つた空の南に、吾妻山がはつきり見えてゐる。なつかしい、殘雪が白く光つてゐる。

吾妻山！見る度に私はいつもなつかしいやうな哀愁を覺る、あゝあの山の陰には、岩代の國があるのだ、知つた人があるでもないけれど――たゞ、あの山の陰になつてゐると思ふと――なつかしい。

燕が鳴いて飛んだ、野は人影もない、赤黃ろい萱草の花がそこゝに咲いてゐる、妹はずつと向ふの草の中て取つてゐる、見えなくなつたと思ふと、つと立つて此方を鳥渡振返つたが――また見えなくなる――立つ――。

その度手に持つ花がふえて見えた。（二十一日）

單に寫生式の文章がうまいと云ふばかりてなく、何處か情味もゆつたりとしてゐる（評）

○夕暮の椐花河畔

信濃　優梨子

柿の花がボタリ／＼と落ちる庭の折戸を明けて、そつと出た。いつもの畔道を、卯の花の白く咲いて居る淨正寺の生垣に添つて、椐花の川邊へと出た。涼しい夕風が河の面を渡つて吹いて來る。すーッと夕靄が立つて、杏の里の安茂里村がうつすり見える、春の夕べと違つて、今は濃い靑葉の色である。

相生橋を渡つて、久保寺の方へ行く馬子の姿が繪の樣だ、追分節でも聞えやしないだろうかと、暫と耳を傾けた。

又思ひ出した、小さい時によくお夕飯を濟しては、お祖父樣とこゝへ來た事を……。「お前は小さい瓢簞に這入つて此川へ流れて來たのを、餘り可愛らしかつたからよ、お祖父樣が拾ひ上げたんだ」なんて、歩きながらよく被仰つたけ。其私はこんなに大きくなつて、お祖父樣はお亡くなりなさる、そうして、いつかは私も死ぬんだ、などゝつまらない事を考へ出す。

「すいかづら」の醉ふ樣な薰りがプーンとするので、見ると土手の處に、卯の花の樣にくつきりと白く咲いて居る。強い香に醉ひながら、折らうか知らん、折るまいかと考へて居ると「お姉さん！まあこんな處にいらして？暗くなつてよ、ネお内へ行きませう」と、東京から來た六つになる從妹が迎ひに來た。從妹の手を引いて歸つた頃は、里わらべの姿も見えなくて、水の音許り高く聞えた。

河畔の景色が實に能く寫はれてゐる（評）

○病院にゐて

横室　多田よし枝

夜となく晝となく病む胸を抑へて私はもう幾日ねた事か、何でも餘程日數は經つたらしい、ふとんにあたる骨の節々がいたい。

私はなぜこんな病氣に取つつかれたのだらう、何の前ぶれもなく不意に。どうしてこゝへねさせられたか、私はそれさへ知らぬ、肺！とおもふけどきいても誰も敎へてくれぬ、肺！肺!!私はどうしても肺だとおもふ。何でも雪がふつてゐた、薄いショールに衿をつゝんで例の社へ出勤るつもりて、人のこみ合ふ割引の電車にのつた、ギシ／＼とつめられるだけつめてゐるので私はやつとの事で後と前の人で支へられてゐた、三宅坂の前で車體がゆれたとおもふと、人はみな前へ一時にたふれた。まではおぼえてゐる、がその後は知らぬ。

それはその日であつたかいつであつたか、ふと目を開くと雪白の衣きた看護婦がゐて、頭を冷やしてゐた、看護婦は氣がついたかとか何とか云つた樣だつた故、私も何か云ふとしたけど舌がまわらなかつた、すると看護婦は氷の一切を口に入れてくれた、私は又そのまゝ何も知らなくなつた。

その次目の覺めたのは夜だつた、電燈がまぶしくかゞやいて室には誰れもゐない、頭には相變らず氷嚢がのせてあつた、氷嚢をソツトはづして左の手をついて寐返ろうとしたら急に痙攣でも起した樣に右の助骨がいたむのでそのまゝたふれてしまつた、そして「母樣母

様」と私はつゞけ様によんだ、此世にゐましもせぬ母様を。

すると又白衣の看護婦がきて、何かいひ乍ら胸をあけて濕布を取りかへたり氷嚢をなほしたりして出て行つた、一人になると急にこゝは何處？自宅とはちがふ、弘さんはゐないかしらとおもつてみたがやはり誰も居らぬ、四方は眞白で天井が大變高い、強い藥の香が鼻をうつ、弘さんといつてみたけど、聲に力がいらぬ。

又看護婦がきた牛乳をもつて嫌だつたけどあまりすゝめるので仕方なしに呑んだ、「今暫くすると姉弟がお出になります」つていつた故何處へいつたのか聞かうと思つたけど大儀だつたから止した。

早く弘さんが來ればいゝと思つてる内に又ねてしまつた。

何時間經つたか知らぬ、姉さん〳〵と云つた聲は確かに弘さんだつた、何か聞きたいと思つたけどやつぱり大儀で仕様がなかつたからだまつてゐると、何か食べさせてくれたり脈を取つてみたりして誰かと心配さうに話て居た、それから私はよくは覺えないが、四五度位誰かしら物を食べさせてくれたり胸をはだけてみたりしてゐた様に思ふ。

昨夜目が覺めた時は丁度弘さんがゐてくれたので嬉しかつた、氣をきかして牛乳をくれたけれどあの匂ひがいや、いやつていふのに弱るからつてむりやり人の口に五勺ばかりをいれてしまつた、いやな弘さんだ。

いろんな話をしてくれたけれどどうも大儀で口きくのがいやだつた。

昨日みつ江様がパンゼーを小鉢にうゑて持つてきて下さつたつて嬉しくみてゐるうちにふといやになつたので直ぐすてゝもらふとおもつたけどそれではみつ江様の厚意にすまない故、私の目にふれない處へおいてもらつた。

春さんはあの可愛い櫻草を、かつて私が歡しがつたに秘藏の低部燒の花瓶にさして下すつた、嬉しくつてヂットみてる目がつかれてうと〳〵したと思つたら、又寢汗がビッショリ。

今朝弘さんが歸つて後は、訪ねてくれる人もなし話してくれる人もなし一人ぼつちで淋しい、けど何時もの様に泣きたいほど寂しいのではない、たゞぼんやりと寂しい様なつて位、私の頭はどうかしてるのだらう。こうして目をつむつて過去の幻影を追つてみてもあんな事もあつたこんな事もあつたとおもふだけで少しもそれがもだへの種とはならない、こんな事より胸の方が苦しい、痛い。

今まで病院の記事や、故事の記事は澤山來ましたが、此れほど詳しいのはなく、また此れ程病人の心持をありのまゝに、うまく現はし

てあるのはなかつた。(野)

○野の夢

臺北　稗貫美津子

鈍色の雲低く閉した空を仰いで、野に立つた。

重々しく濕氣を含んだ風は青草の上を渡つて、肌に冷々と心地惡く泌み入ります、淋しい……寒い、何となく涙が頬を傳ふ、何故彼の時、あの燃ゆる御胸にすがつて思ふまゝ泣かなかつたらう、眞實に本意なく別れた、あゝ口惜しい、なぜ……なぜ、あの御手に「いつまでも」とすがらなかつたらう、と、思へばやるせ無い程慕はしい――頭が呆として來る……折りからぱつと目先をかすめる黒い影、つと顔をあげたがもうおそい……何だらう……遙か向ふを羽根重げな疲れた樣な鳥が飛んでゆく、あれでせうよ、きつときつとあれですよ、妾の夢を覺したのは……可愛さうにどこへゆくのでせう、ふつと野の彼方に見えなくなつた、何となくなつかしい影ですこと……とあらあら遠く遠くけぶつた野末に、戀しい戀しいかの君の姿髣髴、暮れゆく寂しい空の下、野の上に動くでも無く、動かぬでもなく、「こゝにいらつしやる筈がない」と思つても「どうだか」と心の底に叫びがある、なつかしい、そと馳け出だせばおゝ矢張り夢でしたよ、人影も何もない、野は野ですもの。



田舍　京橋　松澤久千代

胸に手を組んで凝と立つと、さら〳〵と靜かに靜かに、丁度春雨の木の葉を打つ樣な、かすかな音がする。何だらう……？雨でせうか、雨なら冷たい筈……否え野をめぐる里川のせゝらぎでせうよ、何て優しいなつかしい音でせうね、……おや、今までじつと死んだやうになつて居た雲が、やゝ、動ぎそめましたよ……願はくばあの雲のとばりを引き破つて、内に深く秘められた天の戸押し開いて、さうして、しばし歡樂の夢に醉ひたいものです……おゝ冷たいこと、まあ此の野の露。

言葉の使ひ工合が如何にも女性らしい、而して野卑でない、獨白体の好模型（評）

○咀はれた矢

金澤　むらさき女

一

皆は靜かに腰かけてゐる、私はじつと一生懸命に綠さんを見つめた。それだのに綠さんは、手をちやんと膝の上にくみあはして、地面ばかり見つめてゐる。——私が何卒あの矢があたつてくれゝばよいと、思つてるのも知らず顏に——。矢は次から次へ一本づゝ送られた。一番は君子さん。平常から御弓は御上手。あの構へやうから見當のつけやうから、確かにあたるにちがひない……情けない……と今放たうといふ矢先を、息を凝らして眺めた。……！ヒーユッ——私は固く耳を抑へて的の方を見ず君子さんの顏色ばかり窺ふ。みるみる失望の色が……。それを見た私は、はじかれたやうに押さへてゐた手を放して的の方を見た——私に狙はれた矢は的をはなれる事一寸で、砂の所に力なく立つてゐる——。私はすぐにもうにこ〳〵した。二番三番……だれもあたらなかつた。ようおしまいに綠さん。むら雨に矢をつがへて、今ひかうといふ刹那……ちらと私の顏を見てにつこり　唸りをうつて飛んでいつた矢は見事九寸的にばんと音して……あつといふ感嘆の聲が一時におこつた。

二

美くしい氣高い、こも〳〵したばらの花の澤山についてゐる鉢を女は片手に、傘さしながら重さうに、提げてゐる。道ゆく人はこれを見ると等しく「あゝ美くしい！」と思はず立どまる。そして必ずその持主たる女を見る。女は見られる度に、臆病らしく飴色の傘をかたむけて、はねの上るのもかまはず、さつさと急ぐ、——春雨のふる日だ——私は其女が妙に見たくてならんので、脇の方から覗くやうに見た。……可愛想に……ばら色の頰や、眞紅の唇をもつてる女なら、どんなに誇りがに、提げてゆくだろうに……。女の將來を想像して見たら、胸も痛くなつた。

一の方お書振も奇抜ですし、興味も乗つてゐますし、二は少し皮肉が利かなかつたやうです（評）

○木曾の宿

諏訪　岩波花江

木曾のやどり！古いはたごやの秋の夜は更けて、水の音のみ高く聞えます、古あんどんがぼんやりとすゝけたひろい天井の板にぼんやり光をなげて、心淋しくしづみゆく、夜は一時にも近いでせう――ふとすゝりあげる妹のこゑに耳をたてゝ「どうしたの？」、綿の重い夜着をのけて妹の床をのぞきこむ、やゝそげてゐる妹の頬には涙の玉がつたはつてゐます、「どうしたの？ねむれない？」たまらず手をとつてこうきゝました。

「いゝえ、……姉さん、今日くれ〴〵にみたあの馬子の顔が忘られなくて……」妹のこゑはふるえてゐます、私はハット今日の夕、つかれてついた此宿の前、旅のわらじをぬごうとして居つた時、ゆくての道の木の間を分けて、悲しい「追分」の細い聲に、女馬のせなに炭をつけてこなたえ來かゝつた若い馬子、年の頃は廿三四でせうか、白い手拭をもれてみえる眉のやさしい、色白の若ものでした、私たちの姿をみるとばつたり歌をやめてしまつて恥しそうにゆき過ぎたあとは、――アゝまた――ても……悲しい子の妹は涙ぐんで見送つてゐるではありませんか。

「ゆり子さん、すあがりませう」心を知つてわざと引あげた此やど。

「ね姉さん、私こんなに思ますよ、あすたつ時にとたのんでおいた、二人がのつてゆく馬れ、その馬がもしあの馬子の馬であつたら……あの馬子の「追分」のほそいうたにひかれて、あの女馬の背にのつたら、淋しい運命のはらから二人、霧ぶかい木曾の山林をこえてゆくなら……つて姉さん私は浮氣でせうか」……妹はほろ〳〵泣きながら私のひざに顔をうづめて――

浮氣！浮氣！悲しき子よ、……「浮氣――それが浮氣で何としませうおまへは生れながらにつさしい美しい「なさけ」の鏡を胸にもつてゐる、雨ふれば雨に風吹けば風に、男ときらわず女と云はず、其鏡に影を止めて姿はなる、或時は詩となつてほとばしり涙となつて湧き、こうして廿年を過して來たのだもの、おまへが私にやさしいのも、彼の馬子を忘れられないのも、心は同じなさけのかゞみにやさしい影をなげたのだ、泣かないで自分をとがめないで、思ふだけ心のかげに泣いてごらん、おまへはそうした生れたまゝの子なのだから」……此むれに湧く妹可愛のほとばしる心を萬分の一も通へよと耳にくちしてこうさゝやいた時、妹はヒシと手をにぎつて「姉さん――死ぬまで別れまい――」と……あゝ、……遠い〳〵母屋の方からかすかにこほろぎのこゑがきこえて來ました。

しめやかに哀な物語、場所と事柄が舊時代で、人間が新時代ですから不思議です（評）

○二人

大阪　今西春江

○

夕……。地に長い影を引いて、脊の高い男と脊の低い男と、連れ立つて町を歩いてゐた。

脊の低い男は糊と刷毛を持つてゐた。脊の高い男は四號活字で印刷した赤い廣告紙を持つてゐた。

電信柱が見つかると、脊の低い男は刷毛に糊をつけて脊の高い男の持つてゐる赤い紙にべた〳〵塗つた。

すると脊の高い男はウンと延びるだけ手を延ばして、丁度手の届いた處へ赤い廣告紙を張りつけた。

二人は恁うしてだまつて町を歩るき、だまつて同じ事を繰りかへした。――

○

若い女が白い顏を深張りの蝙蝠傘で包んで、右の手で蝙蝠傘の柄を握り、左の手の指先で蝙蝠傘の骨の端をつまんで、恁う身體を斜めにしてしなやかに野道を歩るいてゐた。

其女が村端れの土橋の處まで來た時、向ふからも同じやうな姿の女が來た。向ふの女の傘は紫で、此方の女の傘は水色であつた。

紫の傘と水色の傘とで包まれた白い顏は、ツンと澄まして擦れ違つた。

そうして土橋を渡り盡した處てどちらも振り返つた。眼と眼がハタと逢つた。驚いて二人は眼をそらして、知らぬ顔して歩き出した。そして其帶と自分の帶とを見くらべて、安心したやうに歩きつゞけた。

暫くすると今度は紫色の傘が振り返つて、水色の傘を見た。そして其帶と自分の帶とを見比べて、安心したやうに歩きつゞけた。

それからはだん〳〵へだゝつて、互ひの姿が豆のやうに見ゆるやうになつても、どちらの女も振り返らなかつた。――

初めの方は事實てせうが、作りすぎた傾きがあつて、型にはまつた風があります、二者とも散文詩として取扱ふべきものてせうが、少し凝りすぎました（評）

○夢の謎

東京　わすれ無草

十六夜の月も今沈んて仕舞ました、歸り來まさぬ島の人よ、荒立つ波の響の中にあなたの夢はまどやかてすが、今はもう姉樣とも申しませぬ、我から進んて世にそれて、靜かに晩年を送らるゝ獨りの君よ、御言葉てもあれば私は決して御文もあげまい、却て君が涙を誘ふやうなものと思ふては居ります、居りますけどやつぱり慕しくつて、それに今國め掛つた夢の謎が解いて頂き度ばつかりに、斯うして亦も都に漂流の子は、濟いあなたのお瞳を汚すので御座います、ゆふべあの久世山に月明かな儘、おびき出されて登つたのてございます、五年むかしを偲び遊せや、師の君に伴はれて遊戯の時間によく參りましたあの母校の後の久世山、御記憶遊しててせう、カドリールや飛鳥川にと無心に遊戯したあの山、稍の雲霞う靡いて、其昔遙か西に見へた早稻田のたんぼが、今もうなくなりました、他に高く聳へた早大のいからも今は見へませぬが、其他は五年前の眺めと少しも變りませぬ、今宮入幡の坂から、辻廻して登つたは十時すぎ、夜露がしつとりと草に宿つて、折摑皎々とした眞如の月に美しう輝いて居り升、裳がふれたらサラと少さな音もしやうまて、久世山の原は廣ふかう御座いました、後ろに草を踏むて參りますと、椎の木林の左手から清い琵琶歌が聞へるぢあ御座いませむか、殆音の妙に澄むだ嵯峨野の奥の琴の音ならぬこゝは、廣い草の原に草を褥にどつかと座して琵琶を抱へて青年が……

月は冴へて居りました、四邊はたゞ靜てした、牛込の町ははるか下に夢のやうに灯――火に榮へて居ります、樂しい戀の夢から醒めぎはの胸に強く響いた有韻の調もゆるやうな胸の香りも漸く醒せかゝつて來た自分の身は、其琵琶の音に胸の情緒が誘い出されるやう、ふたゝび人が戀しく懐しくなりました。

もう騷がしい現實の世に歸るのが嫌て、永久ても此樣な境に人を慕しんて居度う思ひました。

けれ共私はやつぱり騷がしい世に歸る人てした、歌子樣、人はいつかは現實の手に捕はれるものてせうか、美しい美しい夢にもやつぱり醒める時が御座いますの、敎えて頂き度う御座い升。

抱いて盡きざる青春の怨、たゞ淸く、たゞ美くし、若き日の榮は只之れあるのみ（評）

○落ちたる椿

京橋　夏清

あら、きれいな蝶々が一ィ二ゥ三ィ四ゥまあ幾つ居るのだらう、まあ美くしい花……私の好な千鳥草、あゝそう〳〵みいちやんは此の蝶々が好きだツたワ、オゝ是を持て行つたら嘸嬉ぶだらうれ……行こう……行こう今すぐに……私は美しい花園を何處といふあてもなく、恰ど花の香に醉ふたとてもいふような心地て歩いて居ると何處かて姉樣……姉樣……おや誰だろう此處には私より外に誰も居ないが……おや何ても聞覺えのある聲だワ……ふり返るとあゝ驚いた、それは思ひもよらぬみいちやんだ？「あらみいちやん私が此處に居るのよくわかツてれ」と云ても何故か默ツて居る。

「エみいちやんどうして此處へ來たの」……みいちやんは色白の丸顔て、目の大きい可愛らしい兒てあツたのが、今日は何となく淋しく見えるそして私が又重れて「どうして此處へ來たの」と聞へば叱れはせぬかというような顔附て目に涙をうかべて「あんまり姉樣にお目に掛りた

かなたおらよー』『おらみいちやんも君も子あんまり逢ひたかッたから今此花をもッて行うと思てた處よ」「ま、私の好な水蝶花……姉様有難う」といひながら差し出す其手にふれた時私は思はずゾッとした「何て冷い手をして居るのさ早くお家へ行ッて溫めて上ませう』『あら姉様もうお家へ行くの……私一人て淋しいワ後生だからも少し居で頂戴な……ネ』『だからさお家へ行けば父様も母様もいらッしやるから賑やかだわネだから早くいきませう』『だッて私母様に叱れるワ』『ま嫌なみいちやんネ何で母様がお叱りなさるものですか？さ云ふ事を聞いて早くいらッしやいれいゝ兒だからヨー」何といッても動かない私は少しじれきみて「何故來ないの……さいらッしやいッては……」

露さんどうしたの夢ても見たのかへと母様の聲「あらッ……夢なのれ……」何どもなしにふと床の間を見れば昨日母様が挿して下すッたばかりの椿が落ちて居た「嗚呼……何だか私もみいちやんの處へ行くのてはあるまいか……否あの花の樣に落ちるのではないだらうか……あゝ落ちたくないいつ迄も／＼……

凄いやうに書いてないだけ却つて凄い　（評）



熊野風俗　紀伊　稗田みつ子

◎ある日　京橋　花子

風がひどくッて、埃が絶え間もなくあがる。私はいま、銀座の角に立つて居るのだ、電車は埃りの中をギー／＼と音をさせて、往來して居る。若い女も、年とつた人も通る、學生も、商人も、みんな忙はしそうに、どん／＼と何か求める樣に歩いて行く、向ふから六十位いの老人がまるでつやのない死んだ人の樣な顔色をして、灰色のよごれた着物をきて、頭は、埃て白くなつてゐる、つかれきつた樣な風で、とぼ／＼と何か考へながら、わきめもせずに歩いてゐッた。私は烈しい都會の生活につかれたのだなと思つた。

またひとしきり風が吹いて、白い埃をあげた、その埃の中を、あの老人がぼんやりと、歩いて行くのが、うすくみえた。

ある夜

もう柱時計は十二時をうつた。私は本をしまつて、眠らうとしたが、目がさへきつてどうしてもねむれない。廣い八疊の座敷て、獨めて居るのは私きり、下てさはいだ音もやんで、あたりは、物凄い程靜かだ。しめきつたので心持ちが惡いから窓をあけた、夜の風がスーと顔をなてて、身にしむやう……前の家はみんな戸を閉めて、軒の電燈ばかりが、ぼんやりした光を、道になげかけて居る、空を見ると、たつた一つ星が……まるて眠つて居る世を守つてゐる樣だ。私は何と云ふ靜かな晩だらうと思つた。

微かながらも都會の香が出て居るから嬉しい　（評）

家庭日記



○規定　家庭を主として書いた日記文を云ふ實際的の日日の出來ごと又は心得となるべき事若き奧樣の新しい經驗談も宜し二十四字詰三十行限り半紙又は罫紙に認めること乙號の賞を進呈す

○薪を焚く記

（人賞）　大分縣　原田溶子

米を仕かけて竹くづの焚きつけと、枯松葉を程よく重ねて、さてその上に小さく割つた薪をのせてマッチをする事三度。けれどもたきつかないので附木を取り出して、紫の焔を見せて燃ゑ出した火をそつと焚つけにうつして、それからはれ物にでもさわる樣に用心して松葉を乘せ、やうやくの事で薪まで火をうつした。是てホッと一息ついたけれど、中途で消ゑてはならぬと云ふ心配があるので、母樣から笑はれるのもかまわずかまどの前につきゝりて、薪をいじくり乍ら火をもやした。心盡しの甲斐ありて火勢は盛に成つた、少し位水かけたつて消えそうにもない、これで安心と思つてる時御飯は出來てしまつた、

さ、火を引かなきやこげるよ。

と母樣から催促されたけれど、是程苦心してやうやく燃えつかせ、てんなに燃えさかつてるものを、ムザムザ水かけて消すのは忍びない樣な感がしたので、そつと吹いて見たけれど矢つ張し消えないので思ひ切つて灰の中に押しこんで消した。

何でもないことだが、感じが細かい、注意深いと云ふより、凡てが感情的だと云ふ方が宜らう（評）

○九死一生

（地賞）　鎌倉　湘南彩子

二月十九日

一寸したはな風だといふてゐたのが十日ほど前からから立派な肺炎と名がついて高い熱に苦められる愛兒の側に姑と夫と自分とよるひるねずの看護。

先生も大抵大丈夫てせうとおつしやりはするものゝ、きのふからは乳も呑まず親のかほさへわからぬ樣子。これてこんな具合て病氣が回復するだらうかもしや〳〵

あゝもしやもしもの事があつた時には……、

あらい風にもあてないやうにと三ッのけふまで夜ねる間さへこの子の心配ばかりしてこんなに大きくしたものを今更……それならなまじい生れてこなければよいものを……。そのやうなつらいかなしいおもひする位なら一層先へ死んでしまいたい、けれど／＼またよく考へて見れば後にのこつた姑上や夫に……。あゝもう／＼そのやうな縁喜でもない事よしませう／＼かんがへますまい思ひますまいと力なくかほをもち上げると今迄すや／＼ねむつてゐた病兒はまたしても苦しげにうめきだした。乳をもつでいけば口をかるくとぢてしまふ。おゝもうおむつのぬれた時間とそつとかけたものをはいてさわつて見ればまあ火のやうまた熱がてゝきたと見える。

そしてまあこの股のほそくなつた事、あんなにまるくむく／＼とふとつてゐたあの肉はどこへいつてしまつたのだらう、いそいで枕と水袋へ氷入れてあてゝやる。吸入の支度してゐると朝田先生の御來診脈をおとりになる。大抵先生のその御樣子でよい時と惡い時はわかる。首をおかしげになるあゝけふはわるいのかとかなしいおもひが胸をつくと同時に先生は鞄をさぐつて側の注射器を！　えゝまた注射？と先生のおかほを見上げると「可愛想だけれどいかにも脈がわるいてすからな！」といつの間にかえつていらしつた夫の方を御覽になる。「先生どうぞ願ひませうおまへは氣が弱いからいけないおまへがそばにゐてはいかんさあ奥へいつておいて」と夫のお言葉。自分はあとのみひかるゝこゝちに廊下てればおゝあのするどい針があのあばらまであらはれたやせた胸へ通つたのかワッといふ悲鳴氣もこゝろもそゞろ、いきなり病室の障子へ手をかけた。

三月三日　美しくならんだ雛の前ふだんいけない口に二猪口ばかりすごした夫のかほはあかく雛段の銀燭にはゑて見えた、萬死に一生を得た愛兒のけふはこゝろばかりの回復祝ひに招いた客はもうかへつて子供は自分の膝にすや／＼とねてゐる、のぞいて見て夫はあゝ千金にも替へがたいねとおつしやる。自分もうれしさが胸にみちてあふれておもはず涙を催ふした。

子を思ふ親心は誠に此通りです、若き奥樣達に御一讀を勸めます文章に衒氣なきは一層感動力を強うせしむ（評）

○輝子の日記

岡山　なぎさ（入選）

十一月廿五日、始めて鹽煎餅二枚食う。前齒が二本生えた。

十二月三日、毛絲で頭巾を編んでやる、桃色ので。そつと小指を握らせるとすぐ口へ持つて行つて、小さい

白い歯でかむ。

一月十日、だつこしてお風呂へつれて行く。まだ頸が据わらないので恐ろしかつた。うちでお湯をつかはせればよかつたものを。

二月一日、子守がみぞれの中でこけて來る。家中大騒動、お湯を沸かすやら衣物をぬがすやら、家の中がにえくりかへりそう、子守はゝぼんと青い顔して湯槽のそばに立つてゐた。

四月十九日、櫻の枝を持たして見せた。嬉しさうに上下へふり動かしてゐる。お母さんがもう百五十日からにもなるんだからと云はれる。何かこしらへてやりたいけれど、別に何も思ひつかない。

五月十三日、裸にしてかけて見た。はかりの上できやあ／＼云つて喜んでゐる。私は知らんからお母さんに尋ねると、一貫幾らとか云はれた。

五月十五日、私と二人で晴陽軒へ寫眞撮りに行く。寫眞の鉛板の前に行つても一向平氣で笑つてゐる。自分はひや／＼してゐるのにと思ふと羨しい。とても此子にはかなわない、と思ふ。

五月廿日、寫眞を取りに行く。あひにく主人は留守だつたけれど、愛嬌のよいお神さんが出して與れる。おど／＼しながら見ると、矢張かなわない。まる／＼と太つた手足を露出しにしたまゝの姿。私はと見ると、小さくなつて手を袖の中へ隠してゐる。

一切のむだを省いて、正味ばかりだから幾度讀返しても厭かない日記（評）

【秀逸】

○小さい蠶

下野　春枝子

みどり様から戴いた蠶を菓子折の中に粗糠を敷いて養つて居ります。夜は蚊や鼠をさけるため本箱の中に入れ、桑を朝晩私がやり、お晝だけお母様から下さる事にして居ります。

私はいつもの通り學校から歸つて見るとお母様が桑を忘れたのでせう。可愛さうに、蠶はカラ／＼になつた桑の上に半身をもたげ更に身動きも致しません。飢を訴へて居るのでせう。

私は無意識に庭下駄をはきました。つゆ上りの庭は木と云はず草と云はず活々して、ひなげしの耕に燃えて居る桓根の外からみづ／＼しい桑の樹が庭をのぞいて居ます。耕から濃綠に渡つてかけられた蜘蛛の巣の上に露の玉が置かれ房々と熟した木の實は、桑の葉隠れに美しうございます。

グイと枝を撓めるとさら／＼葉ずれがして露の玉がほろ／＼と。五六枚葉をつんで手を放すと枝は一寸かぶりをふつて又露が散る。桓根の内も外もそよ風が渡つ

てすが〳〵しう蠶は全速力で桑を平げて居ます。

（菓子折の中に養ふ蠶、何んなに育つだらうと氣にかゝる、文章は眞實を傳へて、少しも飾り氣がない、）

○菖蒲の生花

日本橋　佐藤萬壽子

五月二十八日

今日は不動樣の日だからきつと伯父樣が御出なさるだろう、又叱られない内にと午後通りかゝつた花屋をよんで白の菖蒲を買たけれどなか〳〵生からない、萬壽そんなにいつまていぢつて居ると蒟蒻のおばけみたいに成て仕舞ふよ、と又兄樣が例の惡口。

こうじやあない、あゝじやあ成かつたと一生懸命に忘れて仕舞た菖蒲の生法を考へて居る傍から何のかのとひやかすのでさらでもぢり〳〵して居る處をと腹が立て、姿が十八番の横向に袂を顏にあてゝ泣くまねをすると、いつもならそら始まつたと云てすぐ出て行くのに今日は平氣で、をや御機嫌が御むずかり遊ばしたどれ〳〵私が一ッ生て上樣かつて云ながら花を手に取た樣子に。兄樣にぼき〳〵折れては大變と、あわてゝ袂をからけて打つまねをしたら、おゝこわやのこわやのと、にげ出す腰付のお可笑さに思はず笑ッた、やつと一時間半計りて生終た處へ伯父樣が居らしつて、にや〳〵笑ながらじつと見て居被るので又叱られるのかともう胸がどき〳〵して心配して居ると、大そう上手だね伯父さんはこんな間違た生法は敎えなかつたつもりだが、とちくんと一針さす裁縫でつこう針でさしたよりは痛い、第一此の屑の差し方は何です、陰陽も何も滅茶苦茶じやあな



おしごと　豊橋　堀井はな子

いか、こんな生方をして置くと人に笑はれます、早く生け直して置きなさい、と云ながら出て行かれた、あゝ何日に成たらほんとに上手だと言はれる樣に成るんだろう。

文章に異分子のまじり氣の無いのが何より佳し（評）

○痩せたいと思ふ

横須賀　君枝

五月二十一日金曜。もう絲屋張替が出て來た、ほんとに、夏はいやだ、格好がよければよいが、此間も靜ちやんがきて豚の姉さんだつて、隨分ひどい、私だつて好いスタイルとは思つていないが、豚とはほんとにひどい、今度遊びにきたらリボンも何もやるまい、仲中村さんが夏向の髯はやしていらした、床に入る時お腹がへつて、仕樣がなかつたが、やせ樣と思つて我慢した。

土曜。夏休も近づいてきた昨日も一郎さんから夏休には是非につて御手紙頂いた、去年は海に入つたり、ピンポンして敗されて泣いたこともあつた、君ちやんは顏がしろいと、おしやるから、ソーつと鏡見ると、巾なんて、白粉つければ粉がふいてフランスパンの樣だとか、惡口許り私、去年と異つて本年は敗けないつもり、今日も兄樣から御手紙がきた、又例のことゝ思つてゐると小使を送つて下さいとある父樣は武雄は、ねだる時の外はがき一本寄さないとこぼしていらつしやる。

日曜。好い日曜だこと、どこへ行く人か、出ること〳〵私、人の出るとこ大嫌い、机に寄つて、女子文壇見ていると、又時鳥が鳴く、午後から、お洗濯して居ると半鐘がなる、平坂が火事だといふ、お休で陸海軍々人も職工もいるからと、安心していると、風は出る下の方では、大瀧町に火が移つたといふ、大變此地の銀座ともいふ町を殘らず燒盡してやつと六時頃消へた、此風に思ひの外早く消へたのも軍人のおかげと、深く感謝する、燒けた荷を運ぶ消防夫が馳ける、向ふの貸家が急にふさがる、母樣は火事考へると道具等いらないとおつしやる、方々て火事の話許り明日の新聞見てくわしく記しましよう。

ひやうきんな面白いことを仰やる（評）

○苗取日記

信濃　黑田直枝子

六月十日。バサ〳〵と土を落す音や歌の聲て田は中々賑はしい、弟は苗を鳥の樣に殘したり字の形に取つたりして面白がつてゐる、兄さんと私と苗のとりつくらをする、どうしても兄さんの方が早い、けれども兄さんの苗把はさう申しては失禮だが不揃て土もよく落ちてゐない「弘さん」（弟の名）どつちが上手にとつてあ

るか見て頂だい」と云へば弟はそりやあ姉さんさ、とエッコリ、取つた苗から後の方へだん／＼に送つてやる、水から根の出てゐるのや横に何把も重なつてゐるのやさかさまになつてゐるのやらたくさんたまつたので少し取るのをやめて兄さんと私とて苗把を本田に運んだ、後には一把も殘つてゐない、取かけの苗は島の様て、まろくとつたところは入海の様、靜に吹く風に水の面が波立つて畔の横をかろく打つてゐる。

六月十一日。腰が少しいたい、兄さんは内から石油箱の古いのを持つて來てそれに腰をかけてさも樂そうに一心に取つてゐなさる、弟は、兄さんはあんまり樂をしてゐるから今にきつと困る事があるよ、などゝからかつてゐる、さう云ふ弟も今日苗取にあきたと見えて只苗間の中で面白い事をしては遊んで居るばかり、たまに兩手に苗の先をつかんで本田へ運ぶ位のもの、それでもみんなと一所に働いて居るつもりてゐるのがいかにもおかしい、私は兄さんにまけずに取つて見たが腰がだん／＼いたくなつて其上もゝの邊もいたい、ほんとに水の上でもいゝから座りたくなつた、二把とつては腰をのばし五把とつては身をそらして、ふと兄さんの方を見ると、箱がだん／＼水中にはいつて今にも兄さんのお尻がぬれそう、悪いと知りつゝだまつてゐると其中に「あつ冷い」兄さんは取かけの苗をもつたまゝ立上つた、弟はそれを見て「兄さん樂は苦の種とはその事てせう、」思はず大笑ひをした。向の田に居た人も笑ひながら見てゐた。

田植頃の田園生活、觀る如し（評）

○犬

神田　三好富久子

六月二日、朝からポチが、何處かの毛色の赤い、穢らしい犬をつれて來て、庭で轉るやら、呻吟るやら大騒ぎ、折角の植木も何もだいなしだ、十時、千代子様の許から、御手紙が來た――先月御姉様が御嫁し遊ばしたとやら――早速御喜こびの御返事を出す、晝から、昨日縫ひかけの、被布を縫ふ、袖を附けてしまつて、綿を入れてると、又悪戯のポチが來た、さあ大變と思つて居ると、隠れる間もあらばこそ、私の顔を見るが早いか、矢のやうに飛んで來て、尾をふりながら、穢ない足をして、奇麗な被布の上へ、どん／＼乘つて來る、いけないねーつて、下ろしてやると、今度は、物尺をかじり始める、それを取ると、絲巻をくわへる、ほんとに悪戯つたらありやしない、餘り五月蠅から、一つ打つてやつたら、急に温和しくなつて、犬のくせに大きな溜息をしながら、可笑しくて／＼たまらなかつた、夜、謡の羽衣を一つ復習つて、十時床につく。

犬の溜息はよかつた（評）

◯僻地の郵便局

肥前　川野穎子

四月十日。今日は雨が降るから局務もひま、女子文壇を出して見る、一寸と聲を掛る者があるから窓口をあけて何ですと云へば、郵便紙を一枚おくれと七十位の爺さんが云ふ、郵便紙つて端書だらうと思つてはがきですかといへば、やつぱり郵便紙、困つて了つて切手とはがきを出して、どちらと聞いたらこれとはがきを取つて一錢にしやすらう、い丶え一錢五厘、聞えないのかずん／＼行つて了つた。

十二日。二圓送つて下さいといふ、まだ時間に早いがと思ひながら貳圓と書く、爲替劵を女に渡すとぽすとに入れて了つた、封筒にも入れず受領證もつゝけたまゝ無集配局の事とて鍵はなし開ける事は出來ぬ。

十三日。午前八時頃書物にはつてあるやうなこまか紙おくれつて尋常二年位の小學生がいふ、三錢切手をやつた、おとゝいのお爺さんと好一對だと思ふ。

此く一日前にはあるが、なるほど田舍の郵便局はこんなものかと驚かれる（評）

◯齒痛日記

岐阜市　篠田とみ子

七日、昨日今日左の齒齦が痛うてならぬ、世の中を夢心地にうつら／＼して居る、お父樣が齒は大事にせよ、無くなると難儀がながいからなあ、と仰有つて下すつた。

八日、早くから眼がさめる、暗い蚊帳の中で、自分ひとり兩手で兩頬をおさへて、どうしても左の頬がはれて居るような心地がする、起きようとしたら、ガタツ、といつて其痛い事、頭へ針でもつきさしたように感じられて、どつと又枕の方へうつぶしたとたん、涙がほろ／＼ツと出た、そうと抱へるようにして床を離れた、楊子に出したてのライオン齒みがきを思ひきりつけて、痛い處へちつとなすりつけたら、ひり／＼する、首筋へ手をやつてみるとくわッ／＼と熱して居る、神經や筋肉が引きしまつたのかしら、鏡で口中をよく／＼みたら、左の奥の齒に空洞がある、その邊があかくなつてはれて居る、母樣にいふと親知らずといふ齒が生るだんと仰有るけど、八百屋のお仲樣に云ふたら智惠齒だと言ふ、どつちも當らぬといふて笑つた。

夜分來客があつておつき合でお芝居見に行つた新愛知の老公爵、醫はよく揃つて味いけどどうも齒いたて氣がうき立たない、一寸した事にも涙が出て。

◯鰹のあんかけ

岐阜　田中政子

六月十日、下女が魚屋が參りましたと云ふから出て見る、さあ心配なことが出來た、御母さんがるすだから晩の御父樣の御肴をどう仕樣、幸い鰹が有るからあれを餡かけにしてと、思て少々切らせて置く、一寸用が片づいたから、縫物にかゝる。

かくて今日も夕方になつて、妾の留守番の役目もも少して無事にすむことになつた、早目に晩の仕度にかゝろ、鰹を買たが餡を拵へた事が無いので何んでも御母さんのする通りにしたらよかろうと思て鼠入らずの引出しをあけると、中に紙袋に白い粉の入たのが有たから、葛だろうと考へて早速水でといて拵へると旨し相に出來た、大自慢ではめられる積りで膳に付て置くと、御父さんは御らんなさつて、御前が仕たのかと仰りながら、一寸召上て變な顔なさるから、何う仕たのですかと聞くと、何て拵へたと問はれる、吉野葛でと答へると。之は葛じやない、御前がまちがつたんだ、糊だと言はれる、妾、びつくりして失敗たと思たが仕方

お無いから、捨てます、今夜御母さんお歸て、お歸けと、きかれたら、

○母がはり　　芝　鈴木花子

六時半頃父は會社へ妹達は學校へ行く、又今日も一人で留守番、入梅には三四日しか間がない、今の中に辨丼や寢卷のせんたくをして置かう、一人で三人分も四人分も洗ふのだから大變だ、十時髪結を呼ぶ、銀杏返の根が下つたので何だか氣になる、矢張り學生よりは銀杏の根お高い方お似合ふ樣に思ふ、戸棚行李を片附け冬物と夏物とを區別して置く、漸く一安心、午後から縫かけの着物を出して皆なの歸らない中に仕上て仕舞はうと精を出す三時頃漸く仕上げ、たゝみ付け樣とする所へ妹達が歸つた、オヤ姉さんの髪がいきで丁度御茶屋の女中見たいだわと中の妹が云ふ、中の妹は何でもよく氣がきく、上の妹と割り合せたら好いと思ふ、三人して學校の話、宮川さんはすましやだとか、山崎さんはヘイカラ、西澤さんは氣取やだとか、思ひ思ひに噂する、あまり面白い事云ふので思はず吹き出した、本とうに皆なは氣嫌れーと云へば上の妹が今から其んなに苦勞してたまるものですか、學校の勉強で沢山よ、人生わづか五十年、十八九から苦勞してごらんなさい、三十位には白毛のお婆あさんになる事よ、私未だ十二三の子供のつもりよ眞事其のつもりにといつもこんな面白い事を云つて人を笑はせる九時父御歸りになる直ぐへだてない父子同志で食事私は後片附、父は新聞妹等は勉強、八時頃には一同茶をのみがら雑話、この時が一日中で一番面白い、妹達は吾劣らじと理想をならべる、斯くして九時頃寢るのが常である。



おつかひ　靜岡　鈴木ます子

○鰊のとれる日　　樺太　敏子

手ぐすれ引いて待つて居る甲斐が有つて、父樣も彬樣も籠に一ぱいの鰊を重そうに擔げて汗を拭き／＼歸つていらした。十二時に四十分前、私は一寸外に出て張板を返して置く、籠の鰊を桶にうつして數えてみた、父樣が十五疋、彬樣が十三疋、合せて二十と八疋、私は急いで襷を懸けて研ぎ澄した庖丁片手にお料理にかゝろ、大きいのから撰りに撰つて十三疋、ぱん／＼はれるのをやつと抑えて皆んな三枚におろして仕舞つた、まだぴり／＼動いて居るのがある、まあ随分性が強い事とこぼしながらおろし

た身をまた三つ宛に切り放して、五合のお醤油のはいつた瓶にとつぷりとつけて仕舞つた、これで晩の鎌倉燒の仕度は出來た、て早速のお晝の間に合ないので、殘り十三疋を脊割にしてうすく鹽をして鹽燒にした、天然の美味を損ぜずおいしい〳〵と一同舌鼓を打つた、お陰でおはちは空になつた、後仕末を母樣にお願して私は外に出た、張板の布がすつかり乾いて居るのではがしゝ仕舞つて皆んな裏地と張りかへる、これで三度目、よく乾くので嬉しい程はかどる、はがした裏をふはりと肩に掛けて家には入ると、これご覽、今小使が持つて來て呉れたのたよつて仰しやる、見れば大きな桶の中に一ぱいの鰈、まるで鰈攻めだ。五時頃から晩の仕度にかゝる、御飯を焚いた火をすぐ七輪にうつしてないて瓶の鰈を火に上げて一々串にさす、お醤油がしみて身がきつくりとしまつて居る、ずらりと串を並べて火の上に置した、赤く透明つて何ともいへぬ美麗だ、やがて一齊にじゞと油が出る、にじみ出た油が一つの雫となつてポタリと落ちる、パツと燃ゑ上る。黒燒にならないやうにと氣を揉みながらやつと燒き上げた、今度はお醤油をつけてほんの乾く間一寸あぶる、こんな風して皆んな二度宛くり返して鎌倉燒が出來上つた、端の方を少しかいてお挨拶をする、頰が落ちそうだ、これで晩の仕度はすつかり出來上つた。赤い夕日は隣家の窓を照らして居る。

○煤拂ひ

甲斐　網野やす子

起きて外を見るとゆふべの空はからりと晴れて庭先の露を帯びた牡丹の蕾に先ず目を覺した。もう、隣家の方では隣の眞さんや作兵衛爺さんの高聲が聞える。

朝飯をおわてゝ、家、、皆もう大騷ぎで家の中の道具を庭へ運び出す、運び終つた時は丁度十時、一休み仕樣といふので四つ茶とか何とかいつてお隣から見舞ひに頂だいたお饅頭をいたゞく、顏や手は汚れて居ても矢つ張り美味しかつた。今度は私は外で疊をたゝく役となる。美ちやんは眞黒な達摩さんを轉がしては嬉しがつて「母さんご覽よ、姉さんご覽よ」といつてもなか〳〵母さん振り向きもなさらない、私もわざと見ない振りをして居る。美ちやん可憐そうに佗び顏をして達摩さんを抱いて家の方へ轉げていつて仕舞つた。必然お隣の八重ちやんと遊ぶのだらう。六時頃に漸く片附く、それからお湯に這入つて奇麗になつて一同夕飯の膳に向ふ。

何時も小言をいふ美ちやんが今夜は默言つて食卓盤の向の隅で時々皆の面白そうに談話する顏を上目で見乍ら大人しく食べて居る。母樣は初めてそれと氣がついて「オヽ美ちやん其處に居たのかへさお母さんの傍へおいで」と仰有ると美ちやん急にご機嫌に成る。又一し切り煤達摩の話で大笑ひ、美ちやん非常にご機嫌になつて仕舞つた。おや十一時がなつた、さあ床に就きませう。さなくても眠り坊の私、今夜は殊によく眠れるでしよう。

○料理日記

京都　小　葩

五月廿二日、土曜日。學校から歸ると二時、昨日縫ひかけた單衣を仕上げたら四時になつて終つた。今日と明日とは私の料理番だから夕方のお菜の仕度しなければならない、遅くなつたから世話なしの物にして置こうと戸棚を見たら玉子が在る、包み玉子に定める。玉子燒を七輪へかけて、ベタかヘットを使ふのだけれど無いから胡麻油で間に合せて置く。油が温たまつたから玉子を靜かに割つて落し、黄味を壞さない樣大事を取つて轉げてゆくと、駄目黄味を壞してしまつた。二つ目を割つた今度は壞れなかつた。白味で四方から包む。三つ四つと拵らへてゆくうち、やつと能い格好に出來た。ソースをかけて食べる。

廿三日、日曜日。今日は家中揃つてるから何か變つた物が能いと、此間叔母樣に伺つた、落花生豆腐を拵へて見る。最初白胡麻を煎つて擂鉢で能く擂る、其間に靜ちやんに落花生の皮を破つて貰う、一升在つたのが實計りにしたら二合程しか出來ない。「靜ちやん貴女食べたのぢやなくつて」。と問いたら「うそよ食べやしないわ」と云つてるが大分少ない。足りないかも知れないけれど一緒にして擂る。中々潰すに骨が折れる。十分の餘もかゝつて漸く擂り上る、今度は水を少しづゝ入れて堅めにといて裏ごしにかけたが能い工合にこせない、母樣に手傳つて頂いて何うやら斯うやら殘らずこせた。其れからぶりき鍋へ入れて蒸にかけた。蒸してる間、大急ぎて煮出しをとる。暫くしてお釜のふたを開けて見たら少

し濃し過ぎた様だ。倉皇てゝ出して水に浮してきます。初めてだつたので少し堅い様だつた。小口から二寸四方位に切つて山葵の口で煮出しをかけて出した。お父様も母様も大そう賞まりして旨しいと仰つた。

○初旅日記

岩代　吉田きち子

四月十五日。昨夜早く床についたのにもかゝはらず、ふと目が覚めた、生れてから初めての旅なので、何となくうれしくて眠れそうもないから、そつと足音のしないようにと台所へいつた、未だ誰も起ない、何時頃だろ…外は明るくなつて居るの に と独言云ひながら御飯焚きに取かゝつた、何處かで鶏がないた、まだ鬧ても起ないらしい。何だかこう淋しい様な氣がするので早く出來るようにと火ばかり見つめて、今夜は何處へ泊るのだろ―どんな所を通るのだろうなんて、とりとめの無い考へをして居たら、鉄にパチ〳〵と、はじけ立てもいる様な音おや何だろうと外を見たら、大變な大雨、今迄の想の種も皆消えて終つた、何うしても晴れそうもないので、御飯の火を引き次第やめた、何と云ふいぢが惡いんだろ―昨日なんてあんな良い天氣だつたのに、急ぐ旅ではないんだけど何となく早く行たい、姉様も起たらしい「何あになに、是ばかしの雨今に晴れるから、思ひ立つたが吉日と云ふもの、仕度なさい」と云はれるので、やつぱり今に晴れるような氣持もするので出發する事に決めて母と共に御飯を食べて、午前七時十分に雨の道を出發した。

十六日。昨日の疲れに、ぐつすり眠るつもりだつたがやつぱり駄目太陽は東の障子に寫つて居るけれど母様も眠つていらつしやるし隣の客も眠つて居るらしい、いろ〳〵考へたが歌などは浮ばないしするから洗面に行こうと立たうとしたが今度は足が動かぬ、漸くにして隣との襖の端につかまりながら立つた、恰二三才の子供の歩き初めの時のよう、全身に力を入れたものだから、ぴしつと音がして室中が動く、隣の客に迷惑を懸なかつたかしらと思ひながらそろり〳〵と一足づゝ引ずつて行つた、宿の女も今起たらしく目をこすりながら、お目覚になりましたかと、何時頃でしようと聞たら、今しがた四時を打ちましたつて未だ起きるには間があると思ひ室へ入て日誌をつけた。

○小雀日記

府下　木原英子

六月三日。「姉ちやん姉ちやんいゝもの取つたよ」と昨日から遊びにきている従弟の武夫やつと六ッになつたばかりの可愛いもみぢのやうな手に小い箱を大切そうに抱えてゐる「それ何！」といつて覗いて見ると生れて十日もたゝない小雀まだブツ〳〵と赤い皮が表れて羽根も二三枚しか生へていないのが三羽。一寸見てもいたいたしい。「マア可愛そうに親がさがしてることよはなしておやりなさい」といつたら武夫は泣き出しそうな顔して「だつて姉ちやん折角取たのだものいやだ」といつて離しそうにもない。折から親鳥であろう二人をみて哀を乞ふやうにチュー〳〵と啼き乍ら軒端へとんで來た「あれご覧親がきましたから早く御庭の木へ巣箱を載てお上げなさい」といつたら小い武夫もその親鳥を凝と見てゐたが急に走つて行つて松の木にのせた。

六月十二日。親鳥が御庭へ來て餌をはぐくんでから十日目だ、一昨日からやうやう一枚位ひとべるやうになつた、今日はもう巣から下へおりることができるチユー〳〵と可愛い聲はまるで幼子の片ことのやう。親は何かおさつては子の口ばしにツゝき入れるいぢらしさ。親子の情もこうかとつく〴〵父母の恩を感じて思はず落涙した、午後武ちやんが來た、可愛小雀を見て「姉ちやんかはいゝなー」と云つて悦んでゐる「武ちやんどう此間あのまゝ御家へ持て入つたら今頃は土の下で恨んでゐるでせう、あの時云事を聞て下さつたので今此様に可愛のが見られるのよ」といつたら武ちやんも「あゝ」といつてみてゐる、小雀は何も知らずにチユーチユーと武夫の足もとへきた。

（八月十六日）遊殺をしてゐた宗次が頭が痛いと言ひ出す、雑誌へ投書を書きかけてゐると、湯へ這入れと言ふから、湯へ這入つた、飯を食へと言ふから飯を食つた、隣家の牛乳屋の親爺が釣つて來た鯉の汁と今日魚屋から買つた甘鯛の焼いたのとで膳は賑かだ、今日叔父と一緒に花を活けながら、仙臺萩の茶なのが、この間新町の祭済て食つた菊の菓子によく似てると思つた。（小山内薫氏「蝶」より）

和歌

與謝野晶子選



○（天賞）　信濃　藤澤さと子

百人の男子の來りて手捕へぬいぶせき髮を切らんとすれば

○（地賞）　伊賀　岡　花子

少女てふ名のみ賜ひてよく笑ひよく泣く性のよさを賜はず

○（人賞）　香川　子松さと子

走らむと心あせれど走りえぬ夢の境に今日もあるかな

【秀逸】

○　越後　吉田かをる

白き帆に涙ながして君立てる船なほ見ゆる夕月夜かな

○　小石川　海老澤得子

せめてもの慰めごとを賜ひたる日は嬉びぬ底にわびつゝ

○　近江　小倉壽榮

夕まぐれひぐらし鳴きぬ山里の寂しき姉をわが思ふ時

○　沼津　牧野あい子

大海の廣き眞中にわれ居りて沈むを待たず浮ばんとせず

○　伊勢　小宮いと子

夏の夜は髮に涼しく風吹きぬ君の上なる星や生みたる

○　和泉　金田香雲子

朝顏の赤と紫交り咲く垣根に立ちて君を思ひぬ

○　本郷　菰田文子

他は知らず戀の獄に囚はれて御像ゑがくこと覺えける

○　伊賀　山村龍子

大方の男は戀をなぐさみにするとし聞きて悲しくなりぬ

○　秋田　小原あき子

此涙地に沁み入りて亡き母のおん頰を濡せ我泣き居りと

○　上總　龜田美園子

山櫻淡紅にして曉の鐘つく度にこぼれちるかな

○　岐阜　大野あやめ

もの盜む業は拙しみ心の輝く玉を得むとあせれど

○　やなぎ女

○規定　別に新派舊派の名稱にかゝはらずと雖も成るべく清新の作を迎ふ一人一首限りにて必ず半紙又は罫紙に認むること一人にて二首以上ある時は沒書とす丙種の賞を送呈す

誰が爲ととひます君の憎きかな我を隈なく知るてよ今日に

○ 群馬　岩田せき子

空なべて涙うつろひ黒髪の亂るゝ樣に秋の雨ふる

○ 愛知　加藤眞佐子

暗き夜や大地の底に湧く水の音としも聞く幽かなる音

○ 信濃　秀枝子

黒髪の香ないとふてふ五人の男の歌はけものゝ如し

○ 北見　ひて子

誰か來て此胸裂きて若き血を流すを見むと思ひぬ今は

○ 青森　遊蝶花

病せる女の吐息なす如き音して落ちぬ白藤の花

○ 小石川　栗村かつ子

小夜更けて訪ひくる人もなき時にうれしきものは君が水茎

○ 奈良　山崎安子

大和路や故郷へ歸る旅人に京の様聞く夕雨の宿

○ 大阪　今西はるえ

いさゝかの悲しみにさへ胸いため唇をかむ子となりしかな

○ 岡山　高木清子

來む世には何にかならむ我はたゞおんたなぞこの玉とならまし

○ 下總　篠原文子

大根の土を洗へる少女子に野菊の花をやりて來しかな

○ 喜惠子

其の日よりさはわざとげに彼の君は紫の傘かたむけてゆく

○ 牛込　佐藤いつ子

初夏の草生がくれに我一人君待つ空に虹のたつかな

○ 秋田　佐々木萬子

なつかしき君がたまひし文見れば涙さへこそこぼれおちけれ

○ 札幌　森山彰子

亂れ髪櫛けづらして門に立つ少女子戀し春風吹けば

○ 安房　安藤良子

水汲みてやすらひ居れば杜かげを白百合つみて言のこし見ゆ

○ 信州　岩波花江

いと靜にそむけ給へる君が頰の色にもにたる紅そうびかな

○ 日本橋　吉田さく

さまざまの世渡りも見ゆたそがれの橋の上ゆくゆく春の人

○ 日暮里　細谷鏡子

若き子の胸の血潮に似たるかな色こそ燃ゆれ緋牡丹の花

○ 紀伊　蒼生枝

春雨のふりしきる音のさびしらに夜は更け行きぬわれ物思ふ

○ 神田　佐野芳紅

青き蛇夏のさかり野のはての泉求めにさまよひてゆく

○ 長野　山口破魔子

木の隙の蓬の上にねぬれども日ぐらしなきてまどろみ兼ねつ

○ 豐津　赤田すみ子

淡かり舟靜かにゆれてつながるる柳の枝に夏の風ふく

○ 麴町　大村しづ子

小流れの水あまたたびおりのぼり小ぶな追ふ子に夏の風ふく

○ 京都　紫花

つかれたる我が眼なるかな夕づく日赤きを見ては頭わななく

○ 京都　伊藤初瀬

山里にのがれし今も君はなほ我まつの戸をたゝきぬ夢

○ 横濱　みやこぼし

吾が君のみ旅こめし玉かなをひもとく宵の春の雨かな

○ 牛込　山下靜代

涯もなき空行く如く君思ふ心なりけりときにさびしき

○ 青森　西村みや女

若うして無になやめる少女子は夕月夜行き涙こぼしぬ

○ 稲井　やまざと

戀なるや否やを知らず逢ひ見ればうれしかりしか君もさなるや

○　岐阜　傍島小枝子
ま白なるあひるのむれは列みだし池上り來ぬ夕立の雨
○　岩代　冨田千代子
入りかゝる三日月の影ほのくらく森のかなたに時鳥のなく
○　伊勢　小宮あさの子
我性は例へば蝶の舞へる如よろづを忘れ君をしおもふ
○　宮城　杉田うめ子
水かれてまつも久しき小山田に足るまでふりぬ夕立の雨
○　山城　山田幸子
返す浪寄せ來る浪も懐しや三年わが見ぬ古里の海
○　鹿兒島　青松砂子
床の間に今を盛りのさつき花すえてめづなり限りなきまで
○　千葉　花馨
笑回して話好みし妹をしのばん清き白薔薇の花
○　下總　野菊子
夏草のつゆにうつれる月かげは葉ごと／＼のほたるとも見ぬ
○　沼津　渡邊とよを
あまた居れど我は深山にひとり居のそれにもましぬ君いまされば
○　名古屋　千枝子
にれの木の葉かげにきゝし君が歌思ひぞいづれなつの月夜に
○　下谷　田代房尾子
白き糸一つとらへし里の子が持て走りきぬ夏の風吹く
○　熊本　金子片枝
わが聲よふとのこゝろのまどひにもいひて見よがしにくき人の名
○　姫路市　永田喜代子
語り得ず忘れも得せぬ我胸のなやみに似たる五月雨なりや
○　西多摩　三ケ島よし子
あめつちのあらゆるものにことよせて歌ひつくるばゆるされむかも
○　牛込　平塚白百合
山間や夕立過ぎて一つ家の屋根草青き七月の夏
○　美濃　加藤芳子
風薫る青田の海の葉の沖に見えつかくれつ白き帆ゆく
○　山形　君子
白百合の千里四方の花園を戀衣着てさまよひしかな
○　兵庫　笹舟子
海死して島も默すか怖ぢし我水銹し石に面伏せて泣く
○　遠江　鈴木こぎく女
花散りぬ小雨する日の淋しさに戀する胸を抱きて寝ぬ
○　大阪　鹿島綾子
罪の世に魔の誘ふを拒み得し強き心を我誇り居ぬ
○　大阪　谷ふじ枝
君を戀ふ我は眞夏の晝の草情の露をそゝげかしとく
○　神奈川　角田千代乃
君が手の乳兒は優しく微笑みぬ軒端の鈴のいとも涼しき
○　讃岐　小野定子
まどろみしばかりを明けしなつの夜の枕かはかず君をおもへば
○　麻布　花子
その笑顔やがて我が身をさそひゆき魔の住む沼に沈ませむ笑
○　兵庫縣　田村竹翠女
花散りて小雨する夜の我心遠方人にせちに走せ行く
○　秋田　萩原とよ子
青葉蔭庭の桂に二つ三つかはせみとまるかたちをかしき
○　京都　寺井芥子
雨の朝姉と見ゆるが妹の手を引き傘をきせつゝぞゆく
○　東濃　花井靜子
白百合の華をすりて戀少女文書き居れば螢飛びきぬ
○　府下　木原英子
若き血は再びもえぬそのかみの忘れな草のうす紫に
○　大阪市　河盛よしの
晩秋の一里がほども人見えずそぼふる雨に稲の穂ゆらぐ
○　鳥取市　桑本きさ子
たはむれを言はぬ日の我心をほしきさせる君みよくみぬ

○ 茨城　野島里子
飼ふる鳥は愚かなるかな偽りも眞實と思ひよろこびてゐぬ
○ 奈良　中富よしみ
人の世のかたき誓ひとゝりし手に露ぞ冷たき初夏の森
○ 淺草　わかば
春の夜のおぼろ月夜の花かげに歌思ふなり我とわが友
○ 清國　重長孤女
逆事をおもひしれどもかなしきは昨夜見し夢の別れなりけり
○ 茨城　鯉ヶ谷國子
己が身のいのちを思へば何となくあつき涙のほにこぼれける
○ 釜山　富迫ろしふ子
御前にまなこ涙れよさらば吾み手に縋るをゆるしたまはん
○ 金澤市　悠々子
雨あがり土の香いきれ石あつし遠雷もほのかにきこえて
○ 横須賀　和泉咲子
わが友の靈はいにぬ初夏の風に今日さく紫陽花のはな
○ 上總　森蓉美
今日も亦北行く雲を眺めつゝ都戀しと思ひて暮れぬ
○ 加賀　勝崎菊子
五月雨や花ふさおもき紫陽花のなかをなゝめに白き傘行く
○ 高岡　篠原みゆき
白鳥のひとむれ翔ける形して北にながるゝ夏の雲かな
○ 岐阜　日野淑子
君よべば寂しくなりぬ靈もなほ暗き森かなにこだまする
○ 土佐　桃の花
ひなげしはいと花やかに笑み初めぬ戀せる君のくちびるの如
○ 小石川　松原ゆき子
命ある弱き我が身の不安故もだして空の星數え見る
○ 日本橋　川尻とみ子
歌舞伎子の繪をのみかきぬ我父のけふも家へは歸り給はず
○ 牛込　佐藤いつ子
わが君にあはんと通ふ野の末に小百合一本人に似て立つ
○ 韓國　富永濟子
舞姫の手振して行く橋の上暑き秋を涼風のふく
○ 豐後　吉良靜子
われ死なむ君が愛でける白百合とはかなき戀と二つ抱きて
○ とみ子
濃き熱き思ひをつゝみ我魂は終日君のほとりさ迷ふ
○ 靜岡　杉山よう
逢ふ時は我が喉元に寬來りて云はんとするも云ひ得ざるなり
○ 尾張　廣瀬かなえ
晝は飯養は畑野の中の一家に住み時鳥きく
○ 埼玉　青葉女
君こむと思ふ心はかしましき虫の聲さへ心憎かり
○ 尾張　榊原卍田
朝雲と笑はし人を夢に見しうつし心は歌もなされど
○ 札幌　杉紫女
行き過ぎし佳の春のやさしさを見し夜の月のわすられぬかな
○ 栃木　しのぶ
わが耳に君は口あて云ひ給ふみ胸のとぼそよく開きてよ
○ 鳥取　安木春子
雨を呼ぶ蛙に熟睡さまされぬ雲低うとぶ眞夏の白日よ
○ 鎌倉　上原露葉子
青すだれわかきをみなの透影に月影にじむ水ちかき家
○ 鎌倉　白井綠風
島の秋流人の子らの青き頰にしばしほてりぬ夕日のかげは
○ 佐渡　臼杵さだみ
日もすがら舷に碎くる荒潮の響ききつつ歌ひぬわれは
○ 奈良　白ぎく
御手とり別れを惜む夕暮を小雨そぼふり時鳥鳴く
○ 若狹　津田たき子
たゞ一人穴ふかやかに鑛ほると暗きにいりぬ心の坑夫

大阪　吉井都留子

○今日もふと亡き母君を思ひ出て涙ながらにみ歌誦しみぬ
伊豫　鈴木ゆう子

○嶋々は二日の雨に洗はれてみどり美くし初夏の朝
茨城　寺門に子

○春の夜や波路五十里佐渡出てし黄金積む舟港に入りぬ
伊豫　浮草

○ふるさとを忍ぶも嬉し卯の花の垣に身をよせ夕月を見つ
神戸市　落葉子

○我が上を一たび過ぎし紫の理想の雲よ何處に消えし
下關　阿多良子

○何者か我が肩に笑む心地して榕のもとをたちさりかねつ
千葉縣　吉井光子

○綠草今の盛りも夏のゆめ秋過ぎて見よ冬の枯草
兵庫　祥子

○夕月の涼しき光り背にうけてかはづのうない蓮の花舟
信濃　ほとゝぎす

○運命ぞとつよくいひてはほゝゑめど一人ありてはなみだ流るゝ
鳥取　桑澤敏子

○冬の朝綠子背負ふ姉君のおもかげ浮び涙ながるゝ
本郷　千とせ

○三度迄御名呼びしと姉君に今朝かたられて胸とゞろきぬ
茨城　日野秀子

○いつしかと春の日數も過ぎ行きて海邊こひしき夏は來にけり
和歌山　木澤てる子

○露おもき秋海棠に風たちて星の影散る曉の庭
宮崎　津曲とし子

○わけ入りてちらすも惜しきばらのはなまはりみちして行きすぎにけり
大阪　西戸政江子

○淺ましと知りつゝなほも淺ましく死なば願はぬ淺ましき人
島根　白百合

○乳房を索るち子のやは手を頬に當てて獨り我身の思ひに泣きぬ
水戸市　島田かつ子

○折々は小百合の花にたわれつゝ風なき庭に舞ふ胡蝶かな
府下　吉田翠ゝ

○浮雲の樣にも似たるおん君の心を思ひ涙して居ぬ
紀伊　白萩ゝ

○見てあれば紫となり紅となり微笑むに似る夏の夜の星
紀伊　浦見むつ子

○若き胸薄紅色のうすものにつゝみ給へるわがおもふ人
紀伊　榎本千鳥

○一條の髮も亂さで何事にあこがれて居し昨日のわれは
水戸　黒見綠雨

○夏ふかみ繁る草むら風ふけば水なき野邊に波ぞたちける
紀伊　三栖鶴汀ゝ

○ふと思ふ君をまつ日の花の殿夢の柱の冷たかりける
伊豆　白百合

○憂き事の折り重なれる心もて暮れゆく雲を仰ぎみしかな
下總　篠原はつ子

○君故に朝またきより咲き出てぬ口あて給へ朝顏の花
岡山　末松敏子

○水盤のあと幾度と數みかへし燈ともし頃を知らでわれ居ぬ
熱海　土屋さゝ川

○別れ來て心やすしと思へども何とは知らず涙こぼるゝ
三重縣　八重子

○鉢植ゑの數はあれどもとりわきて緋の花柘榴を床におくかな
本郷　西山かづ子

○來世にはまたもをみなと生れきてあくまで戀はんつれなき人を
神田　三好富久子

○吾が胸の今の愁ひにくらぶればその日かの日は樂しかりしよ
信濃　東條周子

○やさ少女細きかいなにすだれ卷き夏の月見るおばしまのもと

○姉君の病み居給へるまくらべに細き光りの豆ランプ暗く　信濃　坂本姫

○世をすれて人をうらみて獨居のわれにも咲くかおしろいの花　品川　柳澤ゆかり

○高殿に簾かゝげて月をまつ姫達ゆかし初秋の宵　茨城　るゞなみ

○今日見れば鏡かなしき我がやつれ笑顔うつせど只に淋しき　阿波　四野ひさし

○くれなゐの花びらの如き何ものか我が胸のうち渦まきて舞ふ　下關　山本榮子

○蜩の鳴く聲はたと今絶えて低うもれ來る暮の鐘かな　常陸　松本起美子

○わが君よいざいこひませ今くみし山の清水もつめたくあるに　丹波　鹽見喜代子

○限りなき悪を包む我なればいまだ樂しき夜は知らなく　新潟　原みゑ子

○夕風に友禪の袖吹かせ行く人の姿を美くしとみし　千葉　菅沼しげ子

○わだ中の島より島に橋かけて渡らまほしき春の日にして　播磨　藤井柏

○月白く一すぢ光る水の面に雁とび行や秋の湖　秋田縣　白萩女

○夏の道レールに眠る晝顔の花にそぼふる雨のすずしさ　横須賀　白井とき子

○鏡とれば人に戀して泣く吾れのやつれ果てたるほゝゑみ哀れ　大阪　照仙花

○み佛に手向むものと立寄れは我手を刺しゝ鬼あざみかな　野菊

○戸によれば寂しき庭に聲ありてわが名を呼ぶやおぼろ夜の月　福井縣　明星

信州　野中たけ子

○身はとけむ君がみ胸の暖き血のわが胸にしみ入らむ時　常陸　大岡久千代子

○今日かくてわれあらむとは去年の春夢にも眼には見えざりしかな　弘前　川村露子

○ほとゝぎすひとり目さめてはかなくもつかむおもひにうちまどひある　岡山　伊原木芳子

○君が家の軒より落つる殘すじを涙とおもひ慰めて居ぬ　長岡市　岸初子

○吾が望みあゝ古りしかなけふの日も想ひてつひに空しく暮れぬ　韓國　原登里子

○愚かさを悔ひぬ冷たきおん胸と知らで戀にしわが愚かさを　横濱　北原仙子

○初夏の風かよふなる朝の杜早百合探して歌思ふかな　松江　寺本みどりば

○心して浮世渡れとなき母のさゝやぎ給ふことのたふとさ　本郷　萩野茂登子

○姉君の京のみやげの玉くしげくやしれずみにあなはかまれし　岐阜　鈴村春江子

○姉病むを吾よもすがら見守りぬ細り行く灯に燈花散る　千葉　峰島和華

○いろ青き坑夫の群の灯火は一つ一つと穴に消え行く　香原ふさ子

○數多ある思ひの中に取りわけて思ふはひとつ君のおんこと　千葉　高橋洋子

○さなきだにさやけき川の瀬にうれ〳〵やどる夕月のかげ　岡山　松かげ子

○落葉つむ下にこゑあり谷水の神のいのりを囁くがごと　大分縣　白筋物

○梅雨霽や牛群れ遊ぶみどり野の遠き彼方に白鷺のとぶ　豐前　數田みつ子

○少女子とわれとはまべに舟まてば月しろかけてほとゝぎすなく

○　　山口増子

今朝見ればおくしもしろし夜もすがらきつれなきてし里の板橋

○　京都　山下はる

春の月やさしき君のおん性に似て麗しくほゝゑみてあり

○　京城　小林芳枝

あゝ清き君が魂夏前の野によびかへし咲かしても見ん

○　四谷　味方古宇

月の夜やわが戀ふる子の軒めぐりめぐりてさけるかきつばたかな

○　四谷　征原よし江

胸の咎われてふものにあざむかれもろくも君に敗れぬ今宵

○　三河　宮田梅子

松が枝にかゝれる月のいとさえて我がまど近くかり鳴き渡る

○　千葉　露野淑子

おもひでの夢の細道たどり行かば君がやさしき影も見るべき

○　靜岡　土屋勢速子

わりなくも戀と云ふ字は一つなるを君笑みてよみわれ泣きてよむ

○　佐渡　谷川桂月子

昨日より君戀ひそめて今宵こそいよゝ焔の胸をやくなれ

○　牛込　塚原學恭女

君われの云へる言葉を一つさへとがめず戀の淋しさを知る

○　信濃　安坂富美子

ふるさとにいまもさけども我しのぶむかしかたらぬ口なしの花

○　京都　小繭

白芙蓉黒髮なひけうつくしき少女は立ちぬ月清き庭

○　仙臺　光子

君を見る日を指折りてかぞへつゝいまだ若しとひとりほゝ笑む

○　福岡　藤部眞久子

夏草の露ふみわけて川の邊を並道ひつゝ乳母がり訪ひぬ

○　埼玉　村田りか子

うら山の百合こそかをれ磯松の下のいはほに潮よする朝

○　北見　今村りせ

十九年泣きて暮しぬあゝせめて幸たまへかし天地の神

○　筑後　梧桐知登子

さみだれす白百合の花一つ咲きぬ君來ましぬとそのかみの日記

○　安房　高梨秀子

朝夕の露の惠に色そひてほのかににほふ撫子の花

○　名古屋　岩井かな

治るもみだるゝも己か心よりふき起す風のあだ波にこそ

○　東京　和子

夕ぐれの戸により君がもの云ひし姿して咲く野路の白百合

○　茨城　良子

かささして訪ひくる友のなかりせばふるさともわかぬけふの春雨

○　茨城　松浦孝子

靜やかにさやかに晴れて夏は來ぬには井のほとり苔青ふして

○　愛知　服部繭子

紫の蝶のあそべるその下に靜かに眠る白すみれかな

○　秋田　いな子

水榭には夕風わたり人をまつ少年の笛ほのかにひゞく

○　本所　武林朗子

くだけよと命の小琴なげてしにからくもうけし君が御手よ

○　大阪　順子

焦がれの鎚もて額をたゝかるゝ樣に苦しき夏の夜かな

○　千葉　石井きぬ子

いとながき袂ならべて快くそゞろ歩きす夏の夕暮れ

○　長野　丸山峰子

なく蝉の聲面白き御山路や青葉かろげに夏の風吹く

○　姫路　富岡綾子

かの宵の君が涙のものがたり今宵のわれのこのものがたり

○　靜岡　後藤みゆき

主もなき野の一つ家の破れ垣に咲く白梅に鶯の鳴く

○　筑前　高松ひで世

美しきみどりの森をうごかして袖にさゝやぐ朝の風かな

新論文



○道樂なれ

（地賞）　伊豆　加藤爲子

道樂と言つては或は語弊があるかも知れませんが、道樂」は即ち道を樂しむといふので、下世話に所謂道樂といふのとは異ります。世が物質的になるにつれ、人の心が浮薄になつて行くやうな傾があります。何をするにもさうですが、職業上に於て殊に著しいと思ひます。「こゝに居るのも、ほんの當座の腰掛けさ」といふ言葉は度々耳にします。これは一方からいへば向上心があつて、いかにも偉いやうに聞えますが、實はこんな人に限つて到底成功は覺束ないことです。小事を全うしてこそ大事も全うすることが出來るので、裁縫をしますにも初めは襦袢から一つ身と次に縫ひます、一つ身もよく出來ない人が何で羽織を上手に縫へませう。現在のことをさて置いて未來ばかり望んだとて到底不可能なことです。家を建てるにしても土臺石がなければなりません。皆が皆上の柱や梁ばかり望んだなら如何でせう、完全な一つの家は建つことは出來ますまい。大きくいへば完全な社會を組織されません。たとへ如何な職業でも自己がその事に興味を持つてゐたなら、地位が低からうが、人の批評が如何であらうが、敢て不平をいふことはないでせう。私は忠實であれの勤勉であれのとは申しません。たゞ道樂なれとお勸め致します。誤解してはいけません。私は現在の境遇に滿足してゐよと申すのではありません。現在のことに道樂であれば未來に於て發達進歩して行くのは勿論ではありませんか。日常の事に致してもその通りで、せよと言はれてするのと、進んでする――之れを樂しんでするとは大層な差がありませう。作文の宿題を課されたと致します、一方には別に何とも思はずに作る人と、また作るのは面白くて仕方がないといふ人があるとすれば、後者はよし下手でも作品の價値といふものは遙に勝つて居ります、亦上達する見込のある者で

○規定　論文と云へどむづかしきことにあらず諸孃が考へしこと思ひしこと文學上又は一般女子に就いての平易なる論談を歡迎す二十四字詰三十行以內一人一章に限る乙種の賞を送呈す

す。

「之れを知る者は之れを好むものに若かず、之れを好む者は之れを樂しむものにしかず」すべて物事は道樂になる位でなくてはなりません。實に事をするには此の心が最も必要でございます。

老成の見、筆も亦よく之に伴ふうて遺憾なし、好論文、好論旨　評

○欺ける悲哀（人　賞）

鳥取　安木春子

此頃若い女、殊に女學生間に、悲哀を云ふ人が多いやうに思ひます、その悲哀も自分で實際に感じたのではなくて時代の風潮に伴はれると云ふのでせうか、たとへば或小説をよみまして、作中の人物…殊に若い女の煩悶とかに強く同情するとして何時の間にかそれにかぶれたとでも申すのでせう、何がなしに自分もその煩悶をして見たがる、と云ふのはつまり「彼の方きつと煩悶してる事があるのよ詩的だわね」とか何とか人から云はれたい爲のつまらない虚榮心から、不如歸の浪さんとか乳姉妹の房江とかを氣取ろうとするので御座います。御覽なさい新作家に出た秋山樣の『假面』の幽香さんのやうな女は澤山あります。こんな伴りの悲哀によつて同情を得やうとするやうな人の常として「失戀」とか云ふやうな事を恥じげもなく殆んど誇のやうに吹聽したり「死」と云ふとを無暗に喜んだり、眞面目な人から見るとまるで狂氣のやうな眞似をして得意がつてゐます、が、實際の世の中になると迚もそんな眞似は出來ないものだと思ひます。一定の時期を經たら自然と眞面目になるやうですから案じる程の事はありますまいがそれにしても私は今少し眞面目に愼重ならむ事をねがふのであります。

甘言至理、中々なか〳〵鋭ろどく肯綮に中て居る　評

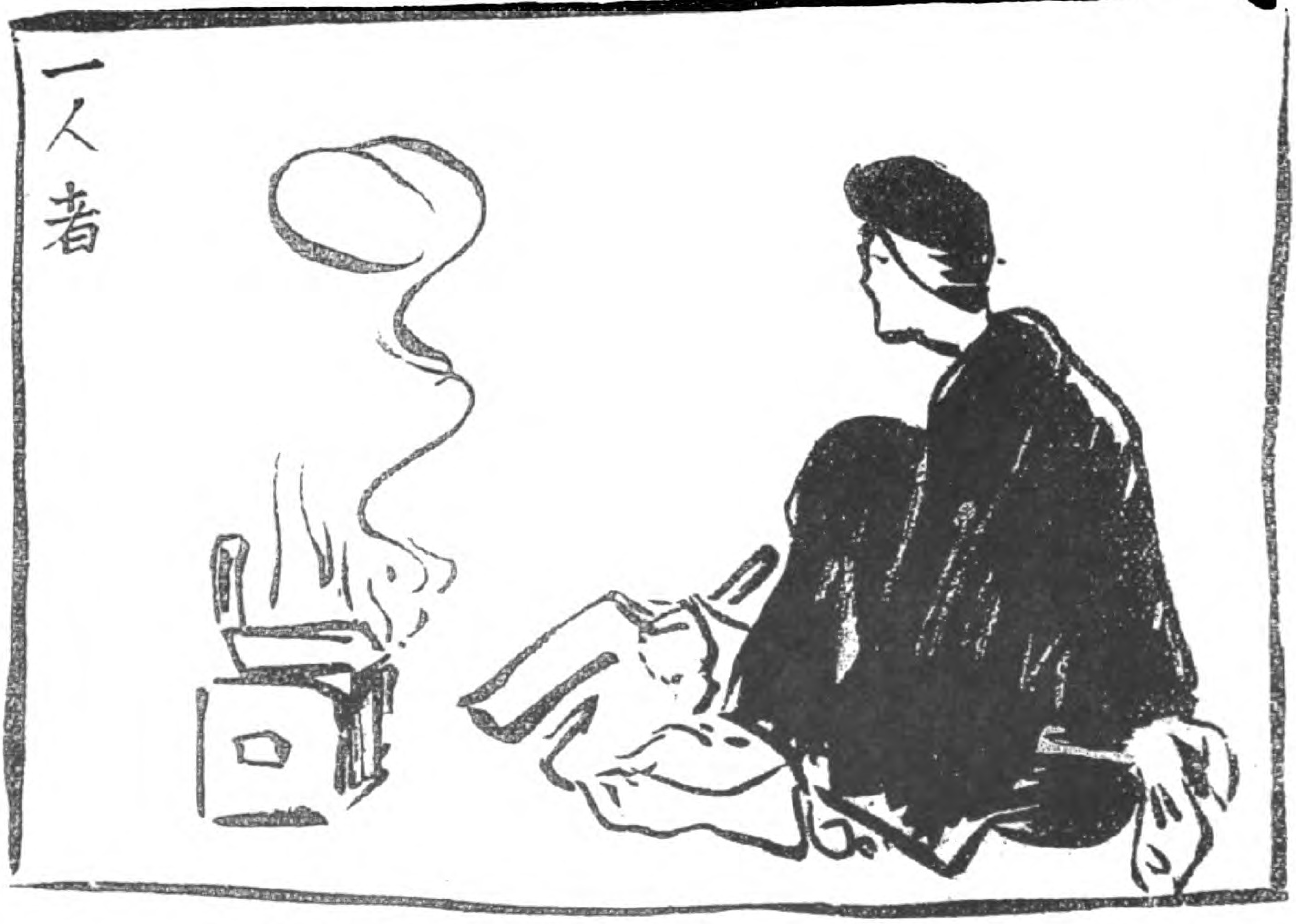
【秀　逸】

○感じたまゝ

大阪市　花　子

二三日前の晩でした、書齋で兄と親しい友達とが、高笑ひしたり眞面目になつたりして話してました、何でも奥樣を貰ふ事に就ての相談らしかつたのです、で、お貰ひなさる方の缺點や美點を、二人が飾らず露骨に話し合つて研究會でも開いてる樣でした、其時私はふと引き比べて、女同志の親友程あてにならないものはないと思ひました、親しいお友達でもお嫁に行く時などは其間際まで秘し匿しにして、いざ嫁くとなる二三日前になつてから、嫁くのやら嫁かないのやら、半ば相談的に――極つて居ても――やれあの方はどこがいゝの財產が悉うの、悉う云ふ趣味が一致してゐる

のと、缺點は擧げずに、美點計りを前置にして、ですけれど什う仕樣かと考へ中なのと伏目になつて了ふ、たゞそれ丈けなんて、私は今までに五六度も恁う云ふ行き方で聞かされましたが、それでも其時は親友には恁う云ふ事迄打明てくれるものかと、一人喜ばれたのでしたが、兄樣達の話を聞た時、女は到底心からの親友にはなれぬものと思ひました、嫁入前の話しても、つまり俗に云ふ見せびらかして、僻ない虛榮の滿足を得る爲と思ひ當たりました。女に虛榮は附物ですが、一心同體などと誓ひ合つた親友の間でも、際どい處て誇らうとするなどは、實に情ない女の缺點て、かう云ふのが女性の通有性だらうと



一人もの　尾張　榊原つた子

思ひます、しかし虛榮や矜が、一面女の生命とも見えるにもせよ、親友となつた仲では決して要らない、否な交誼の妨げとなるものだと思ひます、此虛榮や矜を抉出した、純の純なる心の結合でなくては、眞個の親しい友とは云へません、其處へ行くと男の交誼は淡泊な高尙なもの丶樣に思はれ同時に女の親友は口先計りて力にならない、實に果敢ないものと思ひました。

どうしても僞られねば生きて居られないのが女だかどうだか分らないが、出來る事なら女全志丈けても、精神上の交渉のある樣せられたいものだと外ながら思はれます。此文を讀むにつけても更にさう考へるのです、それが見榮や自慢を拔きにして出來る事なら、そんなに難かしい事でも無いてはありませんか。（評）

○輕業師

岐阜　村木たけの

或る日、私は輕業を見に入りました、スルト扇子と日傘とを持つた可愛い八才位ゐの少女が、座長らしい色の黒い男に連れられて出て來ました。此女は未だ練習中ですから綱から落ちるかも知れませんが、其處の處は御客樣の袖に御隱あつて……と口上を述べました、可愛い少女は梯子を上つて綱の側へ行き、日傘と扇子とをひろげて兩手に持ち綱に片足かけて重心をとりかけました、未だ眞の初歩で、可愛い目に何時しか不安と恐怖との色が漲つて、小さな足はかすかに震へるのです、下で見て居る座長は大きな目をギロリと光らせて、早くッと底力のある聲で促しました、少女は震へる足を踏みしめて、ソロリ〳〵と渡りかけましたが綱が左右にグラリグラリと搖れるので、少女の顏は眞蒼になりました、妾は餘りの事にソッと目を外づしました、刹那に見物人が一度に呀と叫びました、妾も同時にハッといたしましたが顏をあげて落ちた少女を見ようとはいたしませんかつた、妾は少女が落ちた其の瞬間に妾もあの少女のやうな、あぶない一人の輕業師だと云ふ事を自覺いたしました、ひとり妾ばかりではありません、見物人皆が否社會の人總てが、「生」と云ふ起點から「死」と云ふ終點に至る一本の綱、即ち一生涯と云ふ綱を渡る輕業師だと思ひました、これらの輕業師は筆を持つて重心を取るのもありましよう、或は劍或は天秤棒又只口先のみで重心を取つて渡つて行く人も有るでしやうが、一度渡りかけたら決して後戾りは出來ません、只進むより方法はないのです、そして一度重心を失なつたら如何でしやう、妾等の綱の下には墮落、罪惡、自殺と云ふやうな恐ろしい陷阱が幾個も〳〵備へ付けて有るぢやありませんか、ナント妾等は危ない輕業師ではありませんか皆さん!!!

稍〻ありふれたれど、直感として宜い見どころであります、爾て必ずしも綱の下に墮落や罪惡があるのでは無い、迷、疑、忘、嫉、なぞの心持が累を爲して、綱から轉び落ちた時が、墮落、罪惡と云ふのかも知れません。（評）

◎眞の親友

京都　川田益子

悲しい時に共に泣く友がほしいと、誰も皆申ますけれ共、私はそれはりか嬉しい時に共に喜んで呉れる友がほしいものだと思ひますが、容易に得難いものだと云ふ事を知りました。

假に或る人がその父に別れ生活に苦しんで、裏店にても忙しく暮して居つて御覽なさい、其友達はみんな氣の毒だと同情する、これが普通でありませう、隨分身には綺羅をかざり乍らも其九尺二間を訪れて慰める人もありませう、しかし或人が立派な地位に上つて幸福に暮らす樣になつたとして御覽なさい、果して其友は悉く心からそれに對して悅びませうか、それを訪ふて

少しの隙みもなく其得意の笑ひに共に笑ふ人がありませうか、若しもあらばそれが眞の親友てせう、私共自身について考へても、友の失意のときにこそ同情しますが、自分よりも好かつたときには、何程親しい友でも餘り嬉しくは思はれません、斯う考へて見ると、眞の友はなか／＼に得難いものです、この得難い眞の友を得たならばどんなに嬉しいてせう、私はこの眞の友嬉しい時に共に悦び合ふ友がほしいと思ひます。

議論としては新らしきものではないが、感慨として既に一種の熱がある、あゝ得難いものは親友であります、しかし喜憂哀樂共に同情すべき眞の友は、其人の生涯中に一人は來る筈であります、いづれ遠からずあなたにも其事が分りましやう。（評）

○私の寫眞

韓國　富永清子

私は寂しくなると、毎も幼い時からの寫眞を、ずらりと机の上に列べて、其品定めを致します。拾三才迄のは、實に無邪氣に可愛らしくつて、自分ながら接吻でもしたいやうてすが、其後となると厭味が有て、自づと一種嫌惡の情が出て參ります。何故さうかと考へますと、恐らく自分の容子を飾るやうに成たからでして出來るだけ美しく寫し度いとの野心から、無理に口を引緊たり、小さい眼を張裂ける程も見張たりした結果に外ならぬだらうと思ひます。しかも其折はそれでも氣付きませず、次に次にと益々作りましたが、段々惡くなるばかりの樣てした。爰に於いて私は初めて私が自然と云ふものを失して居たと云ふ事に氣がつきました。山水でも人工よりも遥かに自然の方が勝て居るては有りませんか、まして生有る物てす、神樣は決して惡しくは造て下さいません、それに神樣に反いてまでも、自分に持ちもせぬ美を裝ふなんて、實に大なる間違で有りました。神樣でさへも能く出來なかつたものが、どうして人間の私共の手で滿足になりませうか、自然！　實に自然に越した美は有りません。然う感じてから後に撮りました分は、たとへ可笑しう御座いましても、神樣から授かつたまゝに出來たんですもの、滿足せずには居られません。噫何事ても此通りて有ります、私は深く／＼感じました。

一寸宜い見つけ所ながら、議論としては物足りません、自然と云ふ意味はなか／＼難問題て、寫眞て云つても子供の時はつくろはないのが自然てすが、妙齢になると幾らか容子ぶるのが却て自然なんてはありますまいか、髮も結ばず白粉もつけないのが自然て、裝飾は凡て不自然とも云へますまいから……何しろ難しいてすな。（評）

○女子の讀むべき書

群馬縣　小澤せき子

此麼生意氣らしい題の下に何か書こうと言つて、別に何も書けません、又文章も整いません、が本誌を見て一寸感じた事が有つたので、書いて見るのです。妾はいつも本誌の圖書換讀欄を見て驚かるゝ事は外でもない、有益な書物の換讀が少くて、低劣な小說が多い、隨て如何に諸孃が是等小說を熱心に讀まんことを

欲せらるゝかを見る事に就いてであります。妾は未だ小説等は少女小説以外に讀んだ事は有りませんから、果してどの小説は女子が讀んで良いか惡いかと言ふ事は解りませんが、大抵其の命題の如何に徴しても解ります。例へば「魔風戀風」「青春」「横戀慕」「戀の旅」「薄命美人」「女殿下」「女海賊」等此外まだ澤山有りますが、是等の小説を女子が讀んで果して宜しいでしようか。

現今女學生の墮落とか厭世自殺、或は田舍に生れた女子が譯も知らずに都に出て、憐れな身の果となる等申すことが、多く有りますが、妾の考へますのに、是等の小説類が、或ひは幾分原因したものではなかろうかと思ふのであります。そこで妾更に思いますのに、現今若い女子、詳しく言へば未だ夫を持たぬ人たちは、其將來は什麽しても、良妻として夫に仕へ、賢母として子を育てるのが義務でしようから、小説などは多く讀まずして、もつと家庭の爲になる家政學とか料理法、育兒法等を讀み、娛樂として美文作法或ひは女子文集等未だ澤山有りますが、是等の書を愛讀した方が確で又有益だと思ひます。

穩當な見解であります、しかし小說を讀む丈けの趣味と、讀むで惑亂しない識見を養ふ事は更に努めればならぬとかと思ひます。(評)

○私の願ひ　府下　吉田要子

「女學校出の者は困る」と云ふ聲はよく耳にいたします處ですが、私はそれを聞く度悲しい感に打たれます、何故女學校出の者はいけないので御座いませうか。然しよく考へて見ますと、さう言はれるのも無理はないと思はれるふし〴〵のないでも御座いません。例へば、英語のならひたてなど誰も饒舌て見たいのが人情で御座いますから、つひ、愼みも忘れて人前で一言二言交へて申しますと、殊に田舍の御老人などは東京へ出すとあんなに生意氣になるから考へものだなどゝ眉をおしかめになりませう。ですから愼むべきは言語のつかひかたです。

一體女性は虛榮心や功名心が强いもので御座いますから、學校に居りますうちも、優等賞を得やう、ほめられやうといふ一心から勉强する方も少なくはないと思ひます。それは多數の中には、自己の精神を磨き、知情意を圓滿に發達せしめやうと、一生懸命に勉强する方も御座いませう、けれど世間の人は、一部分の缺點あるものを見て、全體を推測するからたまりません。人は本を讀むばかりが上達でないやうに、實地の修養が無ければいくら理屈が言へても何にもなりません。この點に於ては、どうしても年長な方には叶ひませんから、未だ私達は一歩ゆづらねばなりません、と言つて人のいひなり次第になるのではなく、從順のうちに犯すべからざる威嚴を保ち、どんな誘惑にも打ち勝つ

だけの精神は持ちたいものです「人事を盡して天命を待つ」といふ語を忘れなかつたならば、終には立派な人になれるで御座いませう。皆樣御互に世間から批難を受けないやうにつとめやうては御座いませんか。

有益の文字（評）

○論文に就て

信濃　秀枝子

小說欄、美文欄乃至は新體詩欄の盛んなのに較べて、論文欄は何となくさびしいやうではありませんか。

素より美文や新體詩は纖細なる女子の感情を露はすには極適當して居るでせうけれど、其取材がいつも一局面に限られ、煩悶、病氣、哀別など云ふことを、狹き主觀的な見解で、文や詩になされるのですもの、活氣に乏しいのも無理はありません。作者の技巧も加はつて强められて居る感情に、幾多の讀者の思想は知らず〳〵、ある一方に傾いて行くかと思はれます。此缺陷を補うには、文藝の傍數學の研究をなされるのが最もいゝと思ひますが、それは餘りかけ離れてゐますから、矢張り文學中の論文の作を試みられるのが、穩當で一番よいと思ひます、女子には論文は不適當だなど云ふ者もありませうけれど、女子らしい論文は甚だ必要であります、題材などは注意して居ればいくらでも得られる、それに向つては、色々の方面から觀察もすれば、內部から解剖もする、從つて是迄知られなかつた思想上の稗益も得られて、他日處世に補ひ得ることも澤山あるだらうと思ひます。

猶ほ論文には前に申した美文や新體詩と逆つて、悲哀の分子が極少なくて、書かうとしまするにも推理の力を要しますから　自然と頭腦も明晰に態度も嚴肅として來るのであります。



夏の雲　麹町　前田紅百合

散文詩



○石（地賞）

北海道　かげ衣

波一つ立つたことのない私の胸へ、誰か石をはふり込んだ、誰だらういたづらな、――輪は輪をゑがいて大きく廣がる許り、どうしてももとの靜けさに返すことが出來ない、――とうしたらよいだらう――にくらしい、石を投げた人が、ほんとににくらしい。

さすがは女（評）

○片袖（人賞）

伊豆　木村綾野

疊が波打つてをどる。
白い無垢の片袖を縫ひながら、
手を止めて見る。
何にもない。ハテ。
又縫う。
ちらちらする。
眞白！
片袖！
こう思ふと魂がおびえる、
うごく疊。何かあすこには居る。
手が出る。
何の手？
スーと夕暮の闇の香が走つてきた。
暗い色がせまる、刻刻に。
片袖しか出來ない。
どうせう……。
胸に暗の影がさして、片袖の眞白い衣つけた子が、うづくまつてる。

斯う云ふロマンチツクな材料を口語で扱うても屹度面白いものが出來さうに思ふが、何うも輕くやつて了うので、折角の凄みが映らない、眼の着けどころは正に好い（評）

○規定　詩歌的情緒を口語を以て綴るべし形式は問はず凡て自由なり所謂口語詩の類にても可なり二十行以内にて凡て振假名を要す賞は乙種

【秀逸】

○誘ひ灯

越後　佐藤浪子

日はとつぷり暮れて終つた、星一つ輝かぬ寂しい宵ザアー／＼と流れる川べりに一人で立つた。其暗い空の下に誘蛾燈が十一、瞬いて居る。うつくしい。

おびえる心に見つめて居ると、幾千の蛾が僞りの灯に誘はれて死んでゆく、可愛想に、いゝえ、人間だつて美しいと思へば、慕ふ、憧れる、たしかに私の魂も誘はれて居ます、此闇、此水音、おびえて／＼縮まりきつても猶去うともせずに、彼の華かな光をみて居るんですもの・誘はれてます。

感情に交り氣がない（評）

○撫子　　信州　野中たけ子

それでも夜だ、晝の樣に暑くはないほか〳〵と暖かいだけ、氣がぼうとして何だか眠つて歩いてる樣だ。ふと氣が付くと、廣い野だ、撫子の花が七つも八つも一つの株から出て咲て居る。仲よさそうに……けれどよく見れば、一つの花は散り始め、一つの花は咲き始め、一つの花は色あせ、一つの花は右に傾き、一つの花は左に倒れて皆思ひ〳〵になつて居る。あゝ妾の家。お母樣も兄樣も妹もあるけれど、妾は一人、不安だ。恐怖ろしい。悲しい。淋しい。

此の比喩は好かつた(評)

○をんなの心　　横濱　さゝ川

ぬれた指でほつれた鬢をかき上げたら、長い毛髪が一本痛みもなく脱けて手についた、拂はうとして指を振る、振る。まだ落ちぬ、しつかりとまつはつて離れぬ。おゝ丁度、――捨てられた女がはなれまい、離れまいとつれない人に取り縋つてゐるやうな、男は振り切らふ、振り切らふとして。

蛇となつても離れまいとする女心、むごくも離さうとする男心。

あゝ、ああ、女は執念が深い――ふと思つた刹那ぞつとした。私も女だもの。

甚だ、甚だ好かつたが、少し説明に過ぎた(評)

○尼さん　　神田　伊原千代子

お寺の前を通つた、

門の前に尼さんが小さく蹲踞んで居た尼さんの前に常夏の花が咲いて居る。尼さんは其の常夏の香を吸はふとしたが――どうしたのか、小さい花片は、はら〳〵と地に零れた。

マーブルのやうな尼さんの顔――にはら〳〵と、冷い涙が傳ふ。

枯れて行く――花。

冷たい人の――涙。

尼さんは、ひたと。

泣き伏した、花片の上へ……。

少しつくりものらしい氣がしていけないが、巧みは巧みだ(評)

○黄昏　　佐渡　綠髮

黄昏淋しい街端、から〳〵と荷馬車が過ぎた。痩せた馬、疲れた人、ギヨロンと濁つた瞳、汚い服裝の女の子が行くキヨロ〳〵と不安さうに、赤い縮れた髮、窶れた蒼い顔、何を求めるのだらう――突然駈け出した、轍の跡、パンの粉が白うこぼれてゐる――鐘が鳴る、野を越えて、杜越えて……寂かに……未だ佇んでゐる――灰色の空、泥濘の路、二條の線――悲しげに見送つて、額垂れ

て――困憊の生、哀愁の子、未だ佇つてゐる――何を求むるのだらう――黄ろい瞳、鈍い光り、ぢろりと又駈け出した、すた／＼と暗い杜へ跛をひきつ／＼――冷たい風が後から追つかけて行く。

一句／＼離してみると所謂新代人の言ひさうなことだが、但だ纏つた感動がない、中心はなくても可いけれど、何か思はせることがなくてはならぬ(評)

○西洋室　丹波　鹽見喜代子

ふと眞夜中に眼があいた。暗闇に眼が見える。廣い廣い西洋間の、眞白い寢床の上に唯一人、安らかに横はつてゐる。濡ひのない眼をはり切つて、一心に凝視めてゐると、ぼうつと映つてゐた室の中が、次第に瞭然と浮き出て來る――感覺の眼覺め。まだ一度もみた事のない室、眞隅つての方に、赤天鵞絨の椅子と、眞黒い暖爐とが置いてある。

と、チラ／＼と赤い玉が、眼の覺める樣な、綠色の壁の面を、幾つも幾つも、右から左へと飛んで行く。と思つて眼を塞いだ。

生温い蒲團のぬくみと、自分のかすかな呼吸する音とが、軟らかに胸に通つてゐる。

こわばりついた樣な眼瞼が、しくしく痛み出した。

思想は泡鳴から、技巧は白秋から影響されて居るやうだ、生温い蒲團などは少々花袋式でもある、何しろうまい處がある(評)

○朝の海　門司　波子

初夏の風を吸ふて
海岸に行く
若みどりしたる松林の 間から光つた海がほのみえる
もうわたしの心は躍る
青い空が
空と地とをこめて
漁家の軒から緩やかに烟がのぼる
じつとみつめてゐると
むらさきの霞の中から
舟が生れてくる
一つ二つ三つ
そして
眞白い泡を吹いて這い上つてくる波が砂を洗つてかへりに紅い小さな貝を引いて行く

○リボン　淺草　わかば

白や、赤や、オレンヂや美しいリボンが電燈に映て美くしい。姉さんこれそれは少女の昇のやうな眞紅のばらの花。上の妹は淡紅のリボン、二人はよろこんで居る。けれども私は何となくつまらない。生れて二十年。はや世の中に出て生の爲めに働かねばならない。あのリボンも簪ももうつけられない――じつにしてと思ふと急に年を取つたやうに思はれる。そして妹等の華やかな姿が目に浮ぶ――若やいだ聲、希望にみち／＼た瞳。私はもう其時代が過ぎたのだ――けれどもあまりに短かつたやうに思はれる。そしてもつとそんな生活がして居たいと思ふ。ぱつと影がさしたので空を仰ぐと雲がきれて月が出た。高い所で星がきら／＼と輝いて居る。

○光の運命　牛込　塚原けん子

蛙の聲が高い、私と妹は川の汀に立つて。ともすれば聲の中に溶け入る樣。何處からか一匹の螢が舞て來た。妹が慌てゝ袖で拂つたら水面に落た水はその光を浮べたが、それも瞬間！影を消して仕舞つた。刹那私は悲しく思つた、光の運命と思はず叫んだ。

○蔓橋　奈良　中富よしみ

むらだてる山々の靈が、
一時に憤つてかはげしい大雨、
水をませし溪流の淵の色、
すごい程はげしくなつて、

ごうと呼ぶ水の音、
げに天地も崩れんばかり、
私は今この恐しい激流に高く架せる怪しげな吊
橋を渡つて居る、
淋しいこのゆすれ様さへ怖ろしいのに、目が
眩うて今にも
逆巻く激流に呑まれそうだ、
しかしころんだとて 欄にからまつて、落ち様筈
がない、
危ぶむ事はないと信じつゝも、
尚不安の念は止まない。

○ひなげし　京都　露子

夢野……に、ふく和い風が……。
薄い翅を、ふく。又ふく。
もゆる火の色の麗春花、火の色の……
あゝ、和い風、甘い香が漂ふ。
ゆらぐ、ゆらぐ、あゝ、ゆらぐ……。
花は、ちりたいのか、又ゆらぐ。
夢野にふく、和い風。
香をふく、火の色をふく。
らつた！麗春花が……。

○雲　伊豫　楠木たま

晴れ渡る、
たて罩められて居た、朝霧の幕、
パッと、切り落されたかの様に、
空は一面碧瑠璃をとかした様。
向ふの山の頂に、たつた二つ、
大きい雲と小さい雲が、
静かにあらはれてきた。
大きい雲、小さい雲、
嬲がてる様に思はれる、
小さい雲が大きい雲を、
追ふて行く様にも見える、
結局はくつ付いて、仕舞ふのであらふ。
あら、離れるのかしら、
何故だらふ？、
あー、いやよ、離れて仕舞つた。
あ、ああ黒い雲が出て來た、
憎らしい、アノ眞中へ、
そして、
何時迄も〳〵、
黒い雲は其儘かしら。
自分は思はず、
顔を外向けて、
何時の間にか、首垂れて居た

○隣の二階　筑前　白露子

私は毎日、夕方山羊の乳を搾ります、今日もいつもの様に、搾つて居ますと、あら、どうしませう。
また、隣の二階から……
それはれ、大學の生徒で、いつも、私が乳搾る時、二階から見てるんですもの。
初めは何とも思ひませんでしたが、二日三日と日を重ねるに、つれて此頃は、其人を見ると、なんだか、はづかしい様な、懐かしい様な……
そして、如何に笑ふまいと、思つても、すぐ笑ひますの。
するとれ、向ふでもやつぱり、笑ふのですよ。
私は其度に、顔がほてつて……直ぐ物の陰にかくれる——暫くして、出て見ると、もう大學生の影も……其時の淋しさつたら——

○ゆめ　長岡　秋月すゞ子

へびに追駆けられた、「あらたすけて下さい」と、呼んだら、眼が覚めた、眼が覚めたら障子にうつる月の影がすぐ見えた、彼方から男の人だ私の方へ走つて來る、「あら此人は」と、思つたら、まつくらになつた。

○暗い町　尾張　榊原つた子

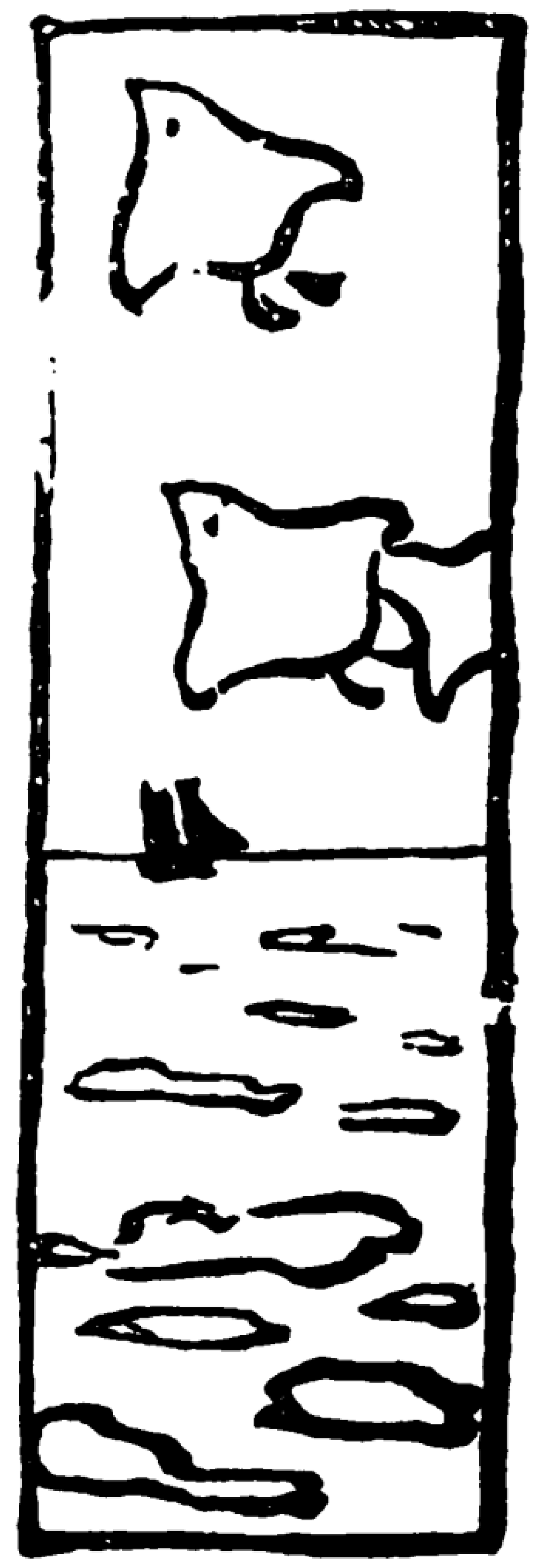
明るい町から暗い横町へ入つた、向ふがさつぱり判らない、瞬きしながら歩いて行く、街燈が射す所だけボウトして居る、軒下の涼み臺で團扇の音がパタ〳〵とするが、人の顔は見えない、私は静かに歩いて居る。
彼方からやはらかい足音が近づいて來る、女の足音だ、眼を大きくして、透して見る、浴衣を着た女だ、プンと香水の薫りがする、摺違つた、途端私はヒョイと振向く。
暗い町、團扇の音、
女の足音、浴衣着の女、香水の薫り、静かに闇の中に消えて行く。

○山路　札幌　杉葉女

黄昏の山路だから誰れにも逢はなければよいと急ぎ足で妾は、坂を上つて楢の森を右に折れた、夜の神が光をみんな呑んで仕舞つた、只片明りがさすばかり、
美人が來たほつそりとした脊の高い顔の透き通る程奇麗な女が無言で、妾の肩に突き當る様にスッーとすりぬけて行つた、ア、氣味が悪いとチョッと振り返つて見たら、矢張り其の女も後を振向いて、薄暗い中にもありありと見えるやうな、白い齒をむき出していやな笑ひをして楢林をまがつて消えた、

短文

中村文學士選



○規定　短くして氣の利いた文章を募る十六字詰七行以内凡て振假名つきへがきは許さず一人一篇に限ること賞は丙種を送呈す

○朝顏（天賞）

筑後　勝子

今は立派に咲いてる朝顏と、種を蒔いて、此方大抵な、骨折ぢや、なかつてよと申しますと、母樣は笑ひ乍ら、お前を育てるにも、其通り花に成る迄には朝顏位の骨折ぢやないよと申されました、私は胸に泌々と覺えられ、返す言葉も有ませんでした。

如何にも。

○霧の朝（地賞）

遠江　春岡

濃かつた、霧が少し薄らいて、靜枝さんの家が見えだした、と、鎮守樣の大きな一本松がポーッと、繪の樣に浮き出る根本の鳥居も常夜燈も。ゴーンと霧の中から撞き出す極樂寺の鐘が、霧の中へ消えて行く、青葉の露がポタリと音を立てる。

巧。

○隣の人（人賞）

本郷　千とせ

「雪に風情の箱根山、魚取る船が見ゆるぞへ―」と口三味線で足拍子取りつゝ窓の下を、もう十一時過だのにあゝ屹度又一騷ぎ起るだらう、あのこわらしいお父樣のお小言にも未だ改められぬのか、痩せた蒼いお顏のお母樣がお可憐相てならない。

短篇小說。

【秀逸】

○光

筑前　野見山柳子

噫、吾古郷は何故此樣に狹い、全くの井底。如何に悶躁ても、永久に四壁を乘越ることは出來ぬのか。空氣は清澄でも四邊は既に古りて居る。噫、厭だ。新天地が戀しい……と嗟嘆して空を仰ぐと、今し暮れゆく高嶺の末に、星影一つ――それよ希望の光。

何となく胸が波だつ。

○牡丹

栃木　しのぶ子

山の手に牡丹見に行つた兄樣が眞白な大輪のを貰つて來られた、マア之が實の純白ですね、珍らしい事と家中は大騷、直と一輪ざしにさゝれた私はソッと鼻をあてゝ見たらプーンといやな〳〵香が――思はず顏をしかめた、純白いけ高い牡丹、如何にか清い香であらうと思つたのに

人にもかゝる事あり。

○惡夢　　信濃　秀枝子

「紅石の指環をはめて見たい」……。昨宵の夢、なぜあんなことを思つたのだらう、あゝ悲しい口惜しい、貘は其處らに居ないか知ら、母様南天の葉は繁つて居て？。――目を瞑ると奥様姿の友の面影が、種々に浮んで來る。清い潔い處女の想ひも、今日から消え初めるのであらうか。

作者はすれものでせう？

○濱の夕暮　　高知市　秋澤花涙

松間の漁家より立ち上る夕餉の煙がゆる／＼うねつて夢の樣に靡れて行く渚を洗ふ女波男波は靜かに戀を語つて居る樣、沖に立ち並んだ帆柱の上にはいつかやさしき月姫が宿つて居ました。

心は天にのぼる樣。

○花のかをり　　四谷　國子

梅は峯の朝心地よいねむりからさめてまだうつら／＼と夢心地をたどる時、かすかに、隙もる風につれて匂つてくるのがすき。櫻は鹽漬にしてあるのを湯に入れた時の匂ひ。ばらは花を鼻にあてていつまでも其香に親しみたく。木犀はとりかたづけたへやで靜かに讀書などしてゐる時、どこともなく。ぽつとかをつてゐるのが大好き。

同感。

○私の望み　　伊知子

官吏の妻になつて子供の出來る迄は矢張り此儘敎員して居つて子供が出來たら一人迄は自分手一つで育て最二人にも成つたら、小學校卒へた十五六の娘を置いてよく子供の爲めに爲る樣守をさせ暇に任せて私で出來る丈の勉强裁縫料理の道を敎へ女子文壇を愛讀させ、子供同樣に敎育致してやり度く御座います、尤も子供は男三人と女一人とがほしく御座います。

結構な事です。

○夕暮　　岐阜　あやめ

日は斜に山の端にかゝつて幾百、幾千、幾萬の美しい黃金矢を惜し氣もなく空に放つて、流れゆく片々の雲は緣を眞紅に彩られ燃えたつやうに見える、壯嚴！。日は全く沈んだ、黑みがゝつた紅の空に七色の虹が一刷毛薄く……。

壯麗、

○情の人　　靜岡　篤子

顏色が惡いといつては優しく尋ねて下さる、嬉しいことがあれば、御自身の事のやうに喜んで下さる一樣、勿躰ない有難いとは思ひますが、さて何故か好きませんので……。あゝ一樣がもすこし冷淡であつて欲しい。

冷淡にすると情がない、今少し、情があるといゝといふのでせう。

○かぜの日　　小石川　野ぎく

風がうなる。裏山の椎の木、樫の木庭の八手まで夫につれて凄い程高鳴する。散らばつた木の葉を吹き上げて空中てくる〳〵廻して又なだれ落す。干物がとぶ。机上の紙が舞ひ出す。光つてたお縁も白茶けて疊の上までザラ〳〵する。今朝はいた新らしい足袋の裏がまつくろ

　結末平凡。

○終列車　高岡市　篠原みゆき

終列車は轟々と着いた、乗る人、降る人の動搖て暫時夜の寂寞を破つた、今發車する最後の瀛笛は丁度人の肺腑を刺す樣にもある、驛前に並ぶ旗亭の灯は殘りなく消えた。向ふの錢湯ては仕舞風呂を流すのてあらう垢を含んだ藥湯の香がする。

　目はいよ〳〵冴える。

○理想の少女　信濃　雪梨子

谷間の百合の樣な優しく氣高いスタイルて、ダリヤの樣に燃える情を持つた、そして絲柳の樣に優しくて、白梅の樣な凜とした處のある、是が私の理想の少女てす。

　理想を實現おさせなさい。

○三枚櫛　芝　照子

ほむとに三枚櫛さすと痛くつてこりごりだと云ひつゝ妹は又さしますから私がオヤ昨日丈がこり〳〵てすかと笑ひますとデモ之さゝないと格好が惡いのてすものと顏赤めましたが其樣な思ひしてまでも形よく見せたい物てしやうか。

　御自分の胸におききなさい。

○私の里　信濃　黑田なをゑ

東京邊はもはや暑くて單衣物をきると聞くに、まだ此所は給の六月の中、田植をしながら西を見ればまだ日本アルプスの頂は眞白てす、東山の青葉の中からは蟬の音がもれますこれても今に暑くなつて白地をきる時がくる のてございます。

　が、高原の夏はさぞ涼しいてせう。

○馬鈴薯　山梨　小林みつ子

今日おひるのお菜に馬鈴薯が出ました、私の好物てすが喰べませんてしたら、妹が、「姉さん、馬鈴薯おきらいなの」つてきかれましたので、一寸返事に困つてゐましたら、そばから兄さんが、「馬鈴薯は好きだけれど、太るから嫌いなんだとうまくづよしなさゝれました。

　お氣の毒さま！

○夜　靑森　遊蝶花

靜な夜だ、月もかくれて仕舞つた風も死んでる。大きな暗が蓋被さつてる、只だもう靜かだ、こんな夜うらやく〳〵毛の生えた毛虫が八重の櫻の花陰て羽色美しい蝶になるんだらう。

　懷憶。

○吃驚させた　上海　小山照子

桶一杯の枇杷を一人して平げた事。又或る日呉服店で一寸の間に二百九十二圓五十二錢の買物をして家人をびつくりさせた。三度目には、二階の窓から屋根のガラス板を貫いて下のコック部屋におつこち、家人始め皆をおどろかせた。

　確かにえらい方てす、

○靜けき夜　靜岡縣　清子

美しい月夜だから大きい聲て唱歌を歌つて見やうと思つてお湯からでた。父と母とは床について他に人もない一軒家。淋しいにはなれて居るが、今夜はまたとくべつ、櫻の木によつてじつと月を見つめた。草も木もねむつたのかゆらりともしない、高い空に月ばかりキラ〳〵と光つて居る　なんだか聲が出なくなつた。

　そして淚が出たてせう。

○寐覺め　小石川　笹原　雪子

棕櫚竹の戰ぎにふと眼がさめると夢ても見たの

が笑いちやんがお母様とにつこり後は又スウ〳〵と軒をかく其の寢顏の氣のせいか餘程やせた樣に思はれると軒の風鈴がかすかに鳴つて宵に入れた螢が一つスーと蚊帳の中を流れた。
是も夏の一興。

○辻
德島　吉田古磨

村はづれに、南北は縣道、東西は三等道路になつてゐる辻がある、その辻へ每日北の縣道を町の製絲から三人の娘が歸つて來ます二人は東西へ一人は向縣道を眞直に、三つの洋傘が傾いて三方へ別れる皆十六七、あの娘達は軈てあの樣にそれぞれの運命に隨うて永遠に別れゆくのでせう。
結句味ふべし。

○野風呂
奈良　中富よしみ

獨り野風呂の人となつて、下行く溪流の瀨と頭上の青葉を隔てた杜鵑の聲とを聞いて居ると、突然優しい螢の光屆の白百合に止つた、花もろとも手折らうとさしのばした手に青葉の雫はら〳〵と雨の樣、同時に涼しい風ほつれ毛を飜つて。幽に詩吟の聲がする。
滿興。

○春の一日
信濃　中峰蝶子

向ふの塘を、荷馬が、チリンと鈴をならして通る水車の音は、キイートンと聞える、きのふ貼つた障子に、虻の豆太皷が、しきりに聞える自分は、そつとペン先て其虻の頭をれらうとブンと云うて虻は美事に逃げた、障子に、大きな穴があいた。
よくやるいたづら。



夏　岩手　佐藤廉子

○鳥の力
靜岡縣　池田よし子

今年も、彼岸から燕が來た、家へも二羽、絕えず土を運んでは梁へつけるあんな事で巢が出來るだらうかと思つた、五六日經つともう立派に出來上つて居る、僅か鳥の嘴て、ああ「不撓不屈」だ、私は何かよい望を得た樣な嬉れしい思ひがした。
好敎訓

○久枝さん
橫濱　小田切錦子

妹の久枝に、お前大きくなると、輝雄さんのお嫁樣になるんだよと、云ふと、（誰あんな兄樣なんかの、お嫁になるもんか、此間妾しのお人形の頸引拔いたのだもの）と、濟してた、あの、久さんが今は一寸貴郎だの、早くお歸り遊ばせの、と云ふのかと思ふと可笑しくつて。
他人のことはあながち笑へませんよ

○掃除
長野　よし子

私等の目を、亂して、はくのが大嫌ひ、每朝、廣い庭を一糸亂さず、目をそろへてはくのです、そして打水した時の心地よさは、丁度美くしく薄化粧した人を、見る樣な氣がします、だから私は雨天の外一日もかゝさずに、庭をはくのを一つの樂として居ます。
結構た事てす。

○朝
神戶　岡靜子

鷄はうたふ、日は出た、雀は啼く鳥も啼く、近所の家々から朝餉の煙が立ちのぼつて居る、山の峰々の霧は流れゆく、車も通る子供も遊びに出た、人の聲もする辨當さげて工場へ通ふ人もある、あゝ朝は世の人が活動の時である……。
働け！と、物皆叫ぶ。

○私の願
青森市　橋本なぎさ

榮華も思はぬ、貴人も願はぬ、只だ戀愛の夢を辿くやうな思の、胸に泌みる、野中に仰に寢て、心行くまで若葉の香を嗅ぎながら、靜に睡りたい。

いつでも出來る事、但し虫にさゝれぬ要心肝要、

○夏の朝　　岩手　燈

フラリと背戸口へ出た
呼子鳥が右手の雜木林で、ガッコーガッコーと、飾りッけのない聲で鳴いて居る。合歡の際に立つて、ふと眼を落すと、路の蕖包が一つ落ちて居た好奇心に一寸のぞいて見たら、哀れ誰が心盡の家苞か、甘い紅寶石のやうな苺が一杯は入つて居た。

そしてそれをどうしましたリ？

○鳥の翼　　鎌倉　上原露葉子

或日私は由井ケ濱に遊びました、向ふを眺めると岸に飛んで居た鳥が誰にか射られたと見へまして地に落ちやうすとる瞬間、以前にもこんな思が有つた樣に思ひましたのであらん限りの記憶を喚び起しましたがおもひあたりがありませんでした。

かゝる事往々あり。

○蚊の命　　遠江　佐藤けん子

机の上に頰杖ついて妾どうしたら善からうと、考へて居ると一疋の藪蚊ブタンと聲立てゝ、額に止まつた、

おとう君るいと頭を振れば逃げて行く、又止るピツシャリ叩けば蚊は机の上におちて足を動かして居る。

たゞこれだけ、つまらない。

○戀　　山口　酒向　敏子

戀にも種類が御座いましやうが、見ず識らずの人に戀せられる程腹の立つたものは有りません、イエ戀する其人に於て一見嶷ない人を戀すなど實に馬鹿げた話では御座いませんか、是は誌友倶樂部よりして得た事實談で御座います

無垢の心を玩ぶ者が多い故、御用心なさい。

○煩悶　　遠江　波多野いち

私は求めて煩悶する、好んで失戀意地に拗る失意の底のどん底に落ちて、あらゆる苦痛に泣き叫ぶ。

何故かつて。其の時は面白かないが一歩去つて客觀すると、此の變化ある生涯が、非常に趣味があるので。

危險ですね。

○西洋のおれくぎ　　尾道　高橋　瀬子

私は修學がたりないからでもありましようが、大變字がまずいので、常に父からお前の字は、西洋のおれくぎ見たいなとしかられて居ります、昨夜も妹が、お父さん西洋のおれくぎつてどんなのと申しましたら、まあひどいお姉さんの字の樣なのだと、私なさけなくなりますよ。

習字をおしなさい。

○最もうれしかりしこと　　金澤市　後藤よし子

わたしのいちばん嬉しかつたことは、始めて小學校にはいった時先生にあたまを撫でてもらつた時と、始めてお羽織を買つて貰つた時と、小學校を卒業する時おばさんに好い袴を買つた時と、此春試驗に及第したことゝであります。

いづれも御尤。

○姉樣　　小　草　子

叔母樣の家に遠い東京から來た方、私あんな美しい人始めて見てよ、と母樣に話したのは未だ桃の咲いてる頃だつた、其方を私は來月から姉樣と呼ぶ事ができるのよ。

おめでたう。

○白い光　　横濱　みやこぼし

妾は夏が好きです。殊に夏の光が好きです。眩い太陽の光は森羅萬象を悉く白い幄に罩めて底不知の池の面にキラリ〱と反射する光は主の眼の輝やきのやう。夏の光――神秘の池――主の眼。夏の靈の繪です。

あゝ、白日も亦神秘ではありませんか。

○形見の花瓶　　兵庫縣　田村竹翠女

大分古くなつたが此花瓶は御歸りなすつた義姉樣のお形見である三年前姉樣が宅へ嫁られた時私への土產として別に下すつた物だ。義姉樣は何故かお歸りになつた其歸りがけに此花瓶私だと思つてねとおつしやつたあゝ此花瓶を下すつた姉樣今は………。

○夏の夕　　下關　阿多　貞子

眞紅な太陽は半分沒した。金粉を散らした樣な道が、すぐ足もとまで續いてゐる、それをじつと見入つてゐるといつの間にか薄い靄が現はれた、不審に思つて後をふり向いて見ると意外！淋しい滿月は早や山の端に。―― 私の影は前後

に影つた。

○好きな名　大坂　高山　米子

同じ級の早苗様に乙女様、先生のお宅の深雪様にきぬた様、妹のお友達では彌生様其れからお向ひの初音様に、此の春生れた從妹の千早ちやん。私はこう云ふ名が大好きでございます。

○私の願ひ　土佐　桃の花

いつの間にか我が和胸に咲いた紅のたつた一つの此小い花を、散りもくづれもせぬ様に、そつと手折つて操つても／＼つきせぬ燃ゆるやうなリボンで、結んで、彼の君に送りたい。

○同　職　岐阜　篠田とみ子

四からと東からと荷賣さんの鉢合せ、やあやあ、て兩方とも立ち止まつた、一寸も賣れんわえん、お前もへ私や大きな顏て家へも歸れんがへ今朝からお前入錢うつた丈てない、明日は賣れるぜ長良へお出ての、あいお前何村ぢやえん、私や西の庄ぢやわ、私や六間ぢやがない、こんな日はし様がないない、北へ行こかへ、二人の荷賣は連れだつて北の方へ。

○朝の森　金澤　悠々子

模糊の霧に包まれた公園の森の間から繁る青葉の精かとも、アーク燈の白い柱は夢の様に見える少さい花賣女の影が森の中へ消えた。あの眞中の池！油の様な碧光の黑い水に滿された池へ落ちれば善いがと思ふ。

○わからなかつた事　大阪　香崎　靜子

私しの七ッでらゐの年頃によく隣の叔母様が私しにもう一度あなたのようになりたいといつも申されて居られました、私しなぜだらうと思つて聞たくてしかたがありませんでしたが此節やうやくわかりました。

○及ばぬ願ひ　信濃　吉澤　辰美

とても及ばぬ願ひだけれど、いつか一度、右手を亡兄に、左手を、私には一人もない骨肉――叔母と云ふものに、いだかれて、白衣を着けた三人の天女にいざなはれ、眞白な雲にのつて、天國とやらへ行て見たい。

○お隣りの御夫婦　韓國　原　とり子

ガラン、ヒシン、と何かの物音つゞいてわあ！と子供の泣聲、チヤまた例のご夫婦喧嘩と思つて居るうちに格子を開けてかけ出す足音。また漢江へ身を投げるつて飛びだしたのでせう。あまり度々なので珍らしくもない、あんなに始終喧嘩ばかりして居て別れるでもなく何を樂しみに暮すのでせう。

○花賣り　牛込　篠原けん子

花や花やと、みだれた衣裝の少女は、夏の照りきつた鄙道をさもだるさうに足を運んでゐる。見る人は皆「可憐の子だ」と呟く、けれど誰一人買ふ者はない。此の世は同情よりは慾の滿ちた世だと私はつく／＼覺つた。

○儚い想ひ　長野　山口破寬子

文金の高島田、振袖の着物、それに相應しい、たて矢の字の帶を結びし、令孃姿の方をみれば妾もあゝして見たいと想ひ、また、マガレットの髮品善い矢絣御召の上着、キユッと、襟止をしオリーブカシミヤの袴を裾長う穿つた女學生風の人に逢へば、自分もあゝしたならばと憧がれつ…身は鍬持つ農夫の娘にてありながら。

○習慣　佐世保　古賀　年子

私の内は精米所でありますいつもお友達がいらして「貴女はよくこんな所で勉强が出來ますれいつもゴトゴト云つて耳がつぶれ相だ」とおつしやいます、私は何んともありません、これも一の習慣と思つて居ます。

○赤子　備中　山下

小草の露は白玉とまがひ梅の香につつまれて庭木の中で雜誌を見てゐますと奥の間て母様や姉様の笑ひ聲何がをかしいのだらうとすぐ行つて見ますとまだ生れて間のない赤子がすや／＼ねたまゝにこ／＼笑つてゐます之はうぶの神様がおつめりになるのだとやら。

○朝　千葉　峰島　和苑

霧に包まれた鎭守の森が、高く仄やりしてゐたがだん／＼晴れて松や椎の森が明かになつた。時して其森のあたりが次第と紅色に染まつて大なる希望を抱いてお日様が出た土藏の白壁が櫻色になつた。日光をあびて白い鳥が默つて飛んで行く。

○機械工場　大阪市　木村　花子

機械工場の巫。ドドドドと機關の響が轟々しく眞夏の晝の空氣に反響する、其絕間には齒車の躁る音が、人の呻吟と絡んで洩れる皮膚の弛んだ、油ぎつた顏がふつと浮んだ、嫌な氣持になつて立止つた頭を返すと眞裸体の男の子がけろりと立つて居た。

俳句

内藤鳴雪選



○（天賞）

古扇ひとさし舞ひて捨てにけり　播介　上原露葉子

○（地賞）

つかれたる蝶の翅や青嵐　麹町　牧野嵐水

○（人賞）

青梅の礫もあるや人の戀　羽後　三浦とみ子

【秀逸】

戸に倚りてさびしき人や春の夕　羽前　渡邊鶴枝

夏の月戒壇石を照しけり　赤石　落葉子

薩摩富士海に浮びて月涼し　鹿児島　青松砂子

草庵やゆかしきものに青すだれ　静岡　原田文子

朝見ればあやめ散り浮く小川かな　茨城　野島たか子

五月雨や梅おとす子のぬれてゐる　静岡　鈴木とも子

豊額のまつはりて咲く小松かな　府下　吉田斐子

○規定　同じ材料で二度以上使へば陳腐になるとか剽窃になるとか言ふ人もあるが餘計な心配である前の人と異つて趣に轉換して活用して居れば幾度同じ材料を使つても差支ない（鳴雪）一人一句限賞丙種

荒寺にやせ百合花咲いて小雨ふる　遠江　波多野いち

水清く小鮎たばしる淺瀬かな　岐阜　鷲見ちえ子

籠に入れて鳴かぬうづらや粟一穂　備中　原ゑつ子

娘とる宮もあるべく旋りかな　京都　天野春子

千間の堤ふきぬく秋の風　麹町　石井すみえ

島の松蒔繪の如く時雨けり　安房　安藤良子

若葉垣歸省の夕風嬉し　信州　岩波花江

初夏や青葉がくれの入日月　日暮里　細谷鏡子

武者振に風薫るなり美少年　新潟　吉田かをる

はづかしの姿も隱せ田植笠　下総　鈴木みつ子

眠る子の顔照らし飛ぶほたる哉　神田　小林きく

紫藤蒔ついばむ鶏や夏淺し　長野　山口はま子

青葉陰に母の乳のむ子牛哉　濱松　中村千代

五月雨の欄干による禿かな　青森市　橋本なぎさ

日盛や木馬の上に人もなし　羽後　菊地まき

軒下に詩人默せり夏の月　岐阜　傍島小枝子

涼しさは青葉の嶺の谷の音　岩代　富田千代子

百合咲くや狂女住むてふ山の家　伏見　幸子

逝く春や蝶はらふ人に椿落つ　越後　たき子

六月や鶏立つ庭の車井戸　藤澤　鳥居俊子

雨もよひ湯のおばしまにほとゝぎす　沼津　渡邊とよを

大木の幹に螢の光りけり　下谷　田代房尾子

水盤に苔の清水を汲み來る　下谷　檜谷孝子

朝顔の垣た一重の無沙汰かな　徳島　吉田紫花
荒武者の發心の夜やほとゝぎす　京都　くちなし
涼しさや蓮の面に風わたる　播磨　永田喜代子
木暮や朝顔の苗踏み折りて　美濃　加藤芳子
白ばらの枝にも輝くや露の玉　廣島縣　露の玉
よき人のよき笛の音や舟涼し　讃岐　小野定子
先生は内かと叩く水鷄かな　兵庫　杉山春翠
御手植の松のしげりや夏の月　大阪　平尾時子
物縫へば袖のまつはる暑さかな　京都　紫花
辿りし草谷に落すや夏の朝　上總　今關げん子
ぐう〳〵と午寐する時佛かな　京都　伊藤初瀬
夏菊に心涼しき女哉　四谷　今川喜久
菜欄に寺の燒けたる物語　横濱　みやこばし
戀初めて君なつかしき初月夜　石狩　河合菊子
のどかさや煙り吐きつゝ走る船　青森　西村みや女
吾妹子に笠あたらしき田植哉　福井　やまざと
大寺の灯火淡し時鳥　清國　重長孤女
五月雨やよき人窓にもの思ふ　茨城　越ヶ谷玉子
涼風や青葉がくれの大鳥闕　岐阜　篠田とみ子
流水の音幽かなり落螢　釜山　富迫ろしふ子
雨はれし夕の森に鳥渡る　金澤市　悠々子
兒どちと踊るもうれし夏の月　神戸　岡部子
髪結ふて新湯かけし姉妹　上總　森緑美
水打てば番殿のたり〳〵かな　高岡　篠原みゆき
日永人牛の歩みに似たる哉　備中　小見山春子
歸らんと思へば涼し笛の音　東京　浪花井靜子
少女子の春の心や雨後の月　府下　木原英子
嫁の手の泥いたはしき田植かな　大阪市　河邊よしの
長堤や青葉若葉に人繁る　茨城　野島里子
薫風の吹て青松白砂かな　大阪　鹿島綾子
湖に臨む一院明けて蓮の花　四谷區　太田桃子

水かれし古井に這うて蔦若葉　日本橋　松岡千代子
螢追ふ妹に逢ひたる涼みかな　和泉　谷ふじ枝
青簾庭の若樹に虹たちぬ　美作　山本鳳外
ちは〳〵と蜻蛉とびかふ眞晝かな　京都　井上すみ子
雨やみて又上りける蝙蝠　大阪　奥野妙子
嫂が家の燈おそし春の風　北海道　小百合
さは〳〵と苗代水や風涼し　茨城　日野信子
螢火の妹を照らしぬ風呂の中　山口縣　林朝子
風鈴に湯殿涼しき月夜哉　越後　木島しのぶ
春の潮君居る島に流れけり　大阪　四戸政江子
僧房に小寒き日ある土用哉　島根　白百合
澤や靈の螢のうづくまる　水戸　小桃子
旭のさして巣を出る蜂の勢哉　能登　藤井澄奘子
卯の花の恐ろしく見えぬおぼろ月　下關　岡多良子
水鳥や蘆の焚火に風起る　長野　山本操
月まうて琴ひく宵や水鷄なく　兵庫　靜子
大道の獅動かぬ暑さかな　四谷　松風富子
夏の月明賣る人を照らしけり　尾張　榊原つた
夕月やあぢさゐ淡き木下闇　鳥取　安木春子
湯上りの女に風のかをるなり　神戸市　比佐野
大寺の松から出たり夏の月　大阪市　木村花子
上臈の髪美くしや青すだれ　靜岡　池田芳子
紺張りの丸行燈や春の月　伊豆　辻村かと子
少女子の髪さびもせて薔薇哉　三重縣　入蛍子
棹させばふはり〳〵と蓮の花や　下谷　谷口桂子
五月雨にてゝ虫の角のびてけり　本郷　西山かづ子
犬つれて彷徨ふ川邊風涼し　宮城　沼倉ふく子
に搖ぐ櫓守の灯や鳴く水鷄　小石川　松原ゆき子
對岸の宿にふりくる白雨かな　日本橋　川尻とみ子
傘に松の落葉や朝の雨　紀伊　湘見むつ子
螢火の水田に低し闇の中　紀伊　阪本千鳥

餘興



○規定　毎號課題を出して諸嬢の餘興に供す十六字詰十行迄一人一章に限丙種の賞を送呈すべし新題は欄末にあり見落す勿れ

買物（課題）

○買物歸りの貯金（天賞）

伊豆　辻村かと子

私はお買物の歸りには必ず何程かを銀行へ貯金して居りますが、もう餘程貯金が出來ました、お買物の歸りに何程貯金いたしますかと申しますると、例へば呉服店に參りまして、二圓參圓で買はうと思ひました品が二圓五十錢で濟みました時は、最初の三圓で買つたつもりて、五十錢を貯金に預けます、呉服物によらず、何を買ひに參りましても左樣いたして貯金に預けます、妹や弟にも實行さして居りますが、皆樣にもおすゝめいたします。

貯金法として甚だ宜し

○大好きと大嫌ひ（地賞）

四谷　櫻子

三越や白木へ反物やリボンをかひに行くのと、夜店へ可愛ゆい金魚や、美くしい草花をかひに行くのと、月末に本やへ女子文壇をとりに行くのが私の大好きな買物。時々下女の代りに、八百屋へ大根やねぎなんか買ひに行くのと、漬物屋へお煮豆かひにやられるのが何だかきまりがわるくつて大嫌な買物てす。

誰ても此通り

○大根を包む法（人賞）

西多摩　三ケ島よし子

私は八百屋の前に住んで居たことがあります、一寸見ると皆青々としてをりますが終日見てゐると、お神さんが葱の皮をむいたり大根や蕪菁の枯葉を取つたりして、古いのから表の方へ出して飾るので嫌になりました、或時ハイカラな奥樣とでも云ふやうな人が大根を一本買つて葉を切らせ根を二つにも三つにも切らせてメリンスの風呂敷に包んで抱えて行くのを見て、なる程どあゝすれば何だか分らないと思ひ、私もそうして別の八百屋から何か買つたことがありました。

新發明

【秀逸】

○小間物屋のお使

埼玉　青葉女

私は物買ひに行く事が嫌ですが只小間物屋ばかりは好きでも有り度々行きます、と言ふて紅白粉を粧たり、りぼんかけたりするのはやはり嫌なのです只かず知れぬ化粧品のゆかしい香りをかぎ、又一ぱいに飾られた美しいりボンや何か

に目を楽しませます、故に私は母様や姉様にお願ひして小間物屋のお使はいつでも〳〵私が致して居ります。

○支那人の野菜賣

韓國 原 とり子

四五日前から、まだ朝鮮語もよく解らない、支那人の野菜賣が來ます、今朝も、のつそり勝手口へはいつて來て、ナサ菜〳〵と云ひます、姉様が「今日は入りません」と云つても解らない、今度は朝鮮語で「不用」と言つても知らん顔、自分一人で何か承知して「百目八錢、百目宜しい」なぞと、覺束ない日本語をつかつて、さつさ〳〵と計つて勝手へ置く、し方がないので姉様も買つてしまふ、私は一人でクヽクス笑つて居ました。

○コントラスト

信濃 俊梨子

私の内は小間物屋です毎日色々な人が買物に來ます。今も、千代田草履にお納戸の絹洋傘をさした時髦の方が、御園白粉と舶來の香水を買つていらしたあとへ、「今日は、孫にやるだが二錢か三錢の簪はごはしれか」なんて、善光寺詣りの歸りらしい在のお婆さんが來ました。面白いコントラストだと思つて、私は獨て感じました。

○馬か牛に運ばれて

山城 木の花

一寸した買物は二里、たいした買物は三里、汽車に乘つて行く買物は停車場迄四里、それが峠の二つ程も越されば行けぬ道、里には氣のきいた品物はなくて價が高い、それもそのはづでございます、何一つとして車ではいるものはない、馬か牛の背によつて里の店に飾られるのですもの……。ほんの山奥ほんの田舍とは此處でございませう。安いものはお茶と炭、山から切り出す材木、これは叉都へ出てから高いものになるのです。

○「いくばく」とは何

滋賀縣 永田二三野

私の小學校時代でした、友と、二人で、本屋へ、行きました、すると、幾何學教科書と廣告が出て居たので、私はなに、「いくばく」つてどんなのでせうと、尋ねると、友も、えゝ私聞いた事ないわ、「いくばく」つて、いふもの、なんて、二人が頻りに、大聲で、言つて居たのです、ほんに、今思うと幾何の事なのです、二人がやかましく、言つて居るのを聞いて居た、番頭は、たまらなかつたらうと思ひます、本屋の前を通ると、思ひ出して恥しくて、汗がにじみます。

○今少し上等を

日暮里 細谷 鏡子

買物の仕方をお話し致しませう、買う品物にもよりますが先小間物屋等に參りまして色々品を見せてもらふ時初めから上等のを見せて下さい等と云ふ物てはありません、小間物等は贅澤品ですから高價に限が有ません、其で餘り高いから今少し安いのをとだん〳〵價を減じて安物を買ふのは何だか變な物です、それより初に安いのから見てもすこし上等のをと云て高價の物を買ふ方が體裁が宜う御座います。

○苦しい頓智

日本橋 佐藤眞壽子

何日だつたか近所の小間物屋へ行た時恰ど妾と同じ年位の娘が色々な品を買て居て妾が香油だけしか買はないのを、じつと見詰て居るのでなんだか其のまゝ出て來るのが嫌になつて、何の考も起らずそこに在た香水を買て仕舞たが、さあどうしよう、かんじんの御費がたりない、はツと思ふと顔はかツ〳〵、して胸は早鐘をつく樣、今更よすわけにも行ず途方にくれたが、とツさに苦しい考へを出して「あの一寸そこまで行て來ますから此處へ置といて下さいな」と云て直ぐにお金を取りに來て拂た事がありましたツけ。

○品物の値を問け

京都 川田 益子

いつもよく前に價をきかないで買物をしましたが、それが不經濟と知つてからは、品物を見て價を聞いてから買ます、そして幾種も買つた時には、自分でちやんと心算をしておいてそれから向へいくらときゝ、其上で代價を拂います、すると間違いなぞがなくて宜いです。

○ざゝやき合ふ

栃木 しのぶ子

歯磨類を買ふ時と青物屋には一人で、いつて大

人なしく買つて來ます、呉服店、荒物屋、小間物屋などに行く時は親友の花さんと一所にいつてきつと何程かまけさせます、殊に一寸した買物に勸工場にいつた時や夜店で花など買ふ時は始めに之何程ですつてきゝますそして花さんと一寸顔み合はして「高い事ね又此次にしませう」つてさゝやきあひます、するとては思ひきりませう買つて行つて下さいつて云ひます、もし安かつたら買ひます、貧乏學生も此頃はなか〱經濟家になりました。

○毛糸を失ふ

大坂　高山　米子

確か九才の秋だつたと思ふ。あの頃は非常に編物にこつてたので、夜分とめられるのも聞かず、下女と二人糸屋迄行きましたが、サア歸りにはねむく成つて來て、トロ〱居眠りし乍ら夢中で、漸く家へ戻りました處が、まあどうしませう、シツカリにぎつてた筈の毛糸はどこへやら、今でも思ひ出すと、獨り顔がほてります。

○琵琶買ひ

福岡　田中とよ子

昨夜でした、五ツになる妹が枇杷買ふと云つて出たきり、十分立つても廿分たつても歸りません、宅は大心配近所の菓子屋果物屋や心當りの家を尋ねましたけれど居りません、父は不在、如何せう交番へ走らうの、親族へ行かうのと騒いで居ますと、ふいと、お向ひの琵琶の先生方の女中さんが、お嬢様が二錢出して琵琶くれつて入らつしやいましたが、お眠りなさいましたからと云つて、連れて來たので、心配變じて大笑ひでした。

○呉服屋は嫌ひ?

常陸　木村那賀子

私は買物するのは大抵夜です、一番行くのが嫌なのは呉服屋です、若い番頭さん達が何人もチヤクで髪を奇麗に撫で分けてぞろりとならんで座つて居る所に這入ると一居辛い、おかけなさい」と其所でも此所でも何所た腰を下ろしていゝかマゴ〱して了ふ、やつと腰を下ろして品物を云ふと、眼の前え山の如うに積み上げる、ランプをグツと明るくして眼先え出すので眞當に蒸かしい、其れでも氣に入つた品があつて買つて來る時は、いゝけれど、思ふ如うなのがなくつて買はずに來る時「又明日でも見に上ります」て云ふと「何なら此方から持參いたしても宜しう御座います」と必ず云ふ其れが嫌だ。

○御免やすと大きに

京都　小　蓜

京都では何を買ひにゆくのでも這入る時「御免やす」歸りは「大きに」と云ふのです。私は東京から來たて如何も其れが出ません。買物に往つても言葉が早いので解り難いか何時も後廻しにされる。其れが他國者だから馬鹿にされる樣で腹が立つて買はずに歸つた事も度々でした、此頃は諸國の人が入込んで來たし私も土地に染んで腹も立たなくなりました。

○買心の好い家

日本橋　松岡千代子

近頃は何屋へ買物に行きましても少し上等物店になると兎角店員が客の取あつかひ方が不叮寧になつた向が有る或る家に至つては客の衣服風俗を見ての上であつかいを差別するなどはもし商人客取あつかひ方に付ての法律でも有る事ならば新事件の續出はまぬがれないでありませう、賣店は買物なす人に勉めて悪感情をいだかせぬやう愛嬌を專一にしてほしい而し買人の方にも必ず愛嬌はあつてほしいのです、先づあすこへ行けばと思ふ店でも「賣つてやる」主義の家は二度と行かない「どうぞお買ひ下さい」といふ方を好むは誰しもならむもわけて女は買心のよい家といふのを大へんに好みあらむで行きます。

○おすし屋と簾屋

本郷　保延　夏子

或日の事私はひる寢して居りますと茶の間で母さんのお聲がしましたので急いで行つて見ると母樣はお客樣ですから早く三町目まで行つておすしをあつらへてお出てとお云ひ遊ばすので其のまゝ顔も洗はずに參りますとどうしましたのですかおすし屋のおとなりの「すだれ」屋に入つておすしをどうぞ早く持つて來て下さいと云ひますと奥で叔母さんの笑ひ聲が聞えました、はつと、思つて私は顔を赤くしました。

○土佐の方言

高知市　初　子

こちらに夏帯がありますか」「やゝ有りますまあお這入り」「これいくらですか」「や十五錢です「そんなら之をもらひませう」「やゝ畏まりた」「十五錢に一や有おとうございます」。

○美しい皿　福島縣　橋本ふさ子

私は皿を買ふので町に出ました、其處此處と品物を見ましたが氣に入つたのがありませんので家に歸らうと思つて四辻に來ました、人が大勢集つて居たのでのぞいて見ますと瀨戸商人であります、並べた中に美しい菓子皿がある ので値段を聞きますと非常に安い、瀨戸屋は得意になつて叩いて品物の丈夫なのを保證して居ます、妾は買つて家に行て自慢さうに母に見せやうとするはずみに落して破してしまひました、よく見ますと洋燈のかさの質なので呆れました。

○モースー　仙台　光子

私は純粹の仙臺ッ子だから物を買ひにゆくときには大きな〳〵聲てモースーと云つてからこれをなんぼがなくないヱつて云つたもんだが女學校に入つてからはさすがにモースーともいはれず只だ御辭儀をしてあれを……と云つた切りあとは默つてる然し今の學校に入つてからはさすがに大人ぶつて店前に立つて御めん下さいこれを十錢分頂戴なんて云ふ樣になつた然し云つて仕舞つてから顏が熱く〳〵なつてソット戸をかみ閉める。

○新學期の大繁昌　仙台　鉛葉子

本年から學校に入つた妹をつれて、本屋に行つた、マア大變な混雜、中の方はボーッとして唯黑い頭が動く許り、愛らしい入つ許りの坊ちやんが「尋常二年の本をおくれ」と、聲限り呼んで居る、若い奧樣がお連樣を伴れて入つて來た、小僧等はうろたへて用も無い所まで駈け廻つて居る中でどつと笑ひ聲が聞えるので、靈いてのび上つて見ると二高の生徒が番頭を捕へてしきりに氣𦦨をはいて居た、赤毛布のお爺さん等は、あきれた樣に立つて居る、たぶん孫の本でも買ひに來たのだらうに。

○一尾二錢の烏賊　福井縣　やまざと

買物位誰ても出來ると思ふと大の間違ひて、是非習つてをかねばならない事だと思ひます。まあ此間お母さんお留守の時、お好な烏賊を賣りに來ましたので、問ふて見ると一つが二錢だと申しましたて、浪の女てはあるし、新らしいと思ひまして、五つ買ひましてお母さんがお歸りになつてから見せますと、これはつけ烏賊てまつ白ぢや黑いやうなのを買はなければわかぬ、これは外の大きい魚を釣る餌に水の中へつけておいたのの餘りて、煮ると小さくなつて古いから味も惡るく、食へるものでない……其から魚だけてない何ても買はれる時には、一一數へて貰ふことにしました。

○母の見立　福岡　登喜子

私が見立てヽ買つた品物は、其當座は何ても宜い樣に見えますが、おしまひには、何故買つたらうと思ひます。が、母樣に見て戴いた品物は、「こんな物、厭だわ」なんと思つてゐますが、後には離されない樣になります。他家へいつたつて、暫くは見立て戴けるが、もしもの事があつて母樣と、永久に離れる樣な事があつたら、どうしようと、お買物の度に緣起でもないことを思ひます。

新課題

女の名

今度の課題は「女の名」と云ふのです、何う云ふことを書くのかと云ふと先づ第一に皆さんが御自分の由來に就いてお話なさい、いろ〳〵の理由があつてつけられたお名もあるでせうから、それを聞きたいものです。それからお友達や、知人の名について何か面白いことがあつたら書いて下さい、又、一般の女の名に就いて、自分の好きな名と、嫌ひな名があるでせう、何と云ふ名が好きて、何と云ふ名は嫌ひだと云ふやうなことでもよろしい、又或る町とか或る村とかに限つて、殊に多い名がありとす、それも聞かして下さると何かの參考になりませう、それから珍しい名や、世間に類の無い名もをかしいでせう、書いて下さい、其外何でも女の名についての事なら宜しい、但し雅號のことは不用てす、苗字に就いても大した必要はありません、主として本當の呼名について書いて下さい、懸賞其他のことは例の通り、（しめきり本月十五日）

社告

●七月號

は發行旬日ならず本社は賣切ました

書簡文



〇規定　手紙又はハガキの通常の音信文を云ふ候文口語體何れにても簡潔なり成るべく意味の透徹したる作を採る二十四字詰二十行以内とす一人一章に限る卷紙を用ゆべからず乙種の賞を送呈す

〇産屋の姉へ

（埼玉）神田基子

姉樣、お目出度うムいます。其れに男の子なんですつてね。まあ、どんなでせう、義兄樣が。本當に見えるやうですわ。

姉樣、姉樣つては、若しやね、義兄樣が、例の鬚無茶なお顔で、あの柔かい赤ちやんの頬ぺたへ頬摺りでもして被居りやしなくつて？　乾度よ。大抵もう、十度目位かも知れませんね。………姉樣、本當に〳〵可哀相だわ、赤ちやんが、氣をつけて下さいよ。

其れから、お名前は、何とついて。未だ？……成るべく偉くなり相な、男らしいのをね。父樣も、母樣も、さつきつから、其御心配よ。父樣なんか、あのそら、又いつもの、汚ない本を引張出して、可笑しな眼鏡をかけて、頻りと繰つて被居るの。だけれど、駄目。あんな古い本から、引き出した、封建時代の人のつけた名前なんか。夫より、義兄樣に、何とか、奇抜なのを、義兄樣の事ですもの、必ずお有りになりますわ。私も一つ夫りやいゝのが、まあ〳〵云はずに置きませうね。あれ、又母さんが、あんな事を。

姉樣、可笑しいわね。あのね。今つから、寫眞をですつてと、笑ふ私も、本當は〳〵、矢つ張りすぐにも拜見したいのよ。寫し次第、乾度送つて頂戴よ。おゝ寫眞で思ひ出しましたわ。あのね、どちら似だらうつて此方の評議よ。

父樣は、義兄樣だらうつて、母樣はいゝえお照てせうつて。さあ、どつちでせう。私は兩方よ。利口振つて。鼻付と、毛の濃いのが、義兄樣に似て、目付とお口と、お色の白いのが、姉樣似だつたら、夫こそ本當のお人形さんに。でも、男のお子さんなら、腦が第一よ。が是れ丈は安心。唯手すぢね。……字丈けわね。義兄樣には。大々秘密よ。あの、姉さま似てなければ、困り

ますわね。

あら、大變饒舌つて了ひました。五月蠅かつたでせう。御氣分に障らなくて？　さあ〳〵ゆつくりと、寐んで頂戴。產後が大切ですよ。よく〳〵御用心してね。そして、早く〳〵、赤ちやんを抱つこなすつた、御寫眞を拜見させて下さいまし。では義兄樣に宜しく。今赤ちやんどうじて。……ねんねなの。何だか氣になつて、仕方がありません。

活潑々地、鯉の跳ねるか何かの樣、かゝる場合にこんな手紙が何よりも慰めになるんで、傍から見てもきび〳〵と快よい、氣さくな若い叔母さんなる哉。（評）

○續舊友の消息（入賞）

麹町　胡　枝　子

先達ては御手紙有り難く存じます、直ぐに御返事差上るので御座いましたのに先頃から暫く房州の方に遊びに參つて居りまして昨日歸りました許り、失禮致しました、いつも御丈夫で何よりで御座います、此頃は御歌に御熱心でいらつしやいますさうで、どんなにかすぐれたのを御よみ出でになるんで御座いませう、何卒御詠草を是非拜見させて頂き度うございます、あんまりで御座いますね田舍者になつたから寫眞は下されないつて仰しやいますの？田舍者に御なりになれば絕交する御約束で御親しく願つたのではございませんわ、とまあ申上げ度くなるでは御座いませんか、都だの田舍だの申し出したら京に田舍あり、私などは一向もう蝸牛然と構へて世間の樣子は何も存じませんのですもの、皆樣はそれやあ御交際上手でいらつしやいますわ、田原さんなんか其内でも尤なる者とでも申しませうか、一口に申せば私どもの反對でございます、ホヽヽ、此頃は獨逸を遊ばしてらつしやいますの、如何して皆さんはあゝ表情が御上手かと思はれる程此頃は巧に御なりなさいましたよ、淸子さんの顏の表情は元より有名でございましたが此頃はもうすつかり御卒業と見えまして五分も御話して居りますうちにはパッと電氣が飛びさうでございますの、全く間の拔けた顏して御相手致して居れませんわ、菅田さんはからだの表情が御上手で有名、まあそういふ御連中は一日しやべり通しても話題を盡きさせたりはなさいませんが、御別れしてから考へてみますと一向實のないものでございます、要するに、と香川先生の口調をまねる譯ではございませんが、まあ、誠實といふ樣な直の友達の溫味はあまりございませんかもしれません、自分は交際術樣習の硏究材料にされたのだと思ひますといやな氣が致します、まあ、おしやべり致しました私こそ、ではまた此次に申上げませう、お神村さんがあなたに宜しく申してくれと仰しやいました、一月ほど前に坊ちやまを御もちになつて、先達て私抱かせて頂きに上り

ましたの、あ、それから近子さんが大阪の方に御縁づきになるさうでございます、何だか義理とか何とか、深い御事情がある樣に一寸きゝました、よく伺つたらまた申上げませう、では左樣なら、

例のきびしくした筆つき確かなもの、どうかするとバッと電報でも出て、間の拔けた批評の筆なぞ揮へない位です。(評)

【秀逸】

○此まゝ明日の一番で

滋賀 磨志緒

此地へ來る時でさへ袖に縋つて泣た時雄が、今又私が廣島へ行くと聞きましたら、どんなに戀しがるでせう、五年生と言へば地理も習ひはじめて、朧げながら日本全國を知つて居りますもの、地圖を披いて見て距離など計算して一しほ遠くなつたのを知つて、さぞ懷かしがるでせう、一度歸つて父母樣や時雄に逢て行きたい、と思はぬでも御ざいませねど、御別れの折お見送り下さる方々に、「左樣なら」と申上る時の心地が思はれて、心ならずも此儘明日一番汽車で出發致します。委細は去る三日夫より差出した手紙で御承知下さいましたでせう。時雄にも話して下さいましたか、姉さん〳〵と慕ひましたら「姉樣は毎日お前が早く中學を卒業して、日頃口にしてゐる軍人になる爲め今兄樣の勸め先なる江田島の兵學校に入り、卒業して立派な海軍々人となつて、兄樣と共に御國の爲に働くやう、それを樂しんで待てゐる」と仰つて下さいませ、此寫眞は御上命の參りました日、紀念の爲めにと二人とも態と平素の儘を撮りました、御覽の上は時雄に遣つて下さいませ、荷造りの爲め取ちらしてある眞中に、ちよんぼり坐つて可愛い時雄の忘られぬまゝに急ぎ認めました、いづれ任地より又委しく申上ます。

藹然たる姉弟の情誼、女性の柔しみが紙表に溢れて居ます。猶ほ此人の「中學に在る弟へ」と云ふのも同樣、涙こぼるゝまで優さしいものでしたが、あまり長く規則を越へて居たので殘念ながら出すことが出來ませんでした。(評)

○兵營内の人へ

山口 酒向敏子

其後は御氣分如何におはしまし候や、打絶えて御便りだになく、いかなる御事にかと一同御案じ申上候。過る三日もお休暇の由、新聞にて知り候ひしを、實に當日は用事これあり候て町迄出で申候處、あなた樣と同じ肩章のお方の樂しく嬉しそうに、三々五々濶歩さるゝ樣を見受け候。私には只々なつかしく且つはアラッ日曜は六日だのになぜ今日はこんなに歩かるゝ事やらといぶかしう思ひ乍らも何となう嬉しさに、ところ〳〵胸をひしといだきて急ぎ用事もそこ〳〵に急ぎ心地にかへり申候處、あはれ勢も張もあらばこそ、やはり

室内はひつそりと人の來しけはいだになきのみならず机上のつゝじはこぼれて我を待ち遠う顔に見受けられし樣の一しほ悲哀を覺えて前後不覺打伏し候。敏子がありさま何卒御推察下され度候。

次の日曜にはお邪魔にと仰せられしより日曜は七度もこれあり候ひしに……とは御恨み致すものゝ、もしや引續き御さえ／＼しからぬやうの御事には候はずやと思へばなか／＼に御恨みも申上かねて我この筆こそ恨めしう候へさりながら給はりしふるき御文にぐちこぼし居り候、私が心中御推察下され候はゞ本意なうとは申上ぐまじく候よ。

おゝなつかしやいづくよりかとびに來けん、梅が木の間を縫ふ初ほたるよ、我そもひかりこぼるゝ此露の玉せめてもの此ほたるに見すべく惜しけれど書くに力なければこれにて筆とめかくは御伺ひまて、かしこ。

敦厚摯實、恐らせ候ともなく／＼になつかしいところがあります、と云ふのが要するに眞情から出たものがいゝからです、しかし此文末段螢の條は無い方が宜い。（評）



野良踊り　豊橋　藤城のぶへ

○根室より　根室　多田よし枝

御地にははや單衣召されしとや、げに青葉の匂ひすが／＼しく見るもの悉く希望にみちざるはなく新らたに織られし手製の藍の香高き單衣に身も心もかろやかに早稲の上渡る涼風に袂なびかせつゝそゞろ歩きし去年こそ偲ばれ候かな、こゝにて單衣きる日はまだ遠き先の事にて、目下綿入に襦袢二枚にて日中日向に出て張り物などいたし候はゞ少々暑さを覺え候へ共、朝夕は肌寒き程に候。

御地にてあやめのおはり候頃を、こゝにてはやう／＼

櫻の二三日咲き申候、こゝの櫻と申すは金比羅境内に唯一本あるのみにて候（周圍五尺許）、わづか一本とは申せこゝにては珍らしきもの故、見物に杖曳く人多く有之候、此櫻は山櫻にて土地適せぬ故にや、花瓣の形やゝ異りをる樣に存ぜられ候、御參考までに一輪封入いたしおき候。

又俗に國后櫻と申すもの有之候、そはかの千島群島の南端國后島に盛に生ふるものにて丈は高々一間位に候根元より枝をはらし葉の色は極く薄く、その形は恰も梨のそれの如くに候、山櫻の變ぜしものかと存ぜられ候、これ又一輪封じ込め申すべく候。

いまだ畑よりは新作物出で不申候へ共、野生の山ボタン、コゴメ、ナヽツバなど申すものも舌つゝみうち申候。

妾こゝに參り候て已に半年、いつしか土地にもなれ申て、をかしき根室語の我知らず口よりいづる事まゝ有之候、昨日なども湯やにて知人と會し「まあこが（赤兒）さんの大きくおなりなすつた事」と申候て、人知れずをかしさに腹かゝへ申候、又何でもなき事を語の解り申さぬ爲めくりかへし〱きゝ後より失笑する樣の事も有之候、とにかくこゝは諸國の人の入り込みし處とて言語の不解なるには今なほ閉口致し候。

僻地はやがて青梅の季節と相成り申すべく、かつては袂のそこに二ツ三ツしのばせて、翌日お腹のいたみに堪へかねて白狀せし事も有之候ひしが、こゝにはなければ、そが却つて幸にて候、有りさへせねば喰べて身をそこなふ樣の事もおはさず候へば、呵々

御身御大切に遊ばさるべく候かしこ

「櫻あるがさびし北地の遊園地」とか云ふ句ありと覺えぬ。形ばかりの花咲く頃、本土の藍の香高き手織の單衣や、あやめの花や青梅を思ふまことに趣味津々として湧き出て來る。（評）

○都の兄に　大阪　木村花子

庭の枳殼の芽が雨を含むやうになりましてから、まだ旬日を出ませんのに、もう此地では五月雨で毎日〱鬱陶しう御座います、昨日の夕暮でした。苔の衣に圍くなつた飛石や、花の散つた躑躅や、池の菖蒲に散る雨を眺め乍ら、何か作らうかと思つて、筆を持つたまま原稿紙と睨見合をして居ましたが、やがて一行書いては消し、二行書いては消しする程にいつしか紙は眞つ黑になりましたの、て、もう飽々しましたから、筆を投て又庭を見ましたが、物の一時間も經つてから、勞れましたので机の上にぐつたりと、臂を折りました拍子に、黑々と塗られた紙の面が、漆の樣に光るてはありませんか、ふと好奇心にかられて、眞正面から見ますと、たゞ黑い計りて光りませんの、つまらない事てすが、何だか面白い意味がある樣に思はれてならないものですから、一心に考へて見ましたが、何うも思

何せぜんの、譬だと云ふ人生も、殊によつたら此道理てなどと大それた事ですが、思浮びましたので、御伺ひ致します、馬鹿なと御笑ひ遊ばすでしようが、御暇の時、兄樣の欲しい御觀察て、何か書いて御送り下さいませ、私も兄さんの哲學とやらにかぶれ初めたのではありますまいか、今日も昨日の樣に机に凭れて之を認めましたの、申後れましたが兄さん梅雨ですよ、御不養生をなさらぬ樣にねえ、御願ひ致しますわ、かしく。

こちたき手紙、面白し、但し成るべく兄さんの哲學とやらにかぶれないで讀むものならばまう願ひたいもので。（評）

○母上に

鳥取　ゆかり子

久しく御無沙汰をいたしまして何とも申譯が御座いませぬ、其後御地ては御母上樣御始め皆樣がお變りは有りませんて在らつしやいますか、二三日此方はめつきり暑さが加はりました、私し方ても今朝はすつかり衣更へをいたしまして、身も心もすが〳〵しうなりました樣な次第……吉田も當夏は至極く壯健て御座いまして、朝夕は家事何くれとなく心付けて頂きますので勿體ないながら喜んで居ります。喜夫も大分成人いたしまして大人らしくなり、お下げの淑子と同道にて登校の後姿など見送りましては行末の事などそゞろに心に浮びまして、思はずほゝ笑む事も御座います。喜惑も此頃は足が餘程たつしやに成りまして草履などはいてかける樣に成りまして「おつぱい頂戴」などと口もよくもとをり出し愛らしくなりました。ほんとにお母樣のお目にかけ度くて今から暑中休みばつかりを子供と一所に成つて指折り數へては吉田に笑はれて居ります。

ほんとに三人の子供丈けても私の骨折りは一と通りては御座いませんのに、本年は雞を五十羽餘りも飼つて居りまして朝夕の出し入れ丈けは喜夫が致しますが之にもなか〳〵手かずがかゝります、其上洋犬が子供を七つも產みまして皆元氣に育つて居ます、私しは丸て子供責めに逢ふ樣て御座います。それても此洋犬の子は種がいいので二三ヶ月も飼つておけば一四五十圓位には賣れるなぞと吉田は一人大喜悅て御座います。いつかお話し申上ました苺が此頃よくうれましたので少々ては御座いますがヂャムにしたのを昨日お送りいたして置きましたから御風味遊ばして下さいませ……お氣に召しましたら又お送りいたします。子供を遊ばせながら書きましたので大亂筆ては御座いますが御許し下さいませ。

家庭的好書簡（評）

○京都の乳母に

本所　橋田倭文子

巡査さんの白服見ましたら、急に暑くなつた樣な氣が

致しました。御宅でも皆々樣御變りもなくて御めでたう。

昨日は、御心盡しの豌豆と蠶豆、澤山に送つて下さうて、ありがたう。ほんとうに、あれだけむいて下さるのは、一通ぢやなかつたでせうね。

何だかから風のない靜かな宵、緣側で大きな籠に豆を一杯入れたのと、他にはめさるやら、桶やら並べて、乳母はもとより、熊さんから安吉どんまで御手傳ひて、せつせとむいて下さる。そして、あの可愛いお河童のお芳ちやんが、私もむいてよと、交ぜかへし半分に、紅葉の樣な手をして、むいた豆は入物に入れず、コロ〳〵と轉がしてゐる樣子があり〳〵と見えてよ。あゝえん豆の匂かぐ度に、乳母の甘いお乳の樣な氣がしてなつかしくてならないの。こんな事云つてると、いつ迄も、子供の樣に思つて居なさるでせうが、私も、もう女學校を卒業してよ。

蠶豆は、小林の叔父樣大好物ゆゑ、早速持たせてやりました。

何故東京では、あんな美味しい豆を作らないのでせう。都會の人は、文明だの改良だのと騷ぎますが、田舍の人殊に、京都の百姓などは、昔からの土地を後生大事にして、あまり踏出さないからでせうね。

六月五日、丁度明日は御祖母樣の御命日よ、だから私誰にも手傳つて貰はずに、えんどうの御飯たいて差上ませう。豆の御禮がとんだ御說教になりましたね。何卒熊さんにもよろしく。さよなら。

かう云つた御禮を受けたら、定めし泪をこぼして、乳母やも喜ぶでせう。（評）

○鈴の子にそへて

靜香

花子樣春も中ばとなりました、山に近く町に近い片田舍では今は茶もみの最中です、淋しい〳〵と思つて居ました私も此頃は滿足してゐます、節面白い茶もみ唄の絕えまがないのですもの、花子樣今日はあなたにお初の物をお目に掛ます、何事にも氣のお早い花子樣名をあてゝお覽なさいませ、なんぼ花子樣だつて之はかりは御分りないでせう、小さい〳〵筍です可愛らしいでせう、之はね鈴の子と申しますのですよ、花子樣のやうに都育ちの御方は御存じないでせう、私なども十二年ぶりに見ましたのです、私が六つ計りの時でした兩親に連れられて當地に參りました時初めて之を味たのでした、十二年ぶりに又此山里に參りましてこれを味ひますとは何とも云へぬなつかしさて御座います、小さい筍〳〵と云て私の非常に好物てしたそうてす、これはね普通の筍と同じやうにこのまゝ糠を入れてゆがいて後皮をむいて料理するのて御座います、筍より

は味がよさそうです、一寸見ましたゞけでも可愛らしいのでおいしさがまします、おゝそれ〱思ひ出しました此鈴の子の大きく成た鈴竹と申しますのは御内のお孃座敷のそれよくお琴のおさらへをして居ましたあのお間の丸窓に白い竹が使て御座いませうあの竹がこの鈴の子の大きくなりました物で御座います、鈴の子はね澤山の〱大蛇でも居さうな處に出來ますので御ざいますつておや〱なが〱と自慢ばかり申しましてどうか頬を落さないやうにお味ひ下さいませ。

麥こがし送るのにはこんなに書かねばならぬ……否かう云つて呉れた方が面白い、貰ふ方でも(評)

○麥こがし

伊豆　木村綾野

良人樣。あなた昨晩好い夢ご覽になつたてしやう。荷物が前につきましたてせう。出國に急はしい此頃の、田舎の送り物ではまづこれ位な物です。田螺はございませんのよ。此こがしね、私がお手傳して作らへたんですの。うそじやございませんよ。お笑ひ遊ばすな。作といふ婆さんがね、御門内の廣場で、重さうに眞赤な顔して麥ついてゐましたの私共の國ぢやカラサガチですわね。こゝいらは面倒な事するのよ。私ね餘り重さうだつたから一つ力一杯出して見事に搗いてやりませうと思つて、婆が一ぷくしてるまに一寸やりましたの。杵は輕いの、重いかと思つて上げたらひつくりしてよ。でも上手に高く上らないの、其格好て隨分おかしいんてすつて、皆がはやすの、腰がかゞんだ儘搗いてるんてすもの。てもゑらいでせう、一うすついたんでてすもの。婆さん喜んてますの、私大手柄したつもり。初めてお百姓ぶつたのよ。昨日一日灯ともし頃までかゝつて挽きましたの四升ひいて一升貰ひましたの。喰べきれないのよ。お裾分します。それや甘しい事。だつてね少し面倒だけど豆の粉混ぜたから。あんまり頑張つてお口を粉だらけにしない樣に。さよなら。



一休み　插圖原田文子

お伽噺

懸賞小說選



○乙鳥のお土產（天賞）

上毛　卯の花子

或る原の中に一軒の家が有ります、此家には一人の慾深な婆さんが住んで居ます。で每年春になると、此慾深な婆さんの家へ乙鳥が來て、巢を作るのです。今年も最ふ巢を作りました、と或る日の事慾深婆さんは巢の下へ行つて「オイ乙鳥、己は每年此の俺の家へ來て巢を作りペチャ〳〵騷ぎあがる、喧ましい、が別に邪魔にもならねえから默つて居たが斯う每年來るんだら一度位土產を持つて來ても良いぞ‥‥まあ今迄は許してやる、だから明日の正午迄に此俺に世の中で一番味い食物を持つて來い、若し持つて來なけりや己が巢を叩き毀してしまうぞ」と言いました。すると乙鳥は「ハイ〳〵明日はきつと持つて參ります、だから巢はどうぞ壞さないで‥‥」と言ひました。

其日は暮れて翌日になつた、乙鳥は婆さんが戶を明けるのと一緒に外に出ました、婆さんは「ハヽア俺が彼の樣に言つたら今朝は早く出て行つたな味いのが取れゝば良いが」と言ひながら待つてゐました。

正午になりました、が歸りません、一時になりました、未だ歸りません、二時三時、やつぱり歸りませんと、婆さんはヤケになつて「畜生來やがんね　巢を叩き毀してやれ」と言つて棒を持つて來て、壞し始めました、すると乙鳥の巢から、バタリと何か落ちまして婆さんは見附けて拾つて見ますと一ッの袋です。で中には何か入つてるようです、婆さんは開けて見ました、すると中から一匹の蛇が出ました、それは美しい。諸孃ならさぞ驚いて、人でも賴んで捨てゝ貰ふてしよう、が此婆さんは元來慾深ですから驚きもしないで「ヲ

○規定　新しきお伽噺を作ること土地の口碑傳說を採用して材料とするは宜しけれど既に在るお伽噺の燒き直しは許さず二十四字入十行以內凡て振假名つき罫紙又は半紙に認めること賞は乙種を送呈す

蛇が出たぞ、此麼美しい……此れはきつと乙鳥が昨夜取つて來たんだ、でも蛇なぞ……否々これは俺に(此れは世界に二つと無い蛇だ、大きくして見世物に出せそうすれば金錢が澤山出來るから)と言ふ譯なんだ、それにしても餌が要る……そうだ蛙でも取つて來てくれてやれ」と思つてそれからは毎日蛙を取りに行きました。が蛇は蛙なぞ食べません、婆さんが、蛙取りに出て行つた留守、婆さんが大切に大切にして居たお米や何かを食べるのです。ですから蛇は矢鱈大きくなります、婆さんは大喜び。此麼風て



二十日許過ぎました或る日の事、例ものように蛙を取りに行つて歸つて來て家へ這入ると、これは不思議！座敷の眞中に、美しい〳〵着物を着た、お姫樣が座つて居ます婆さんは別に驚ろきもしないて、慾深の事てすから、「あのお姫さん俺に何か持つて來てくれたのかそんなら有難いが……でも何處から來たのか聞いて見よう」と思ひながら「此れはお姫さま、何處からお出てなさいました」と恐る〳〵尋ねると「否、妾はお姫樣でも何でもない蛇てす、其の婆さんが毎日蛙を取つて來て食べさしたが、妾は蛙等食べ

ません、婆さんが大切にして居つたお米や何か食べました」と言ふと婆さんは顔の色を變へて「何！畜生俺が米を……」と言つて怒り出しますと「まあ怒らないで下さい、其の交り良い物を上げるから」と言つて懐から二ッの袋を出て「ホラ此れです婆さんは妾を、乙鳥の土産と思いましたが此の袋がホントの土産です、て一ッは味いものが何ても出るし、一ッは不味い物又毒な物何ても出るのです、どちら食べるのも婆さんの勝手、此れを二ッ上げます何でも婆さん慾深な事はするものじや有りませんよ」と言ふかと思ふと消てしまひました。と婆さんは、ポカンとしましたが間もなく「ハッア蛇がお姫さまに化けると言ふがホントだな、まあ有難い、一ッ出して食べて見よう」と言つて「味い物出ろ」と言いますと成程出ました、パンの様なものが婆さんは食べて見ると味いのです、婆さんはたいそう喜こんで、其れからは毎日味い方ばかり食べて居りましたが、或日の事、此れは味いものがたいへん出るが、どうも矢鱈食べるのは惜しい、此れからは不味い方を食べよう、て味い方は一月に一度位食べて……まあ不味い方を食べて見よう毒など有りやしないや、きつと」と言つて「不味い味い物出ろ」と言ひますと出ました、婆さんは早速食べて見ますと不思議！不思議！婆さんは目玉を白黒させて見る間に死んでしまいました。きつと毒が有つたのでしよう。

（評）兎角人事を主としたものが多い中に之は動物に人事とを合せて何となく目先の新らしい感じがします。

○黄金水（推賞）

栃木縣　細井小夜子

或處に一人のお嬢さんが有りました、其のお嬢さんは三月なりの優しい眉、凉しい目、愛らしい締りのある口、誠に美しい顔容て有りましたが、只惜しいことには、色の黒いことで有りました、其れも顔ばかりては有りません、體中さうなので有りました、それで誰てもお嬢さんを見た人は「嬢て色が白かつたなら、甚麼にか美しい嬢だらうに……」と言ふのでありました。丁度其の頃、其の國の王様は皇子様に、お嫁さんをお娶りになると云ふお觸書を、國中へお出しになつたのです、其のお觸書には、色の眞白い美しい處女でありさへすれば、門閥などは構いませんと、恁う有るものですから、諸方の美人が競つて參りますが、皆んな色が黒いからと言つて返へされて終ふのです、お嬢さん

は恁う云ふことを聞く毎度に、鏡に對つて泣くのでした。今も丁度鏡に向つて泣いて居りました。

「什麼して恁麼に黒いのだらう？」と、鏡に映つた涙に潤んだ自分の顏を瞻めて、優しい手で頰を撫でながら、

「色が眞白かつたならば、皇子様のお嫁に參つて見るのに……何んで恁麼だらう」と、無念さうに獨言をしまして泣き崩れました。

其れからと云ふものは、色の白くなると、名のついた藥や洗粉や、其の他あらゆる品を使用つて見ましたが、毫も効能が有りませんでしたものですから、到頭可憐想にも、泣き出しさうな顏をして、自分で其の藥を探しに出掛けました。險しい山を攀じ登つたり、下りたり、谷川を渡つたりしまして諸方探しました、其の探し廻つて居る間でさへも、何時皇子様のお嫁さんが出來ますか知れませんものですから、心配で〳〵お孃さんは、道遇ふ人毎に「皇子様のお嫁さんは出來ましたか」と、恁う訊くので有りました、訊く度毎に「未だ決定りません」と云ふ答を聞きまして、非常に安心して悅んで居りましたが、色の白くなる藥りは、什麼しても見付りませんで、却つて漸々と日に燒けて黒くなる許で御座いました。丁度三年目の春になりました、お孃さんは相變らず苦辛を凌いで、疲れ極つた體を、ヨツコラ〳〵と、探し廻つて、長閑かな春の美しい景色をも振り向きもしませんで、若葉の影に崩れるやうに、腰を下しまして「もう駄目だ」と頻りに思案へて時々太息をつきまして、濶れかへつて居りました、其の時「もし〳〵お孃さん」と後の方で呼ぶものが有りましたものですから、不思議だと思つて振り返つて見ますと、其れは〳〵色の眞白いお婆さんが微笑みながら、綺麗な壺を持つて近寄つて來るのでした、お孃さんはお婆さんの白い顏を、羨ましさうに瞻めて居りました。

「お孃さん！能う辛抱して下さいました、丁度今日で三年目ですよ、お孃さんのやうなお方こそ眞實に、皇子様のお嫁さんに適當つたお方なのです——此れは黄金水と云つて、此の水でお洗ひになれば、其麼な黒いお方でも眞白くなる妙液なのです、此れをお上げ申しますから、萬望お嫁さんに行つて下さいませんか」と言ひながら壺を渡すや否や消えて仕舞いました。

お孃さんは固々嫁きたいものですから恁麼難儀辛苦をしましたのですから、夢かと許かりに嬉んだの嬉ばな

いのつて、直樣家へ飛ぶ樣に歸つて來まして、直樣洗つて見ました處が、不思議やお婆さんの言つた通り眞白く〳〵美しいお姫樣のやうに變化して仕舞いましたお孃さんは大層悦んで、早速皇子樣の御殿へ參りました、皇子樣も今迄來た美人とは違つて眞白く美しいかのですから、一も二もなく娶らうことに決定りました其れて立派な結婚式を擧行りまして、目出度妃殿下となられました。

（評）よく有る筋てはあるがすら〳〵と書き去つた手際は感服の外ありません。

○谷間の蛙（入選）

大阪市　西木むらさき子

或る谷間の水美しき邊りに、赤と青との大きな、蛙が二匹住んて居りました。赤蛙は中々意地の惡い慾の深い所謂利己主義といふ奴てす。青蛙は誠に温和しい然して親切な蛙てあります。或る日のこと、青は自分の住家を出て、彼所此所と逍遙ふて居りました時、苔なめらかな岩と岩との間に、蛙の最も好きなご馳走が澤山あるのを見付けました。青蛙は飛び立つ許り嬉しく思ひましたが、自分一人て、食べるのは餘りに勿體なう思ふて、直ぐに赤蛙を呼んて來ました。慾の深い赤蛙は、もう涎を流して直ぐにご馳走に飛び付きました。「ねエ青蛙さん、向ふの岩の間にも旨い香ひがするよ一寸見て來てお呉れ」と云ひましたので、正直な青蛙は向ふへ飛んて行きました。此れは赤蛙の計略で、青蛙が留守中に、其所にあるご馳走を己れ一人て、皆食べようと思ふたからてす。「さあ占めた、青蛙が歸らぬ間に乃公が悉皆食べて了つて遣らう」と赤蛙はぞく〳〵して居りますと、後ろの小笹の中にがさ〳〵と怪しい音がしましたので、不圖振り向くと細い長い、恐ろしい蛇が、鎌首を立て〻、のそり〳〵と、出て來るのです、赤蛙は、ハッと驚いて直ぐ傍の岩の中へ逃げ込みました。そんな事とは露知らずに、青蛙はあちらこちらを探し乍ら戻つて來ました「赤蛙さん、何處を探しても何もありやしないよ」と云ひつゝ、彼の恐ろしい蛇と顏を見合せました。青蛙は太く驚いて直ぐ逃げやうとしましたが、もう間には合は無かつたのてす蛇はとう〳〵青蛙を呑み込んで了ひましたが何しろ細い身體の蛇が大きな蛙を呑み込んだのてすから、見る見る腹は大きう腫れて來ました。蛇はやがて、谷川の邊りに咲いてゐる白い草花を一口呑み込むと、不思議!!

今迄腹の中に眠れて居た塊は次第々々に溶けて了ひましたので、蛇は其儘何處へか行つてしまひました。最前から始終の樣子を岩の間から見て居りました赤蛙は漸う出て來まして『ヤレ〳〵恐かつた、然しもう此れて安心だ、彼の馳走は乃公獨りで片付ける、若し過食して苦しくなつたら、あの蛇のやうに向ふに咲いてゐる草花を呑み込んだら、すぐに消化て了ふのだ此りや旨い事を覺へた。』と、ほく〳〵喜び作ら先刻の食ひ殘しを、うんと云ふほど詰め込みました、見る〳〵中に腹はふくれる、苦しいやら術無いやら、漸うの事で谷川の邊りへ這つて來て、彼の草花を一口ぱくりと嚙りましたがまあ！不思議、またゝく中に足から腰から、遂には身體一面水の樣に溶けて了ひました。最前蛇が呑んだ草花今、蛙の呑み込んだ草花は、食物を消化するのでは無く蛙を溶かす草だつたのです。

（評）短篇の中妙味あり教訓あり見るに足るもの、



金魚屋　挿繪　稗田みつ子

【秀逸】

○不幸な兄弟

駿河　千代菫

露チャンは今年七つて、圓顏の色の白い目のぱつちりした、それは〳〵可愛い子でありました弟に建チャンと云ふ三つになる子がありました母樣は三月計前に、フト風が出て床に就きましたが病は次第に重くなる計りてありました。父樣は元より幼い露チャンの心配は一通てはありません。露チャンは毎日建チャンの守したり母樣の御用をしたりして弛まず看病致しましたが、其効もなく十日計前にとう〳〵遠い天國に逝き

ました。母様が今はの際に兄弟を呼んで母様は逆も徒目だから是からは父様の云ふ事を好く聞くのですよ」と細い手を出して二人のお顔の紅葉の様な手を確かり握りました。此の時母様のお顔には熱い熱い涙が頬を傳つて居ました。ア、今迄可愛がつて下すつた母様は今を最期として名殘惜い別れを告げてとう〳〵永い眠に就ました。露チャンの嘆きはどんなでしたらう、父様は役所から歸つて來る毎に乾度御菓子を買つて來てくれます。建チャンは夕方に成ると淋しがつて「母チャン母チャン」と泣きますので露チャンは種々慰めながらつい自分も悲しく成つて建チャンと一緒に泣きました。或大變月の好い夜父子三人で緣に出て遊んで居りましたが、露チャンはフト母様の事を思ひ出して「父様母様は今どこに居るでせう」と聞ました。父様は悲しそうなお顔をして、露チャンのお頭をなでながら「母様はね天へ昇つてね、ホラ今お月様の傍に澤山お星様があるだろうアノお星様になつて居るのだよ」と言ひました。露チャンは熱心に天を見て居ましたが、だん〳〵目が疲れてついうと〳〵と眠つて終いました。フト邊を見ると今自分は建チャンを負つて淋しい田舍道をさ迷つて居ました。是に乾度建チャンがあまり「母チャン母チャン」と慕ふので、今母様の御墓に行く所でした。やがてお寺に付ますと、邊は木が茂つて居て薄暗く、其の中に未だ幾日もたゝない新しいお墓がありました。露チャンは走り寄つて建チャンを下していきなり「母様」と二人で墓を抱き占めて、暫くは聲もたて得ず泣きました。やがて露チャンは生きてる人に言ふ樣に「母様建チャンは毎日夕方になると母様をしたつて泣きます。私もつい悲しくなつて泣きます父様はいつもお目に涙を一パイ溜めて種々慰めてくれます、母様どうかもう一度家に歸つて下さい」と願ひました。そして建チャンのお頭を紅葉の様な手でなでながら「母様はねこゝから天へ昇つたのホラアノ美しいお星様に成つたのだよ私達も往たいね」と言ふと建チャンは小頸傾げて「ウン〳〵」と言つたそして二人はぢつと天を見て居るとお星様は銀砂子の様にある其の中で一番大きな・番美しい星がありましたので二人はよく見つめて居ると其の星がスーッと降りて來た次第に近づくのを見ると一人の天女てした。白い薄絹を着て紅の絹を上から白絹でおほつた様な顔の額にはきれいな星がありました、につこり笑つて二人の傍に來ました。姿こそ變つて居るが正しく母様でした、二人は「母様ッ」と叫んで飛び付ました。母様も二人を確り抱き占めて頰揩をしました、そして「お前達は好く來たね母様はやつと月姫様から少しの時間を戴いて來たのです」と言つて何か後の方から出しました。それは大變味のよさそうな果物やお菓子でしたをして二人にくれましたのゝ十分食べまして暫く母様に種々のお話をして戴きました、其內に「母様はもう時間が切れそうだからお前達は又お出で母様に會たくなつたら何時でもここえくれば母様も乾度來るからね是は決して病氣にならない藥だから家へ持つて往つて父様にも上るのですよ」と言つて小さな包をくれました。そして二人のお頭をなでて名殘惜そうに、天に昇りましたので二人は急に悲しくなつて母サーン」と大聲で叫びますと、不思議にもお父様のやさしいお聲で「露チャン目が覺めたかね」と言はれて、フト目を開くとアア今迄のは夢でした」露チャンはボンヤリして傍を見ると建チャンは天使の様な顔をしてスヤ〳〵と眠つて居ました。

（評）何となく悲觀的のものですが、少女には或はかう云ふのが好かれるかも知れません。

教への庭



○規定　此欄の投稿は女教師の方に限る十六字詰十行賞は同賞

○發音教授（入賞）

岩見　德子

今日は新文字ゲの教授、先づゲタにつき發音を明瞭にせんと、掛圖を示し、是れは何でありませうか、直ちに生徒「ドウジマデアリマス」さて困りました、下駄と答ふる者は一人もない、然うでない下駄だとは云はれん、曖昧に附しても濟けんので今度は下駄一般の構造より漸つと滿足が出來ました。

○唱歌室

京都　春日朱鷺

毎日々々五月雨が降つて陰氣で困ります。オルガンでも彈いて氣を晴らさふと、明日の教案を校長の机に差し出してから、唱歌室へ參ります と窓から裏の墳墓が累々として新しいのや古いのが眼に這入ります。あの中に山陽先生が御書きになつた、桜川君の碑といふのがあります。此人は生前お醫者であつたさうです。壁生々した若葉が漏れた障子から覗いてます。い鍵をやつと開けて白鍵を指の尖で輕く押さへると、またあめがしと〳〵〳〵と降つて來ました。まあ、この蚊の酷いこと——。

○先生

紀伊　女郎花

子が持つて知る親の恩とはよく云ふ事だが又子を持つて知る親心である。私は先生と云はれる機になつて始めて、先生の有難さも分つたが始めて生徒可愛さも知つた。例へば兒童に怪我した者在ると云へば吾教子では無いかと思ひ、悪戯する者あると云へば先胸轟かす、又他人が受持の兒を批難すれば、辯護の一つも仕度なる、そして、學年の終に引渡す程つらい者はない。吾愛兒を人に取らるる心地して。

○愛らしき歌

近江　よし子

先日尋常一年生に兎とかめとの歌をうたはせましたら、小一と云ふ子が、「これは、はすぎたしくじつた、ヒョン〳〵」と云ふところをさもとくいさうに、「ペロンペロン〳〵」と云ひましたから皆大笑

○謝罪

信州　野中たけ子

『誰かの事を先生に告ぐよ……』と大層はやして居ますから、妾は何かあつたなと思ひながらガラッと戸を開けますと、楓の様な手が三つ四つ上つて居ます。妾は先づ靜ちやんに聞きますと『私が次郎さんの足を踏みまして謝りましたのに次郎さんは私を打ちました』と告げます。妾は『それは次郎さんが不可ない、ちやんと謝りなさい』と申しますと、次郎さんは席を立つて靜ちやんの傍え行きおじぎをして『靜ちやん私が惡く御座いました。ゆるして下さいませ』と本を讀む調子で、謝罪しました。

○時間外

福井　明星

私の學校では、毎土曜に科目外の時間が特にある。此時間は全兒をたまり所に集めて、各各のふしぎを聞く事に定めてある、がいつも山程の問あまりいろんな事まで尋ねその て面白い様なこわいよう。一年なぞは皆問ふものだからすまぬ顔付で、目をくろくるまわしてゐる、中に一兒童が畑先生に向つて、先生の お顔に青いとこありますのはなんです、とさも平氣に、——

○向上心

恒子

恒子或休みの時間に一年生がたくさん私の傍へ來ました。すると清一といふ無邪氣な子が、切りに自分の頭を撫てゝは私の頭上を見て居ましたが、突然右手を上に差延して「まだいけない」とさもがつかりしたらしかつた其中に私が蓋を見つけて腰を折りましたら、「アヽやつと屆いた」とひとりにこ〳〵して言ひました。

少女文壇



○規定　本欄は十五歳以下の少女に限り投書するを得文章和歌俳句唱歌等を採用す年齢及び住所姓名學校等を明記すること用紙は半紙賞は丙種を呈す

○蝶（地賞）

遠江　鈴木りう子（十四才）

私の家は不しあはせてす、一昨年私を生だ母樣は死で行きしました。父は昨年又母樣をむかゑたのてす。私にはまゝ母てす、又先月の初めに父樣も逝かれたので、私は學校々午後にしまつて來ては、父上樣の御墓に參りに行くのです、父の墓に默つてゐると美しい蝶々が舞つて來ては、又他の蝶が舞つて來る。又何地へかゆく、私も蝶の樣にひら〳〵と舞つて行きたくなつた。

まことに少年の悲哀（評）

○和歌（人賞）

信濃　野中小よせ（十二）

むらさきのはかまをはいて先生が朝日さす野を歩いて來ます

子供らしい歌（評）

○好きな花

高知　智恵子（十三）

夏さく花て、一番すきな花は、お父樣はぼたん花やかなのが好きて、雨の日等は、御自分のぬれるのもおわすれなさつて、かさきせかけていらつしやいます母樣は、丱の花、ちえさんの色もあんなに、白いといいれとおつしやる、兄樣は、あさがほ、盛のみじかいのがいい、と姉樣は、岸のほとり、青葉がくれに、き色にさいた河骨の、私は白百合の花、私もこの花のやうにと、いつもおさげに、さして居ます、

○かほみてにこにこ

ハリマ　高松しな子（十才）

ただいまかへりましたといつて、おぢいさんのおへやへ行くと、めがねかけて本をよんていらつしやつたおぢいさんは、私のかほをみて、いまかへつたかとおつしやつて、いつにないにこにこがほてあるから、私は、おぢいさん、おすきのおさけのんだの、とたづねましたら、いゝやとおつしやいました、おまへにごほうびがあたるのよと、いつてゑらいものになつてくれよとにこにこしてあたまをなでてくださいました。

○花ちやん

滋賀縣　杉野葉子（十三才）

「花ちやん一寸いらつしやいな」と私が申ますと「ハイ」と返事して、やがてパタパタと小さい音をさせて來ました、花ちやんの手には、義兄樣がお土産に下さつた、お人形さんをだつこして居ましたから、

「其のお人形さん見せてよ」と、言つて、取らうとしますと、「あら姉ちやんひどいわ今赤ちやんがれんれしたとこだのに」と、申ましたので私はおかしくて〳〵たまりませんでした。

○朝

佐世保　古賀年子（十四才）

「はとポッポ〳〵お寺の屋根から降りて來い」と妹の友達が二三人歌つて居る、はとは驚いて逃げて仕舞つた、歌はハタとやんだ今朝はおそい樣だ、が、やうやく六時半だ、向ふのまま母が子供を叱つて居る子供はオイ〳〵泣ながら裏へかけ出した、おほかた朝寢坊をしたから、氣色が惡いのだらう。

○髪

靜岡市　鈴木ます子（十四才）

「今日はハイカラなマガレツトーにれ、だつて毎日束髪ばかり結つて居たんですもの、もうあきてしまつたわれ、おれがいたから結つて下さいな」つて云ふとあんまり眞面目だつたので皆んなに笑はれちまつたわ、女中のおタツ迄くす〳〵笑つて居るんですもの、私口惜しくつて〳〵二階てさんざん泣いた。

新歌謠



○規定　古來の俗謠の形式を取りて專ら優美洒脫なる作を歡迎す投稿者一人一章限りにして半紙又は罫紙に認むること丙種の當な送呈すべし

○（推賞）

金の扇をひろげたやうに月が上つた女松原　下谷　田代房尾子

新らしくは無いが感じが好い、（評）

○（人賞）

青葉がくれの小暗き坐敷伊勢を枕に夢を見る　藤澤　常盤幸子

夢は八橋か武藏野か、（評）

【秀逸】

○ 裏の川邊に卯の花咲いて清き流れに夏が來た　美濃　古田俊子

○ 人の氣配に背戶押し開けりや月に光れる磯の波　播磨　永田喜代子

○ 傘を傾け振り向き見れば柳がくれに虹の橋　信濃　紅ばら

○ かりがと飛立つ田の足あとに芹がもえ出す春の雨　白井綠風

○ 躍る大波這ひ寄る小波沖ぢや蹴上げる月の毬　靜岡　池田芳子

○ 蛙啼くなよ啼かずにおくれ思ひ出します國の母　神田　三好富美

○ 君に逢ふとて此處迄來たが月が笑ふ樣ではづかしい　伊豫　浮草

○ 靑葉若葉の匂へるなかを靑い光りの螢飛ぶ　常陸　木村那賀子

○ 阿蘇のお山に黑雲かゝる麓七村雨が降る　大阪　西戶政江子

○ 藤の瓔珞躑躅のはかま今日も見えます山姫が　秋田縣　櫻井了子

○ あふぐ絲の團扇をそれて月にかくれた江戶螢　美濃　ときわ子

○　伊豫　鈴木ゆう子
苫をかすめて啼くほとゝぎす月にあかるい瀬戸の海
○　四谷　桃子
浮世はなれた山ふところの霧に育つたか百合の姫
○　牛込　小野寧舜女
べにの扇が少しく洩れた妹が小袖に夏の風
○　京都　春日桃牛
銀がとぶ〳〵青野の果てを白いリボンが飜へる
○　信濃　山西照子
行くに行かれず歸るは出來ず私一人で泣いて居た
○　秋田縣　北林まち子
田舍小女に薫りは無いがおもて豊かな蓮の花
○　神戸市　落葉子
恥しいとてあみ笠被ぶり月の淺瀬を馬で越す
○　下總　月沖さゆり
あやめかざせばまこものなかの潮來女を思ひだす
○　伏見　幸子
暮れりや蚊が出て夕顔咲いて川にや涼みの舟が浮く
○　鎌倉　上原露葉子
船頭やさしや柳の糸でつなぎとめたよ渡し舟
○　大阪　平尾とき子
花に迷ふて浮かれた蝶があはれかゝつた蜘蛛の巣へ
○　丹波　鹽見喜代子
露の玉散るこの蜘蛛の網を衣に織りたや山賤の
○　信州　野中たけ子
青葉がくれに白馬曳いて赤いたすきの馬子が行く
○　大阪市　木村花子
姉妹五人が皆湯あがりの顔を並べた夏座敷
○　香川縣　子松さと
宵はゆた〳〵腰はゆらぐ鼓うて〳〵月が出る
○　茨城縣　日野信子

鳥羽の御殿の連歌に更けて戻る月夜路ほとゝぎす
○　濱松　中村千代
濱名荒海三人の船頭いきな聲ぶし櫓がしはる
○　大阪市　鹿島綾子
垣の朝顔色さま〳〵に瑠璃も絞りも一夜染め
○　神田　三好富久子
妹可愛や紅葉のやうな可愛手をして蝶を取る
○　埼玉縣　青葉女
山のほとりの私が家の白いつゝじが花ざかり
○　茨城縣　寺門つち子
桐の花ちる明家の空を鳳凰舞ひ下る
○　紀伊　白萍子
百合にそへたる玉章も露に濡れて文字までにじみ勝ち
○　常陸　春野あさ子
蚊帳すゞしや秋七草を亂れ咲かしたすそ模樣
○　札幌　杉菜女
青葉七重も八重にもかこむ中にや戀しい母の家
○　熱海　土屋さゝ川
桔梗尾花に雨降り濺ぎ露もいろある野の面
○　下關　阿多貞子
淸い瞳の星樣訪ひに渡つて行きたい虹の橋
○　德島縣　吉田古扇
かくしかくして見せない箱をそつとあけたら京市松
○　長野　山口破寛子
姉と妹が君が代歌ふ調べ合せて春の雨
○　韓國　原とり子
韓童可愛や牛引いて歸る夕日斜に山に入る
○　牛込　藤原けん子
霧になりたやあの故郷の方へ流れてゆく雲に
○　奈良縣　中富よしみ
大和紀州を片足づゝでふんで休むか峠茶屋

笑話



○規定
面白い話なれば何でもよし實際の話でも一口話でも隨意なり賞丙種

○雪枝ちやんのお家（人賞）

横濱市　小田切錦子

此間だ初めて行つた、呉服やへ今日又、出掛たが其店がどうしても、見當らないので、乾度町を違へたのかと思つて、或る門の前に立つて居た少女に（こゝはどこですね）と、聞くと莞爾として、（あのーこゝは雪技ちやんの、お家なのよ）と。

○上手なお口

山城　木の花

一枝様五月の検定試驗はどう……。私尋常本科正教員を受けたらよかつたわ、餘り安かつたので……。

孫子様は……。

あら、私誤解してよ、尋常准教員なんて受けるもんぢやないわ、一枝様！

○八年振り

近江　石川大子

甲乙八年振りに出逢ひ

甲「ロ――久し振りでの

乙「久し振りやの君は全體何歳になつた

甲「廿八歳になつたよ

乙は指おりかぞえて

乙「僕も歳をよつたがやはりまだ君のが三つ上だな！……

○誑もの

熊本　哲子

「私今日獅子を見てきましたよ、あんなのは又と見られないから、ぜひ見ておいでなさいよ、」「でもれあれはライオンだと申しましたよ」「あらまあ……今の世の中はだましものばかりですれ」

○感心

信濃　保科せい子

皆様、支那人だつてチヤン〳〵だとかチヤンコロだとか云つて馬鹿には出來ませんれ、だつて日本の本字なんかズン〳〵書くんですもの、實際あれには感心して居りますよ。

○頭の光る人

徳島　西野ひさし

娘「お母さん昨日の音樂會ねえ、頭の光る人が澤山來てましたわ」

母「まあそう、そんな老人がヴアイオリンやヒアノなんか聞てわかるのでせうか」

娘「あら、お母様そうじやないの、チツクで頭の光る人なのよ」

○きそば

千葉　鈴木みつ子

生徒「先生、蕃蔘はどこから生れるですか

先生「蕃蔘は生れるてはありませんよ

生徒「でも看板に生蕃蔘と書いてありますよ

○好きな唱歌

青森　林　ちゑ子

姉「正ちやん、何に明日歌一番好さなの

妹「私君か代一番すきよ

姉「でも正ちやん君が代が厭だといふくせに

妹「だつて君が代を唱ふ日には學校でお菓子をくれるもの

○母の名

大阪　森山百合子

君雄が「お母さんの名は奥さんがほんとうか、おつかさんがほんとうなの？つていつて大笑ひいたしました。

○首出し

藤澤　鳥居俊子

先達、私が郊外より歸宅して弟に母様はと尋ねますと、母様は丸山さんの家へ、アノネ……アノ……島渡首を出しに行つたの、て大笑ひしました。

○眞面目な滑稽

熱海　土屋さゝ川

運座會の晩、難題でどなたも口をきかずにお考への時、騒しい法界屋の流しが、來ましたので『おゝ入釜敷い』と皆様が一様に眉を顰めましたと眞面目て有名な秋頭さんが『おゝ發句でもやればいゝに』と申しましたので一座崩るゝばかりの大笑ひ。

○小判

佐渡　臼杵さだみ

私學校から歸つて見ますと、健ちやんが切りに畑へ翌を埋めて居りました、何するのと聞くと『將來に小判が澤山できるよ』と莞爾致しました……

○口と耳

岩手　清子

妙ちやんが、榮ちやんの耳に口あてて何かさゝやきました。小さい榮ちやんはうなづいて、玩具箱から何か持つて來ましたが、今度は急いで妙ちやんの口に自分の耳をあてゝ、コソ〳〵物かいつてるのです。私は思はず噴き出しました。

女子衛生問答



產科婦人科專門
醫學士　北島孝夫述

○規定　女子の身體に就て衛生生理疾病等各種の質問に應ず薬齒養支なし、毎月一日〆切翌月發表す

第百二問　避姙法　姙娠を避けるにはどうしたらばよろしきか。（千葉、よし子）

答　避姙法は醫師としてその適應症を認めれば行なふ可からざる事である例之ば骨盤の絶對的狹窄の如き場合に於ては普通の產道より分娩を爲し能きを以て余儀なく手術（危險多き）に據りて送娩せしめねばならぬ如此婦人にして姙娠を繰り返せば毎時危險に瀕接するの恐れあるが故に醫師として必要上避姙法を提供する次第である醫士として之を認めざる限り避姙法を示す事は成り兼ます須らく熟考せられよ思ひ半ばに過ぐる事あらむ。

第百三問　無毛　おはづかしいですが私は二十一才になりますが、未だ局部に毛が生じません如何にすれば生ずるでせうか、藥は効能ありますか。（滋賀、ふさ子）

答　發毛す可き局所に發毛せざるは個人の先天的異常なれば之を如何とも爲し難き事であります毛囊ありて纖毛のみ發生するに終るのも之又先天性なり徒に世の射利者の言に惑はされ危險なる賣藥杯を亂用せざらん事を御忠告致します。

第百四問　便秘　此頃便秘甚だしく、常に氣分あしく、身體肥え、下腹部張りて見惡し、食進みやすく、腦も少し惡い樣におもへます、病氣でせうか。（運動女）

答　春機發動期の頃には多く肥滿するものです何もそれ丈けで疾病とは申し難し又習慣性便秘としても隨分疾患なき人にして所謂習慣となりつゝあるものもあります他に健康を害しておらぬ樣に推察せられますから勉めて屢々述べおきました冷水浴、適宜の運動、定時の攝食法等を履行せられよ又便意を毎朝必ず催し得るが爲めに有りても無くても毎朝上圊する習慣を執られよ自然に習ひ性となりて參ります是非以上の方法を試み給へ。

第百五問　產後の腹痛　私は三度產をしましたが最初を除く外は產後の腹痛にて眠る事も出來ません。目下又姙娠七ヶ月なので大變案じられます。（姙娠女）

答　後陣痛（俗言アトバラ）は誰人にも起る答でありますが殊に劇痛を感ずるに至りてはその鎭痛方法として醫師は適宜の鎭痛劑を投します然し御自分でその痛を除き去る（寧ろ輕減する）方法としては先づ下腹部の溫罨法杯が能いと考へます。

第百六問　虫に螫された時の手當　私は虫が來て足などに止りますとすぐ腫れておできになつて困ります、どうすればおできになりませんか。（金澤、一少女）

答　虫に螫れて局部の腫脹を來すのはその虫の分泌したる液汁に刺戟せられ局所の炎衝を來す爲めであります然し多くは格別に手當を爲さずとも治し去るものでありますが時としてはそれが原因となりて癤瘡（俗言腫物）となる事がありますから虫に螫れたる時はアルカリー溶液にて洗滌しその上に硼酸水濕布罨法を爲しおかれよ。

第百七問　無月經　宅の下女は二十二才なれど未だ月經を見ず、二月頃より全身青色になり、歩行不自由にして呼吸苦しく、醫者は十二指腸と申され二ヶ月服藥すれども未だ効なし、次に尚一人の下女月經後白き粘液樣のもの出づ、

臭氣に關りあるにや。（文壇愛讀者）

答 二十二年の婦人にして無月經なるは或は内生殖器の發育不全に基するならんか、敢て婦人科的診察を要する次第である又全身の蒼白、歩行後の呼吸促迫等の症狀に據り察すれば或は醫士（主任醫）の診斷の如く十二指腸虫の發生に因する全身貧血症の爲めらしく推察せらる無月經症は啻に内生殖器發育不全に原因するのみでなく又高度の貧血の爲めにも來るは敢て稀少ならず故に果してその下婢の無月經なるは全身貧血の爲めに來れるやも測れず必ず專門科醫師の診察に據りて判斷を乞れよ又次に白帶下（コシケ）に就ての質問らしく考へられますがそれは前號の女子文壇に詳しくのべて置きましたから就いて參照せられよ。

第百八問 毛髮を洗ふには何が一番よきや くせ直しする時湯にアルコール二三滴たらすも害なきか。又毛髮を洗ふには何が一番よろしきや。（北海道、りせ子）

答 アルコール二三滴を多量の温水に投じ之を以て頭髮を洗ふも毛髮に何等の影響も無し又毛髮を洗ふには鷄卵殊に卵黄を塗布し微温水にて洗滌するを簡易にして且つ毛髮に害を與へざる方法と考ふ。

第百九問 肺病の初期の現象 肺病の初期にはどんな現象が起りますか。（心配女）

答 肺病と申しても肺結核のみでありませんが恐らく肺結核の事を指して申さるゝ事と推考しその初期の症狀を概擧して御答へ致します、肺結核の初期には先づ咳嗽喀痰の存在するを普通とす然し之なきものもありその他不定の熱發（多く日晡潮熱と申し夕刻に體温の上昇を來す、）あり食欲不振、倦怠を起し時として少量若くは多量の喀血を來す事あり次て痩削（ヤセ）貧血、心悸亢進、精神不安、不快等を來すその他種々の現象もありますが先づ大體に於ては以上の事が重もなるものである是等の症狀は肺結核の初期にのみ來るものに非ずして他の疾患にも來る事である故ゑ往々肺結核初期を他の疾病と誤る事あり注意すべき事であります。

第百十問 紅顔 私は常に顔が赤く、冬期になると紫紅色となり日に幾度となく眞赤にほてります、誠につらいです、普通になる法はありませんか。（福岡、多血女）

答 顔の白くして紅を帶びたるは美的であるに殊に年少の處女には必要なる條件にして途上蒼白の婦人と紅顔の處女の並行するを見たる人は何れを眞の美と認むるや誰も健康なる多血性より出たる紅顔を指して眞美とすべし紅顔なる哉紅顔なるかな。

第百十一問 白帶血過多と不姙 平生白帶血多く下る者は不姙なりと申しますがほんとでせうか。（日本橋、呆子）

答 白帶下の多量なるは生殖器の疾患を意味するものでありますが必ずしも不姙症を意味する者ではありません生殖器疾患あるもその病狀によりては姙娠分娩にないとも限らぬ然し多くは不姙若くは流產、早產等を來すものであります。

第百十二問 肥滿 私は十八歲の處女ですがお恥かしいやうに肥えてゐます、痩せる方法はないもんでせうか。（女學生）

答 本誌に度々述べてありますが春機發動期は女子の最も發育全盛の時であります、故に大抵の處女に此時に肥滿するを常とす時來れば纖々たる優姿になり得可きものなれば今日徒に痩身法杯に窮追する必要は斷じてありません。

第百十三問 四ケ月乃至五ケ月 私は四ケ月乃至五ケ月も無月經のつゞく事があります、捨て置きて差支なきや。（山陽道、水鏡）

答 月經は每月定期に來潮すべきが生理的であるに之に反し月經の不調なるは病的であるそれには種々の原因ありますが四ケ月乃至五ケ月も閉經するは或は子宮の發育不全、卵巢の發育

異常等に原因するならんも知れず確實なる頭腦を有する專門家に診斷を乞はれよ。

第百十四問 ●月經と胃病●●● 私は十八歳ですが月經がありません。又胃病で困ります、胃の根治と月經のある様になる法をお教へ下さい。(紀伊、心配女)

答 胃疾患と申しても種々種類あり診察の上診斷確實ならざれば根治法を示し難し、又十八歳にして月經未だ來潮せずと申さる丶が格別氣に懸け給はぬが宜し往々二十歳位にして初潮を見る人があります。

第百十五問 ●月經時の學校其他に於ける當時の處置●●●●●●●●●●●●●●●● 月經の時には學校などにおける當番、體操、遊戲などに對する處置は如何したらよろしう御座いますか。又寢言を止める法がありますか。(妹に代りて市内、花子)

答 月經時に於て過激の運動を爲す事は頗る危險であります故へ是非之を戒めねばなりませんが、と申して月經毎に徒に學校を休まするのも甚だ教育上不得策なれば寧ろ月經の事實を教師に打明かし體操若くは遠足等は月經期間休む事にしたらば宜しからん妹子の口より教師に話し難ければ姉君より教師に告ぐるか或は書狀にて申されて宜しかる可し何も如此瑣小の事を苦慮せらる丶必要はありません又寢言の禁止法に就て御尋ねですが之は自身にて言はぬと決心して豫防するより他に方法はありません。

第百十六問 ●瘢痕の光澤●●● 瘢痕の光澤を除く方法はありませんか。(友思少女)

答 創傷後の光澤を有する瘢痕は如何なる方法を以てするも去り難し、唯手術に依り、廣き瘢痕を切除し之に植皮術を施すの法あるのみ。

第百十七問 (一)出血●● 初婚者は房事の際出血すると聞き候が、それは其の時だけにて止るものに候や、

(二)月經時の旅行●●●● 年長じて月經時中止を得ず旅行する如きことあるも格別の害はなく候や(初婚女)

答 (一)處女膜破裂の爲めに出血するは通常有り得べき事なり、蓋し眞の處女にして初めて男子に接する者に限る、然るに處女にして初めて男子に接する者と雖もその以前婦人科的診察を受けたる人は已に機械的に處女膜を破りおるを以て此場合に於てはその事情を異にす。

(二)年齡の長幼を問ず月經時に於ける過劇の働作及び運動は身體に害あり、その理由に就ては數多の根據あります。

第百十八問 ●病氣でせうが●●●●● 私は一月經以前に結婚致した者で、身體は極く健康、又月經も毎月必ずありますが、房事中非常に子宮が痛み、且經水の出る口の處に中より何か出て居りましてそれが口ど擦れ〳〵になつて居ります、用をたす時も少し强く當りますと非常に痛みます、大方房事の時もそれに當るのであらうと思ひますが之は何か病氣でせうか。(心配妻)

答 稀らしき御訊ねである、實地診察の上でなければ御訴への狀況のみては、確たる意見を述べかねます。

第百十九問 ●鼻病● 私は昨年四月より鼻にふき出物がして、種々手當を致して見ましたが何も全快の見込みがありません、此頃は鼻のよい日は頭痛がし、頭痛のしない日には鼻がいたみます、其他非常に眠くなること、又は耳鳴のする事もあります、如何なる譯でせうか。(石井玉子)

答 鼻腔壁の小節瘡及び焮衝より咽喉、咽頭へ及ぼしたる加多留症のために腦神經衰弱を合併したる者らしく考へます醫療を必要とす

第百二十問 ●日にやけぬ様に●●●●● 之れから避暑にゆきますと東京に居ると違つて夫は眞黒になりますが、どうかして日にやけぬ様にする法はありますまいか。(花子)

答 醫師の技術を以て之を避ける事は出來ません、努めて日光の直射及び間接射を御避け

なさいまし、よし色黒くなつたとて御人格に關係はないではありませんか。

第百二十一問　胃病　私は毎年五六月頃になると必ず胃病が起ります、豫め前に注意するのですがどうも駄目です、起らぬ様にする方法はありませんか。（黒川俊子）

答　攝生法が最も必要であります、根本的療法は到底素人にては行ひ難く又御分りになりません、胃腸病專門醫に就て受療せられよ。

第百二十二問　脱毛　私は一體に眉毛薄き處へ、昨年頃から脱ける様に思へます、一旦脱毛れば再び生えませんか、又脱毛を止める方法はありませんか（長門、少女）

答　毛髪の粗弱なるは個人の先天性性能でありますから、之を密生とする事は出來ません、又一旦脱毛したる者は巳に毛根を失ふ故へ再生は不可能です。

第百二十三問　双胎兒　双胎兒は一度に出來るものでせうか、又數回に出來るものでせうか。（案じ女）

答　双胎兒の受胎は一回の接合により成立するものである、數回に分れ、個々に成立すべきものではありません。

第百二十四問　早く就眠出來る方法　私は此頃の短夜に不眠で困ります、早く就眠出來る方法はありませんか。（近江、愛讀者）

答　就寢後快く睡眠を催すには適宜の運動と適宜の精神的勞働を日常規則正しく爲すを必要とす、無爲安逸は不眠の誘因であります。

第百二十五問　月經時の攝生法　月經時の注意及び攝生法をくはしく御敎へ下さいませ、又月經時に入湯するは害がありますか。（一少女）

答　月經は婦人の身體に於ける一種の生理的作用にして、殊にその期間に於ては、婦人の一般生活作用に多少の變動を來すべきものである故に、經行中は特に攝生の必要なる殆ど言を要せず蓋し多くの婦人はその際一種病的に近き感覺を抱き不快を感ずるのであります。以上の理由により、經行時は殊に種々の障害を受け易きを以て、能く注意を拂はればなりません。勞働は如何なる種類に拘はらず避けるを必要とす、然し安靜をのみ繼續せればならぬといふとはありません。が、成るべく體養時間を長くし、且つ屢々繰り返す事が必要であります。殊に經行時には舞踏、長時間の佇立、ミシン裁縫、車行乘馬、奔走等の如きは必ず避ければなりません食物の攝取狀態に就ては、何等變更するの必要なし。然し殊に重くるしき且つ膨滿風氣を釀す様な種類のものを禁ずべし。之は骨盤内の器官鬱積を來さぬ爲めの豫防であります、其と同じ理由により、便通の正規なるを必要とす、交接は經行時に於て必ず禁ずべき最要件である如何となれば生殖器に充血を促し、且つ異物を輸入するの害あるを以て須らく之を避ければなりません、次に必要なるは經行時に於ける清淨の注意である、故に外陰部は毎日數回硼砂及び清水を以て淨めればなりません。又血液を吸取せしめるが爲めに、陰裂前に滅菌脫脂綿片を當てゝ（適宜の厚さにおき）之を丁字帶（恰も越中褌の如き）にて固定し、脫脂綿は屢々新鮮なるものと交換し、且つその丁字帶も、汚染するも汚染せざるも、屢々新しきものと取り換へるを必要とす、經行中膣腔を洗滌するは餘り必要ではありません。倘し或る原因の爲めに膣腔を洗滌せねばならぬならば高き水壓を以て洗ふのはよくありません。何となればその洗滌液を子宮口以上に注入するの恐れがあるからであります先づ月經に就いての攝生法及び注意は大略以上の條件であります。

福岡、匿名子へ……月經のことに就いては本誌の前號、前々號等に詳しく述べてありますから御覽下さい。

新夫人へ……妊娠中の心得は本誌三月號にありますからそれを御覽下さい。

東京、心配女へ……不得要領の御訊れ故御答いたすに苦しみます。

讀友倶樂部



○規定　本欄は讀友諸嬢の機關として誠意に使用われ各自に誠實を守られたし不確實の投稿は沒書とす住所本名は詳記すると字體の明瞭を要す

交際を望む

○英國人に交際を望む方　私は數人の英國の人と交際いたして居りますが、其の内の一人、（十七才）より、日本婦人と「エハガキ」や、「手紙の交換」希望の英人が數人御座いますとの返信が御座いました故皆様の御内で御望の御方が御座いましたら私の所に知らして下さいませ。先着六七名様限（女子の御方に限る）御紹介いたします、文は英語ですがやつて見ればやさしいものですよ。（牛込區若松町六七、米村方にて、米村華）

○看護婦の方に　本誌愛讀の諸姉様の中に看護婦の方及び未來看護婦として世に立たうと思ふ方がございましたら不束な者ですが永久御交際を願ますそして眞面目に此職の爲に盡そうではありませんか御近い方は御遊びに御出て下さいませ（本郷天神町一ノ二四、中央看護婦會内相樂きみ子）

○再び虫齒の藥について　前號に虫齒なをす藥のことを載せましたが七月三日から十日迄七日間に百九十七名のお方から申込が御座いました、妾は決して右の方々のお手紙に對して不實は致しません製藥を無代で郵送致しました此外に未だ虫齒でお困の方は早速申込下さい三吋以内に藥店なき所のお方へは特に其由をお知らせになれば少しも手數のいらぬ様に製藥して差上ます私は是迄家内共々長の間病覺の手に捕はれて悲しき年月を送て居りましたが漸く本年二月から病覺の手を免れたのです、だから病む人、親に別れた人兄妹を失つた人などの話を聞くと胸が一杯になつてお察し申します乾度皆様から代金も送料も申受ず自辨して世に苦しむお方を及ばずながら救はむと致しますから御心配なく誠實にお申込なさいませ苦しみつゝ在るお方にお勸めします（靜岡縣引佐郡奥山村栃窪、高田元子）

○鐵道唱歌　御姉上様方の内で餘程以前に流行致しました鐵道唱歌「キッテキ一聲」とか云ふ歌御存じのお方は何卒おしらせ下さいませ其のかわりに稲育名所の本又はリボン何色とお書きそへ下されば必ずお送り申します、（甲野俊154 Gold St., Brooklyn, New York）

○病後　久しく病床にうちふしてゐましたが二週間前に全快しましたからふたゝび拙筆を振つて投書いたします皆々様御交際下さいませな男子の方にても淸い方なれば御恥しながら。（下關市岬之町飯の内山本松碳方山本芳子）

○淸き交際　諸姉上様私は至つて不束な無學の者ですが此の女子文壇を何よりの友として出來ずながらも少しづゝ投書致して居る者で御座います（平戸伊知子又伊知子として）私は至つて惡筆ではありますけれども皆様方と玉章の交際致し度く御座います恥かしながら男子の方でも淸い交際して下さる方がありますならば何卒下記へお玉章を願ひます（長崎縣北松浦郡山口村船越小學校松本伊知）

○百七十名の讀友　本誌のおかげ様で百七十名の讀友を得たのを深く記者皆様へ謝します中には殆ど大家を凌ぐやうな句もありましたし、鷺窓風や六朝風などのうつくしい短册など、みな青春の紀念となるべきものゝみです。みんな御返事申した筈ですがもしまとりおとしないともかぎりませんから何卒御一報御願申し升。尙ほどしどしエハガキの交換も御願申します又立秋と星月夜の句を下さい（羽後由利郡院内村、三浦ふみ子）

○お斷わり　私、事情あつて此地にまゐりましたが、今迄の様に皆々様と御交際致す事は出來ない境遇になりまして、御手紙頂きましてもお返事はあげられませんから、何卒あしからずお許し遊して一々おことわりもあげない方が有ますから一寸此欄をかりておことわりを申あげます（仙臺市にて、菊池りう子）

○寛貴　皆々様御手紙下され有り難く御禮申

ますわ、て七月號には誠に恥かしい寫眞が掲げられましたがあれは今から七年前で坂本小學校を卒業した時の寫眞でした。次ぎに私は都合にて左記の所へ轉居致しましたから以前に倍して温い御玉章の御交りを願ひますわ。何御寫眞をも御惠み下さい。左様なら（東京市神田區豐島町三九、竹内方佐藤いつ子）

○大阪に來る　皆樣私神奈川縣の木村はるよ都合上當大阪へ出まして旅の空とて郵便爲替貯金管理所にはいりました哀れな者球算許りパチ〳〵やつて居て文學には少しも通じませんが本誌女子文壇の力でどこまでも諸姉樣のはしくれに入れて頂き度いのよ前から御交際して下さつた諸嬢樣以後も相變らずお願ひ申します今の所はほんとの住家ておりません故轉じましたら御通知致します（大阪市北區川崎町四〇、木村淑花）

○妹に代りて　情愛深き諸嬢方よ斯の女子文壇を愛讀せる私は阪田芳子の兄ですが一寸誌上をかりまして諸嬢方に話しましやう私の妹芳子去る六月七日より病氣にかゝりまして今は當地病院に入院致して居りますが病蓐に呻吟する身と成りました腦を患ふる事久しく今日では殆んど死に瀕せりとでもいひましやうか妹の靜子は姉の病氣の爲め入院せしより度び〳〵病院に行きて介抱し今は女學校をも休みて學問爲すいとまあらず妹の靜子は申して居りますどうか哀れと思ひ寫眞送られし方々にはC印のハモニカに樣の寫眞香水サボン色々雜誌五冊付けて進上す私は男子ですが、本誌愛讀者なり早速返禮す。（大阪市東區上本町九丁目一五三、阪田清方阪田縫、仝靜子）

○小說好　小說好きの方と御交際を望みます（尾張西春日井郡金城村西志賀、白夜、長尾信子）

○英語の教師　御なつかしき皆々樣よたのしい〳〵夏休も近よりましたわれ私れ高等女學校の四年生で御座いますが本當に愚な者ですのよ皆樣此の夏休を只遊んでもつまりませんから私れ平常好きな英語を研究致し度く思つて居りますが好い先生が見あたりません若し皆樣の内で西洋人でも日本人でもよろしう御座いますから英語の先生を御存じでしたら御手數の事と存じますがどうぞ私の手元まで御知らせ致して下さいませんか妹の御願ひて御座いますさよなら（東京市牛込區市ケ谷加賀町二ノ二十一番地、水越國子）

○琴花孺子　皆樣早もう秋蘭草花の種が色々取れました此度も春の様に廣くおのぞみの方には上げますから返信送料袋代として一錢切手五枚入れてお申込みなさい優等種五袋づゝ上げます（佐賀縣小城町岳子町、田尻貞子）

○音樂趣味　皆樣の內音樂に趣味を持つていらつしやる方がありましたら清い〳〵御交際下さいませんか御願ひ致します（大阪市北區西梅ケ枝町百廿七番地、森山百合子）

○淋しい身　親愛なるお姉上樣方友なき淋しき身はお姉樣方々のやさしき御文に今迄色々となぐさめられて居りましたのに嗚妾はもうおやさしき姉樣方に御交際れがえぬようになりましたの何卒〳〵惡からず――あゝ妾は又元の淋しき身となりました（近江、佐和田芳子）

○左の諸嬢は皆新しく交際を望まれる方です、文章は大抵一致して居りますから一々此處に擧げませんけれ共、皆樣とも趣味ある交際をなさるやう記者からも望みます

○栃木縣下都賀郡寺尾村尻内、福富元八郎方福富うめを子。
○青森縣弘前市田代町四、齋藤みよし。
○大阪市東區紀伊國町家近丘吉方大島なほ子
○奈良縣添上郡柳生村大字柳生、大久保房子
○大阪市東區寺山町四九三ノ一相川方、池田操子。
○肥前佐世保市花園町百八十一、伊藤よし方、四村かのゑ。
○東京府下南多摩郡忠生村上小山田、中島きよ子。
○新潟縣三島郡塚野山若林太平治方、俊子。
○奈良縣北葛城郡當麻村大字今在家山下又五郎方、山下繁子。
○大阪府下堺市榮橋通一丁平野力造方、中尾岡伊子。
○和歌山市雜賀屋町東丁二番地、中村都。
○奈良縣高市郡高取町上子島、湯川まさ子。
○本郷區帝國大學病院皮膚科內、深谷英子。
○福岡縣豐前田川郡上野村、渡麻子。
○京橋區松川町一番地、榊原のぶ子。
○千葉縣印旛郡成田町田町、櫻井花子。
○神戸市荒、三、二六〇ノ四七、岡靜子。
○信濃加茂郡黑川局區內驚見吉六樣方、花井靜子。
○鳥取縣西伯郡米子尼方町、足立春子。
○長野縣松本市宮村町八〇三、ミセーヒーホ

イットン方、アーメン女。

○靜岡縣引佐郡田村新木北、鈴木小菊女。

○長野縣南安曇郡南穂高村烟實丸山成六樣方米子（姉）ます子（妹）

○山形縣東置賜郡吉島村字吉田三十刈、島貫琴子。

○常州稲敷郡太田村大字小野、齋藤大次郎方、史巫子。

○神奈川縣中郡土澤村、簑島元子。

○栃木縣芳賀郡茂木町、今井きよ子。

○福井縣坂井郡鶴村浄土寺、北利子。

○豐州臼杵川のほとり、吉田元子。

品物交換

○空器　皆様のつかひ古しにても何でもよろしう御座います故ヴァイオリン、手風琴、月琴、いづれなりとも、御もちの方は、何卒めぐみ下さいませんか、其御禮としては、帝國習字速成樂會發行の習字速成練習帖（但假名稲川傳谿先生書未使用）三册及特許懸一個、准之錚一册に私のみにくい寫眞をそへて御送り致します、決して只だ取りなどは致しません（栃木縣那須郡黒羽町役宅鐵道員大島方青戸せい子）

○織物見本　皆様の内で織物見本（二三寸の）御持の方は送つて下さい　私からも足利産の小切見本種々送ります（下毛足利町柳田幸吉方白露子）

○繪上等の繪葉書を誰方か送つて下さいませんか、妾も乾度致します、内外國の古切手も妾は大好ですよ、東の露の樂、藥有サフラン種球を望むものにはホンの實費送料とも三錢てお上げ申ます（千葉縣香取郡多古町多古　平山萬吉方平山佐多子）

○皆様　美術繪はがき、栞、編物の類をお送り下さい、相當以上の御禮いたします（下野足利町柳田登三郎內、柳月子）

○皆様私はあみものきちがいとまで云はれた位いの者故あみものは澤山手にありますから此の度び寫眞あみもの玉章葉書小說和歌など御惠送の御方には名古屋市發行の良友誌自からの編物にて乾度御返禮致します（岐阜縣加茂郡和知村下牧野、日置桃花）

○お懐かしい誌友の皆様私花物大好よ諸姉様の内に美麗な花の種が御座いますなれば何卒送つて下さいな乾度お禮は致しますわ（靜岡縣引佐郡都田村新木北、鈴木こぎく子）

○懐かしき誌友の諸姉様妾も誌友に相成ました から紀念として長く保存致しますからお寫眞に不要な雜誌なんなりとそれからお手細工のくみ物何なりと御返禮には私の從兄弟の齋藤地巾一尺二寸の立六七寸位の物差上ます必ず寫眞を添えて下さい（秋田縣北秋田郡阿仁合町銀山齋藤內、小原あき子）

○皆様の御手許に不用の聖書ヴワイオリン御持ちの方はどうか下名までお知らせ下さいまし相當の物で必ず御かけて御れい申します（熊本市外古町村、雨森あい子）

繪葉書を好む

○皆様私はこの程繪を習ひそめたの、至つて拙いのですが自筆の繪はがきを交換して頂戴自筆のでなくとも宜しいわ、然し極くまじめの方だけよ（三重縣阿藝郡白塚村多羅尾方、靜江）

○日本古切手紀念切手御不用の方は私の繪葉書と御交換下さい（廣島市國泰寺村一二二森本別莊方、內海敏枝）

○諸姉様よ繪葉書を御送り下さつた御方には三名にかぎりハガキ文學、秀才文壇、少女世界、少女界、リボンか御好みに應じて御送り致します（大阪府下堺市榮橋通一丁目平野力造方、中尾阿伊子）

○當ははがき交換倶樂部を設けましたから毎月當はがきを五枚宛（名所に限る）開封の上完結迄交換致し度人ははがきに住所姓名を記したる上私方まで其由御申込を願ひます地方の御方に限ります（赤坂檜町六、清崗龍子）

○遞信省發行戰役紀念繪はがき第四回海軍の部三枚と妾の思出の記、海賊大王、朝日櫻、我が文壇、女子消息文かきぶり等と交換して下さい、同海軍凱旋紀念二枚御送りの方には皆海、女子作文作歌辭典、新詩辭典、會玉齋の巾御望みのもの〻にて返禮します（栃木縣芳賀郡小貝村、深畑都也子）

○妾の兄が英國より送り來りし薔薇や菫や西洋美人山水の景色の繪葉書澤山御座いますから繪葉書御送り下さる御方には早速御送り致しますよ御早く（大阪市東區上本町一丁目百六十六番屋敷河路敏殿方、東花子）

○妾二三年前まで大の繪葉書狂でおつただけに今でも手元に三四百枚未使用のものがございますから御希望のお方は新しい小說と交換を願ひます御交換下さる方は小說の名と著者の名と文

御寄稿のヱハガキの種類と枚数をお知らせ下さい（大阪東区越中町八七二、服部きよ子）
○肉筆の繪葉書下さい御禮はいたします（府下南品川妙同盃予四百四十六　辻庫吉方、　坂梧）

寫眞

○なつかしき諸友の皆様方にて寫眞を惠まれたる御方に妾の（下田次郎著）女子之修養なる本を一部宛送ります（北海道上川郡神楽村字東御料地第五號官舎、　池田元子）
○私はごく〳〵田舎に住まつて淋しく暮してゐますから姉様方の お寫眞を下さいませ必ず私のも御送り致します（香川縣志度郡新町、　山本なか）
○何卒貴讀様の御寫眞御送り下さい御禮には妾の見苦しき寫眞に香水や リボンなそへて進上ますわ（大阪東區上本町九ノ一五三坂田方、　坂田靜子）
○御寫眞お送り下された方には妾の寫眞に京都名勝繪葉書栞を添へて御返禮します（京都市上長者町西屋町四入、　上野政子）
○御寫眞の交換をねがひます（羽前西置賜郡十王村、　平まつ子）
○私　信濃の山奥に住む一愛讀者です親密なる交際を望む、、ピュアーな文なら男子にても差支ありません。　次に皆様寫眞御送り下さい先着五名の方に妾の寫眞に添へて只今手元にある花袋小品、　晴小袖、　恋人、　靈風戀風、　春汀文集何れにても御名さしなれば上げます、　但し本名にて御來読下さい。（信濃桜代寺尾、　小池いち子）

文學上の交際

○越後頸城の諸姉に申す、小子もと赤壹洸ふが如き生涯を送りつゝある一人にて只無聊を慰むべく最も罪にならぬと思ふ俳句を嗜み故千代尼が吟懐をあこがるゝ者にて候よ希くは下名へ宛て一片の涙を惠まれなば嬉しき事の限にて候可祝「七轉び八起の蘭も萎して候」（雪の越後中頸城郡寺野村久々野、　蕗原不二女）
○月末までに秋の句をはがきに三句書いて送つて下さい、　翌月發行のすみれと云ふ雜誌に載せてお返しいたします（大阪市東區内平野町二ノ十三服部方、　堀口いわ子）
○繪葉書に俳句や和歌を書いて御送り下さい御返事いたします（本郷區新花町九十三、村松方、中野靜子）
○私は俳句が大好きです皆様葉書に二句以上十句迄書いて下さい多く集れば俳句集として皆様に分ちます〆切は七月廿日限りとします住所氏名をくわしく願ひます何卒れ―（千葉縣安房郡田原村太尾、　阿部樂天）

記者と讀者

○目に青葉の候、　記者様私は七月から、　本誌の愛讀者になりました、　以後宜しく御導き下さいまし、　記者を親と慕ひ、　諸姉を眞の同胞と思ひます、　駄作を昨日と今日と二週にして投書しました故、　あとの方でよろしいから只一寸評だけして下さい、　沒書は覺悟の上ですが、　後のためになりますから、　私は載せて下さる迄、　何十年でも投書いたします、　妾の命のあるかぎり、　記者様それから、　木瀬へ諸姉にお知らせするために、　地方の名所古蹟の話等出してはいけませんか、　もし出してもよいなら出します（岡山縣山田靜野）（記者曰、　御熱心感服いたします、　名所古蹟でなく現在の御地方の樣子が承りたいものです、　各地通信として此處に出るやうな記事を歡迎いたします）
○病氣致しまして當分投書を控えますいづれ全快の上は又皆様達と御一緒に御願申ます、　當分當地に靜養致して居ります（伊勢國津市贄崎町清水屋方、　西戸政江子）（記者曰、　御病氣とは心がゝりです、　お大事になさいませ）
○記者樣妾スケッチを投書しようと思ひますが用紙は何がよいですか又スケッチは一度書いた上を又書いてはいけませんか（墨のうまくうつらなんだ時など）　然しひきうつしてはありませんよまた寫生畫がよいですか想像畫がよいですか何卒本誌々上で御敎導下さいませ（新木、鈴木こぎく）（記者曰、　用紙は鳥皮か、　それに似た薄い紙ならよろしい、　書いた上を又書くのはいけません、　寫生でも想像でも御隨意です）
○上總、　今關げん子さんに。　誌友くらぶは葉書でもよろしい（記者）○小夜子さんに。ながく〳〵との御譴親しく拜見いたしました、　あの文章は全く上出來でした、　はたの方にも分らなかつたとは可笑しうございますれ、　何うかあれを手はじめに上手な文章を書くやうになつて下さい。（記者）○茨城、　照澤とよ子さんに、　夜雨先生は又常陸へお歸りになりました（記者）○常盤幸子さんに、　御挨拶ありがたう、　寫眞は何うか送つ

て下さい（記者）○吉田散花さんに、珍しい游泳の萬鳳とやら、何うか送つて下さい（記者）

○下に記す諸嬢からの御申越は一々拜見しました、特に御答する必要もないと思ひますから芳名だけを擧げて、拜答の意に代へます。上海、小山照子。京橋、せゝらぎ女。伏見、山城より。宇都宮、千秋。常陸、定子。大分、お尋れ女。紀伊、女郎花。兵庫、愛子。梅花。京都、梶谷種子。名古屋、てふ子。山形、烏賀琴子。北海道、加藤はる子。羽前、眞志子。岡山、青山勝子。遠江、鈴木りう子。けん子。赤坂、靜江。盛岡、米澤白桃。福岡、高橋律多江。妙子。成田、野々宮清子。むさし、はる子。（記者）

○靜代さんに

本誌前號で御許様が夢の謎の本を讓るとのことでしたが左の方々から讓つてくれと申込まれました、一々直接に御問合せの上、宜しいやうに御處置下さい（記者）

東京府下在原郡入新井村字新井宿入最坂下二千四百七番地渡邊芳江

東京府ト淀橋柏木一五九、菅沼百合子

羽前西置賜郡長井町小出柏町、佐藤ます子

靜岡縣伊豆下田町廣岡鈴梅方、土谷鈴子

埼玉縣入間郡福原村字中代、關口よしの

宇都宮市西原六道町二千百三十三、中村きよ子

各地通信

○臼杵より　私の住むで居るところは、一方豊後水道に面して、三方は、景色すぐれた山谷で圍まれて居る大きい町であります。電話や何かは設けられてありますが、風景はとても都會では見る事の出來ぬ樣な所が多くあります。ことに可笑しく感ずるのは、近江八景にまれて、當地にも臼杵八景のある事です。今それを御通知致しませうに、米山の秋の月。松島の夜雨。架溪の歸帆。領南の暮雪。諏訪の落雁。白馬溪の瀧。臼杵川の夕照り。大橋寺の晩鐘などてあります。此の外他に種々あるが游泳の又珍らしい事は此の縣下ては唯一てあります。之も亦追ひ〳〵御通知致しませう（豊州臼杵川のほとり吉田元子）

○馬祭り　當地には舊七月十日に馬のお祭りがあるのよ、それは馬がうつくしい布を背にかけ鈴をさげてお觀音様に參詣に行くのです、一年中朝から晩まで働いて居る馬の一日の樂しみ如何に樂しいでせう、私はいつまでも〳〵此風をつゞけて行きたいと思ひます（羽前、眞志子）

○田邊はがき　本年より高等女學校が開設せられました、郡立なんです、妾は其二年生ですわ只今校舍建築中て、郡會議事堂をかり校舍としてゐます、本年と明四十三年度とに出來上る由くわしくは後便に（六月廿日、小文子）

注意

○皆様世中にうはべは女子文壇の愛讀者と云ひ其のうらは世を欺きて自己のためをはかり淸い本誌をけがして居る者がある私は五月の文壇圖書換讀に文壇不用なのは何册もあるから御望の方は新小說と交換を願ひますと出しましたら早速播津川邊郡長尾村販上龜子さんと云ふ人から大へんていれいな葉書が來ました文壇五册以上送つて下されば御望の本に寫眞をつけて送るとの事てすからすぐに七册送つて上げましたら向ふてあなた入用の本何々すぐ小包て送るからんて二度葉書が來ましたから今日か〳〵と待つても何んの音もなく又葉書を何度出しても返事はなくなりました私はすつかりおかめさんにだまされてしまつたのてすしかし是非約束の本は取らなくともよいがあまり不人情てはありませんか思へば思ふ程かゝる淸き本誌に龜子さんの如き人間があるかと思へばなさけなくて涙が出てたまりませんかの罪人なる龜子さんが又よいもうけがあるかと思ひきや七月號の誌友倶樂部の品物交換に大きな顏をぬーつとあらはして居りますから私を手本として必ず〳〵品物交換なさらぬよー重れ〳〵御注意をいたします。（一誌友）

○本誌は名の如く女子の前に提供した文壇ではあるが男子と雖も神聖な體度を取つて忠實に文藝を研究しよーといふ方があれば決して本誌の記者様は拒まない筈てす、それにも拘らず堂々たる知名の男子が女子らしく變名して本誌に出てるのです何故に男は男らしい體度を取らないんてしよー私は女名の男子を大分知つて居りますから飽く迄女々しい根性の人々の名はいつか折を見て摘發する積りてす、既に名ある文士にして眼中唯賞品を目標して稿をよするが如きは以ての外てす（轉居、大坂東越中町八七二、服部きよ子）

○誌友倶楽部で交際を願ふとおつしやるから、同じ喜びの私はつい繪はがきを送るのですが、悲しい事には十人の中、四人位はきつとお返事を下さらないのです。夫れはもう私の樣な者ですから、お氣に召さないで許して貰へないのは仕方が有りませんけれども、夫れにしても其由を、一片のはがきでなりとも知らせて下さつたなら、同じ断られるのでもどんなに滿足だか知れないのですが、當方から出したものは歸つて來ず、又先樣からも音沙汰なしといふ樣ですと、人樣をお疑ひ申しては すまないと知りつゝ、つい何だか故意に黙殺されたかの樣な氣がして、よし夫れは惜む程の物ではなくとも、やはりいゝ心持ちは致しませんから、此後其樣な人が有りました時には、其姓名を誌上に發表して、他の誌友方が再び其手にかゝられない樣に注意致すと同時に、此誌友欄を一層誠實なものとして、お互樣に安心して交際を願へる樣にして戴きたいと思ふのですが、併し私どもの申す事は一切御採用下さる事が出來ないとならば、如何とも致し方がございませんて、まあ半分でもお返事を下さる方が有れば結構とあきらめまして、相變らず偶多い人の中から、頼もしさうなお方をさがし出す事と致します。（京都、みやま木）

問合せ

○關まち子樣　下野那須郡晄川村小嶺のお方でございますが、幾度も御手紙を出すのに御返事がありません、私から出したお手紙は返つてきませんから屆いて居ると思ひますが、どうしたのでせうか、御存じのお方は其消息なお知らせ下さいませ心配して居りますからどうぞお願ひよ（小石川丸山町十七、香川富士）

○田中菊子樣　住所御存じのお方がございましたら何卒紙上でお知らせ下さいお禮は小説又はエハガキで必ず致します（足利町柳田きみ子）

○山崎みつ子樣　二三年前まで三田醫院によらしつた方です、現在の御住所ご存じのお方は誌上でお知らせ下さいませ御願ひ申ます（島田たか子）

○井上おひさ樣　御年は二十二、小學時代には、八戸に居られて其後鎌倉に轉居なされましたが、何んでも實踐女學校に通學なされて居られたと云ふ事は聞きました現住所御存じの方御知らせ下さい、御禮は系はがきにて、（陸奥國八戸町八幡十九、一友女史）

○立花とも子樣　每號本誌で御目にかかりますお貴女樣はもしや去る卅三年に御地の新町尋常小學校へ御入學遊ばされたお方でありませんか、私も生れは御地なので、大層おなつかしう御座います、又同校當時の最員いく子先生は只今何所に御在ですか、御存じなら御手數がなら一寸、本誌でお知らせ下さい（北海道、しらぎく女）

持つてゐる書物

讀みたい書物

○小説と風通　誌友の諸姉樣よ小説や雜誌の交換してくださいな、彼の不如歸、金色夜叉、寶風戀風、戀か夢か、ハイカラ令嬢、ハイカラ夫婦、貴族の戀、處女の秘密、外何んな小説でも宜しう御ざいますから送つて下さい御禮には當地産物たる（風通）三尺以上にて必ず上げます誌友の皆樣の中にはこちらから品物を送つてもハガキ一枚返さない御方が多い樣でありますが妾ばかりはそんな義理でない事は決して致しませんから（新潟縣中魚沼郡水澤村大字新宮、村山ぎん子）

○詩集と小説　皆樣の内で、天地有情、行く雲、花守、二十八宿、湖畔の悲歌、常夏、戀衣、落葉、短歌評釋、女夫波、コブシ、檜木笠、旅姿、春、生、母の面影、伯爵夫人、心の波、小華族、天うつ波、新生涯、無花果、御持の方は私の、夢笛集、ハイネの詩、テニソンの詩、みだれがみ、まひる野、白光、新派和歌辭典、草枕、田園生活、雛子、黒風、黒潮、思出の記、青春、天才、花袋集、ハムレツト、ふるさと集等と交換して下さいませ（大和吉野郡賀名生村中富よしみ）

○小説と譜　皆さんの中で不如歸か己が罪、或は乳姉妹をお持ちのお方は妾の新らしいヴアイオリン樂譜、霜月花、松づくし、春のことぶき、それにヴアイオリン獨習と交換して下さいませんか、なるべくならば市内のお方で直接致したいのですが正直のお方ならば地方のお方でもよろしうございます。（本郷區元町二ノ六〇、井出方、渡邊菁子）

○拜借　源氏物語、谷間の姫百合、お不用の

お方は暫くお貸を願ひます（遠江國奥山局區内、森田もと子）

○千鳥の曲　皆様の中で千鳥の曲、御持ちてしたら私の造花珊けいこと御交換下さいな。寫したのでもいゝのよ、御禮はきつとします。（相模藤澤、常盤幸子）

○講義錄進呈　愛讀者諸姉、妾の許に、實用女學講義錄、女子大學講義錄、明治英語學會講義錄、大日本繪畫講習會の洋畫講義錄、繪畫講習錄、日本大學法科講義錄、實地活用柔術秘意講義錄、文章講義錄等の講義錄あり。御望の方は郵税一册に付き三錢御送次第進呈す（茨城縣稻敷郡柴崎村皮渡新田山本三造方あさ子）

○諸友の皆々様妾は四年前よりの愛讀者で有ります小說を澤山持つて居りますが美しいおはがきと御交換を願ひます（長野縣延德郷便局管内牧野芳枝子）○諸兄姉上様よ妾の手許に本誌、少女世界、其他二三の古雜誌がありますから皆様の御寫眞と御交換下さいな又造花一人形編物の本御持の方々は是非御送り下さい御禮には絹ハンカチーフかリボンで致します。（府下西多摩郡青梅町天ヶ瀬荒内はる子）○皆様私の手許に新ホトトギス、ホトトギスの歌がありますから皆様の死美人、新美文、不思議のランプ、君子、「金色夜叉」「眞人の自白」「ハイネの詩」「天うつ波」「血の涙」と換へて頂戴（河内守内町倉利子）○皆様小說の御よみ古し御あきなら御めぐみ下さいまし先着五名様には小說送ります又一番いゝ小說御送り下さつた方にはハーモニカをおくりますどうぞ御めぐみ下さいな（長野縣上伊那南御北島のぶ子）○私の手許に文章世界五册と獨逸童話集、塔中の怪、海龍窟、東洋武俠團、武俠の日本、武俠艦隊、海底軍艦、日の丸太郎上下、薄水正吉上下、幽靈學校、志士と佳人、閨秀作家、黄菊白菊、名家模範新派歌集、自然と人生、新約全書、四十年の女子文壇八册、婦人世界の四十年のが二十册計り三十九年から四十年の女學世界十册、太陽臨時增刊時代の趨勢、今年一月の新聲、長歌今樣歌集、安來の勸三、婦人世界の衣裝かゞみ、ABC雜誌十二册、ハガキ文學、秀才文壇、中學世界、日本少年、少女界、少女世界の古いのが合せて三十册計り有りますから皆様の欺かざるの記、春、不言不語みだれ髮、とお取交ひ下さいませんかお交換下さる方には、御望のもの何册でも差上げます、又上等繪葉書と外國切手たくさん有りますから寫眞かリボン御送りの方に差上ます男子の方は御斷り返本はきつとまちがひなく致します（越後中魚沼郡十日町宮入悦子）○皆様の御手許に思出の記、百合子、怪光、夏子、雛子、女夫波、青春、伯爵夫人、新不如歸、ハイカラ令孃、新學士、新後不如歸、金色夜叉、不言不語、破戒、多情多恨、片戀、コブシ、眞人の自白、御持ちの御方は其の有情無情、塔中の怪、新日本島其他種々の雜誌と御交換下さい先着の御方に私の寫眞を添へて差上ます（越後中頸城郡大潟村大字大坂井山岸久子）○諸姉様の御許に理科教科書、略畫の手本、毛筆畫帖、手工實習書等の書籍御持ちの御方は何本御送り下さい私の婦人世界、少女界、衞生新報、文藝倶樂部、新小說等に當地名所の繪ハガキを添へて御返禮致します（清國北京宣武門外椿樹頭條成賓館ニテ平尾）○諸姉様妾の手許に新不如歸、春風、不如歸の歌、櫻の御所、少女の戀、戀と愛、思出の記、己が罪の歌、美少年、初航海、戀と人生など只今不用になつて居りますからどれでも御望の方は御寫眞を添へて御申込下さいすぐ送ります（千葉縣東葛飾郡福田村三ヶ尾六二一内藤涙江）○誌友の諸姉様私の手許に小說後の不如歸、朝ぱれ、玉虫、初航海、塔中の怪、おとぎ花籠、おとぎ共進會、明治の令孃、女學世界、小女世界、日本の少女等ありますから小さなハート、ロビンソン絕島漂流記、小公子、フランダースの犬、肉彈、嬌美人草、乳姉妹等の書と御交換下さいませんか御入用の方は下名まで一寸御知らせな願ます（茨城縣眞壁郡下妻町平澤きい子）○私の手許に新小說、女學世界、酒道樂、後の不如歸、新美文、エハガキの栞、美文斷片、文藝倶樂部、滑稽妙文集、美文小說フエマストーリイ等不用になつて居ります極めて心切な優しい方て、心の秘密、ハイカラ令孃、寫眞帖、樗蒲園、栞、悲しい本と交換して下さい（三重縣一志郡久居新町田中屋方宇野等）○皆様の内で本誌の二月號と新美文御不用の方は御送り下さいませんか、御禮には婦人世界か婦人くらぶかてハガキてちかつて致します（芝區田村町八關戸方島田歷子）○皆様方の月曉、青春、行燈、不如歸、と私の花子の罪、雛子、金色夜叉、とかへて下さい（大阪府北河内郡守口町久眞利子）○私の手もとに深山櫻、我が罪、あらゝぎ、青春（春の卷と夏の卷）その外雜誌類がありますから青春の秋の卷か他の小說と交換下さい（大阪市南

區駿谷東ノ町二百三十六番屋敷小山方、小山はま子）○今私の手元に新ほとゝぎす、戀の闇、小督、己が罪、吾輩は猫である、乳姉妹、春の歌、乳屋の娘などあります、雜誌は女學世界、婦人畫報など、以上小說其他の書物、案其他の編物、寫眞、繪はがきなどと御交換を乞ふ（小石川區水道端町二ノ二十一下宿方、菊池雅子）○妾こんな本があるのよ諸姉上樣の何とでも交換して頂戴ね小說、何處へ行く、戀と戀、破戒、火の柱、青山白雲、ふた葉、ひとりぼち、寒畠、男一匹、露伴叢書小品十種、名士と家庭、自然と人生、シブキの歌、此他秀才文壇、新文林、成功なんかの雜誌ならたくさんありますへ播磨揖保郡伊勢村藤井椅子）○私の手許に不如歸、ユゴー作鐘樓守、婦人のかゞみ、世を渡るたつきの風琴、ケキワート女傳、家事經濟學、竹取物語、方丈記、外航見聞記、歐洲忠臣藏、少女の死と靈不滅、七小姉妹、其他英書種々不用に成つて居ますから皆なの内に金色夜叉、アラビヤンナイト、エノツアーデン、一葉全集、枕の草紙等其他家庭新小說の不用かゞ御座いましたら御交換下さい、尙エハがき、手細工物の交換もお願致しますふ、（神戶市中山手通り一丁目四十六ノ十四岸本新子）○皆樣私の許に婦人世界、食物かゞみ、女學世界、はがき文淵、中學雜誌少年、秀才文壇、新婦人、女子文壇は四年九號より五年六號まで不用になつて居りますから皆樣御持の金色夜叉、雜姉妹、思出の記、新不如歸、綠木雜等と御交換下さいませんか（茨城縣稻敷郡牛久村野島たか子）○皆樣のお内で讃美歌全集か又は聖書をお持の方はありませんか、もしおゆずり下さる樣でしたらどうぞ私の元まで…御返禮は其の方のお望に…御不快を買ふ樣なことは決して致さない覺悟で居ます（廣島縣賀茂郡仁方町手島政子）○皆樣の御内に本年の女子文壇三月號、女學世界五月增刊號、新聲五六月號お持ちの方は何卒お惠み下さい、私の女從、婦人くらぶ、婦人界等にて屹度お禮いたします（大阪市堂島濱通四丁目二十二番地内にて近木淺子）○妾の手許にハガキ文學、婦人世界、秀才文壇、ムラサキ其他小說類不用につき二十七名家又は新文林本年發行の中にて御交換下さい、尙行雲流水、野菊お持ちの方は妾の不用澤と御とりかへを願ひます（大阪市堂島濱通四丁目二二地内にて國近みどり）○私は日本少年發ノ卷から全部、日本少女、秀才文壇、文章世界、ムラサキ、女學世界、新潮、ハガキ文學其他地方雜誌澤山及びすみれ集、みだれ髮、藤村詩集、其他澤山あります、皆さんの小說かハンカチ寫眞其他物品と御交換して下さいませんか往復はがきて問合せ下さいましたらすぐ御返事致します、それから繪はがきも望みます。（大和郡山町大字新中小橋きく子）○私のところに女學世界、女子文壇、冒險世界、少女界、少年世界、少女世界など百冊餘りもございますから皆樣の日の出島と交換して下さいまし幾冊でもおのぞみだけ差上げます初卷からお送り下されば藥末集をそへます（橫濱市神奈川柳町一條俊子）○活動之日本、實業倶樂部、白百合、店前裝飾術、日本地理問答、家計簿記、作文敎科書、歷史敎授法、習字圖畫敎授法、理科敎授法、其他色々ありますから交換して下さいな。（千葉縣野田西仲町直井清溪）○お姉樣方、妾の元に、和、漢、洋の書籍澤山ありますから、どうぞ御交換遊ばして頂戴な、御願よ、御希望の方は御申越しく下さい、藏書目錄をあげますわ。但し男の方は御ことはり（伊豆國松崎局岩科村八木山大屋方、佐藤幸枝）○諸姉上樣妾先月海外よりかへつた許りてお友だちがなくてこまつて居るのよ妾音樂や小せつ大好き小說交かんして頂戴な今妾の手許に海水浴、町の娘、不如歸、己が罪、自死と自死、小間使、大暗愁上下二冊、海軍士官、美少年、當世五人男二冊、新ホトヽギス、浮世車上下二冊、フタゴ美人、ヒミツ其外にも昔の小說なればたくさんあるわ姉上樣方のおもちの小說と御交換して下さい妾、のはヒジツキをつけてお送りいたしますお寫眞を下すつた方には妾のを送るわ但し先行の名樣信者樣なら尙好いわ（滋賀縣彥根二番町三十ヒ瀨澄初枝子）○皆樣の中て、高女四年用の習字帖御不用の方は御ゆづり下さい（福島縣伊達郡川俣町字頁町一番地氏家英橋方にて氏家いち子）○皆樣の内に小說己が罪、不用のをお持ちの御方は私の脚本不如歸、初戀と交換して下さい。（栃木縣足利町榮町柳田幸吉方白露子）○私の許に金色夜叉、ハイカラ令孃、片戀、百合子、無花果、有情無情、夏子、月しろ等の小說本が三十冊あまりあります諸姉樣方に青春、深山の美人、富美子夫人、ひとりね、うきね、戀さめゝか不貞か、颶風戀風、良人の自白、少女の戀の小說が御座いましたらどうか交換を願ひます（大和國高田町東口大谷桃溪子）○皆樣の中て歌集まひるの御不用のお方があれば、おゆづ

り下さいませんか（若狹國小濱町伏原津田たき子）○和歌作法、和歌集などお貸し下さい御返しの時はかならず御禮致しまて（下總印旛郡成田町土屋臨三樣浪子）○誌友の諸姉樣妾の手許に音樂通解、書翰文辭書、日用辭典、日本歴史辭典、明治字林玉篇等色々の辭書類が澤山ありますから皆樣御所持の小說類と交換して下さいませんか（岩手縣一關地主町二階堂方佐藤麻子）○妾の手許に、金色夜叉、多情多恨、一葉全集、あめりか物語、一休和尚、蜀山人、月島丸の行衛、美文作法、寫生文の作法、記事文、最新讀書法、讀書便覽、明治英語學會の同講義錄、等ありますから、皆樣の魔風戀風、小女の煩悶、戀と戀、呪はれたる女、新婚旅行、紅葉全集第一卷、天風覺帆、等お持ちの方は何卒以上の書と交換を願ひます先着五名の御方へは妾の不束なる寫眞と繪葉書とを御禮に差上げます（埼玉縣入間郡三ヶ島村堀田增五郎方高野藤子）○皆樣の中で中學世界の六月號をお持ちの方は一部御惠み下さいませんか御禮は繪はがきで最も珍號でもかまいません（愛知縣知多郡半田町名切二八渡邊靜）○皆樣の內に紅葉全集、露伴全集社會字彙、少年百科事彙、日露戰史、不用の方は妾の女子書類では明治少女節用、女學世界增刊の靈ろく手紙、女子文壇、婦人世界、少女世界小說に後の不如歸、新不如歸、冒險探檢世界文藝倶樂部、中學世界、寫眞畫報、現代婦人成功立志談有ますから どし／＼送つて下され御望の書若次第送りますから願ますわ（富山縣西礪波郡山王村一歩貳歩村永澤清子）○私の處に山[illegible]著普通作文新書、飯塚啓著植物學新論、松本小七郎著數學獨習算術之部、日本地理辭典矢野龍溪著浮城物語、林治一著日本文典講義、井上十吉著英文典講義、落合直文著中等教育文法教科書等がありますから皆樣の增田藤之助著英和双解熟語大辭典齋藤秀三郎著 New text-book of English Grammar 上下二册 チヤンバー廿世紀英字書と御取り換へ下されませ（茨城下妻町濱波子）○皆樣私は、造花どく習、小品文集、日清會話、西洋料理、其他いろ／＼の雜誌たくさん持つて居りますから、皆樣の內水彩畫のエハガキか俳畫（新舊共）何役かに、ふんせるエハガキを二枚と、送料（各本に應じて違ひますけれど）を封入御申送下されば いつてもよろこんで御送り申ます たゞし男の方は斷じて御ことはり申ます（麻布森元町二ノ廿九番地にて山下花奴）○私は名高き小說は大抵讀みましてよ同じ思ひの諸姉樣御愛讀になつた中で最もお好きな二つ三つを繪葉書で知らして頂戴れ妾も美しき紙上に誓つて返事してよ（大和國山邊郡朝和分局森本信子）○皆さん御手紙下さいませ御返事は屹度差し上げます。四月か五月の少女世界、中學程度の國語讀本、菊池先生の平面幾何學、立體幾何學、幾何學講義、寶文館の英語獨習全書お持ちの方お惠み下さいませ屹度御禮致します又下記の書物と交換して戴いてもようございます。中學英和新字典、和英袖珍新字彙、英語研究（一の一より二の十まで）譯註西洋幽靈の話、新案英和會話六十日間速成、自然と人生、書道講義、支那語講義、英習字講義、初等樂典教科書、醫科理化學、催眠術自在、幻影不可思議奇術、日本歴史地理博物その他お望の方は御一報下さいませ男の方でもよろしいのですお答致します（遠州濱名郡貴町村園田藤子）○女子文壇誌友の中で、婦人世界、女學世界、小女の友、朝顏日記、令孃と男兵、本年五月發行の女子文壇其外種々の小說本御持の御方は妾の家庭小說、心の鬼、嫁と姑、女日用かゞみ、乳姉妹、青春小說、茶の湯と生花、造花一人習不如歸などゝ交換を願ひます先着四人のお方には美人繪葉書を三枚づゝ送ります（千葉縣山武郡白里村四天木局區內中里けん子）○私は色々の事情有つて昨年の拾月より親しき女子文壇愛讀致す事が出來ませんでしたの…御なさけ厚き皆樣方の御手許に御よみあきの十月より今月迄の文壇御持ちの御方一册にても宜ろしく御座い升から此賤ケ女に御惠み被下まし御禮は乾度郵稅にそえて御送附致し申升しかし男子の御方よりは失禮乍らおことわり申置きます（山口縣佐波郡防府町上新田田中文子）○姉樣私の所に四聲音引廣益大玉篇完、長澤龜之助著中等教育算術教科書、理學士藤井健二郎著植物學教科書（文部省檢定濟）理學博士箕作佳吉著動物學教科書（文部省檢定濟）不如歸、新編美文などの不用の書が御座いますから金澤博士著辭林、言海、長澤龜之助著數學辭書、藤澤利喜太郎著初等代數學教科書などゝ御交換下さい（北海道空知郡砂川村字南空知太佐藤富美子）○詩集「香蕊」「夕潮」「天地有情」歌集「冷人」「歌袋」雜誌「帝國文學第六卷全部」「衞生新報全部」「文章世界十四號迄」「文」「詩」「瞑想無語」其他作文書あり古き俳書俳句集の類を交換御望のものは繪葉書又は交換書に、御通知下さい（土佐土佐郡朝倉村大利秋尾）

雜報

盛夏來る

盛んな夏になりました、ぢり〱焼きつく様な太陽は毫しの假借も無く照りつけて、過ぎる宵葉は萎れ氷屋の旗に動いて居た風も默つて仕舞ふ、ギラ〱光る軌道の上を電車が重き音を立てゝ通るのと、定齋の藥屋が荷をカタ〱鳴らして行くのと位で、二階三階の家並や電線越しにわき立つ雲の峰が盛り上つて居る、甍の上はチラ〱炎が燃えて、塵埃が火の様に飛んで居ます、實に盛んな夏になりました、愛讀者諸君御健在ですか。當方社員一同も健かにして努めて居ます▲日中は如上の焦熱地獄の様な盛も、遉がに朝夕は氣温が下りますから滿都の士女も朝冷夜涼を趁うて苦熱を遁り得るのであります。▲兩國の川開は今月の八日にあるのですがそれならても、江東に日比谷に觀月橋に人は出るのであります▲入谷の朝顔も時十分てありまて、園々の草花、水に泛く睡蓮なども好時節になりました。▲東京は例の新曆で七夕も盂蘭盆も過ぎました、全く形式的なもので、七夕など折柄の梅雨で何處の空に天の川があるのやら、牽牛星も織姫さんも迷つたらうと思はれる程でした▲草市も濟みました、これは桔梗でも女郎花でも乃至萩でも咲いて居るのでありますが、まだ秋らしい情趣が添はない様であります。▲活動寫眞の興行と、ペン〱と絶叫し廻るロシヤペンの實行は相變らず好い景氣らしくあります▲横濱に開港五十年紀念祝賀會が七月一日から三日間あつて、雨勝ちの天候にも拘らず賑やかであつたさうです、當地から出掛くる爲め、新橋品川兩驛は非常な混雜でありました。

○閑院宮殿下の王女子御命名式　六月三十日御誕生の王女子御命名式は、七月六日午前同宮御殿に於いて行はせられ、『華子』と御命名に成つたさうで御座います。

○北白川宮武子女王殿下御降嫁の事　北白川宮武子女王殿下には、今回子爵保科正昭氏へ御降嫁の御內約整はせられ、近々御親族方へ御協議の上勅許を奏請せらるゝに至るべしと洩れ承ります。保科子爵家は舊上總國飯名藩主にして今年東京帝國大學理學科を卒業し理學士の稱號を受けられた方であります。

○長唄の女名人逝く　長唄紫紅會の主幹として又杵屋六翁の愛女として、長唄界に名聲を擧げた杵屋てること大槻てるは豫て病氣に罹つて居たが前月終に六十六歳を一期として長逝した、得意の曲は勸進帳、執着獅子、道成寺、木賊刈、雁の文、横笛、鷺娘等

○東京音樂院夏季講習會　三宅博士の校長、天谷秀氏の學監たる神田今川小路二丁目十二番地の同院にては、音樂科教員音樂學校入學志望者の爲めに、來る八月十二日より同廿六日迄、第五回夏季講習會開催する由、入會志望者は八月十日迄に申込むと、講習科目は唱歌、ピアノ、オ

ルガン、ヴァイオリン、及受驗科等にて、講師は音樂學校教授數名出席、懇切に教授するさうです、尙ほ九月一日新學期各科共生徒募集する由。

○東京瓦斯株式會社扱ひの瓦斯竈と七輪　從來日本式の臺所に使用されて居る、薪や炭ほど燃料として不適當なものはありません、熱が微弱な上に燻ぶつて、不經濟で、婦人の最も大切な頭髮、皮膚、衣服の汚損は非常なものです、わけても夏向きの臺所と來てはしばらく戰の様で自然庖厨炊事をも厭ふ様になります。神田錦町の瓦斯會社では家庭改善の一歩として、瓦斯竈と瓦斯七輪の据付を、最も手數の要らぬ様に便宜に扱ふと云ふことであります。

○壽美禮白粉と壽美禮洗粉　東兩國に高層なる老舗を構へ、數代續いて有名な壽美禮白粉を製出して居た全店では白粉の外、壽美禮洗粉其他化粧品をも、永年の研究を基礎とし、化學的の製法を應用し、益々改善したる効ありて、東京勸業博覽會及び第五回內國勸業博覽會品評會等に於て、賞牌褒狀夥多受領したので、今や貴婦人令孃間に專ら愛用され優に全盛の位を占むると云ふことです。

新刊

○希臘神話　杉谷代水著

杉谷代水君は多年希臘の神話を研究して居られたが、其結果は一部の書物として發表されました、希臘の神話は西洋の文學凡ての根源を爲して居るものです。けれども然う云ふ研究的の意義を離れ、神話は神話として獨立させて見ても餘程面白いものです。愛の神樣の話、武勇の神樣の話、或は月の神樣や水の神樣や、さま〴〵の神樣のお話があります。それらの神樣が皆後世の詩歌や、物語や、小說や、文學以外では宗教、哲學などにも關係してゐるのです。此の如く文學の淵源をも知り、又興味ある話材にもなる神話を、趣味深き筆で書き綴られたのは、誠に欣ばしいことです、我國では恐らく好い神話の書物の初めてせう、體裁は菊判四百頁、珍らしい寫眞版も澤山挿んであります（定價一圓五十錢、神田富山房出版）

○小說辭典　海賀變哲編

明治年間に出た有名な小說から、模範的の名句を拔いて、數十項に分類したのです、短きは二

行、長きは數千行に渉り、容姿、扮裝、動作、會話、叙情、叙景、構造、叙事、怪異、滑稽の各部門に分ち、其部門毎に男性とか女性とか、又幾種にも分れて居ます、一句毎に作者の名も示してあります、例は注意して成るべく肝腎な處へ抜いてあるやうです、出ずる目の引例とは大いに趣が異つてゐるだけ用意もかゝつたことゝ思ひます、則に欄頭には演劇用語、花柳通語、古文名句、字音假字遣ひ、現代文士録があります。挿繪代りに現代文士を雪月花に分けて各自の直筆で之を寄したものを挿んだのは一寸思ひつきでした、紙數一千頁、美本（定價一圓二十錢、博文館出版）

○惡夢　水野葉舟著

惡夢、花嫁　カンナ以下凡て二十二篇の短篇が集つてあります、君の作はいつ見てもしみ〴〵とした柔い線で人生を描いてゐると云ふ趣があつて、此の漂ひと、此の肌觸とは當代外の人には見られぬ詩人的の特色かと思ひます（定價金五十五錢、府下四大久保白光社出版）

○煉獄へ　高濱長江著

詩集です、此一冊で見ると舊い因はれてゐると云つたやうな作もあり、又新しい思想の生々しな作もあり、律格もそれに伴ふて、固定して動かぬものと、自由に試みたものとあります、新しく奮闘しやうとする詩人の面影は浮んで居ます、製本甚だ美くし（定價金六十錢、日本橋今古堂出版）

○故郷　石丸梅外著

曩に談潮と云ふ小說を出した人の作です、未だ世に聞えない作家ですけれど、眞面目な努力の痕は此作にも現れてゐます（定價金五十錢、大阪積文社出版）

お伽噺を募る

本社發行『少女』掲載用としてお伽噺を募ります、つまり本誌のお伽噺欄を廢すると同時に、それらの寄稿家諸孃にもお願ひする譯です

▲お伽噺は飜譯又は翻案を避けたし、成るべく創作を望む▲二十三字詰二百行を制限とす▲原稿は本社編輯局宛に送られたし▲毎月末に締切り本社編輯局に於て選抜す▲『少女』に掲載したるものには正金二圓以上五圓以内の範圍に於て其作に應じたる報酬を呈す

因に云ふ『少女文壇』の欄も『少女』が出來ましたから本月限りで本誌から除きます、又『教への庭』の欄も本月限り當分休むことにいたしました、此旨御承知を願ひます

寫眞を送つて下さい

誌友諸孃、本誌は諸孃の詩歌文章を紹介すると共に、諸孃の姿をも天下に紹介したいのです、多年本誌上に、掲出して居る諸孃の寫眞は大多數に上つてゐます、併し我が誌友は無限に增加してゐるのですから、是等の方が一層の好意を以て其寫眞を貸與して下さいましたならば、如何に本誌の光彩が添はるでせう。寫眞は其裏に「乞返送」と書き添へて置いて下さらば、用濟次第速に返送いたすのです、一人のでも多人數のでもかまひません。又誌友の外に新しき風景風俗、女學校や婦人會などの寫眞も歡んで迎出いたします、本誌を愛する諸孃よ、偏に寄送を希ひます

○女子文壇投稿各種懸賞定額

（甲乙丙の各欄を通じて最も優秀と認むる作物ある場合に之を呈す）

▲特別賞金五圓

▲甲種（短篇小說、美文）
天賞金參圓。地賞金壹圓五拾錢。人賞金七拾錢。

▲乙種（お伽噺、家庭日誌、新論文、書簡文、新體詩、散文詩）
天賞金貳圓。地賞金八拾錢。人賞金四拾錢。

▲丙種（和歌、俳句、短文、饒舌、笑話、歌謠、敍への庭、少女文壇 圖畫は二寸の三寸の大きさにて薄き日本紙に限る）
天賞金壹圓。地賞金五拾錢。人賞金貳拾錢。

◎各種とも金壹圓以上の價格當選者には相當の呉服物。小間物。文房具。日用具等凡て物品にて贈呈す 壹圓以下は便利圖書切符を以て贈呈す

◉投稿締切日　凡ての投書は每月十五日限り締切ます

◉賞品發送は作物發表の翌月末日に贈呈す、（但他人の作物を剽窃したるものは無効とす）

社告

女子文壇定價明細表

振替貯金口座 東京第五七四九番

○定期發行分 ▲▲▲▲ 每月一回（十一日定期發行）

一冊（一回分）定價金拾五錢：郵稅一錢五厘　計金拾六錢五厘
三冊（三月分）同前金四拾三錢五厘：同　四錢五厘　計金四拾八錢
六冊（半年分）同前金八拾四錢：同　九錢　計金九拾三錢
十二冊（壹年分）同前金壹圓五拾六錢：同　拾八錢　計金壹圓七拾四錢

○臨時增刊分 ▲▲▲ 年四回（二月、五月、八月、十一月臨時增刊）

一冊（一回分）定價金貳拾錢：郵稅一錢五厘　計金貳拾一錢五厘
二冊（半年分）同前金三拾八錢：同　三錢　計金四拾壹錢
四冊（壹年分）同前金七拾貳錢：同　六錢　計金七拾八錢

○定期發行及び臨時增刊とも全部 ▲▲ ——十六回 ▲▲▲

四冊（三月分）定價金六拾三錢五厘：郵稅六錢　計金六拾九錢五厘
八冊（半年分）同前金壹圓三拾三錢：同　拾貳錢　計金壹圓四拾五錢
十六冊（壹年分）同前金貳圓三拾八錢：同　二拾四錢　計金貳圓六拾二錢

▼申込注意　振替にて拂込む時は諸代の外に貳錢登記料增すと、郵便爲替は中橋和泉町局、郵便切手代用は必ず壹割增、收入印紙謝絕）、凡て前金拂込に限る

明治四十二年七月廿九日印刷
明治四十二年八月一日發行

定價金拾五錢

不許轉載

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郎
印刷者　東京市京橋區四紺屋町廿六七番地　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區四紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

發行所　東京市京橋區大鋸町十、十一番地　電話（本局六〇七番）　女子文壇社

特約賣捌元　○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂

好評嘖々

前半期の女子文壇臨時増刊一、二

新美文

全一册美裝

定價金貳拾錢　郵税壹錢五厘

口繪　入選作家十二人寫眞及び版彩色密刷　樂器三隅箋密刷

現代の若き女子は如何なる感情を抱きつゝありや又如何なる趣味を持ちつゝありや之を窺んとする者は本書を見よ、或は家庭を材とし或は自然を描き或は人事を歎ひ或は都會を寫す百人百樣の觀察は讀者をして逡巡に遑なからしむ、選擇の嚴正にして批評の痛切なる論し最新式の文章を學ばんとする者には無双の寶典たるべし

▲附錄　名家新作

●小寒日記……田泣菫
●裏の家……江孤雁
●憧憬……小川未明
●一轉機……高須梅溪
●女床屋……兒玉花外
●拾て犬……岡田八千代
●火藥……澤村胡夷

女子名文 新作家



口繪　原色名畫頗鮮麗　入選作者十七人寫眞光澤紙密刷

若き女子が大懸賞懇募の小説、美文、詩歌俳の文藝を興味ある新式編輯法にて統一せるもの。別に日課表あり登載各自の住所年齡家庭等作物と對照し其人物を一目瞭然たらしむ。

定價金貳拾錢　郵税壹錢五厘

▲附錄　閨秀作家短篇小説

○闇の夜……服部貞子
○敗者……加藤菊子
○火事……永代美千代
○氣まぐれ者……太田樂子
○新粧……尾島菊子
○六月……山田くにえ
○姉……故田中久子

各紙數大判二百四十頁價格は最廉無比

東京市京橋大鋸町十七番地　女子文壇社出版　（振替口座東京第壹七貳九番）　賣捌　全國書店

最寄書店になくば出版元へ申込を乞ふ

明治四十二年八月一日發行
（每月一回一日發行）



禁轉載　御茶の水小林寫眞館撮影

【東京秀英舍印刷】